山岳

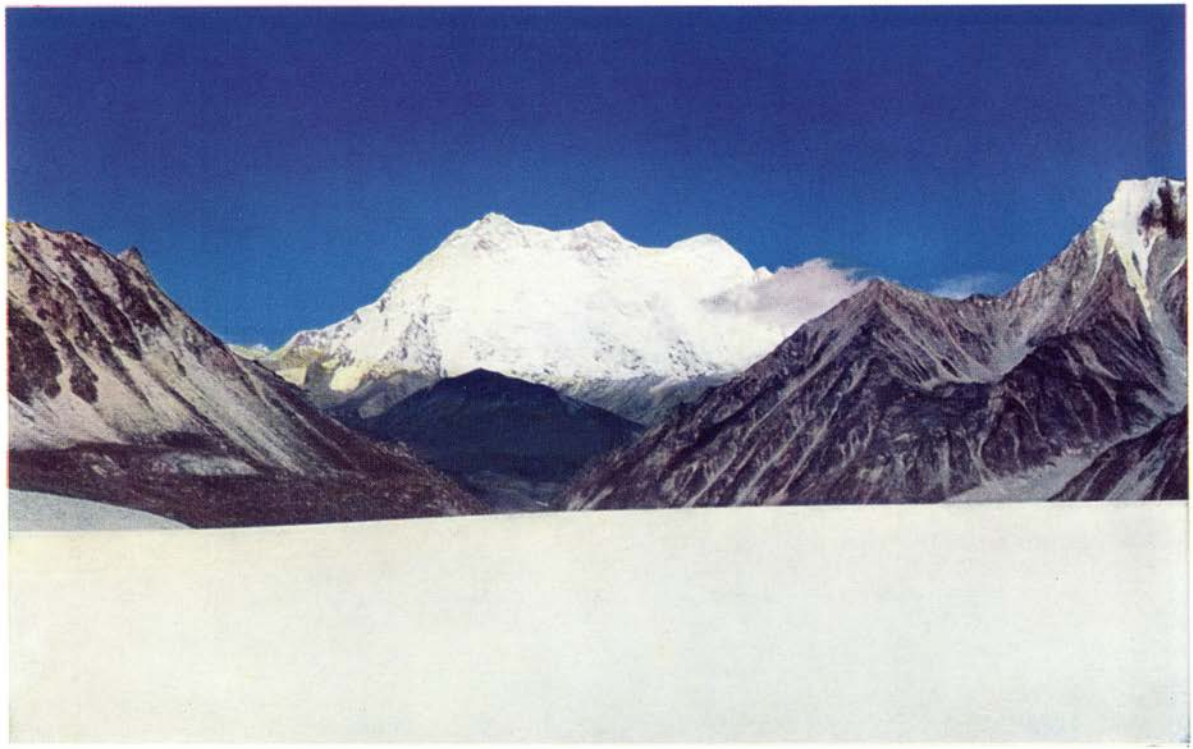
LV

キャラバン
Caravan

日本山岳会ヒマラヤ委員会　創案
軽登山靴のパイオニア

キャラバンデラックス ¥2,100
キャラバンナイロン ¥1,900
キャラバンビニロン ¥1,600

製造元 藤倉ゴム工業株式会社
総発売元 株式会社 山晴社



ムナカ・チュウの峠から眺めたクラー・カンリー、アッサム・ヒマラヤ
Kulha Kangri (7554 m) as seen from the Munaka Chu La (c. 4900 m), in Assam Himalaya. (autumn, 1958) (by S. Nakao)

山岳

第五十五年

山岳 第五十五年 目次（一九六〇年度）

ヒマルチュリ――一九五九年の登山……村木潤次郎…一
ダウラギリ山群の偵察（一九五九年）……慶応義塾大学山岳部登高会…三
ペルー・アンデス遠征……竹田吉文…三
ランタン・ヒマール紀行―サルバチュム登頂……山田哲雄…七
ガウリ・サンカール紀行……加藤秀木…九
冬のソロ・クーンブ……大山塚崎英雄博美…二八
奥峡湾偵察（一九五九年）―極地に於ける軽量橇の性能テスト……中村純二…二四
マッターホルン登山鉄道――アルピニスムの終焉……ギド・レイ日高信六郎訳…二七
茨木猪之吉君の追憶……高野鷹蔵…六八

追悼

三木高岩氏（藤木九三）、岡本信三氏（佐藤久一朗）、亀岡英一氏（望月達夫）……一七
大ヒマラヤ展の記（松田雄一）……一九六
会務報告（一九五九年十月～一九六〇年九月）……一八〇

写　真

ムナカ・チュウの峠から眺めたクラー・カンリー、アッサム・ヒマラヤ（原色版）
BCにおけるヒマルチュリ遠征隊員
ニヤック付近から眺めたヒマルチュリの東北面
C3付近から見たヒマルチュリの北面
C3とC4間にある≪アイス・ビルディング≫下の一〇〇mの氷壁
C5とC6間の六九〇〇m付近で酸素補給器を使って偵察中の山野井隊員
最後の大氷壁を登る松田、石坂両隊員
ダウラギリ主峰の圧倒的な東南面
ムー・ラの下り
ムクット・ヒマールの魅惑的な北壁
ダウラギリII峰の北東面
ダウラギリII峰の剃刀の刃を思わせる北西稜
マナンボットからヒマルチュリの遠望
パラク部落からムクチナート・ヒマールの遠望
チューレン・コーラの不気味な廊下
BCにおけるベルー・アンデス遠征隊員
アウサンガテ南峰
アウサンガテ南峰
アウサンガテ南峰C2へのルート開拓中の隊員
アウサンガテ南面、C2へのルート開拓
日本隊が初登頂してピコ・デ・アロスと命名した六二五〇m峰
C2からサルバチュムを望む
ガンジャ・ラ下方のニャガン・カルカから見たリルンとチョムギャムツ
C3からキャンジンとウルキムマンを望む
シャブルの上方から見たリルンの西壁と西尾根
ガンジャ・ラから見たランタン・ヒマール及びゴサインターン（折込）
メンルンツェの西稜からガウリサンカールを望む（折込）
ハデンギイ・ラの前進キャンプとチョー・オユー
ゴジュンバ氷河からギャチュン・カンを望む
ションブジェの丘から眺めたエヴェレスト、ローツェ、アマ・ダブラム
チャンボチェ僧院からエヴェレスト、ローツェを望む
ブモリの支尾根からチャンツェ、エヴェレスト及びクーンブ氷河を望む
ナンパ・ラ（チューレより）
レンジョ・パスからの東望（折込）
ルェツォホルム氷河の中を行く平山隊員
名誉波止場で憩う犬橇
奥氷河岳からルェツォホルム氷河を望む
氷河の侵蝕作用で造られた高さ二〇〇mの岩壁
茨木猪之吉氏の像（佐藤朝山作）
三木高峯氏
日本人の記録による大ヒマラヤ展、会場の一部
大ヒマラヤ展をご覧になる秩父宮妃殿下

地　図

ヒマルチュリ略図
ヒマルチュリ登山隊ルート図
中央ネパール・ヒマラヤ概念図
ダウラギリ山群概念図
コルディエラ・ヴィルカノタ概念図
サルバチュムへの登山ルート略図
ランタン・ヒマール概念図
ガウリサンカール及びギャチュン・カン略図
西北ブータン・ヒマラヤ概念図（英文欄末尾）

表紙カット　牧野四子吉

ヒマルチュリ――一九五九年の登山

村木潤次郎

まえがき

人間はなかなか賢くなれないものだと思つた。観念の上では、山登りがどんなものかということも充分知りつくしたつもりでいる。万事、計算づくめ、計画のつみ重ねの上にしか安全確実な登山は保証されない。まして、大きな、高い山に長期間にわたつてぶつかるヒマラヤ登山の場合はなおさらである。それだけに、大抵の予想される場合に対処して準備を進め、慎重な計画も立て、頭の中では何回となく登り尽したような気持で、あれこれ計画を練り直したあげく、現場にぶつかつているのだ。然し、それでもどうしてもうまくゆかない場合の方が実際は多い。自然とはそうしたものなのだろう。例えば、予想した以上に険悪な地形にぶつかつた場合、天候が悪くて計画通りに進めない場合、隊員の力が思う通りに発揮されない場合、とんでもない事故が発生して計画が頓挫した場合等、うまくゆかなくなる可能性というものが、ヒマラヤに限らず、自然である山の中には、到る処に転がつている訳であろう。

しかも、これらのマイナスの条件は、何も突然一気におそいかかつてくるとは限らない。悪天候は幾日も続くであ

ろうし、隊員の調子の悪さ、地形の困難さ等というものは、長い時間を掛けて、登山隊の力を徐々にすり減らしていくのである。従つて、何十日にも及ぶ長期計画を立てて、頂上をうかがつて行動し、いよいよ、その計画の大詰に近づいた場合、少し思慮分別のある人間なら、この計画がうまく行くかどうか、頂上へ無事立てる可能性が何パーセント位あるかということも、大方は見当がついている筈である。まして昨日今日始めた山登りでもないし、ヒマラヤというものも少しは分りかけてきていた私達である。最初に東京で考え、印度への旅の途中で常に頭の中で反芻し、そして現地の情勢に対応して又組直した計画、それがどんな形で実を結びつつあるかを見れば、いま目の前に立ちふさがる頂上に対して、私達の隊の実力でどの位迄闘えるかということは、言わずもがな十二分に分つているつもりであつた。何日も悪天候が続いて、頂上直下の氷壁の下で一週間も足踏みしてしまつた。七千メートル近い高さでは、その間にどんどん隊員の力も低下する。そして、食糧燃料も不足を告げてくる。そして目の前には硬い硬い氷壁が、まだ五百メートルにも及ぶ高さでそびえている。今迄、マナスルやガネッシュ・ヒマールで出喰わした氷の斜面の、どれと比べても手強そうだ。そして後続の若い隊員達はすつかり疲労してしまつた。となれば答は明らかである。人間相手のスポーツならば、こつちがピンチならば相手も同様ピンチに落ち入つていると考えてもよい。そこで一つ大いに気力を奮い立たせて、最後に一発という手もあるが、自然相手の山登りではこの手がきかない。こんなことが充分分つているつもりでありながら、五月二〇日、ヒマルチュリの北東面、ジャンプ台に張つた第五キャンプに忽然と訪れた晴天をきつかけにして、最後のバクチを打とうとしていたのである。第五キャンプには私と石坂、松田、住吉、山野井の五人がいた。

ここで活躍した唯一のシェルパであるサーダーのガルツェンは、撤収を予想してもう昨日第四キャンプに下ろして、残つているのは隊員だけであつた。久し振りで晴れ上つたチベット側の国境の山々をにらんで、登ろうか下ろうかさんざん判断に迷つた挙句、最後の「かけ」に踏切つたのである。この日は氷壁の中段、七一五〇メートルに第六

キャンプを設けて、石坂、松田の二人が入り、残りの三名はこれをサポートした。そして翌日、キャンプの二人が頂上をねらつた。五月二一日も前日と同じような静穏な夜明けであつた。普段は誰よりも朝寝坊で、隊長の特権は睡眠にありと云わんばかりに愚図々々している私も、さすが薄明るくなつてくると、もう寝ていられなかつた。天幕の入口から手を出して外の寒さを感じとろうとしたり、首を出して天気模様を確かめたり、五時半にはたまりかねて外へ立つて第六キャンプを見上げた。丁度、氷崖の陰になつたキャンプは、黒い点のように見えるだけでまだ人影もない。寒さにふるえて天幕に入り、又もぞもぞと這い出して酸素ボンベの空箱に腰を下ろす。疲れ切つて寝ている住吉や山野井のために、お茶でも沸かしてやればよいのだが、いらいらした状態ではそんな気にもならない。この晴天に恵まれ、張り切つている二人が頑張れば、あるいは頂上も見込みがあるかも知れない、というはかない希望が湧き上つてくる。午前七時には黒点が二つ、第六キャンプから登り出した。昨日、既に固定綱を張つた上部二〇〇メートル位迄は、素晴しいスピードで進んでいく。丁度稜線にぬける氷壁の出口と第六キャンプとの間の三分の一位に当る部分を、二時間足らずで登り切つたのを見ると、昨日迄の冷静な判断、「頂上はもう無理だ。今こそ撤収しないと手遅れになる」なんていう考えは、どこかえ置き忘れたような気持になつて、明け方のはかない希望は今や更にふくれ上り「なんとかうまく登つてくれ」という虫のよい思いにかられてくるのである。この瞬間の気持ちを今でも鮮かに思い出すことができる。太陽がうららかに輝やく第五キャンプの前に腕ぐみして立ち「ひよつとしたら俺も幸運な隊長になれるかも知れないな。松田の負けん気と頑張りには時々閉口するが、今日は棄てたものでもない。」

「何もかも数時間の勝負だが、このバクチは案外な目が出そうだ」なんて良い気なことを考えていた。前に述べたように長い間、追いつめられてきた隊の実力が、そんな急に好転する筈もない。昨日迄は十中八九どころか百パーセント位、この計画の失敗を予想した頭で、今日はもうこの上すべりな喜びようはどうだ。こんなことなら長い間、一生懸命計画を立てるなんて無意味な筈である。このおめでたさ加減、馬鹿さ加減に腹が立つくらいはつきりと記憶に

残っているのである。早速一時間もすると、前途の容易ならぬことが目の上に見える彼等二人の行動からはつきりと読みとれてきた。綱が一杯に延びたと思うと、そこでトップの黒点は一時間近くも停止している。再び後へ戻り始めた。白い屏風のようにつき立つた氷壁の上で、小さな二つの黒点が綱にあやつられて動くさまは、まさに空中サーカスを見る思いであつた。一瞬にして、思い上つた虫のよい希望はペシャンコにつぶれ、昨日迄と同じ暗い思いにとらわれ始めていた。もう二人がつまらない努力をして、変な事故でも起こされたら大変だという心配で頭が一杯になつてしまう。早く無事に引上げて呉れればよいとさえ思い出す、全く、今朝からの私の心の中の動きを見れば文字通り一喜一憂という言葉通り、七〇〇〇メートルの高度に一週間もいたので、少し脳中枢がやられたとしても、あまりにも単純な反応の仕方が、後で考えると恥かしい思いである。

然し、こんな思いをしたのは私だけであつたろうか。一緒にいた住吉、山野井も、又第四キャンプ、第三キャンプにいた他の隊員も、シェルパ達も、皆、全勢力をこの一日にかけるような気持で、熱い視線を氷壁に向けていたのである。そして、実際に氷壁に向つた石坂、松田の二人自身も、朝、天幕を出発する時には、「かなりやれそうだ」という自信があつた筈である。当時の松田の記録を見ても、

「午前七時には酸素ボンベ四本ずつ、軽量天幕、固定ザイル、カメラ、高度計など完全装備で出発することができた……」とある。彼等自身、致命的な氷の硬さに出会う迄は、「ひよつとしたら頂上へ行けるかも知れない。もし、今日中に氷壁を登り切つたら、稜線でビバークしてやろう」という気持ちがあつたからこそ、敢えて軽量天幕をも持つたのであろう。

このように、隊員もシェルパも全く同じ時期に、同じように気持ちを高ぶらせ、同じように落胆する。いかにも感情の起伏の大きな一日であつた。

山登りも、所詮は感情の動物である人間がやることだ。登頂の成否は最後が喜びに終るか、落胆に終るかで異つて

ベースキャンプにおけるヒマルチュリ遠征隊員　　(by K. Kimura)

The members of the Himalchuli Expedition, 1959, at the Base-camp. Left to right: Hirotsugu Takeda, Hisashi Tanabe, Senya Sumiyoshi, Junjiro Muraki (leader), Yuichi Matsuda, Shojiro Ishizaka, Takeo Yamanoi, Gopal Raj Panth (liaison officer).

ニヤック付近から眺めたヒマルチュリの東北面　(by K. Kimura)

The north-eastern aspect of Himalchuli (7864 m) as seen from near Nyak on the Buri-Gandaki.

第3キャンプ付近から見たヒマルチュリの北面　(by K. Kimura)

The northern face of Himalchuli as seen from near Camp III.

第3キャンプと第4キャンプ間にある《アイス・ビルディング》下の100メートルの氷壁

A 100 metre-ice-wall under the "Ice-Building" between Camps III and IV. (by S. Sumiyoshi)

くるが、その間の経過はそんなに違つたものではなさそうだ。少しひねくれた云い方をすれば、終つてから後の周囲の人の気持ちや態度が違い過ぎるから、自分達自身も、大変な差があるような錯覚に陥ち入つてしまうのではないかとさえ思われる。問題は、ことの成否は別として、激しい行動と感情の起伏にほんろうされて、その間に何がしかの充実したものを感じとるところに意味があるような気もする。しかし、こんなことは山登りに限らず、他のスポーツでも、仕事でも、人生万般のことが、一喜一憂で過される訳で、別に特異な現象のようでもないが、よく考えて見ると私達、一九五九年ヒマルチュリ登山隊というのは、出発点から問題の多い、一喜一憂の振幅の大きな隊であつたようだ。この計画の発端については、既に一九五八年ヒマルチュリ偵察隊の報告に詳しいから省略するが（「山岳」第五四年参照）、それ以後の資金の問題、シェルパ雇傭の紛争、現地人の登山阻止、前衛峯通過路の発見、ニマ・テンジンの死亡、プロパンガスの爆発事件、そして最後の五月二一日、このように目まぐるしい事件の応接に張り切つたり、がつかりしたりしながら数カ月を送り、そして二一日の夕方、第六キャンプの二人が、何もかも撤収して山のような荷を背負いながら第五キャンプに下りて、どつかりと私の前に腰を下ろした時、総ては終つたのである。

いかにも人間の浅墓さと、馬鹿さ加減をあらわに示したような、この一日の事柄を鮮やかに思い出していると、行動を共にし、感情迄も共にした当時の仲間のことが一層懐しく思い出されてくるのである。

隊の編成

最近、ある週刊誌に海外登山を扱つた座談会の記事が載つていた。その中で評論家のU氏が、

「元来、登山はスポーツであり、個人の趣味である以上、自分の金で始末すべきだ。内地の山に登るのに人から金をもらつて行く奴はいないのに、海外登山だからといつて他人の金を当にするのは間違いだ。外国では皆、自分の金でやつているではないか……」

という意味のことを云われていた。成る程、理屈はそうであるが、私には何んとなく抵抗が感じられた。座談会に出た人達がどんな答をしたか覚えていないが、少くとも私の出会つたヨーロッパの登山隊の人々で、自分だけの金でやつてきていた人達は殆どいなかつたようだ。フランスは政府の金で、オーストリーも政府の補助金、足りない分の金集めの苦労も聞かされた。昔のよき時代、財産家のお坊ちやんが、親の金を自由に使つていたような時代はとも角、このせちがらい世の中で、普通のサラリーマンや学生達が、なんとか自分達の目的とする海外登山をやろうとする場合、U氏のような割り切り方をしたのでは止める以外に手はない。それだけに私達も海外登山の間接的な意義については、大いに宣伝していたつもりであるが、何れにしても登山計画の最初に頭を悩ますのは資金の問題である。

幸い私達のヒマルチュリ登山に対しては、毎日新聞社が総経費の半分に当る四百万円程度は、補助しようということになつていて条件は良かつた。然し、残りの数百万円をどう処置するかという点には、いろいろな議論があつた。例えば先に述べたU氏の説のように、隊員一人当り五十万円程度負担させようという考え方なども、その一つであつた。成る程、自分が好きで、千載一遇の好機としてヒマラヤへ出掛けて行けるのであれば、この位の負担は決して高くない筈である。然し、現実にこれだけの金を右から左へ出せる人間は極めて少ない。少なくとも日本山岳会派遣の登山隊として行つてもらい度いような人間というのは、皆、逆さにふつても一文も出てこないようなのが多い。又逆に、五十万円なら何時でも出すから是非参加させてほしい、という希望も山積してくるという珍現象さえ生じかねぬ状況でもあつた。しつかりした計画と準備を以て登山隊を結成しようとする以上、何にもまして大事なのは金であるが、逆に金を主として考えれば、金のある人間だけを集めることになり、日本山岳会はヒマラヤ旅行社に成り下つてしまう。このように実際の費用の半額ですら、思い悩むことが多いのを見れば、全額自己資金で海外登山をせよなどということが、いかにも現実離れした理想論だと云えるのである。然し、こんな気苦労をし、日高会長の御尽力とヒマラヤ委員会の応援で、なんとかすつきりした人選を進めることができる段階に迄こぎつけられるようになつた。

私の最初の構想から行けば、ヒマルチュリの困難さを考慮して、隊員の大部分はヒマラヤの経験者、然も、三〇歳前後の年令層を中心として、見掛けの体力よりも、精神的に或る程度安定した、いわゆる山ずれした図々しい隊を編成したらと考えていた。然し、日本山岳会という大きな団体が、将来更にヒマラヤで発展し得る素地を作るという点から考えると、どうしても新しい人達のトレーニングという点も加味しない訳にはいかない。然し、混成チームの最低の条件として、隊長の私が全然知らない人、又、隊員お互同志がよく知り合う機会のなかつた人は、どんなに優秀な人でも選考の対象にはすまいと考えていた。したがつて範囲はやや狭くはなつたかも知れないが、私としては充分に安心のできる、又日本山岳会として外に対してもあまりはずかしくない隊を作るということには、かなり努力した。実際に現場にぶつかつて見ても、又一年たつた今再び思い出して見ても、お互に、こういう仲間ともう一度ヒマラヤで苦労して見たいと思うような連中ばかりである。どんな連中であつたかを、御紹介しよう。

石　坂　昭二郎　（二八歳・東京図書販売勤務）

第一次マナスル登山以来、ヒマラヤ登山に関心のあつた人達には、今更紹介の必要もあるまい。一九五三年、第一次マナスル登山隊に最年少の隊員として二二歳で参加し、加藤喜一郎、山田二郎両氏と七七五〇メートルの最高点に到達する程の活躍をした。眉の濃い、なかなかの美青年で皆からは石坂少年と呼ばれて可愛がられたが、有能な、いわゆる大人ばかりの隊の中では、彼の真価を発揮する迄にはいかず、その後不運が続いた。南極に関心を示したりしていたが、矢張りヒマラヤを忘れることはできなかつたのであろう。このヒマルチュリ計画では、五八年秋の偵察から引きつづいて本隊の中心として参加してもらつた。一見、冷静沈着、大いに頼もしそうに見えるが、偵察の時には前衛峯とヒマルチュリの頂上を間違えるなどという、とぼけたところもある。然し、あまりにくめない一種の人徳がある。本隊では松田と共にこの上なき私の相談相手であつた。

隊の計画立案者としての松田の厳しさに、ピリピリしていた若い隊員達は、このどこか抜けたような石坂の態度に

安らぎを見出していたようだ。又、前衛峯の通過路発見の際、松田、田辺、竹田の三人が三〇〇メートルばかりの氷壁を下りてしまつて、帰れなくなるような事件が起つた。丁度、前進根拠地の第二キャンプに大方の荷が上つて、いよいよこれからという四月三〇日であつた。その夜は吹雪の中をシェルパ二人をつれてうろうろし、彼等の安否を気使う許りで私には為す術もなかつた。翌五月一日、彼等の安全を確認し、下から応援にきてくれた隊員達と一緒になつて、救出しようとしたが上へ引き上げることはできず、物資を投げおろしても、途中のクレバスにひつかかつて下へはとどかない。そして再び吹雪という悪条件が重つた。いらいらする私に、「じや僕行きましよう」といつて天幕、食糧を持つて吹雪の中を、綱にぶら下るようにして下りてくれた時の彼の働きは、忘れることができない。

普段はぼんやりしていても、いざという時には頑張る、これが彼の本領であろう。又、毎晩テントの中では、ひげと垢に埋つた瞳を宙にただよわせて、ロマンチックな夢を語りながらせつせと日記を書きつづつた。そして二言目には、

「もうこれでヒマラヤはこりごりだ。こん度帰つたら山登りの足を洗つて嫁さんを貰うのだ」と意気まいていた彼の今の気持ちはどんなであろうか。一遍改めて聞いて見たいものだと思つている。食糧を担当した。

松　田　雄　一　（二八歳・日魯漁業勤務）

最近、ヒマラヤ登山に出掛けた人人の中で、彼の意見を聞いたり、世話にならなかつた人というのは殆んど皆無であろう。全く大変な勉強家である。このヒマルチュリの計画の原動力になつて、最初の起案から実行に到る迄、よく頑張り抜いたものである。マナスル登山の頃から庶務、会計を担当して、「レシート魔」などとあだ名をつけられる程、その緻密な仕事振りと頑張りには定評があつたが、ヒマルチュリでは聊かボンヤリした隊長の私を助けて、万事を切り廻わした。然も最後には、頂上直下の氷壁でねばりにねばる離れ技迄やつてのけたのである。

然し、あんまり張り切り過ぎて、第三キャンプの氷壁を一気に三〇〇メートル許り下りてしまつて帰れなくなつた

り、彼と山野井のいたキャンプがプロパンガスで爆発したりして、「ヒマルチュリの事件屋」という新しい名もついたが、どんなことがあつても閉口垂れず、目的に直進するのが彼の真骨頂である。

ベースキャンプに帰りついて、私はやれやれとほつとしたが、彼は、もう翌年の再挙に思いを廻らしていたのである。

住　吉　仙　也　（三二歳・川崎病院外科勤務）

隊員の大部分が東京の学校出身である中で、唯一の関西出身。茫洋とした人柄と、豊かな抱容力で、すべての隊員の相談相手となり、石坂、松田とは別の意味で隊の中心となつた。私が住吉の参加を希望した最大の理由は、彼が医者らしからぬ医者であつたという点である。どういうタイプが医者らしい医者かというと少し説明に困るが、登山隊の医者の任務というのは仲々むずかしいものである。元来、体の丈夫な隊員であるから、そうたいした病気にかかるはずもないが、ときには盲腸炎などの急病が出ないとはかぎらない。それよりも例の高山病である。小は頭痛、はき気、下痢、大は心臓衰弱に至るまで奇妙な症状が現われ、初めての連中はそういう肉体的な苦痛にひどく神経質である。そんな意味で対症療法を施すと同時に、ある場合には隊員の内面的な不安の支柱にもなるといつた、神経科の医者みたいな能力も必要である。また低地のキラバンでは、無数といつてもよいほどの現地人の診療にも当らなければならない。いわば医者としてのオール・マイティーであり、さらにその上に優秀なクライマーでなければならない。彼が、この条件をすべて具備している素晴しい人物であつた、などとは私は云わない。然し、第二キャンプ辺りの雪原で雪焼けに悩まされている頃、鼻の頭が一番やられるからといつて、鼻に紙を張りつけたりするひようきんさや、若い隊員達から、

「うちのドクターは、医者のこと以外はなんでも強いや……」とよくひやかされた、旺盛な喰い気と高度に対する適応性は、小気味のよいものであった。私達が第三キャンプから前進する時、氷壁の関係で隊が二分されるおそれ

があつたので、後方隊のお目付けとしてドクターに第三キャンプに止まつてもらつた。ドクター曰く、

「なんで、俺をこんな処に残こすのか訳が分らん。」

という憤慨振り。とうとう、最後には、田辺、山野井の若手を引きつれてジャンプ台の第五キャンプ迄進出して、第六キャンプの荷上げを手伝い、クライマーとしても天晴れな働きぶりであつた。医者にしておくのは勿体ない人であつた。

田　辺　　寿　（二七歳・三越本店勤務）

一九五四年、第二次マナスル登山隊の準備を手伝ってくれた頃からよく知っていた。明朗でテキパキした態度、慶大山岳部の若いＯＢとして、現役の連中にもしたわれていたらしい。私自身も彼が好きであつたし、又、かねてからヒマラヤの計画を持っていた、慶大山岳部の代表選手という意味も含めて参加してもらつた。後々のために大いに勉強してもらうということだけでなく、若手の精鋭の一人としても大いに期待していた訳である。隊の登山計画としてはベースキャンプ以上を五十日と限り、頂上との間に約五箇所のテントを設ける。そしてその間を撤収を含めて五段階に分けた。マナスル以来、身を以て体験した高度順化法を作戦にとり入れることによつて、日本で立派なクライマーとして務まる男なら、たとえヒマラヤは始めてでも大いに活躍させることができると自負していた。これはあるいは私達の思い上りであつたかも知れない。計画は作戦通り着々と進んでいた。然し、常に予想を裏切られるのが山登りの常識とすれば当り前かも知れないが、高山病による故障者が、若いシェルパや隊員の中に続出した。特に四月三〇日、松田や竹田と一緒に六〇〇〇メートルの氷壁でビバークを余儀なくされたということは、大きなショックであつたろう。二日後、氷壁への途つけでは、私や石坂と組んで元気に働いていたが、高山病の一つの症状である彼の胃酸過多症は段々悪化し食慾を失つていつた。更に、シェルパ、ニマ・テンジンの急死という珍事で第二キャンプに全員が集結していた時、何時迄も高処へ置くことは徒らに病状を悪化させるばかりだと判断して、彼と竹田（足を凍傷で

やられていた）をベースキャンプに休養に下ろした。

いよいよ、ジャンプ台への登路も開けようという時、この二人を失うことは全く耐え難い思いであつたが、どうしようもなかつたのである。第二キャンプから綱を結びあつてとぼとぼと下つて行く彼等を見て、この計画が終る迄、もう彼等の姿を見ることもできないのではないかと私はひそかに予想していた。ところが、五月一二日には、住吉と二人で第四キャンプ迄やつてきて、丁度、テントで留守番をしていた私に会うなり、

「もう元気です。なんとか上へ行かせて下さい」という直訴である。歩きぶりを見ても、まだ回復の状態は本当ではない。唯、なんとか高処での経験をつもうという、その執念には頭が下つた。然し、こんな張りつめた気持ちは他の若い隊員、山野井、竹田にも同じようにあつたであろう。逆に、これが彼等を早く疲れさせた原因かも知れない。お互に、よく知り会い、仲のよい仲間であつても、自分だけは弱味を見せまいとする意地張りが、期間の長い、そして空気の薄いヒマラヤでは逆効果になる。混成チームの難しさの一つであろうが、そういつた心裡を見抜いて、予防の手を打つことができず、あたら有能な連中をつぶしてしまつた私は無能な隊長である。然し逆に若い連中は、ヒマラヤの厳しさを十二分に体験して見事に成長した筈でもある。そしていち早くその答を出してくれたのが田辺である。

竹　田　寛　次　（二四歳・早大建築科研究室勤務）

大きな体で、のんびりした性格、大学でことわられる迄ゆつくり在学したことから考えてもなかなか近頃得難い存在である。田辺とは正反対の人柄で、どこといつて激しいところのない彼も、永年手掛けてきた山登りだけは達者である。丁度、二人がよい組合せになつて隊の装備を担当した。矢張り先に述べたビバーク事件で、凍傷にかかつた足の指が悪化して、期待したような働きをさせることができず、私の心を痛ませたが、更にニマ・テンジンの死に立ち会つた唯一人の隊員ということで、一層の苦労を掛けてしまつた。

五月四日、調子の悪い彼とニマ・テンジンを第三キャンプに休養に下らせたのであるが、その夜ニマ・テンジンは

第二キャンプで急死してしまった。翌朝第三キャンプに届けられた竹田の連絡によると、

「昨日第三キャンプを下るときは割合元気だったニマテンが、ラニーピークの下で完全に動けなくなってしまったので、下から荷上げに上ってきたシェルパにかつがせて、とにかく第二キャンプに下った。意識もなくすでに薬も受けつけず、容態も悪化する一方なので酸素をすわせたところ一時持ち直したようだったが、遂に二〇時半にいたり喀血しながら息絶えた。」

とあった。自分自身も、凍傷に痛む足を引きずって大変であったろう。ノビノビとさせておけばもっと使える男であったのにと、未だに残念である。その後、ベースキャンプで毎日、痛む足をお湯につけて療養に勤めていたが、帰路のラルキャ越えも、顔をしかめて如何にもつらそうで回復は遅かった。然し、撤収時には第三キャンプまで上ってきて、氷壁の荷上げを指揮してくれた姿を忘れることはできない。彼もまた、山登りの執念はありあまる程持っている男である。

山野井　武　夫　（二四歳・常盤製材勤務）

竹田と同じ年であるが生れ月が少し遅い。ヒマルチュリ隊の最年少であった。田辺、竹田、何れもそうであったが中でも彼は若さと、強さにあふれるような男である。そして、いつも、ニコニコして素直であった。東京で準備をやっている頃、松田にヒマラヤの食糧の基礎的な勉強をしろとおどかされて、英語のレポートを渡されている時の途方にくれたような彼の顔、現地では石坂と一緒に食糧を担当し、

「なるようにしか、ならないよ」とうそぶいてひつくり返っている石坂の傍で、はらはらしながら夜遅く迄食糧計算の算盤を入れていた姿等、今でもありありと思い出すことができる。この山野井も、第二キャンプではひどい高山病にやられた。計画の第二段階として、四月一八日から隊員を二班に分け、五八五〇メートルの第二キャンプに泊って高度順化を行いながら、前衛峯の偵察をやる予定であった。松田、田辺、竹田、山野井、いわゆる若手グループの精

鋭が先に登つたが、この第二キャンプに着いてしばらくすると猛烈な吐気におそわれた。翌々日、私達が登つていく迄の二日間、ほとんどなにも食べないで吐きつづけて、ひどい消耗のし方であつた。

「大丈夫です。だいぶよくなつてきましたからもう一晩おいて下さい」と頑張るのを叱りつけて、第一キャンプに下らせた。私も今迄にこんなひどい例を見たことがないだけに心配したが、彼の場合は高山病にかかるのも早いが、なおるのも早かつた。第一キャンプでは忽ち食慾が出てケロリとしてしまつたらしい。その後も、上のキャンプへ行くと忽ち、具合が悪くなるが一寸下へおりるとすぐ回復して、次に登つてきた時にはなんともない。こんなことを繰返して、松田と共に初めてジャンプ台に到着して、高処では最後迄よく働いてくれた。

木　村　勝　久（二八歳・毎日新聞社写真部勤務）

私達が想像している、ニュース・カメラマンらしさ、新聞記者らしさといつたものを、およそ持ち合せていない人である。でつぷりと小太りで、いつも穏やかな微笑を湛え、ゆうゆうとしている。山麓迄の道中でも、山の上の行動中でも、この調子である。前から依田さんの精力的な仕事振りを知つていた私達は、

「木村さん、そんなことでいいのかい。そもそもカメラマンたるものは……」などと、釈迦に説法みたいなことを云つて、からかつたものである。

山は好きで前から歩いていたが、山岳部のような団体で訓練を受けた訳ではない。「あんまりこわい処は行きたくない」と云つていたから、技術的な歩き方といつた面では、始終、石坂あたりに叱られていたらしいが、彼の高処適性は素晴らしいものであつた。口の悪いのは、「木村さんは鈍感だから高山病にかからないのだ」などと悪口を云つていたが、どんな高さでも元気に働ける人だと折紙をつけてもよい。

然し、山慣れないせいか、例の氷壁を下りて第四キャンプへ行くことは、どうも気が進まなかつたらしく、「高処の写真をとるのは、僕が頼まれましたよ」と住吉が笑つて話していた。逆に考えると彼が第三キャンプにねばつてい

たからこそ、五〇〇ミリの望遠レンズが威力を発揮して、頂上直下で苦闘した石坂、松田の姿を、如実にとらえる素晴しい写真がとれたのであろう。とすれば矢張り、彼は有能なカメラマンである。そして更に慶応のヒマルチュリ隊の写真によつて、彼の名カメラマン振りは、なお一層証明されたといつてもよかろう。

シェルパ問題

一九五八年秋、ヒマルチュリの偵察隊の時からシェルパの傭い入れが面倒になつた。その時の経過は既に金坂氏の報告に詳しく載つているが、要するに、各国の登山隊は印度在籍のダージリンのシェルパばかりを使用するのは怪しからぬ、大いにソロ・クーンブにいる土着のシェルパも使うべきだという論旨で、カトマンズにヒマラヤン・ソサエティなる団体ができた。そして時の外務大臣の後押しでダージリン・シェルパの傭い入れを妨害し出したのである。

私達が東京を出発した後で、ネパール政府の口上書が日本山岳会宛に届いていた。

「昨秋の偵察隊の金坂隊長がはつきり約束したのだから、ぜひ今回はカトマンズのヒマラヤン・ソサエティを通じてシェルパを雇つてほしい」

という意味で、又、ニューデリー日本大使館宛にも同様の申入れがあつたということである。

一応、理屈は通つているようだが、新興国らしい妙なナショナリズムの臭味がつきまとい、又、山登りやヒマラヤのことなどさつぱり分らない、カトマンズの議論好きな青年共のでつち上げたことである。大事な山登りに未経験なソロ・クーンブの山出しシェルパなど、使えるはずもないというわけで、各国とも問題にしてなかつたのであるが、たまたま運悪くひつかかつたのが、私たちの偵察隊であつたということである。

幸い、カトマンズに着いた時は、フランス大使の強硬な抗議を後だてにして、ねばりにねばつた。ジャヌー隊のフ

ランコ隊長がダージリンのシェルパを使う許可をとりつけた後で、フランコ氏に教えられたネバリ戦術と、丁度、期を同じくしてカトマンズに乗りこんでいた、オーストリーのダウラギリ隊との共同作戦が効をそうして、最後にはどうしてもガルツェン等、ダージリンのシェルパを使わねばならぬという理由書を提出して、どうやら難関を切り抜けることができた。

サーダー（シェルパ頭）はガルツェン・ノルブ、マナスル以来のなじみである。（ヒマルチュリ以後、雪男探検隊、アピ隊のサーダーとなつた。）強い責任感と、現地人やシェルパ達に対する巧みな統率力は出色である。ローカルポーター・サーダー（キャラバン中の人夫の統率をする）はガルツェンの兄パサン・プタール、シェルパの長老で何時もつつましくひかえているダワ・トンダップ、コックで伊達男のラクパ・テンジン、ひようきんで強いグンデイ、忠実そのもののアン・ダワ、ニマ・テンジン、偵察隊で始めて日本隊に参加したパサン・テンバ、何れもヒマラヤ登山史に名の通つた立派な連中だ。

他に、シェルパの見習いとも云うべき、若いニマ・ドルジェ、ラクパ・ノルブ、ペンゾー、オンディ、ダー・ノルブ、カルマ等という連中も、ベースキャンプから前進根拠地迄の荷上げ用ポーターとして参加した。隊員も平均年令二八歳という若さにあふれていたが、シェルパも練達者と若手が適当に混じりあつた、一九五九年の各国登山隊の中では、より抜きのチームであつたと云つてもよいであろう。

山麓の旅

三月二一日、カトマンズを出発した。キャラバンの出発というのは、前夜迄の猛烈な忙しさからやつと解放されたという安堵の気持ちと、いよいよこれからだという緊張感の入り混じつた、独特の雰囲気を持つている。正直なところ、私のようなまけ者にとつてヒマラヤ登山の最大の魅力は、キャラバンの楽しさにありといつてもよいのだ。ヒ

マラヤ登山の厳しさ、苦しさはまだ十日以上も先のことだし、世俗の煩しさからは全く解き放たれて、自分達だけの気楽な生活が待ち受けている。そして毎日は爽快な大気の下、適度の運動の繰返しと、忠実なシェルパ達にかしずかれた簡素な野外生活、そして仲間は皆気持ちのよい連中だ。これが楽しくない筈はなかろうという訳だ。

然し、今年の隊は、そう簡単に喜んでばかりもいられなかった。隊の構成は、隊員八名、シェルパ八名、連絡官のゴパル君、ローカル・シェルパ六名を含めて荷かつぎ人夫は一三〇人、総勢一四七人である。隊の経費を倹約するためには、人件費を少なくする以外に手はない。そのためには高処キャンプ以外の食糧はほとんど現地食に頼るようにし、カトマンズからのポーターの数は極力制限したが、それでも予定より一〇名も超過してしまった。しかも一つ一つの荷は、規定の三〇キロを四キロも五キロも越しているといった有様。従って個人でどうしても必要で荷物に入らぬものは、各自のトレーニングも含めて自分で背負うことにしたのである。普通なら極く僅かの身の廻りと、写真機、弁当程度で、先程述べたいわゆる快適なキャラバンを続けるのだが、今年は各自、大ルックに二〇キロから二五キロ位も背負わされて、先ずカトマンズ郊外、カカニの丘の七〇〇メートルの登りでコツンとやられてしまった。そして、その翌日は一〇〇〇メートルの下り、もう炎炎たる烈日の亜熱帯地帯である。長い船旅と都会の雑務に追われてなまった体も、四五日苦しい旅を続けると調子をとり戻してくる。若い連中は見るもの、聞くもの全てが珍しく楽しいらしいが、私にはもう四度目の途である。唯、違うのはお天気模様と、発電工事の風評などに感じられる文明の息吹きである。せいぜいバスガイド宜しく

「この峠を登りますとガネッシュ・ヒマールが見えます」とか、「あそこのアンク・コーラの水浴は快適だぜ」と説明したり、ぼだい樹の茂った休み場で馬鹿話にふけったり、道端の茶店で一杯一五パイス（約七円）の紅茶を飲んだり、一週間目にはこれ又、おなじみで、どこの角を廻ると何が見えるという程度迄覚えてしまったブリ・ガンダキの渓谷に入る。

この頃、第二の難関として予想していた、ナムルーの妨害問題に関するニュースが入り始めた。これも昨年の偵察隊以来、尾をひいていた問題である。すなわち、ヒマルチュリ東尾根の入口、ナムルー部落のチベット人達が、神聖な自分達の山に登るのは怪しからぬ、若し敢えて登るならばシェルパも隊員も殺してしまうといきまき、結局現金二〇〇ルピーと物資をいくらかやっておさまったという事件である。風評によればその後も類似の事件が起り、印度測量局の連中があの附近に行った時、サマ、ロー、リダンダ、ナムルーなどの四箇村が合同で妨害し、四〇〇〇ルピーも寄越せといったので、ついになすことなく引上げたというのである。

この辺は別に通信網がある訳でなく、情報は口から口へ伝えられるだけだが、その伝達の速度は驚く程早い。おそらく、私たちがカトマンズを出発するかしないかの時期に、日本隊のことはナムルーに伝わっていたであろう。ガルツェンは昨年の秋きた時、既に騒動の張本人と義兄弟の縁を結んでおいたから、大抵大丈夫だとは云うが、絶対的な保証は勿論できない。どんな手を打つべきかは自分からいうことはできない。隊長の意志次第だという。こうした現地人の妨害などというのは、デマがデマを呼ぶ類いで、真相は現地へ行って見なければ分らないし、対策も立てられないが、まず万全の策を立てて、後で悔を残すようなことはしたくないと考えて、アルガート・バザールからグルカの知事に電話して、応援の警官を派遣してくれるように依頼した。そして、少しでも現地人を刺戟することを避けようと、毎日晩飯の時には多田等観先生にテープレコーダーに吹きこんで頂いた、多羅菩薩二十一礼讃経というチベット語のお経を全員で唱和、にわかラマ教徒に化けるというはかない努力迄やってのけた。何やらさっぱり意味は分らないが、言葉の分るシェルパ達にいわせると、たいへん有難いお経らしく、彼等の方が張切って二度も三度も繰返す始末、隊員の方は空腹でどうも落ちつかないから、飯が済んでからやってほしいとか、

「はーらがへった、はーらがへった。こんやのおかずはなーんだい。」

などと、つぶやいている不届者も現われた。最も敬虔なラマ教徒は石坂で、見事な顎ひげと薄汚れたシャツの襟の間

に、片時もはなさない数珠がよく似合った。

このように多少の不安は伴つても、ヒマラヤの旅の楽しさはそう変らない。唯、多少例年より天気が悪いということを除いては、総てが順調に進んで、四月三日には問題の村、ナムルーに入つた。その晩、部落では集会を開いて登山隊に対する態度が決つた。いろいろ心配したが、ガルツェンの友人を通して村人に悪感情を抱かせぬように、日本人も仏教徒であるという宣伝をまじえた内部工作と、警官や連絡官のゴパルを通じて、もし不穏の行動に出る者があつたら、すぐ政府に報告して多勢の兵隊を連れてきて捕縛してしまうぞ、という威嚇工作の両面作戦が成功したのか、ここからベースキャンプ迄の荷上げは一切ナムルー村民を使うこと、ラマ寺の修理費として一五〇ルピーを寄進することの二条件で、山に入る了解をとりつけることができた。考えて見れば全く馬鹿な話である。既にネパール政府には二〇〇〇ルピーもの登山料を払い、政府の許可を承けてやつてきているのに、又又地元で金をとられたり妙な約束をしなければならないのである。確かに煩わしいといえば煩わしいが、山に入ることさえできれば、これもヒマラヤの景物の一つ、一寸したスリルである。ここからベースキャンプに入る迄の三日間、未だ大分トラブルはあつたが、四月六日にはようやく待望のベースキャンプを四一五〇メートル、シュランの谷に設けることができた。神戸を出帆してから既に五十三日目である。

私たちの登山計画

ここらで一応ヒマルチュリの地形を説明しておこう。既に「山岳」や「会報」にも書かれ、マナスルの報告書にもその名は記されているから、今さら珍しい山ではないが、北からマナスル、P二九と続き、マナスル山塊の南端に位し、カトマンズ周辺からもその特徴のある姿を望むことのできる、中部ネパールの雄峯である。そのアプローチについては、南西面ムシ・コーラに入つたティルマンの隊とケニヤの隊の記録、私たちがガネッシュ・ヒマールの帰り

に入つた東部チューリン・コーラ側と、マナスル側から見た北西面の知識しか持ち合せていなかつた。頂上の南西面は比較的なだらかな斜面が続き、北東面はジャンプ台と称した基部の台地の上は相当な急斜面であることなど、既にマナスルへの往復の途上よく眺めて知つていたが、一九五四年のケニヤ隊の否定的な報告が気になつたし、東面のルートはこの目で全く不可能なことがよく分つていた。そして止むを得ず選んだのが、ジャンプ台に達することができると想像される北東面のルートである。

慶応の人達によつて頂上に登られてしまつた現在、今さら何をいつても仕方がないようなものだが、私たちのルートも全く無謀なものであつたとは思つていない。最後の氷壁も状況さえよければ不可能ではなかつたと考えている。とも角この北東面に入る谷さえも当初は未知であつた。山かんで、リダンダの谷かナムルーの奥を探ぐることを偵察隊に指示したが、リダンダの谷は部落の妨害で一歩も入れず、ナムルーの奥からシュランの谷を経て東尾根へ出る途だけが見出されていたのである。予定通り、リダンダの谷へ入つていれば頂上附近の壁の状態も、もう少し詳しくつかめて大分様子が変つたかも知れないが、頂上の位置もはつきり分らぬ東尾根の末端で偵察が終つてしまつた。然し、東尾根を辿れば、なんとかジャンプ台迄は行ける筈で、ジャンプ台に立てば頂上に登る可能性もあると信じていたので、本隊もこのルートを採ることに決めていたのである。

印度測量局の大雑把な地図で、ベースキャンプの位置と頂上との間隔を測ると、大体二〇キロメーターに近い。マナスルのベースキャンプと頂上との距離の倍に近く、ベースキャンプに入つても、どこに頂上があるかも分らないような遠さである。私たちの基本計画は次の通りであつた。

一、登頂時期は三月中旬、モンスーン前期の静穏な時期を選ぶ。

二、キャンプ地はベースキャンプを除いて五箇所、五七〇〇メートル、東尾根の交点附近に第二キャンプを設け、ここを前進根拠地とする。

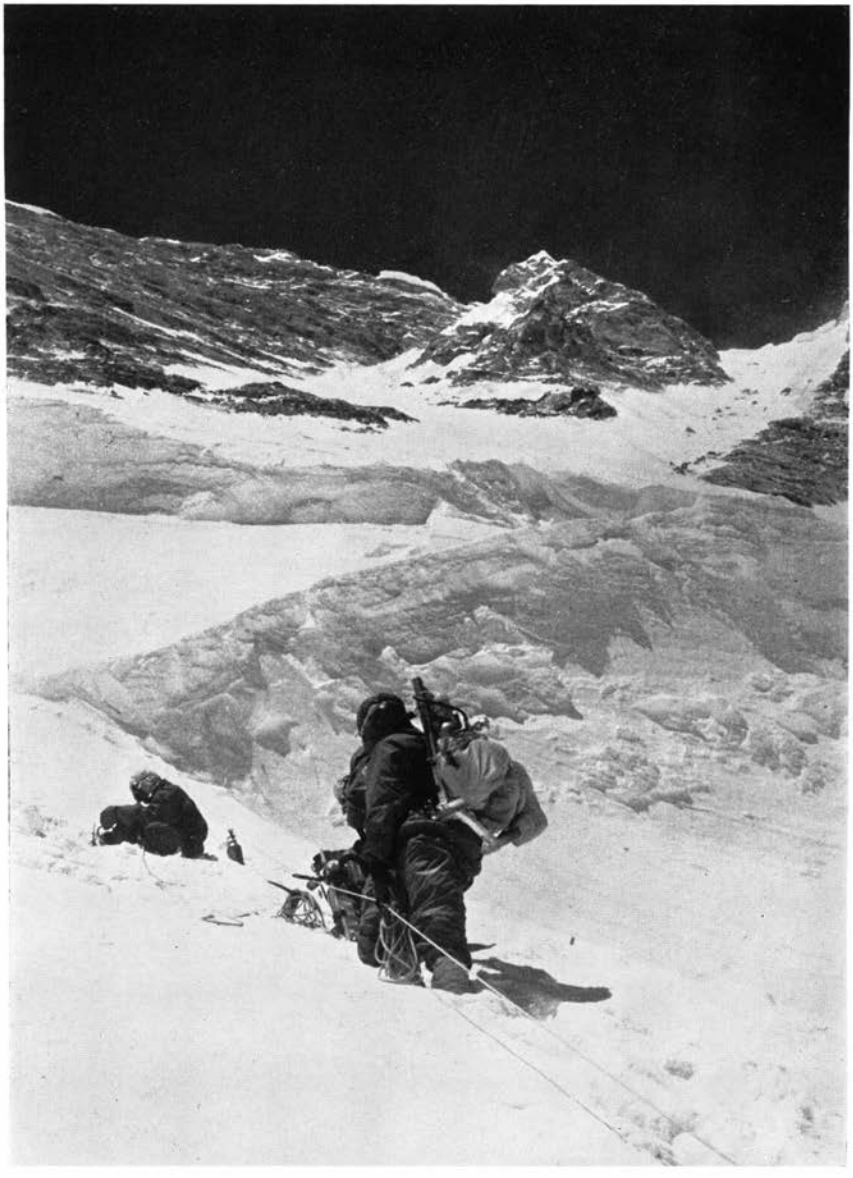
三、荷上げ開始から撤収迄、全日数を五〇日とする。

四、隊員は八名(内医者一、カメラマン一)、シェルパ八名、他にローカル・シェルパ六名を補充し、前進根拠地迄の荷上げ能力を増加する。

これらの条件の内、㈠の項については、これ迄のプレ・モンスーンの実績からいつても当然であろう。年によつてはモンスーンの襲来が遅くれ、六月初旬迄登頂のチャンスがあり、逆に五月の中旬は天候の安定しない場合もある。然し、四月初旬からその時期迄登頂態勢を持ち続けるためには、高地食糧、燃料の量が尨大となり、従つてキャラバンの人夫も幾何級数的に増大して、軽遠征隊という主旨に反する結果になる。どうしても或る程度で登山日数を切らねばならぬとすれば、登頂目標をこの辺におかざるを得ぬということである。これは㈡項とも関係するが、帰路のキャラバン用として、五日間分位の高地食糧を予定しておき、もし必要が生ずればこの分を現地調弁の食糧に切り換え、登山日数を一週間位延長することは可能である。(実際にこの方法を採用したため、帰路は副食、調味料の不足をきたし、一週間位は砂糖なし、ツァンパとじやが藷ばかりという生活を続けた。)

㈡項、キャンプ地の問題は、偵察隊の報告だけでは不充分で、前衛峯を越してからどうなるかはさつぱり見当がつかなかつたが、写真と地図上の距離から推測したところ、これだけの数で頂上基部のジャンプ台迄はなんとか行ける筈だと判断した。距離が遠いわりにキャンプの数が少ないような気もするが、これ迄のマナスルの経験と隊の力を予想して、充分やつていけると考えていた。比較的急峻な処で高度をかせぎ、平坦な処で距離をかせぐ。そのためには少し時間がかかつても予めしつかりした偵察と途つけをして、キャンプ地が決つたら一気に荷上げをするという方針であつた。山の様子が分らないと、つい気があせつて無闇に前進し、キャンプ地の数が増えがちであるが、荷上げの運行計画の上で非常に不便になることをおそれていたのである。

㈡項については、㈠項の説明でも少しふれたが、登頂時期の遅れを予想して、六〇日も七〇日も延ばすのは得策で



第５キャンプと第６キャンプ間の6900m付近で酸素補給器を使って偵察中の山野井隊員

T. Yamanoi reconnoitering with oxygen-apparatus at the height of c. 6900 m between Camps Ⅴ and Ⅵ.

最後の大氷壁を登る松田、石坂両隊員

Y.Matsuda and S.Ishizaka climbing on the final great ice-wall. The real summit of Himalchuli is immediately left on the crest line. (by K. Kimura)

ないと考えた。この考えは今も変らない。私達の場合も、もう少し食糧燃料の余裕があつたならばという批判もあるが、高処における人体の衰弱を考慮に入れない理想論である。ベースキャンプ（ヒマラヤのベースキャンプは大体四〇〇〇メートル以上）以上の行動は、五〇日を超えると著しく体力が低下するという、従来の医学調査の結果を基にしたもので、この期間中に登頂のチャンスを握めずに何日もねばつたところで、大した成果を挙げることは不可能であるし、又晴天が得られぬことは自然現象であるから、その隊の不運としてあきらめるべきだと考えていた。従つて、この五〇日を約一〇日単位で区切つて、高度順化と荷上げを行う予定であつた。先ず、ベースキャンプと第一キャンプの経験で、二・五トンの荷を上げ、その間に第二キャンプの偵察を兼ねて二日程度五〇〇〇メートルの高処に隊員を泊めて、第一次の高度順化を行う。第二次はシェルパ全員を第一キャンプに上げて、第二キャンプへの荷上げ、隊員は交互に第二キャンプに泊つて前衛峯の偵察を行い、第三キャンプの位置を決め、荷上げ終了と共に全員ベースキャンプに下りて休養する。

第三次段階で、第三キャンプの荷上げと前衛峯を越えてジャンプ台への偵察を行い、再び第二キャンプへ引上げる。ここで天候を見定めて、第四段階に入ると一気にジャンプ台に第五キャンプを設け、登頂のチャンスを狙う。そして第五次で撤収にとりかかるという計画であつた。

前衛峯の氷壁

四月一〇日から第一次計画に入つた。その後第一キャンプ、第二キャンプの荷上げも順調に進み、四月二六日から第三次段階に入つた。全隊員、全シェルパをＡＢＣＤＥの五班に分け、第三キャンプへの荷上げと、前衛峯を通過して、ヒマルチュリ主峯の基部に第四キャンプを設け、さらにその上部に、第五キャンプの位置を偵察するというのが、この段階における主目的である。

A班　松田、竹田、ガルツェン、グンディ、ペンゾー。
B班　村木、田辺、ニマ・テンジン、パサン・テンバ、ニマ・ドルジェ。
C班　住吉、山野井、ダワ・トンダップ、オンディ、ダ・ノルブ。
D班　石坂、パサン・プタール、ラクパ・ノルブ、カルマ、パサン・ノルブ、プーツェリン。
E班　木村、アン・ダワ。

のように組分けし、A班が第三キャンプ以上のルート調査、BC班がこれを助け、D班は第三キャンプへの荷上げに当り、E班は写真撮影のため、自由に行動してもらう予定であつた。

四月二九日、A班が第三キャンプにはいつた。この夜から天候が崩れ出して、第二キャンプの八人用の大型天幕は支柱が折れる騒ぎ、一晩中天幕の補修にまんじりともしないで夜が明けた。翌三〇日、A班は前衛峯の下降路の偵察に出、B班も第三キャンプに入つた。私達が第三キャンプに着いた午後三時頃から再び吹雪、天幕にはペンゾーだけが残り、A班は全員偵察に出てまだ帰らないという。

私はカマボコ天幕にはいつてしばらく休んでいたが、なんとなく心配になつたので四時半、田辺とパサン・テンバの二人を迎えに出してやつた。このころから吹雪はいよいよ激しく、赤旗の標識もなかなか識別が困難になりつつあつたが、五時四〇分、ちようど気象通報の時間だとラジオをひねつていると、ガルツェンが雪まみれになつてあわただしく飛びこんできた。

「松田サーブと竹田サーブが、急な氷壁を固定綱でおりたまま戻れなくなつてしまつた。」

という。

松田は午前九時三〇分、第三キャンプ背後の氷の急斜面から固定綱を三〇〇メートルばかりおろして、それを伝つて下の台地におり、あちこち、適当な下降路を物色している間はよかつたが、登つてくる途中で連絡が悪くなり、途

中で宙づりになつてしまつたらしい。一二時二〇分、竹田は松田と連絡をつけようと努力するうち、彼もとうとう下へおりて上れなくなつてしまつた。風がひどくて声がとどかないのと、ことばがうまく通じなくて「引け」というのに綱をゆるめたり、「ゆるめろ」というのに引っ張ったりということを繰返していたらしい。ガルツェンはグンディと二人で上で綱を持ち、いっしようけんめい引上げようと努力したが、どうにも力不足と悪天候のため途方に暮れていたところへ、田辺がきて、下の連中の身を案じて彼も下りてしまったという。自分はまずバラサーブ（隊長）に報告して、下へ天幕や寝袋をロープで送るようにした方がよいといって止めたが、田辺サーブがあわててておりてしまったから報告にきたのだという。

天幕の中で、ノンビリと彼等の帰りを待つていた私にとつては、まつたく青天の霹靂の驚きであつた。とりあえず処置しなければと、彼らのための天幕、寝袋、防寒衣料などを大至急用意し、ガルツェンと私、B班のニマ・テンジンの三人で急行した。グンディは固定綱の端を持つて数時間がんばつているうちに、足の先をすこし凍傷でやられたらしいといつて天幕にはいつたきり。これも気にはなつたが、今はかまつている暇もない。

もう六時過ぎで薄暗く、その上猛吹雪でルートもほとんど見分けがつかない。天幕を出て五分ぐらい、ガルツェンはふと立ち止つて、

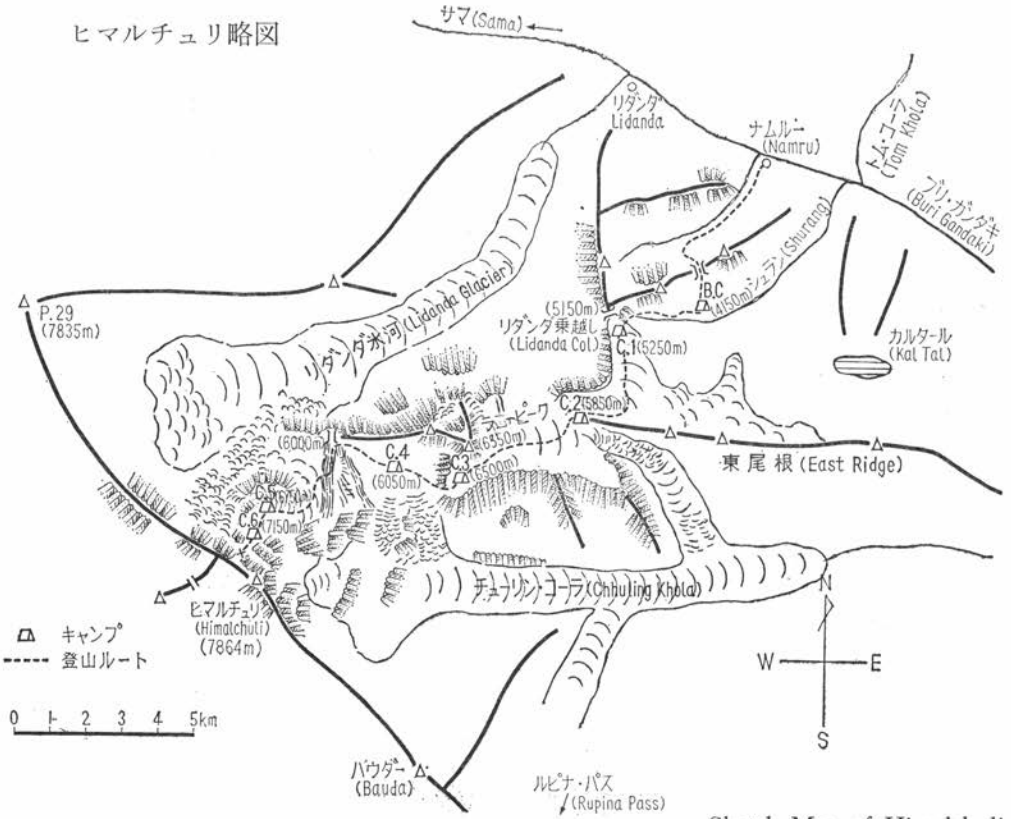
「バラサーブ、今晩はわれわれも帰れなくなるかも知れない。どうしても行くか。」

と聞く。

「あたりまえだ、ともかく現場へ行かなければ話にならない。」

と、どなり返しながらもふと不安になつたので、もう一度引返して赤旗を一つかみずつ持ち、いままでだいたい、五〇メートルおきに立ててあつた標識の間を埋めて、二〇メートルおきくらいに立て直して下つた。途中クレバスの縁に固定綱を張りめぐらした危険な道をたどり、やつと現場へ到着すると、まつ暗闇の中にパサン・テンバが一人、固

ヒマルチュリ略図



Sketch Map of Himalchuli

ヒマルチュリ登山隊ルート図

Route Map of Himalchuli Exp. 1959.

定綱の支点にうずくまつて田辺の帰りを待つていたのである。もう少し、私達の行くのがおそくなつたら、彼とてもどうなつたかわからない。

とりあえず、固定綱の垂れ下つた氷壁に乗り出して下を照らしたり、声をかけたりして見たが、いずれも風と雪に妨げられてなんの効果もない。あとで聞くと、松田たち二人はすぐ下、四〇メートルばかりの所にある垂直の氷のクラックの所迄登つてきていたのである。そこからは、オーバーハング気味の完全な氷で、それを登り切るにはピトンも足りないので、ピトンを氷壁に打つて体を確保し、ゴツゴツした氷に身をもたせ、半分宙づりのような格好でいた。そこえ上からおりてきた田辺が固定綱をたどつてすべりこんだらしい。幸い田辺がテルモスに熱いお茶とちよつとした携帯食、防寒着など持つていたので、三人で分け合つて過していたという。ガルツェンに聞いて、私は彼らが下の雪原におりていると思いこんでいたし、いくら近くにいても、この猛吹雪では声も光も届くはずはない。時々、乾いた音で炸裂するような稲光で、あたりの氷塔や氷の肌が気味悪く浮び上つてくるばかりであつた。

私自身その綱を伝つて彼らの安否を確めたい誘惑にかられたが、もし私が下りてしまえば、あとはシェルパだけの第三キャンプで、後の処理も不安だ。かろうじて誘惑をこらえ、持つてきた荷物がなんとか届いてくれればと念じながら、固定綱を通して下へおろしてみたが、これとてもどうなるか分らない。まつたく、彼等にたいして何一つしてやれない無力な状態であつた。

ただ、オロオロ、ウロウロするばかりで立ち去ることもできず、九時過ぎまで現場にいたが、風雪は一向におとろえるようにも見えない。私とガルツェンの二人しか持つていない灯火も、そろそろ怪しくなつてきたので、後のことを考えて私のライトを消した。さすが、ガルツェンはしつかりしていたが、若い二人のシェルパはピッケルにすがつてうずくまつたきりであるのを見て、このままにしていては自分達の方が危いかも知れないと思えてきた。下の三人はいずれもしつかりした連中だから、一晩くらいはなんとかしのいでくれるだろう、と心の中で詫びながらついに引

上げることにした。

帰り途は、まったくあわれなものであった。先頭にガルツェン、間に二人のシェルパを入れて最後が私、四〇メートルの綱につながり、風に吹きとばされそうになって歩いた。固定綱をつけた、傾斜の急なクレバス地帯はまだよかったが、第三キャンプ附近の雪稜に出ると、吹雪はいよいよ激しく、二〇メートルおきくらいに立てた赤旗が、ライトの光ではどうしても分らないことが何度となくあった。先頭は、吹雪の中に身をかがめながら次の赤旗の位置をじっと見つめている。見定めるとパット飛び出す。あとに続いている私たちはクレバスに片足つっこんだり、前へつんのめったりする。こんな時にはふだん無気味な雪さえ助けになった。青白い稲光の中に、赤旗を見いだすこともできたのである。

どうやら第三キャンプにたどりつくと、グンディとペンゾーの二人が、私たちのアイゼンを解いてくれた。一杯の紅茶を飲み終ると、雪まみれのまま天幕にころげこんだが一人ではどうしても落ちついていられず、ガルツェンを呼んで、その日の様子をもう一度聞きただしたり、あすの善後策を相談した。その後、疲れたのか、すやすやと眠ってしまった彼の傍で、とり残されたような私は、あれこれ考えながらまんじりともせず明け方を待ったのである。

五月一日の朝、第二キャンプに連絡を出すと共に、再び現場に出掛けて、彼等の無事を確認した。思わずうれしさで目の先がぼんやりかすんでくると同時に、無事に彼等を連れ戻すにはどうしたらよいか、第二の心配が気になっていた。それから後、石坂が天幕、食糧を持って下へおりてくれたこと、翌日別のルートから全員を無事収容して、第四キャンプへのルート確保に成功したこと、そして引続いて起った不幸な事件、ニマ・テンジンの死亡、等については既に前に記した通りである。

五月五日、男の節句、本当なら大切に持ってきた鯉のぼりでも立てて、景気をつけようとしていたのに、忘れられない不幸な日となった。全員第二キャンプに集合して、彼を氷河のクレバスの底に葬ったのである。

最後の努力

ニマ・テンジンの死亡、田辺の胃病、竹田の凍傷、二、三のシェルパも体の不調をうつたえ始めた。こんな事故が重なつて、私は思い悩んでいた。この計画を続けるべきかどうか、弱つた心には、雲の晴間から見下すカルタールの水の色がこの上もなく魅力的で、何もかも投げ棄てて緑の草の上で思う存分寝て見たいような誘惑にさえかられた。天幕に入つても結論を出すのがおそろしくて次の計画を立てることもせず、とりとめのない話をしてごまかしていた。こんなことが二日も続いたであろうか、ようやく私も、他の隊員やシェルパ達に励まされて立直つてきたのである。残り少ない隊員とシェルパ、なんとか最後迄やり抜こうという覚悟が決つて、再び第二キャンプも活気づいた。五月九日には、六名の隊員と八名のシェルパが第三キャンプに入つた。問題の氷壁には一〇〇メートルの固定綱と縄梯子をつけ、十日には一気に八〇〇キロの荷物をおろして、第四キャンプ（六〇五〇メートル）の建設、いよいよ登頂態勢に入つたのである。

しかし第五キャンプ（六七五〇メートル）への途は、まだまだ長く続いていた。氷壁を下ると広大な雪原がひらけ、その上に第四キャンプ、雪原の端からチューリン・コーラの源流地帯を越えて、ちよつとした氷崖をよじると又再び雪原、そのつきぬけた先にジャンプ台、又その上に主峯がといつた具合に、まだ一〇〇〇メートル余も高度を残してヌッとそびえているのである。

四人の隊員（村木、石坂、松田、山野井）と四人のシェルパ（ガルツェン、グンディ、ダワ・トンダップ、アン・ダワ）は、第五キャンプへの途つけと、荷上げにひたすら頑張つていた。そして、五月一三日、待望のジャンプ台に第五キャンプ（六七五〇メートル）を設けて、松田、山野井、ガルツェンの三人が入つた。

五月一四日、第一回の氷壁偵察を終つた松田達のチームと、村木、石坂のチームが第五キャンプで交替する予定で

ある。私たちは三人のシェルパといつしよに七時半第四キャンプ出発、ジャンプ台の雪原まではしごく快調であつたが、六四〇〇メートルを過ぎてジャンプ台の登りにかかり、途中残してあつた酸素ボンベを二箱ばかり荷の上につけると急に体にこたえた。連日午後の吹雪にたたかれるこの斜面は、赤旗がわずかに進路を示すだけで、先行者の踏み跡などまつたく消え去つて相変らず深いラッセルを強いられるのだ。今日も午後になると猛烈な西風が吹き出した。第五キャンプの直下、大きなクレバスが斜面をま一文字に横切つていたあたりを巻くころは、十歩行つてはうつむいて風を避け、風がおさまるとまた歩くというありさま、それでも午後一時過ぎには第五キャンプに到着した。

連日余程風が強いらしく、あたりは一面のスカブラ、目を上げると、圧倒的な険しさで氷壁がそびえているが、その上半部はもう吹雪のためによく見えない。第四キャンプに帰るシェルパ達は、まだたつぷり三時間はかかるので大急ぎで帰つてもらつた。天幕を二つ向い合せに張つて、その間に覆をつけて炊事場にしてある。そこに坐つて、石坂とぼそぼそ話していると、一吹きくるたびに粉雪が舞いこみ、あたりにおいてある食糧や石油コンロは見る見るまつ白になる。二人の頭にも肩にも雪が積つて外はいよいよ猛吹雪である。こんな時は、上では標識も足りないであろうにと、かわるがわる入口を明けて外をのぞいて見るが、さつぱり様子はわからない。そのうち、入口を明けることさえためらわれるような猛烈さである。四時、五時、時間はどんどんたつていく。私たちは風の音の中にも何か聞えないかと耳をすませ、話もとだえがちであつた。

六時前、叫び声を聞いたように思つて天幕をとび出すと、すぐ裏の稜線をおりてくる三人の姿が目に入つた。「いつも心配させやがる」と思いながらも、元気な姿を見るとほつと安心する。彼らは氷壁の下部、氷が断層になつて切れおちている部分を乗越し、高度七二〇〇メートル付近まで登り、固定綱三〇〇メートルを付けた。夢中になつて仕事をしているうちに三時になつてしまい、あわてて引返したが猛吹雪のため道を見失つてなかなか帰れなかつたという。松田は、

「引き返し点から主稜線を見上げると、もうすぐでしたよ。うまく行けば、あすは村木さん達上へ出られるんじやないですか。」

と意気軒昂である。

然し、以後の一週間というもの連日、同じような天気が続いた。午前中はどうやら晴れているが強風に悩まされ、午後になると必ず吹雪が襲つてきて、第五キャンプへ戻る途さえ分らなくなり勝ちである。一進一退という言葉がそのまま当てはまるような毎日であり、予定の日数はどんどん無駄に過ぎていく焦燥の日々であつた。

一七日の夕方には、住吉、田辺の新手と休養に下りていた山野井も第五キャンプに入つて隊員六名、シェルパ二名という主力が集結したが、一八日は朝から吹雪で行動できず、一九日は計画表では許される最終日ということから、第六キャンプを建設して松田、ガルツェンを登頂隊とし、隊員四名がサポートする予定で出発したが、猛吹雪の中に雪崩の危険を感じて引返さざるを得なくなつた。

もう明日は撤収を開始しないと、途中の各キャンプの保有食糧、燃料もなくなるというギリギリ迄追いつめられてしまつたのである。それから最後の二日間の有様は最初に記した通りで、私達の登頂計画は失敗に終つた。

あとがき

計画が終つて、時が経つにつれて私達の行動に対する反省も色々の角度からなされた。

行動計画の立て方、登頂時期の選び方、隊の運営方法、最後の氷壁の処理法、ルートの選び方等、色々問題はあつた。運営の面では、前衛峯の通過の際に、一寸したあせりが行動のつまづきになつて現われたような事件があつたが、ヒマラヤの未知のルートを採る場合、あの程度の事はままあり得るのではないかと考えている。問題は、隊員が現実にああいつた場で、どのように対処する力があるかということにあろう。適切な処置をとる能力がなければ致命

的な事件になる可能性は充分あるが、それは人間の能力如何にかかつていよう。その後ニマ・テンジンの不幸な事件もあつたが、ジャンプ台、第五キャンプ迄の推移はあまり予想と外れることもなく順調に進むことができたと考えているし、ルートとしては比較的安全度の高いものでもあつた。距離が遠いということ、高度差があまりないということは高度順化の作戦が立てにくい点もあるが、より安全であるという点は棄て難いものがあつた。

然し、私達の一番の失敗は、最後の氷壁に対する判断の誤りであつたであろう。高さ、傾斜に対しては以前からの観察で略推測をつけ、特殊な固定綱も充分に用意し、それに見合う作戦も持つていたが、現実にぶつかつて見て驚いたのは氷壁の硬さであつた。なかなかステップが切れない、ピトンが入らないという悪条件と悪天候が災して、遂に登ることができなかつた。これに対して或る人から、何等、将来に対する具体策が示されていないという批判を受けたが、ヒマラヤの高処における条件というものは、そんなに簡単なものとは思つていない。例えば氷の硬さにしても気象条件の著しい支配を受ける。壁の位置は略東面を向き日射の条件は悪くない。現に他の記録を見てもヒマラヤであの位の壁は、条件さえよければ登られているのである。昨年登れなかつたからといつて、どの年も同じ状態とは限らないし、四、五日の晴天さえ続けば登り得たものと今でも考えている。従つて、ピッケルとかハンマー、ピトン等、稍特殊な物は考慮する必要があつたかも知れないが、敢えて具体策らしいものを示さなかつた訳である。然し、誰でもぶつかつて見なければ氷の硬さ等は分らないし、それだけに遠くから見ただけの偵察というものが、如何にも無力であることを思い知らされたのである。今年、慶応隊は反対側、南西面のルートを採つて幸に登頂に成功した。人は、ルートの選択がよかつたからということを強調し勝ちであるが、私は必しもそうは思つていない。ヒマラヤの高処では天候の条件がよいことが一番の成功の要素である。南西面ルートといえども困難の多いルートであつた。計画の立て方、隊員の力、それ等の綜合力の上に天候が幸したからこそ登頂に成功したのである。負けおしみではないが、同じ自然条件に恵まれれば、私達のルートでも頂上へ登ることは、決して難しくはなかつたのではないかと考え

ている程で、最後の氷壁に対する具体策を示さないということは、前に持っていた作戦が決して無意味とは考えていなかったからである。

その他、隊員の管理方式にしても、新しい隊員の消耗振りを見ると考えさせられるものがあった。本当は第三次マナスル隊のような大人ばかりの隊が、ヒマラヤでは一番強いにきまっているが、次代のトレーニングを考えればそうもいかない。経験的には理想的な高度順化方式があり、その通り行っても結果は御覧の通りである。少し大げさな言い方をすれば、健康管理と共に微妙な精神管理も必要なゆえんである。とも角も、この計画を終始して、一喜一憂の内に全隊員が大変な勉強をさせてもらったという感じが強い。

昨年、帰国直後に、

「今、日本に帰ってきて、しみじみ思うことは、何時か、今回の経験を生かしてなんとかヒマルチュリの頂上へ登ってやろうという気持と、マナスル以来、四回目の体験で始めて知ったヒマラヤの恐ろしさ、この二つの相反する気持をどう処理して、自分を成長させるかということである。」

と書いたのを覚えている。今、ヒマルチュリという文字は何か他の名前に書き換えなければならないが、気持ちは同じである。貴重な勉強をした人々が中心になって次期計画を練り、更に後継者を養成していく。これは個々の団体ではなかなか困難なことで、日本山岳会でなければできない使命であろう。ヒマラヤだけが登山の目標ではないかも知れないが、ヒマラヤでなければ得られないものも沢山あるのである。

終りに当り、私共のヒマルチュリ登山隊に対し、色々お心添え頂いたり、お援助下さった方々に改めて深くお礼の言葉を申し述べる次第である。

（追記）挿入した地図及び登山隊ルート図は、毎日新聞社の好意によって掲載したものであることを付記し、感謝の意を表する。

（編者附記）本登山については、既に村木潤次郎著『ヒマルチュリ――雪原と氷壁の山』（昭和三四年一二月毎日新聞社刊）及び石坂昭二郎著『ヒマルチュリ日記』（昭和三四年一二月ベースボール・マガジン社刊）の二書が刊行されている。

ダウラギリ山群の偵察（一九五九年）

慶応義塾大学山岳部
登高会

今回のネパール・ヒマラヤ偵察行は、慶応義塾創立百年に際して慶応義塾山岳部並びにそのO・B団体である登高会が、一九六〇年春のネパール・ヒマラヤ、ダウラギリⅡ峯（七七五一メートル）登攀計画の予備行動として企画実行に移したものである。部創立以来、自分達の仲間だけでのヒマラヤ登山は、代々受け継がれて来た夢であり、何遍も計画されながら色々の障害に妨げられて実行出来なかつた悲願でもあつた。

昭和三十二年冬、山田二郎を中心としてヒマラヤ登山実行委員会が最初の会合を持つた。委員会のメンバーは殆んどが戦後の卒業生であつた。当初の目的はネパール・ヒマラヤ、アンナプルナⅡ峯（七九三七メートル）が選ばれ種々計画立案の上、三十四年春を同計画実行の時として推進していたのであるが、同年春の外貨割宛てを日本山岳会のヒマルチュリに譲つたため、計画実施の時は三十五年春に持越しとなつた。ところが三十四年春に到つて外務省経由ネパール政府宛提出された同峯の登山申込みが、英国のロバーツ隊へ先に許可となつたため、他の山を選ばねばならない羽目

になつた。そこで次に選ばれたのがネパール中西部ダウラギリ山群の雄峯ダウラギリⅡ峯（七七五一メートル）である。しかし、同峯は未登の高峯として広く各国の登山家に注目されながらも、同地域が未だ十分に踏査されていない西部ネパール奥地に属するため、過去においても一九五三年オーストリア隊、一九五四年英国隊並びに一九五八年京都大学西北ネパール学術探検隊のわずか三隊が、その山麓を通過したのみであり、山自体については全く知られていない状態である。そこで三十四年秋を期して急遽、偵察隊を派遣することとなつた。

出発は八月下旬、インド経由カトマンズ、事務処理の後、空路ポカラ、ポカラからキャラバンを編成し、カリ・ガンダキ沿いに遡行してツクチャまで、ツクチャから西進してダウラギリ山塊の北側ムクット・ガオン部落に入る。ここを根拠地としてダウラギリⅡ峯の偵察を行うが、前記ロバーツの写真、又京大隊の写真によつて地形的には東北面は無理で、北側から氷河を遡行して内院プラトーに達するルートが可能性が強く、偵察の主力を注ぐこととする。ダウラギリ偵察に約一カ月を予定し、終了後はツクチャまで引返し、カリ・ガンダキを渡つてヒンズーの聖地ムクチナートを経、トウンドム・ラを越え、マルシャンディ源流沿いにマナンボット、トンジェを通り、ポカラに帰る。以上約三カ月間の日程である。加藤喜一郎、宮下秀樹、石島襄二、神戸常雄の四名が選ばれ、慌だしい準備の後、羽田を出発したのは八月二十一日であつた。カルカッタ経由カトマンズに着いたのは八月三十日であつた。

ここでシェルパの雇用問題につき、例のヒマラヤン・ソサイエティと、(註一)同年五月改訂された登山規則(註二)のために大変な苦労をさせられたが、そのいきさつを書くと優に「山岳」一冊分の原稿となるので割愛するが、唯ここに一つだけハッキリさせておきたいことは同登山規則第十五条にも明記されているように、今後のネパール・ヒマラヤ登山者のシェルパ雇用はH・S（ヒマラヤン・ソサイエティ）を通じない限りは不可能であるということである。

（註一）The Himalayan Society. Head office は Putali Sadak, Kathmandu, Nepal. Branch office は Khumbu, Namche Bazar, East No.3, Nepal である。

(註二) Terms and conditions for carrying mountaineering Expeditions to the *Himalayas in Nepal*.

XV) His Majesty's Government of Nepal will henceforth give recognition to those foreign parties visiting Nepal who undertake to carry mountaineering, scientific and similar expeditions in Nepal by arranging the provision of Sirdar, Sherpas and porters required for the same through the Himalayan Society, Kathmandu. (May. 12, 1959)

この項が追補された。同登山規則については日本山岳会編『マナスル・一九五四～五六年』一二八頁を参照されたい。

経済面を全面的にインドに依存しているネパールは、外交面にもインドの制約を受けることが多く、国家意識の向上もあつて意外にインドに対する反感が強いようである。特にテンジン・ノーケイがエヴェレスト登頂後、「自分はインド国籍に属する」と云う声明を出して以来、テンジン個人に対する悪感情が、彼の組織したダージリン・シェルパのシェルパ・クライマーズ・アソシエーションにも(註三)向けられている訳である。勿論それだけでなくコムミッションその他を独占しようとする肚が、H・S側にもあるのであるが。兎も角、H・Sは現在では唯一の政府公認のシェルパ雇用斡旋機関である。だからネパール国内ではH・S登録以外のシェルパは使えないことになる。ところがH・Sの登録シェルパはロクなのがないと来ている。我々が雇用希望の優秀なダージリン・シェルパは勿論、前記シェルパ・クライマーズ・アソシエーションに属しているから、我々が外務省登山係のN・M・シンにダージリン・シェルパを使わせてくれと希望すると、H・SのO・Kがあれば構わないとの返事であつたが、勿論利害相反するH・SがO・Kする筈が無かつた。我々はH・Sと交渉を重ねるほか、コイララ総理大臣、テンジン・ノーケイその他頼りになる総ての線を動員した結果、到頭日本出発前から契約済みのダージリン・シェルパ、ラクパ・テンジン、グンディの両名を、H・Sの臨時会員とさせて雇用することに成功した。ところが、僅か七七五〇メートルのダウラギリⅡ峯が単に「ダウラギリ」と云う名前であると云う理由で、第一級のロイヤリティー（登山料）三〇〇〇ルピーを支払わされたのは、誠に残念であつた。(註四) 登山係のN・M・シンはH・Sの黒幕でもあり、油断出来ない存在である。(在カトマンズH・Sの支配人代理、ナルシン・マン・プラダンは彼の甥である。H・Sが御用機関として高姿勢なのも、一々彼の

指令で動いているからであろう。(註五)

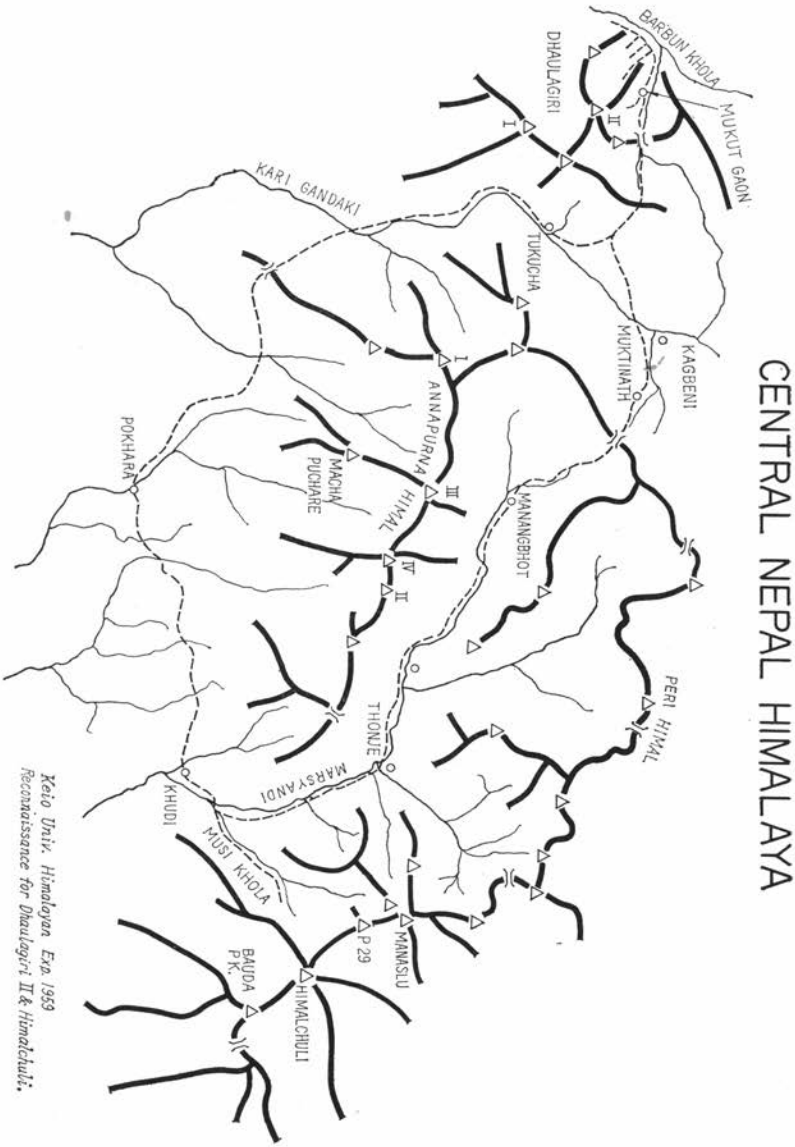
(註三) Sherpa Climber's Association. No. 1, Tonga Road, Darjeeling, West Bengal, India.

(註四) 註二参照。登山規則第十二条に、エヴェレスト、ローツェ、カンチェンジュンガ、チョー・オユー、マナスル、マカルー、アンナプルナ、ダウラギリは登山料三〇〇〇インド・ルピーを政府に支払うべしとの項がある。

(註五) 同年のヒマルチュリ隊(日本山岳会)は登山規則改正前であつたから問題はなかつたが、改正後入国したチョー・オユー隊、飯田山岳会隊、雪男探検隊は皆同じトラブルにぶつかり苦労したのである。

兎も角、H・S相手のネパール式の気長な交渉がやつと終つたと思つたら、今度はR・N・A・C(王立ネパール航空会社、但しインド資本)が税金問題で政府とゴタゴタを起して飛行停止を喰らう始末、テンヤワンヤの後ポカラ向けの再開一番機に乗つたのは九月十九日、実に二十日間に亘つて我々は名前だけは一流のイムペリアル・ホテルの不味い飯を喰わされた訳である。

九月十九日、ポカラ着。同地で三十六名のポーターを雇用する。ツクチャまで一日五ネパール・ルピーの契約。驚くなかれこのポーター共、H・Sの指令でカトマンズからポカラまで、テクテク歩いて来て我々の到着を待つていたとは……!! 九月二十一日、マラリヤ研究のため我々とツクチャまで同行されるWHO(世界保健機構)の正垣さんが、カトマンズから飛んで来る。愈々、待ちに待つた出発!! モンスーンの名残りの雲に蔽われてヒマラヤは顔を見せないが、皆の心は明るい。隊員四名、シェルパ二名、正垣氏の他、H・Sにかくしてダージリンから連れて来たピンゾー、カルマの二名のシェルパ、連絡官のプラダハンが加わつて皆キャラバン・シューズに半ズボンの軽装で足取りも軽い。路はモンスーン・ルート(モンスーン中は谷筋は歩けず尾根路を行く)なのでイキナリ急登で、皆アゴを出す。途中、アンナプルナ連峯、マチャプチャリ、ダウラギリ主峯の大景観を次々と楽しみながら、五日目カリ・ガンダキの河岸に下り、後は流れを遡つて北へ進む。



Keio Univ. Himalayan Exp. 1969
Reconnaissance for Dhaulagiri II & Himalchuli.

二十八日、ツクチャ着。ここは言うなればチベットの玄関口といった感じだ。二日滞在して人夫の支払い、ミュール（騾馬）の雇用、現地米の買入れ、紙幣と硬貨の交換等忙しい。川喜田隊以来御馴染みのスッパ、サンガルマン、インドラマンの両セルチャンを通じて万事スムーズに処理出来たのは有難かった。三四日前から急性の腹痛に苦しんだ石島も恢復する。村のお医者とジャック・ナイフ一挺を小犬と交換する。名前はトラ。ニル・ギリとツクチャ・ピークの谷間の村、ツクチャ。その石造りの家並みを吹き抜ける北風が祈祷の白旗をはためかせ、砂塵を捲き上げる。

十月一日、カトマンズに帰る正垣氏と袂を別つ。弁髪のチベッタンに追われてヤクの群が北から塩を運んで来る。中共兵を何人も殺して逃げて来たというカンバ族の青年はソフト帽に直刀、裸馬に飛び乗つて荒れた河原を走り去つて行く。後を追つて我々のキャラバンも北に進む。二日目からカリの流れを離れて路は上りとなる。時々、カラン・コラン（白鳥）の群が啼き交しながらヒマラヤを掠めて南へ下つて行くのと摺れちがう。右手遥か、赤褐色のチベット高原が延々と連なつて涯しない。この辺りからは、いじけた灌木ばかりで、もう緑の梢は見当らない。

十月四日、サングダに着く。この村でヤクに換える。乞食が来て、歌を唱い踊りを踊る。シェルパに聞くと我々の讃歌だそうで、一ルピー祝儀をやると感激してベロを出した。これが最敬礼だ相な。このところ、午後は必らず雨。ゴムボートまで用意したケハ・ルンパも意外に水量少なく、丸木橋もあつてなんなく通過。明くる十月六日は雪のコグ・ラ越えで手荒くシゴかれる。何しろキャラバン装備では芯まで冷えて皆悲鳴を上げる。翌日はスカッと晴れて、ティジェ・ラ（五三〇〇メートル）から遥かマナスルを望み、バラ・サーブ（加藤）は感無量の面持ち。ここからムー・ラまで、モンスーンも上つてカンカン照りのラプツェ・シャルマ高原は、昨日に変る炎熱地獄となる。ヒマラヤ四回目のバラ・サーブもキャラバン中に高山病とは驚いたと息を切らす。

十月八日、ムー・ラ（五四〇〇メートル）に上ると眼前にダウラギリⅡ峯があつた。息を整える暇もない素晴しさである。圧倒的な東北面。氷壁をえぐるヒマラヤ襞。皆時の経つのを忘れてその特異な山容に眼を注ぐ。矢張り東北面は

手がつけられない大氷壁だ。ムー・ラの下でラクパが雪男の足跡を発見する。例によつて一列の足跡が遥かムクット・ヒマールの方まで続いている。雪男探検隊ならぬ我々は、写真を撮るだけで何の未練もなく雪男を平和な大自然に委ねて出発する。十月九日、前夜はダウラギリを正面にした快適な草原でキャンプ。今月も日一杯、厭気がさす程下る。但し草原、モレーン、河原と点綴する路は絶えずダウラギリを正面に仰ぐプロムナード・コースである。

やがて行手の谷が大きく開けて、明るい南斜面にムクット・ガオンの段々畠が現れる。部落内のゴムパの屋上にテントを張る。傍にネパール、日本の両国旗、慶応の三色旗を立て、小さいながらも向う一カ月ここが我々のB・Cとなる。この村のスッパの息子は、我々のシェルパ、ラクパ・テンジンと義兄弟の仲で何かと都合が良い。折から収穫が終つたばかりで家々の庭先には黄金色の麦束が山と積まれている。そしてこの豊かな村の、素的に美味しい馬鈴薯と、コクのあるチャンが我々の疲れを癒してくれた。

ムクット・ガオン（三八五〇メートル）を根拠地として、いよいよ我々はダウラギリⅡ峯（七七五一メートル）登頂ルートの偵察に取り掛つた。ダウラギリの真北に位置するB・Cから見ると、北面は前衛峯がムクット・コーラの左岸を衝立のように走つて、全く取付く余地がない。唯ムクット・コーラ源流の東北面の上部氷河に入り込めれば、或いは前衛峯に隠されて見る由もないダウラギリ北面のプラトーへ進入するルートが発見出来るかも知れない。即ち主峯から北に下がる剃刀のような尾根が、末端で前衛峯の東端と交わる部分の状態次第である。もし緩傾斜のコルとなつていれば、それを越えてプラトー到達は可成り希望が持てそうである。問題は、その上部氷河と下部氷河を分つ落差三〇〇メートルのアイス・フォールの突破である。（以下この氷河をムクット氷河と呼ぶ。）B・Cからレンズを通して見たところでは、一寸登攀不可能と見えた。然しプラトー進入が、このルートから可能なら当然試登の価値があろう。宮下、石島、グンディの班は、最初B・Cの北側頭上に聳えるカングレワ（五六〇〇メートル）に試登し、前衛峯越しにプラト

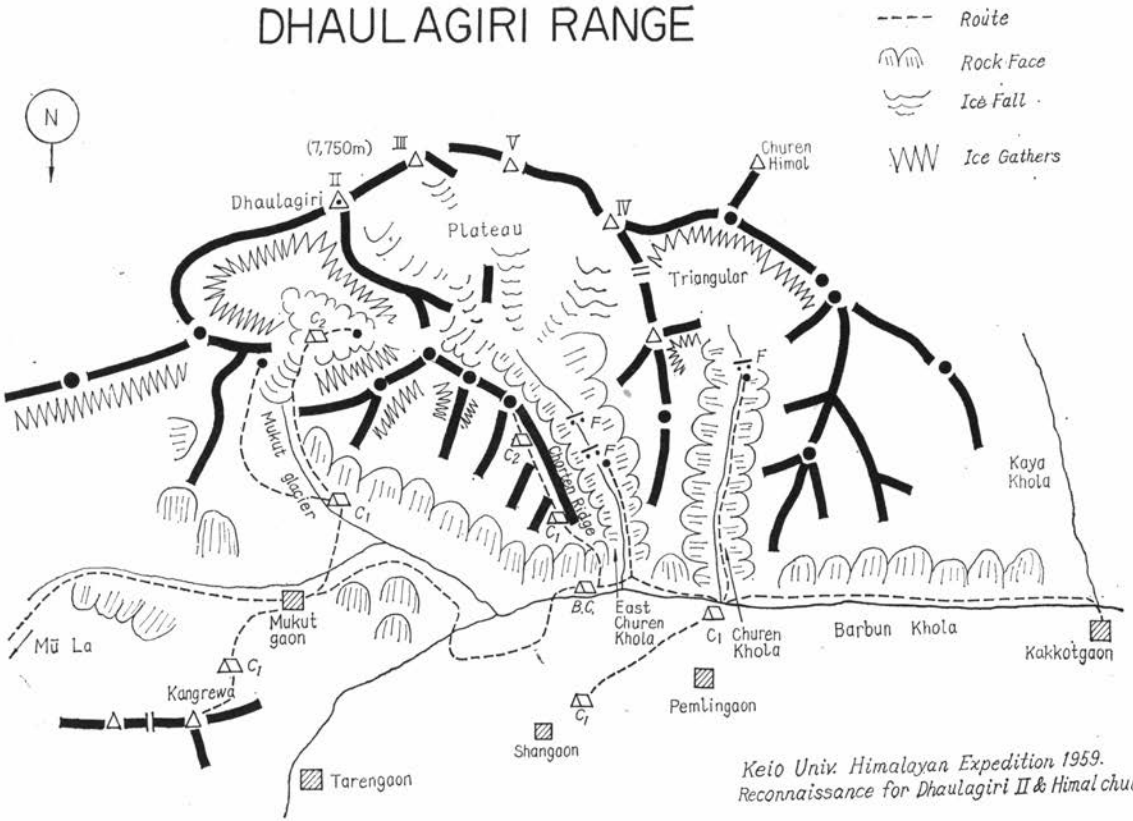
ーの状態及びムクット氷河より進入の可能性の有無を偵察する。その後B・Cに戻り、直ちにムクット氷河に入り、アイス・フォール付近の偵察・試登を行い再びB・Cに戻る。一方、加藤、神戸、ラクパ・テンジン、ピンゾーはムクット・コーラをバルブン・コーラの合流点まで下り、その後プラトーからバルブン・コーラに注ぐチューレン・コーラ、東チューレン・コーラの両河を遡行してプラトーへ達するルートを調査する。このルートはアプローチこそ長いが、両コーラの河原沿いにプラトー氷河に到達出来れば、現在渇水期に入りつつあるし東北面程の危険はあるまいと予想された。日本出発前から、この方面が本命と見られていた。両隊共に五日間の日程でB・C帰着を約した。連絡官のプラダハンはカルマと共にB・Cに残つた。

十月十二日、いよいよ偵察隊はその本来の使命を開始した。宮下、石島はムクット・ガオンの裏山を登りながら、バルブン・コーラに下る加藤、神戸を見送る。その後、急斜面の直登にシゴかれながら雪線直下にキャンプを張る。翌日約三時間で頂上（五六〇〇メートル）に着く。最後は急なナイフ・エッジ、右手はツァルカ側にドカンと切れている。振り返るとダウラギリ主峯が又物凄い姿を見せ始めた。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ峯、チューレン・ヒマールもプラトーを囲んで目の前だが、肝心のⅡ峯下部は矢張り前衛峯に妨げられ良く見えない。プラトー（約五〇〇〇メートル以上）上には数カ所、デブリとブロックが見える。無風快晴を幸い約三時間を偵察に過す。十月十四日、B・C帰着後ムクット氷河遡行、アイス・フォール直下まで偵察、高距三〇〇メートル余りだが両岸が突き出てゴルジュ状になつており、幅が一〇〇メートル余に圧縮されているため、上部氷河の重圧を受けて正面はテラテラのブルー・アイスとなつており、加えて上部のセラックスが今にも落ちそうに傾いている。見ている中にガラガラッと崩れ落ちて来る。両岸は三〇分置き位いに氷雪崩が落ちて、大きな氷塊が我々の足もとにまで、散乱して来る。ダンダン寒くなつて早々に引き返す。十月十五日・十六日アイス・フォールに挑み、最悪の下部一〇〇メートルを突破、アイス・ピトンを叩き込み固定ロープを付ける。十七日、バラ・サーブから遅延の由、連絡があつたのでCⅠを氷河末端に建設。十八日遂にアイス・

フォールの突破に成功、上部氷河に出る。但しアイス・ピトン二五本、固定ロープ四〇〇メートルを使い切つた（これは偵察隊の装備全部である）。氷は猛烈に堅く、国産アイス・アックスのピックが曲り、アイス・バイルは二つに割れて仕舞つた。アイス・ピトン一本打込むのにも最低十分は掛る。ステップ・カットまた然り。ラストのグンディは垂直の登りでモロに氷片を浴びて、二日目からは渡河用に用意して来た安全帽をかぶる始末だつた。何時もニコニコ顔のグンディが、このアイス・フォールでは終始ムッツリして「エヴェレストのクーンブ氷河の方がズーッと楽だ。大体こういう所では割増しを貰うことになつている」などとグチつたりした。折角突破したアイス・フォールは氷雪崩の危険性が甚だしいので、右岸のリッジから上部氷河に下るルートも偵察する必要がある。アイス・フォール取付地点で一日観戦していたプラダハンが、「テリブルな観物だつた」と首を振つて迎えてくれた。十九日、CⅠに来たチベット人から加藤、神戸隊のムクット・ガオン帰着を聞いて、一旦B・Cに帰つた。

B・Cで両隊の報告を比較検討し合つた結果は、両方共悲観的なものであつたが、ムクット氷河側は固定ロープを付け、ステップも馬穴のような奴を切つてあるので、取敢えず全員で取付き、アイス・フォール上にCⅡを進め、加藤、宮下が入つて上部氷河のドン詰りで三日間偵察を行う予定となつた。十月二十日、全員でB・C発午前七時、CⅠ経由アイス・フォール直下でクランポンを付け、ロープを繋ぐ。十時、宮下、グンディの組が一足先に取付く。突然、轟音と共に右上方のセラックスが崩壊する。取付き点の二人がパッと左手に逃げる。見ている背筋を冷いものが走る。大きな氷塊がドッと崩れ落ちて、一瞬の中に凄い風圧の吹雪で蔽われる。大粒の雪粒がバリバリッと顔に痛い。有難い!! 吹雪が収まるともう二人は平気で登り始めている。大荷物なので急な登りにシゴかれながら、十四時前回の最高到達点に着く。直ちにCⅡ建設、神戸不調で帰途を危みCⅡに残る。ここは上部氷河のカール・ボーデンに当り、頂上稜線直下の大氷壁が頭上に迫つて物凄い。石島とシェルパ二名は早々に戻る。途中、真下を通るとミシミシ厭な音を立てていたセラックスが、無事下部氷河に降り一息付いて見上げた途端に崩壊して微塵に砕ける。下の三人

DHAULAGIRI RANGE



Keio Univ. Himalayan Expedition 1959.
Reconnaissance for Dhaulagiri II & Himal chuli.

は呆然として顔を見合せる。CI帰着十八時。待ち構えたプラダハンから「コーガン夫人チョー・オユーに逝く」の報を聞き、出発時の華やかさを知っているだけに暗然とする。

十月二十一日、前夜半から気温下り、二人用テントに泊ったCIIの三人は惨めな一夜を送る。上部氷河はクレバスと氷壁が錯綜し、その上降雪でラッセルに苦しみながらルートを求めたが、午後になって降雪烈しく視界零。諦めてテントに帰る。CIの石島、クラパは右岸ムクット・リッジを山腹を捲きながらCIIと同高度まで達し、コール・サインを交わしてCIに帰る。翌二十二日も朝から雪で一メートルも積る。珍らしい湿雪で寐袋までグッショリ濡れる。今日も偵察ははかどらず、遂に「ムクット氷河は、上部氷河の悪相とアイス・フォールが春季にはもつと雪崩の危険性が強くなることを計算に入れると、来春の荷上げルートとはなし難い」と結論が出て、このルートは放棄することとなる。十五時、ムクット・リッジの石島にコール・サインで明日引上げを伝える。この日、石島はシェルパ二名とアイス・フォール落口真上まで達したが、新雪に悩まされ、新雪雪崩に飛ばされた石島が確保のロープにブラ下る一幕等あつて、結局ムクット・リッジも高捲きルートの傾斜が急で危険、見込み無しとなる。

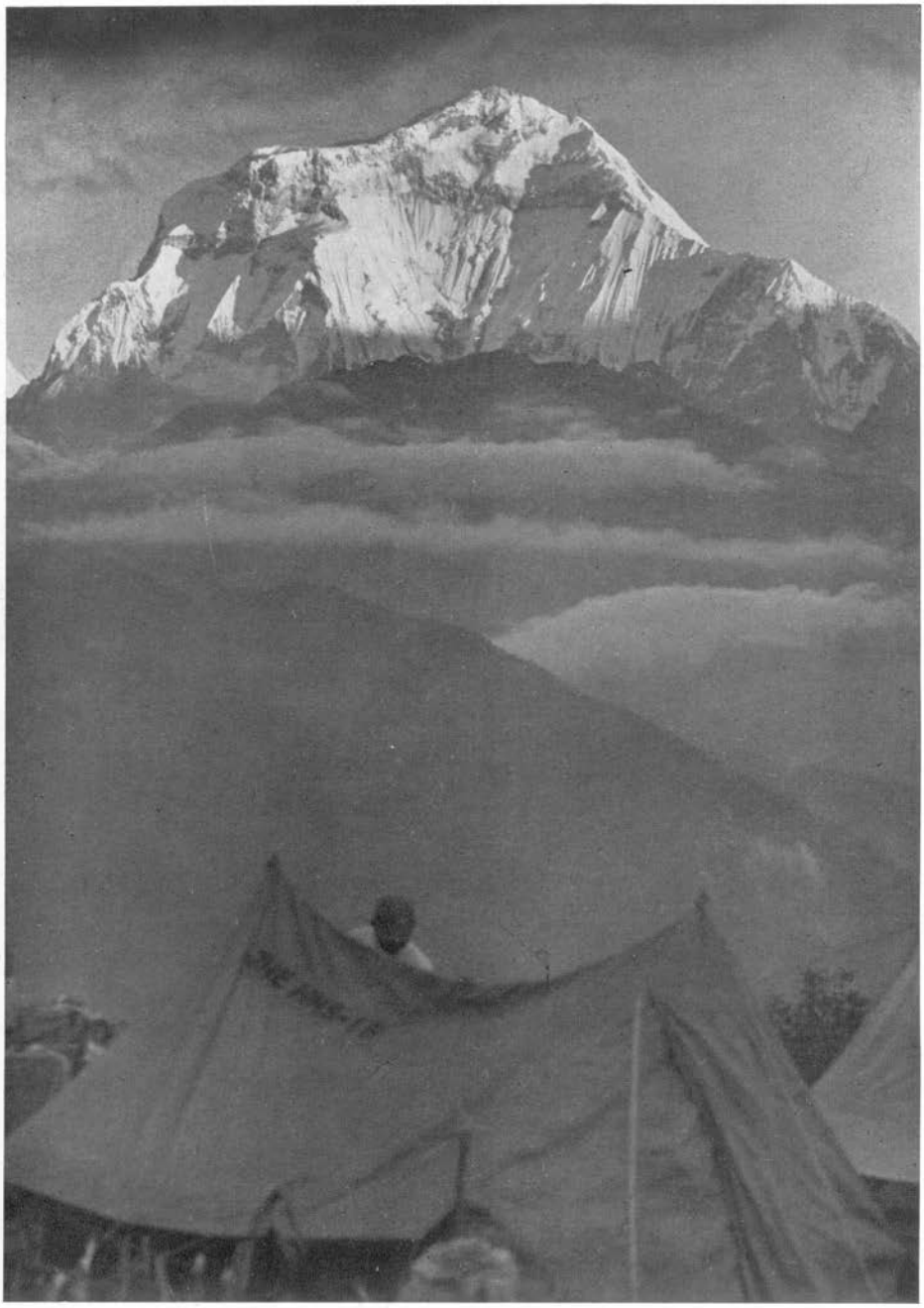
二十三日は晴、CIIの状態は昨夜が最低であつた。二人用テントに三人では身動きも出来ず、白桃の空缶に小便をする始末。勿論バラ・サーブの考案である。朝九時三〇分、陽が射すまで身動き出来ぬ寒さ、遥か頭上の稜線では雪煙が高く吹き上がり、ゴーゴー物凄い音を立てている。CII撤収、忽ちラッセルの連続。赤旗も埋りルートは不明、時々クレバスに胸まで落ちる。十三時、CI隊の呼び声を聞き、間もなく再会。荷を分けて下降、CI隊は固定ロープの撤収を行いつつ下降。十九時三〇分、全員CI帰着。カルマの差出す冷いチャンが喉に泌みる。かくてムクット氷河の偵察行は終了。後はチョルテン・ルートに最後の望みを掛けるのみとなつた。

ここで十一日前に遡り、加藤、神戸隊のバルブン側の偵察報告から記述すると、十月十二日加藤、神戸、シェルパ二名は、ムキアの息子ツィルング・フルバにヤク三頭を追わせてムクット・ガオンを出発した。バルブン・コーラま

で三時間、その間Ⅱ峯東北面の前衛峯は、切り立つた岩壁となつて取付くべくもない。ムクット・コーラとバルブン・コーラの合流点で股下までの渡渉、秋の逆光に光るススキを分け高原を登つて、シャン部落下に幕営した。ツィルングから二、三百年前に東チューレン・コーラ内院に部落があつたとの伝説を聞いていたので、双眼鏡で見ると、対岸の東チューレン・コーラ右岸末端のピーク（約七〇〇メートル）上に数箇のチョルテンらしきものを認めることが出来た。翌日、更に高所から眼鏡偵察を行う。東チューレンの右岸稜は、日本出発前から最も有力視されていたが、末端が総て岩壁となつて高距約一〇〇〇メートルもあろうか。チョルテンの疑問を解くにしても登攀の困難が予想された。東チューレン・コーラは、両岸が絶壁となり折重なつて谷底は見えない。ここから見ても絶望的な感じであつた。これに対しチューレン・コーラの谷筋は、狭いながらもいくらか開け、細々と白い渓流が続いている。但し内院からプラトーへの取付部分は、どの側も壁状又はアイス・フォールとなつて登攀は可成り困難と思われる。唯Ⅳ峯から北に走るリッジ末端の三角山の南西面に登攀可能ルートを発見出来れば、Ⅳ峯北側のコルからプラトーに入り、東に向つて比較的緩傾斜のプラトー上部を横断して容易にⅡ峯に取付くことが出来るであろう。そこで①チューレン・コーラ遡行、②東チューレン・コーラ遡行、③チョルテン尾根試登、の順で偵察を開始することとした。

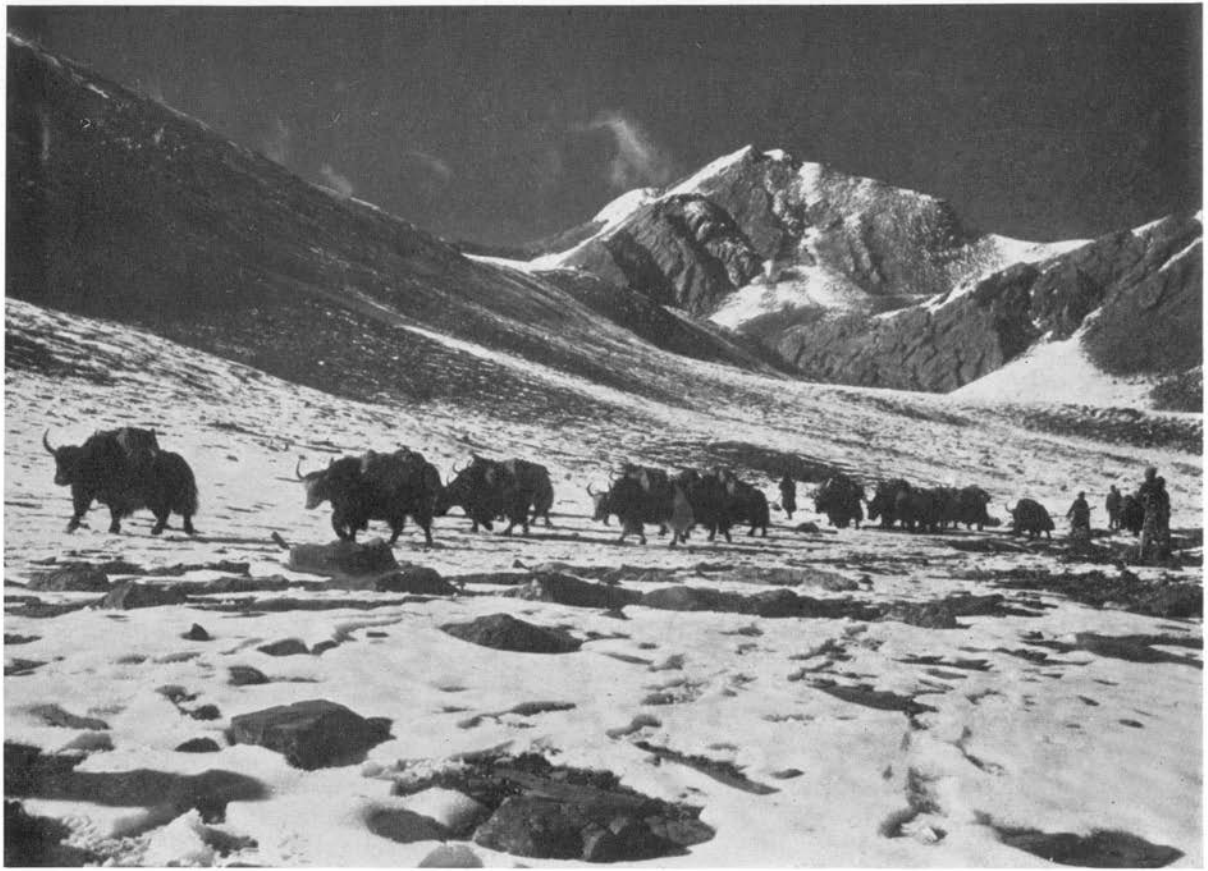
然し可成りの期待を以て、この方面に来た偵察隊が、多少の失望を味わつたのは事実であつた。眼鏡偵察の結果もダウラギリ山群の北面は悉く岩峯と氷壁で下部を鎧つた城砦のように見え、このルートこそと言える、可能性の高い登路は発見出来なかつた。特にプラトー到達への直線路である東チューレン・コーラが廊下状で続き、しかもプラトー氷河末端は急傾斜の大アイス・フォールとなつているため、ルートとして全く絶望的に思われることが失望の最たるものであつた。又、チューレン・ヒマールへの有望な登路も北面には発見出来ず、或いはカヤ・コーラ上流に入れば、何等かの解答が与えられるものと思われた。

翌十四日、再度バルブン・コーラを渡り、チューレン・コーラ出合に天幕を移動した。加藤、神戸、ラクパとチュ



ダウラギリ主峰の圧倒的な東南面（ファラテより）

Formidable south-eastern face of Dhaulagiri I (8172 m) as seen from Falate.



ムー・ラの下り

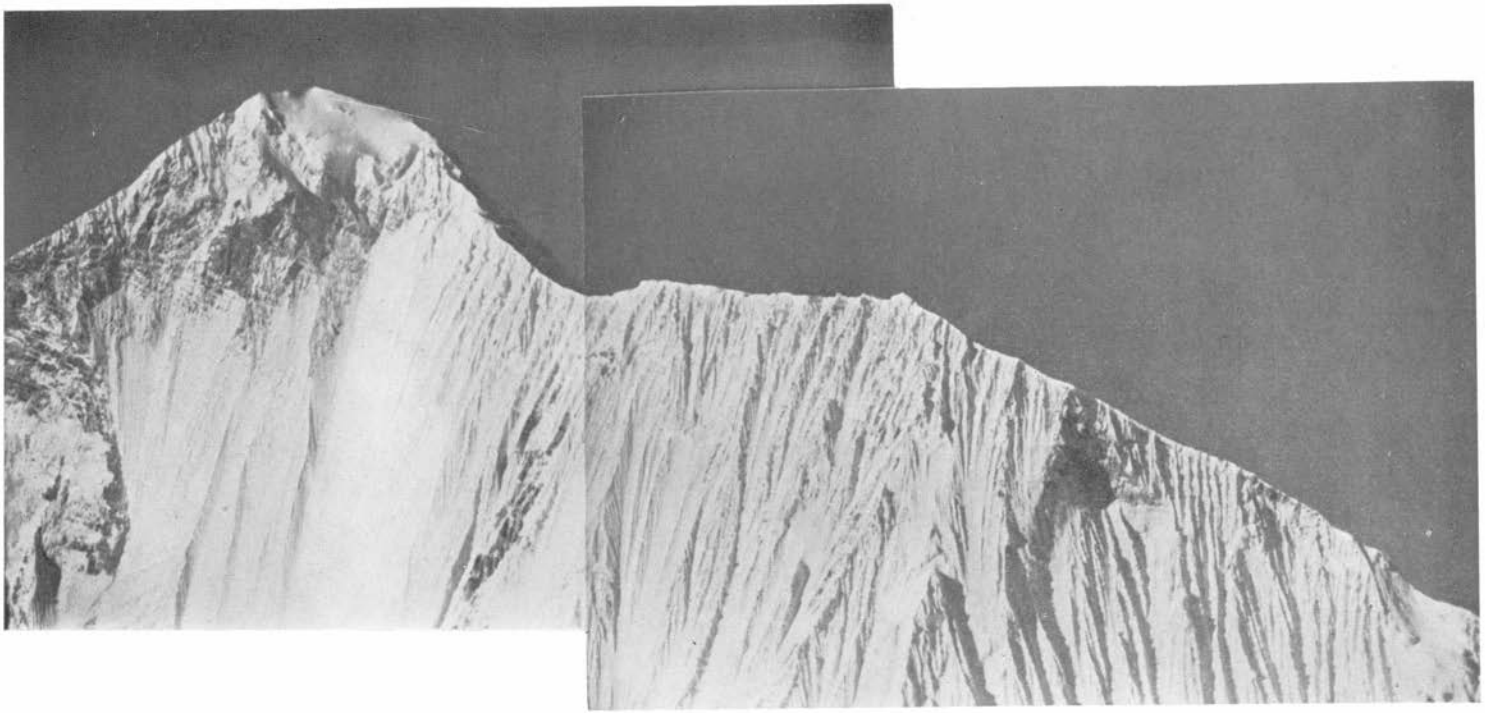
On the way down from Mu La.

ムクット・ヒマールの魅惑的な北壁（左端が最高峰）

The northern face of Mukut Himal (The left is the highest peak).

ダウラギリII峰の北東面

The north-east face of Dhaulagiri II (7750 m).

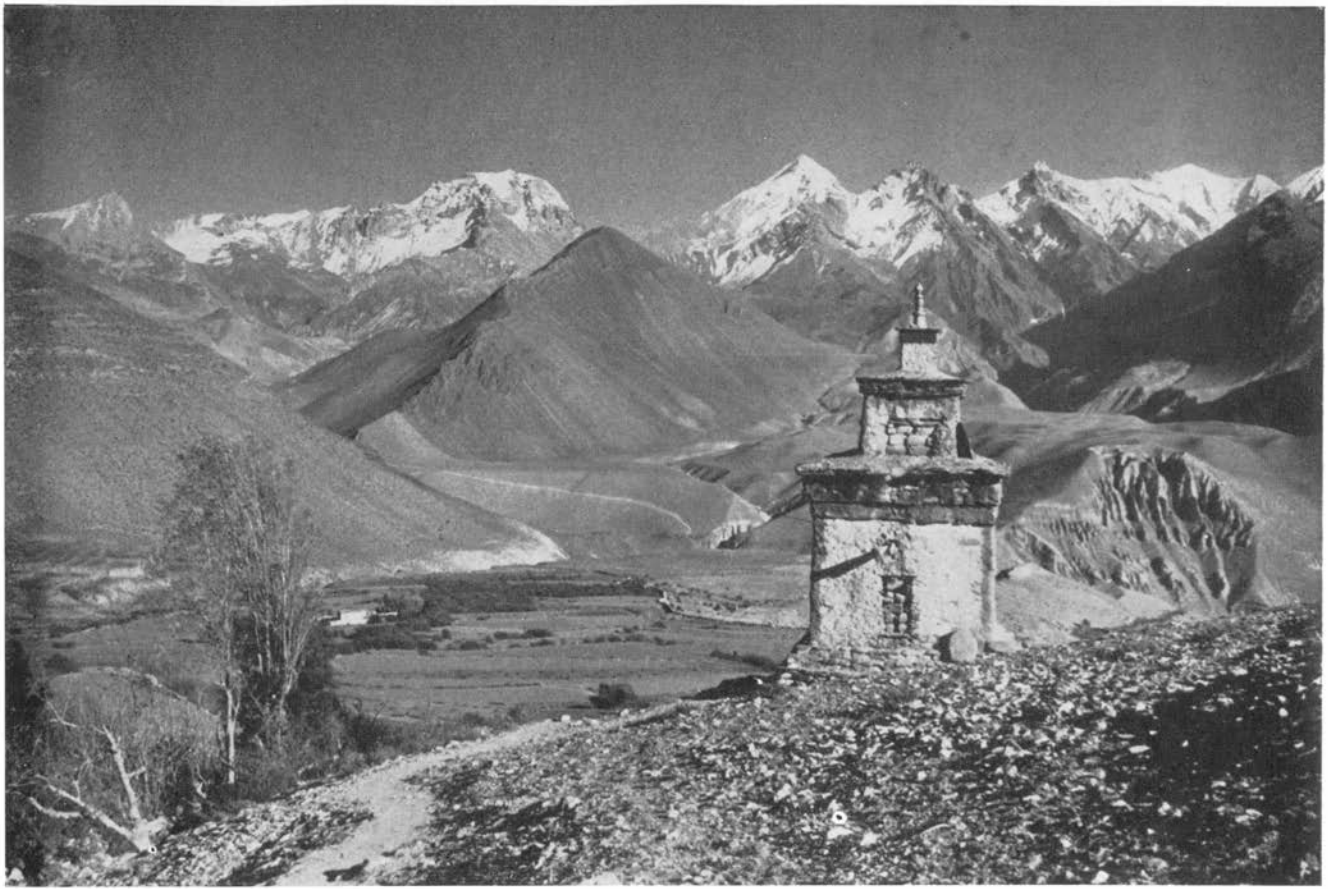


ダウラギリII峰の剃刀の刃を思わせる北西稜（望遠写真）

Dhaulagiri II (7750 m). Its north-west ridge like a razor-edge (telephoto).

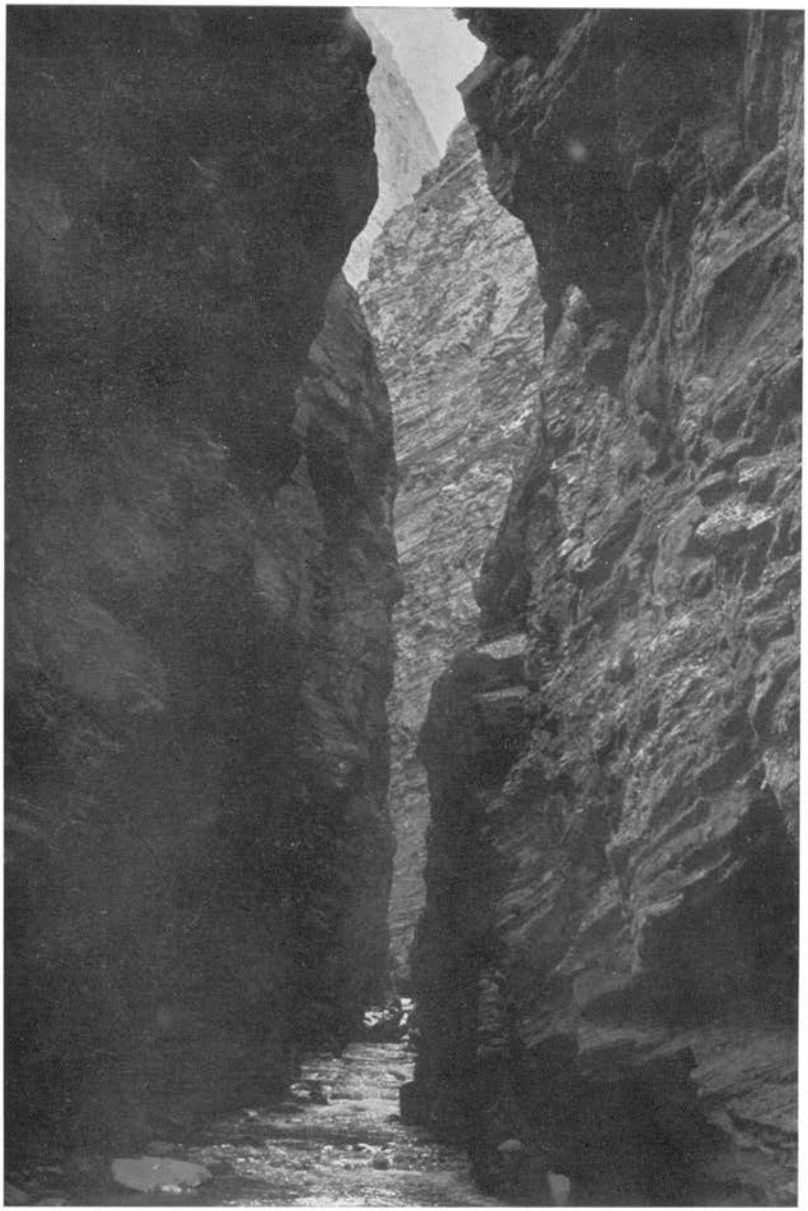
マナンボットからヒマルチュリの遠望（望遠写真）

The distant view of Himalchuli (7864 m) from Manangbhot (telephoto).



パラク部落からムクチナート・ヒマールの遠望

The view of Muktinath Himal from Palak village



チューレン・コーラ。不気味な廊下が何処までも続く

Endless, grim gorge of Churen-Khola.

ーレン・コーラ偵察に入る。両岸は取り付きようの無い岩壁となつており、所々砂の上に大孔が穿たれている。落石の仕業である。渡渉又渡渉、やがて谷幅四メートル程の廊下となり、胸まで水に浸る。急流に足を取られ、確保のロープに救われること数度、遂にそこから引返す。青空はベルトのように空高く懸り、深海のように薄暗く、雪融け水に冷え切つた身体は感覚が無い。渡渉は約二〇回前後、プレ・モンスーンの遡行は可能と思えない。十月十五日、東チューレン・コーラへ入る。出合から既に谷幅は狭い。水量はチューレン・コーラより少いが、もつと薄暗く、岩に苔がついて滑り易いので油断出来ない。岩蔭には長年の岩埃が堆積して、傍を通ると煙のように舞い上る。出合から十分で廊下となり、水深は股まで、三十分も遡行すると足の感覚は無くなる。やがて正面に滝が現れ、手前の淀みは深さも知れない。もつと内部からは大きな滝があるらしく、水響きが腹の底に響いて来る。ここまでで諦め、心を残しながら引返す。十月十六日、再びチューレン・コーラに入る。前日シェルパに作らせた渡渉用の橋桁を、皆で担いで行く。一昨日の引返し点を通過。廊下を抜けて暫く行くと、氷河までもう程近いと思われたのが、突然大きな滝で阻まれる。両側は高捲き不能、滝壺は忽ち胸まで入る深さ。止むを得ず引返す。

十月十七日、加藤、ピンゾーはバルブン・コーラを下つてチューレン・コーラ以西の谷及び尾根の末端を探るべく早朝出発したが、合流点のカコット・ガオンまでで半日を費し、空しく帰る。その途次、ダウラギリ北面末端部はルートとなるべき取付点も無い。出来ればカヤ・コーラに入り、チューレン・ヒマールへのルートを調べたいが既に時間の余裕もない。一方、神戸、ラクパはチョルテン岩峯の偵察に出発、脆いスレート状の岩場を登り、二時間でシャン部落から見えたチョルテンの台地に達する。快適な草地で、正面の谷間にⅣ峯と三角山が見え、放牧小屋（カルカ）の跡らしいものや乾燥し切つたヤクの糞も発見された。見下す東チューレン・コーラは滝場が連続して、一見して遡行不能を認めざるを得ない。この台地正面の岩峯北面を横断気味に登り、午後二時岩峯上の草原に出る。このまま、北面前衛峯の尾根通し進めば、或いは東チューレン・コーラ内院に降るルートを発見出来るかも知れない。然し、前途には

大小の岩峯が乱立して予断を許さないし、岩質もスレート状で不安定である。唯、他のルートが絶望の時は、このチョルテン・ルートにキャンプを延ばす試みも行わなければならない。神戸はここから引返し一つの希望を残してバルブン・コーラ側の偵察は終了した。(註六)

(註六) チューレン・コーラ、東チューレン・コーラ、バルブン・コーラ、ムクット・コーラは、いずれも非常に透明な河水であつたのは、氷河末端から流れ出る河であるだけに不思議な感があつた。岩質によるものであろうか。また前二者は上流の方が水量が多くなることもあつた。

十月十八日、バルブン側偵察隊はムクット・ガオンに帰り、前述のようにムクット氷河偵察隊と合流したのである。

ムクット氷河の芯の疲れる一仕事を終ってB・Cに帰つた我々は、濡れた装備の乾燥に、陽ぶくれになつた顔の手入れにと二日をノンビリ過した。B・Cでそよ風に吹かれながら昼間からチャンで一杯やつていると、アイス・フォールの苦闘も夢のようにしか思い出せない。麦打ちに忙しいチベッタンの唄声が、澄んだヒマラヤの空に吸い込まれて行く午後、アメリカの登山隊がムクット・ヒマールから降つて来た。我々と同じ四名、皆ヒゲ面だが年を聞いたら若いので驚く。ダウラギリを背景に連中のチーズと日本の白桃缶でティー・パーティーを開く。装備はお粗末だがポラロイド・カメラとベルト付きの小型高度計に差を付けられる。アメリカ隊は二十六日ヤクに荷を付けて出発。我々は翌二十七日、ヤク七頭と共にバルブン・コーラへ下る。前回のキャンプ地に前進ベース・キャンプを作る。徳沢辺りの梓河原を思わせるカラッとした明るい河原である。薪も豊富で快適なB・Cが出来た。

十月二十八日、全員でチョルテン・ルート偵察に向う。CI建設予定地は積雪皆無なので燃料タンクで水を運び上げることとする。四三〇〇メートルの岩峯直下の草原にテント場建設、B・Cに帰る。二十九日、加藤、宮下、石島、グンディがCIに入る。他はサポート。CIの正面にカンジロバの三つのピークが美しく聳えている。三十日、宮下、石島

は加藤、グンディのサポートで四八〇〇メートルの稜線にCⅡを建設する。この日、野羊の群と至近距離でぶつかり、一散に飛び去る連中の岩登りの上手さに感歎する。事実、垂直に近い岩稜を跳ね飛びながら軽々と駈け上る見事さは、シートンの動物記に出て来る峯の大将を想わせる夢のような光景であつた。三十一日、宮下、石島は浮石と新雪の岩登りに悩まされながら、チョルテン・ルートの岩稜を辿つた。午後三時、最後の岩峯を越すと突然、チョルテン・リッジの全貌が開けた。今までの岩稜は氷のナイフ・エッジとなつて東北に向つて走り、最高点は上部ムクット氷河と東チューレン・コーラ内院を分つ例の鞍部上に位置している。その間、内院氷河への降路はリッジの東チューレン・コーラ側が絶壁となつているため、全く望みがない。降路が発見出来ない場合、これ以上チョルテン・リッジを辿ることは無意味である。それで遂にチョルテン・ルートも絶望と終る。但し、この位置から望む内院の展望は素晴らしい。東西にⅡ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅳ峯の各ピークが走り、プラトーの雪原をかかえて大円型劇場を造つている。プラトーから流れ落ちる大アイス・フォールは落差二〇〇〇メートルもあろうか。その雄大さに唯、呆然とするのみであつた。二度と訪れる人もあるまいこの地点にケルンを積む（高度五三〇〇メートル）。流石に帰りは足取りも重い。十一月一日、CⅡ・CⅠを撤収、サポート隊に迎えられB・C帰着、翌二日、休む間もなく再度、チューレン・コーラに突入するが、前回の滝場で又撃退される。本当にもう一息という所まで来ているのに口惜しくてならない。ドウドウ地響き立てて落下する滝を仰いで、皆、言葉も無かつた。

その夜、B・Cの石火鉢を囲み、盛大なジンギス汗料理の炎を夜空に上げながら、今後の行動を協議する。約一カ月に亘るダウラギリ偵察は、南面以外の各方面からの試登も空しく、遂に登攀ルートを発見出来なかつた。南面を偵察するにも、又一度カリ・ガンダキをカリ・コーラとの合流点まで下り、再度カリ・コーラを遡行せねばならない。そのための資金・食糧も既に乏しく、ヒマラヤの常識からしても南面は余り期待出来ない。この際、ダウラギリに未練を残さず諦めて、当初の計画通りキャラバンを開始し、マルシャンディを下つてヒマルチュリ西面の偵察を行うこ

とに決定した。同西面は、我々の仲間で古くから研究され可能性の存在を認められていた地域で、マルシャンディの支流ムシ・コーラに二・三日の遡行で西面の可成り有効な偵察が期待出来たのである。然しながら、さきのカトマンズでの滞在が災いして、既に季節的にも冬に入り、帰途を阻むムー・ラ、ティジェ・ラの峠越えが雪に閉される恐れもあり、我々は慌だしい気持でムクット・ガオンに帰り、出発の準備を急いだ。

十一月五日、駈け足でやつて来た冬の冷い風がもたらしたか、鉛色の雲が空を蔽い始める。ムキアとチャンを汲み交して別れをつげる。先に使命を残した我々は、余り感傷にも浸れず再び来ることの無いムクット・ガオンを後にした。案の定、降り出した雪に悩まされながらの帰途、オール・インディアのニュースで福岡大学隊の行方不明を聞きビックリする。マダム・コーガンの遭難直後でもあり、その後V・O・J(註七)他のニュースも刻々詳報を伝えて来た。一同徹夜で協議の結果、ヒマルチュリを棄てて救援に向うこととした。ところが翌日、同隊の無事が判りホッと一安心する一幕があつた。十一月十一日、再びカリ・ガンダキの濁流を見下すファカンの部落に帰り着いた。ここから道はカリ・ガンダキを渡り、ヒンズーの聖地ムクチナートを経、トウンドム・ラ(五〇〇〇メートル)を越え、アンナプルナ連峯北側の村マナンボットに出て、後はマルシャンディ伝いに下り、ヒマルチュリ西面からマルシャンディに注ぐムシ・コーラとの出合まで二週間の行程である。

(註七) VOICE OF JAPAN。その他 VOICE OF AMERICA, B.B.C., VOICE OF AUSTRALIA も聞くことが出来た。使用ラジオはシャープ十五石 2 BAND。

十一月十二日、カリ・ガンダキをヤクの背中で渡る(この時バラ・サーブが飛び乗り損つて、ヤクの背中からジャボンと真逆様に落ちる嬉しい一幕もあつた)。荒れた河原伝いにムクチナートに入る。赤や白の練瓦造りの大きな建物が小高い丘に聳え、ヒンズーの聖地らしく活気に溢れた村である。折良く徴税旅行中のサンガルマン・セルチャン

に再会、何んとなく伯父さんに逢つたような気がする。サンガルマンの威勢は大したもので、ヤクからゾーパ[註八]への切替え、紙幣と硬貨の交換、総てスムーズに取計つてくれる。その上、名高いムクチナート[註八]・ゴンパの見物に誘つてくれ、我々は彼の案内でノンビリ一日を見物に過した。ムクチナートはヒンズー教のメッカとも云うべき聖地で、五月の祭りにはインドから何万人もの巡礼が来るそうである。僧院は静かなポプラの木立の中に、数カ所点在している。有名な聖火が青い炎を岩の間から上げ、竜頭の蛇口から聖水が流れ出る等、種々の名所を落葉を踏み分けて訪ね歩きながら、久し振りに閑寂な気分に浸る。カトマンズ辺りのジャラジャラした寺院に比べると余程日本的な静けさが嬉しい。然し、黄金の瓦越しに空高く雪煙を吹き上げるダウラギリ主峯が、青空に抜きんでているのを見付けると、もう信仰心などどこかへ吹き飛んで仕舞う。十一月十四日、サンガルマンの見送りを受け、十二頭のゾーパに荷を付けて出発、ヤクと同じ一日六ルピーでマナンボットまでの契約、然しヤクよりもノロマである。ヤクを連れてムクット・ガオンに帰るツィルング・フルバが涙を流して別れを惜しむ。可成りガッチリ頂かれた我々は、意地悪く「御得意様と別れるのが辛いんだろう」と思いながらも一寸感傷的になる。

(註八)　ヤクと牛の雑種、ナムチェ・バザール地方に多く産するという。
(註九)　Muktinath.「救済の地」"Place of Salvation" の意。

十五日、寒風吹き捲るトウンドム・ラに立つ。右手はアンナプルナⅢ・Ⅳ・Ⅱ峯、左手ペリ・ヒマール、ダモダ・ヒマール[註十]を見渡す大景観も、手荒く冷い風の中では、ガタガタ震えて焦点が定まらないのが残念であつた。ジャージン・コーラ[註十一]に沿つてドカドカ降り、アンナプルナⅢ峯の下をマナンボットに近づく。この辺り緑の針葉樹林帯となつて西北ネパールの乾燥地帯を後にして来た我々にはとても新鮮な景色である。マナンボットはⅢ峯直下の広い河原から山裾に拡がる大きな部落であるが、丁度三年に一度の祭日で花火を鳴らしチベッタン・ダンスで大騒ぎの最中であつた。ところが五日間の祭の期間中「四足は部落に入れぬ。違反すれば一〇〇〇ルピーの罰金だ」と、呑んだくれが

来てヌカす。止むを得ず部落の手前でテントを張る。夜、ラクパとプラダハンをスッパの所へ交渉にやるが、サンガルマンの紹介状も因襲の前には効果なし。仕方無く十八日の祭明けを待つこととする。この村はおまけに禁煙（罰金二〇〇ルピー）と来ているから、唯一人のスモーカー、宮下がテントの中で一服する時は、入口に犬をつないで番をさせる始末だ。十七日、ムクチナートのゾーを帰えす。

（註十）Peri Himal, Damodar Himal.

（註十一）Jargen Khola.

十八日、やつと祭りも終り、ポーターを集めにかかると女が六名、男、それもヨボヨボ爺が二名でやつと八名。あとは下流のピサンで雇うこととして、ゾー六頭を雇う。足もとを見られて一頭十一ルピーは痛い。マナンボットのチベット人共はインド辺りまで出稼ぎに行くらしく、金歯をはめたり、革靴をはいたり、英語の片言も喋るが、それだけスポイルされていて柄が悪い。村を通過する我々を囃したり石をブツけたりする。この辺から路は平坦な河原を行く。途中、ブラガのゴンパを左に見る。西遊記に出て来そうな岩山の中腹にあつて、遠眼には大変お伽話的である。路は素的な松林を縫つてどこまでも続く。きれいな池にペリ・ヒマールの白い頂が映つて、五十年前の上高地はこんな風だつたろうと想つたりする。夜はキャンプ・ファイアーも盛大に出来る。ピサンでポーターを雇えたが、団交の結果一日六ルピーに賃上げさせられる。この辺からは京大アンナプルナ隊の記録でお馴染みの谷筋である。やがてP二九、マナスルが正面に現れ、隊長の想い出話がウルサくなると、もうトンジェも近い。スッカリ亜熱帯に戻り皆半ズボンで歩く。長い尻尾でチャコール・グレーのラングール猿が河原でノミをとつている。甘いスンダラ（蜜柑）も喰える。ラクリ（薪）を背負つた可愛い娘の二人連れに逢う。バラ・サーブの顔を見て笑つた方が、日本のサーブ方から御ヒイキのサムデンだそうな。早速我々の隊もトンジェの娘ポーター達を傭うことに話が決まる。やがてトンジェである。久方振りにネパール風の家が懐しく現れる。チェック・ポストではヒマルチュリ隊のサイン帳を見せられ、もう

駄目だなと思う。

（註十二）Blaga. シェルパはタガールとも呼ぶ。ことマナンボットが一九五三年頃三年間にわたつて戦争をしたとのことである。

ここで我々は、もう一つの小トラブルを処理せねばならなかつた。というのはムシ・コーラを遡つてヒマルチュリの偵察を行うには、最低限三日の日程が必要である。ところが僅か三日でもヒマルチュリはヒマルチュリ、我が隊の許可はダウラギリ登攀に限られている。「もし、後でバレると二〇〇〇ルピーの登山料だぞ」と心配しだしたのが、リエゾンのプラダハンである。こつちは「そんなこと判りやしないよ」と平気だが、「チェック・ポストも近いから、カトマンズにこつちの行動は筒抜けだ」とか、「私の将来を考えてくれ」とか色々うるさい。何んとか理由を見つけるべく頭をヒネる。所が幸か不幸か、石島が往路苦しんだ腹痛が、この時再発したので、その静養を名目にムシ・コーラ出合のキャンプ地で三日間停滞することにした。プラダハンも納得し、ポーターにはその間一日分の給料とツァンパを一日分やることにして万事ケリが付く。十一月二十五日、加藤、宮下、神戸はシェルパ三名を連れ出発する。ムシ・コーラをはずれて右岸の尾根に上り、ツルベシを過ぎダハレガオン部落付近のカルカにキャンプ。翌二十六日、ダハレガオンの食糧調達可能性を調査。快晴を幸い、今まで隠されていた氷河末端までのルートを確認し得た。

日本出発前から問題とされていたヒマルチュリ西面の基部は、眼鏡偵察の結果は決定的な障害となるものは認められず一安心する。前山を越してB・C建設予定地になりそうな氷河末端までは、ポーターも使えるだろう。さらに登路は鎌形の雪稜を登り、白いドームを越え、上部の可成り悪そうな氷壁を登れば後は雪の斜面をウェスト・ピークまで、トラヴァースして頂上に達することが出来よう。最後の偵察で、やつと成果を上げることが出来たのでホッとする。帰路は石楠花の森が連なり、来春本隊遠征の際には一面の花盛りとなつて、真赤な花が白い山を背景にさぞ美しいことだろうと楽しみである。バラ・サーブも「ビムタコーチそつくりだ」などと御機嫌である。キャンプに帰つて最後のアルファー米やハイ・レーションをモリモリ喰う。

十一月二十八日、曇天でヒマルチュリも見えず、総てを終つた安心感に浸され帰路に着く。ポインセチアが真紅に燃え凄く暑い。クジー、ナルマと泊りを重ねつつ南下する。ミディム・コーラで発音筒の魚採りで一挙に二〇〇尾の大戦果は良かつたが、夢中になつたポーター、シェルパはてはリエゾンまで深みにハマつて溺れ出し、時ならぬ人命救助に変つた一幕や、ルパタールの静かな湖面にゴムボートを浮べて、旅路の終りを楽しんだ午後など忘れ難い想い出だが、取りわけ十二月二日、無事にポカラ飛行場に帰り着いた夜、帰途のキャラバンで毎夜楽しんだシェルパ・ダンスが、今夜で最後とばかり一際華やかに「セッセッセカ・セーヤ・セーヤ」と展開され、果ては普段余り踊らなかつた連中まで、夫々「これはキロンのダンスだ」とか「これはカンバ族のダンスだ」とかお国振りを見せてくれ、愈々最後の踊りが終ると、口々に「ソーソーソー」と称えながら、我々の頭にツァンパを振り掛けて祝福してくれた。お蔭で粉だらけになつたが嬉しい想い出が一つ増えた。翌朝、又トンジェに帰つて行くポーター達が馬鹿にソッケなくキャンプを離れて行く。「ダンネンバ」（さようなら）と手を振ると、振り返つて手を振る。その男達、女達の顔が涙で濡れていた。思わずこつちの眼頭も熱くなる。飛行場の彼方に彼等の影が胡麻粒のようになるまで、お互に手を振り続けた。

（石島襄二記）

ペルー・アンデス遠征

竹田吉文

処女峯アウサンガテの二つの頂きの初登頂に成功し、しかも誰一人怪我も病気もせずに帰りえたことは実に嬉しい。今までに欧米からの登山隊が五回も攻撃に破れたこの山を、無事に登頂出来たというのは、幸運と各方面から寄せられた力強い御協力によるものと、心から深く感謝を捧げている。

私達のメンバーは、次の通りであつた。

隊長　竹田吉文　36歳　（一九五八年度偵察隊長、東洋曹達勤務）
副隊長　西村　格　26〃　（東大O・B・倉敷レイヨン　〃　）
隊員　麻植正弘　25〃　（関学O・B・日本ポリエステル　〃　）
　　阿形健蔵　24〃　（関学O・B・内外糖業　〃　）
　　竹内桂男　24〃　（関学O・B・近鉄観光　〃　）
　　堀内幸重　23〃　（一九五八年度偵察隊員、堀内食品　〃　）

計画から実現まで

計画を樹てたのが昭和二九年、偵察隊を出したのが昭和三三年、本隊が出たのが昭和三四年だから実に六年がかりであつた。外国遠征にペルー・アンデスを選んだ理由は、

①ペルーには六千メートル以上の高峯が多く、その上処女峯もかなり残されている。

②山麓までのアプローチが短かいので、小遠征隊でも行ける。

③世界中の氷の中で、ペルー・アンデスの氷が最も堅く、そのため高度のアイス・テクニックが満喫出来る。

④ヴィルカノタ山群の周辺にある古代インカ及びインカの遺蹟は、現代の科学を以てしても解くことの出来ない神秘と奇跡そのものであり、いわゆる神秘境の奥にアンデスの氷帽（アイスキャップ）がそびえている。

このように甚だ興味あるかずかずのことが、一層私の心をペルーへと燃えたたせたのである。

だが遠征を目指して本格的に調べてみたいと思つても、日本では詳細なペルーの地図が手に入らず、文献に出てくる山が、一体ペルーの北部にあるのか南部にあるのかさえ判らなかつた。気象、交通、物価等にいたつては推理小説か、ボナンザグラムといつてもあえて過言ではなかつたろう。

その後ドイツ山岳会、ハーバード大学、インスブルック大学などと連絡がとれるにしたがつて、ペルー・アンデスの輪郭が鮮明に浮び上がつてきた。しかし今にして思えばこれまでの苦労は、アンデスの山へ登るよりも数十倍もの苦労の連続であつた。ともすれば遠征の意図も薄れんとする私の心に力強い激励を与えてくれたのは、海外の友と日本の山友達の友情であつた。かつてペルーを訪れたことのある欧米の登山家、考古学者達が私の良き相談相手となつてくれ、毎週幾通もの航空便が太平洋を渡り北極圏を越えて私達の間を往復したのである。

いよいよ計画も具体化してきたので昭和三三年八月私と堀内隊員がペルーに飛び、本隊のためのペルー政府との交

渉、日本大使館、在留邦人会との連絡が滞りなくすまされ、また連日の悪天候に悩まされながらも現地の奥深く偵察に入り、登攀ルート、キャラバン編成、気候、装備等に関する貴重な資料を持ち帰ったのである。この間副隊長の西村は教会の牧師さんからスペイン語を一生懸命に習うという努力の一齣もあった。

何しろお互いが社会人であるため勤務地が山口、愛媛、大阪と三地区に分散されており、連絡をとるのも大変であつた。瀬戸内海を真ん中にはさんだ本州と四国だから、ちよつと打合せをするにも、長距離電話か速達で片づけねばならず、やむを得ない場合には、汽車と船で集会場にかけつけるという非常な不便さがあつた。

装備、食糧、医療については前々から詳細なリストが用意されていたが、実際にこれらを発註、製作、梱包発送するのに僅か二カ月という短期間でやり遂げたことは、在阪隊員、そして事務局O・Bの献身的な努力にほかならないと感謝している。

出発前夜

壮行会の席上で私は、「貴重な資金と日数を費やして海外遠征を試みるのだから成功を念じている。だが私の考える成功とは、皆が仲良くそして全員無事に帰国することが何よりも一番の成功だと確信する」ということをしやべつた。私の考えはずるいのかもしれないが、「断じて日章旗を処女峯に打樹てる」といつた責任感、悲壮感に満ちた遠征は、どうも私のような呑気な性格の者には合わない。気の合つた者同志で気楽な気持で海外の山へ出かける小遠征隊が私の理想であつた。

いよいよ六月一日に麻植、阿形、竹内三隊員は横浜港より川崎汽船キューバ丸で出帆し、私と西村、堀内の三名は六月二〇日ノースウエスト航空で、ニューヨーク経由リマに飛んだのである。

どんな事があつても再び元気な姿で隊員に日本の土をふまさなければならない。これが出発のときから帰国するま

での間、片時も忘れることの出来ない私の大きな責任であつた。

ところで私達遠征隊には本来の登山のほかに、古代インカ遺蹟の調査という大役が課せられていたのである。ということは昨年私と堀内よりなる偵察隊がペルーからの帰途、南部ペルーの高峯に古代インカの遺蹟らしいものを見出したところ、その後ペルーはもとより各国の考古学者から「新発見の遺蹟ではなかろうか?」とセンセイションを起こしていたのであつた。この遺蹟がもし真実のものであれば、私達日本隊は頂上への登攀路を開拓して、ペルー側考古学者と共同調査に当るという計画をもつていたのである。

そのためには後発隊がリマに到着するまでに、今一歩突き進んで再び空中偵察を行なつておきたいと考えていた。

(昨年これを発見した時は民間機上から望見して写真を撮影しておいただけで、正確な所在地が不明であつた。)

空中偵察の結果

私達先発隊がリマへ着いてから、ペルー空軍の特別機を出動させるまでに、二四日間も折衝に費やしたのである。これがもし日本だつたらどうであろうか。外国人の依頼で軍用機を特別に出動させるということは、たとえ二四カ月いや二四年かかつたとしても到底実現しないであろう。リマへ着くなり外務省、文部省へ挨拶に訪れたが、私達の遺蹟調査については非常な関心があることに驚いたのである。といつて彼等も莫大な費用のかかる空中偵察には気乗り薄であつた。何しろ目的地が六千メートル級の高峯では簡単にセスナ機を飛ばすこともできない。最小限に見積つてもDC—4型の力を借りなければならない。だが予算に乏しい私達遠征隊に飛行機のチャーター料一日七十万円の支出は痛い。そこで日本大使館を通じて外務省から空軍省に対し、軍用機の特別出動を要請したのである。

だが若し空軍機が飛んでくれたとしても、どこを目標に飛んでもらうかが問題だ。そこで

①この附近のコースを飛んでいる飛行士に逢つて、片ッぱしから問題の写真を見せて正確な山の名前を尋ねる。

②空軍省測量部で、航空写真を徹底的に調べてみる。

私達三名は朝早くからホテルを飛び出し、ある者は空軍省に、ある者は航空局へそして測量部へと駈けずり廻つた。今にして考えてみれば毎日が焦慮と苦慮の連続であつた。というのは南米の習慣で官公庁の執務時間は午前九時から正午まで、午後は三時から五時までの都合一日五時間制であるから、非能率的なことおびただしい。おまけに宗教的な祭日が重なるので休日が多く一向に仕事が進まない。それどころか突如内閣の総辞職が起り、万事休すと絶望的な時さえもあつた。だが私達の努力が神に達したのか、スルスルと事が進捗しはじめたのは、後続隊三名がカイヤオ港に入港する数日前であつた。

どの航空会社のパイロットも知らないといつていた写真の山が、私達の予想していたソリマニ峯、コロプナ峯、アムパト峯の何れかではなかろうかと助言してくれたのは、丁度十五人目に面会したファウセット会社の首席パイロットであつた。これに力を得て航空局管制指令室を訪れ無理矢理に頼みこんで、昨年十月私が飛んだ時の記録を倉庫の奥から引ツ張り出して貰うことにした。この記録によつて当時の天候、経過時間、搭乗員名を識ることができた。幸いその時の副操縦士がリマに来ることになつていたので、早朝に彼の泊つているホテルを訪れ、未だベッドで休んでいた彼に逢つていろいろ質問したところ、長途の飛行で疲れていたのもかまわずに、愛用のスポーツカーを運転して、彼の同僚をリマ市中に五人も訪れ、問題の写真がどの辺りの山であるかということを探すために協力してくれたのである。何しろ既に一年近く経つているので彼自身も、当日どのコースを飛んだかということは記憶していなかつた。その理由は、航空地図から調べると定期空路を飛んだ場合、リマからアレキイパ（ペルー南部の都市）までに真ツ白い万年雪を頂いた高山はすべて機の左側に見受けられるのに、私が昨年撮影した一連のフィルムは、これと反対に、すなわち真ツ白い高山がすべて機上の右窓から撮影されていたのであつた。

この原因は当日の飛行記録から推して、リマ離陸を定刻に行なつたが、離陸直後何かの都合で予定の飛行時間より

余計にかかつたので、その遅れを取り戻すために当日の快晴を利用して、正規の定期航空路よりグンと内側に入り時間を短縮するために飛行したことが判つたのである。

残された問題は空軍が特別機を出してくれるかどうかという点であつた。内閣総辞職という思わざる障害で、私達の申請書類は空軍次官の手許で保留されていたが、日本大使館の猛運動と、在留邦人有力者の裏面工作が功を奏し、私に空軍司令部へ出頭するようにと通知のあつたのは、後続部隊麻植等三名がカイヤオ港に入港する前日のことであつた。

いかめしい司令官室に通された私は、空中調査の目的、今までの経緯等を約一時間詳細に亘つて陳情したところ、このいかめしい司令官室は高級参謀、幕僚を混じえたなごやかな談話室となり、話はトントン拍手に進んで明後七月十六日、日本隊全員集結を待つて四十人乗りのDC—6型空軍輸送機を、一日間特別に出動してくれることになつたのである。

世紀の偉業果してなるか？　悲壮にも似た気持ちで、南十字星の輝やく払暁の飛行場に集つた私達に対し、ペルー空軍きつての名パイロットである機長のミロケサーダ中佐から、——

「この飛行機は、貴方達日本隊のものである。何んなりと遠慮せず思うままに航路を指定してほしい。」

といわれ、日本隊一同は感激した。リマ空軍基地を離陸した私達の特別機は、機首を南に向けて高度を増し、獲物を追う猟犬のように問題の遺蹟を求めて飛んで行つた。

午前九時四十六分、操縦室に立つていた私の双眼鏡に、くつきりと十層の階段状の岩峯が辺りの雪面を圧して浮びあがつた。

「あッ、見つけたぞ!!」

高度は六千六百メートル、機内の温度は実に零下十一度である。私は緊張の余りか離陸以来、酸素補給も全然使わ

ず、その上寒さを忘れて上着すらもぬいで立つていたのである。喜びに包まれた機は、この山をゆつくりと旋回しはじめた。

「おやッ、おかしいぞ、この遺蹟は立体三角形のようだ。」

私の不安は今一度機長に対し、旋回を促がしたが、そこには長年月の間に風と氷で浸蝕された奇岩がそびえていただけであつた。

希望を失い、疲れ果ててリマに着陸した私を迎えてくれた空軍司令官は、

「遠い地球の裏側からペルーのために、わざわざ調査に来て下さつた日本隊の御協力を、心から感謝する。」

と温かくなぐさめてくれたばかりか、日本の登山家がペルー空軍の軍用機を指揮した功労にといつて、私と西村副隊長の胸にペルー空軍指揮隊長記章を授けてくれたのであつた。

翌日のペルー各新聞は、この空中偵察のことを写真入りで一斉に大きく取り扱い、

「日本隊の努力にもかかわらず遺蹟は遂に幻の城と消え失せてしまつた。しかし後に残されたものは、日本登山隊とこれを援助したペルー空軍の固い友情である。日本隊は本来の目的に戻り、そしてペルーの独立記念日を祝して、ヴィルカノタ山群の処女峯アウサンガテの登頂に向うことになつた。」

と報道されていたのである。

リマからティンキへ

私達の目指す処女峯アウサンガテ南峯（六二〇〇メートル）は、かつて十二世紀から十六世紀にかけて太陽の帝国と称し、南米太平洋岸の全土を席巻して栄えたインカ帝国の廃都クスコより更に東へ三百キロ、すなわちボリビア領との国境に近いヴィルカノタ山群の盟主であつた。そして、この山はクスコの守護神アオキが住む山といわれる、イ

ンカの伝説の山でもあつた。

リマからクスコへは約千五百キロで、その間は飛行機と定期バスが通つている。飛行機なら一時間半で達するが、私達は三トンもの荷物を携行しているので、トラックとバスで砂漠を走り、アマゾンの源流を渡り、四千メートルもの峠を幾つも越えて三日間を費やしてクスコに達した。

クスコ、それはインカの廃墟の上に建てられたカソリックの街である。スペインの征服者達はクスコの街を焼き払い、山の上から王宮の石垣を引ずりおろして多くの教会を建立したのである。だが、この街の周辺にある数々の遺蹟は、まだ考古学の宝庫として驚嘆の目を見張らされる。かつては一メートルもの幅の黄金の帯で飾られた「太陽の寺院」、冷たく乾ききつたクスコの街を不気味に見下ろす「サクサイワマン城址」に残る豪壮な石造建築物は、一つ一つが形の違う石で組み合わされ、安全カミソリの刃すらはさむ隙もない精巧な建造技術には、すべての観光客が呆然とさせられている。

かつてスペイン軍とインカ軍が熾烈な攻防戦を繰り展げたクスコの街も、現在では赤褐色の山肌と緑濃いユーカリの樹に囲まれた美しい観光都市である。石畳みの急坂に面した先ぼそりの矩形の石の門から、リヤーマの毛皮を重ね着にして、きらびやかな黄金の飾りつけをしたインカの武将が、投石器を携えて今にも現われるのではないかというような錯覚をも起させる街がクスコである。

この海抜三七〇〇メートルのクスコには、河村さんと大村さんという日本人の成功者が手広く商業を営んでおられる。私達も着いた翌日から早速このお二人に連れられて、クスコ州庁と警察本部へ挨拶に行つた。昨年も訪れた経験がある上に、ペルー外務省、文部省、それに日本大使館から日本隊に対する便宜供与の依頼状を持参していたので、州知事は、「管下の役場、軍隊、警察は日本登山隊の目的が達成できるように、あらゆる便宜を提供せよ」という命令を出してくれた。その上、警察本部では昨年私達偵察隊と既に顔なじみであるアステッテ伍長を、日本隊の護衛と

ベースキャンプにおけるペルー・アンデス遠征隊員

The members of the Peruvian Andes Expedition, 1959, at the Base-camp. Left to right: (Front row) M. Ohe, I. Nishimura, Y. Takeda (leader), K. Agata. (Second row) Y. Horiuchi, K. Takeuchi

アウサンガテ南峰

Ausangate South Peak (6200 m), Cordillera Vilcanota.

アウサンガテ南峰
Ausangate South Peak (6200 m)

アウサンガテ南峰第2キャンプへのルート開拓中の隊員

A member openning the route to Camp II on Ausangate South.

して二カ月間派遣してくれることになった（勿論無料である）。

深夜のクスコをトラックで出発し、根拠地ティンキに到着したのは、新世紀の訪れを思わせるような荘厳なアンデスの夜明けに、アウサンガテの氷峯（ネバド）が輝やく七月二七日の朝であった。

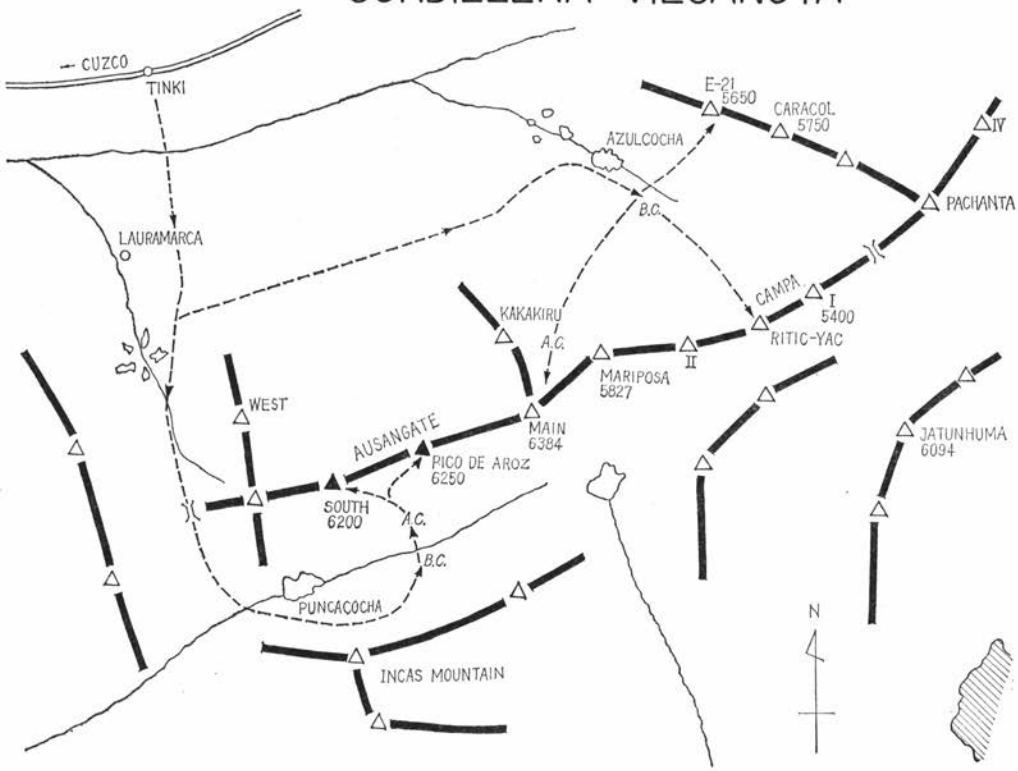
ティンキからベース・キャンプへ

ペルーを北半球に置き換えるなら、クスコは丁度ヒマラヤ山麓のカトマンズで、ティンキはさしづめサマ部落に相当するようだ。五十個で三トンもある荷物をここで整理して、馬に乗せられるように袋につめかえる。これがヒマラヤなら何十人何百人ものポーターを集めなくてはならないところだが、ここアンデスには馬という調法な輸送機関があるので助かる。

三三頭の馬が揃って愈々出発することになった。私の右手が高く上って、「バーモス（出発）」と合図を送る。三三頭の馬を連らねた大キャラバンは、アウサンガテ南面の谷を目指して、ゆっくりと前進を開始した。この日の到来を待つたのは私ばかりではない。全隊員が夢にまでえがき、そして全力をこの遠征に打ちこんだ報われが遂に実現したのである。誰もが喜びと感激のこの尊い一瞬の光景を、夢ではなかろうか？　いつまでも消えることのないようにと瞳を輝やかして見つめている。

昨日までの快晴はどこえやら、今日は朝からずっと曇っていてアウサンガテの偉容は見えない。重苦しい乳色のベールに包まれ行手に眺められるものは、金髪の波に似たトトラ葦のゆれる果てしないパンパだけである。だが意地悪なアウサンガテは遠路からの日本隊に対し二日間にわたる猛吹雪で、歓迎の意を表してくれたのである。そして難渋を重ねたこのキャラバンの終着駅には、白い肌を落陽でバラ色に染めたアウサンガテの霊峯が静かに私達の訪れを待つていた。

CORDILLERA VILCANOTA



私達のベース・キャンプ（BC）は、アウサンガテ南峯と渓流を隔てた対岸、すなわち主峯から落ちてくる氷河の末端と、氷河湖プンカコチアにつながる渓流の左岸、標高四六五〇メートルの地点に設けられた。

BCから第二キャンプへ

南峯登頂ルートについてはドイツ隊、アメリカ隊から数々の資料を提供され、その上親切な助言まで受けていた。この処女峯挑戦についてはスイス山岳会も大きな興味を抱いていたが、昨年既に偵察隊まで送りこんだ日本隊の熱意に敬意を表して、スイス隊もイタリー隊も手を引いてくれたのであった。

南峯登頂の鍵はBCのある谷から、いかにして南面一杯に落ちこむ氷瀑を乗り切って、頂上直下のプラトーに第二キャンプを設けるかということであった。氷瀑はお伽の森の妖精が踊るにも似たグロテスクな大氷塊が無数に乱立し、コンクリートのような堅い大氷壁と共に頂上への道を固く閉ざしているのである。

昨年の偵察で第二キャンプへのルートを発見しておいたが、どのような気候異変があったのか、山は七月に大雪が降って氷瀑上はものすごいラッセルであった。毎日毎日第二キャンプへのルート開拓隊が波状的に送られるが、成果は遅々としてあがらない。一日に進み得た高度は僅か二十メートルという日もあった。そしてアイスハーケンを三十数本も打ち込んで、やっと第二キャンプへのルートが開通したのは十日目のことであった。

この間、毎日午後二時過ぎから約束したかのように降雪に見舞われ、せっかく苦労したラッセルも翌日はすっかり新雪で埋もるという有様だ。その上至る所にクレヴァスが横たわっていて廻り道を余儀なくさせられる。クレヴァスも幅の広い大きなものは扱いやすいが、小さいのになると新雪の下にスノーブリッジがあり危険な登攀の連続であった。

微妙なバランスと強い労力を必要とする蒼黒色の氷壁登攀には、苦しいながらも快適のアイステクニックを満喫さ

せてくれたのである。昨年の偵察でいかにアンデスの氷が堅いかということを経験していたので、私達の装備はモリブデン鋼のアイスハーケン、オーストリー製の十二本アイゼンで大氷壁に敢闘した。オーヴァハングの氷壁にハーケンを打ち込み、股の間から遥か下方の氷河を眺めながら吊り上げでジリジリ登る醍醐味は、アンデスならでは味わうことのできないクライミングであつた。

ここアンデスにはヒマラヤのようにシェルパもポーターもいない。そこで第二キャンプ建設に必要な約三百キロもの荷物を、私達隊員だけで強行輸送することになつた。BCから途中に仲継点が設けられ高度五二〇〇メートルの第二キャンプへピストン輸送が続けられたのである。隊員に混じつて私も同じ様にキスリングを担いで輸送に加わると「隊長、そのルックだけはやめて下さい。隊長にまでルックを担がしたとあつては、私達が日本に帰つた時に皆に笑われますから……」と誰もがとめたのであるが、何しろ迫りつつある雨季の天候悪化を考えては、一日でも一時間でも早く第二キャンプを設営しなければならない。だが若い隊員に負けるものかと二十五キロもあるキスリングを担いで、第二キャンプへの登攀を続けたが、やはり隊員の若さには勝てない。酸素の稀薄とルックの重量が心臓の鼓動を破れ鐘のごとく伝えてくる。神聖そのものを感じさせる白一面のプラトーには、真ッ赤な高所テントが二つ仲良く並んでいる。そして日章旗が強風にはためいていた。

登　頂

第二キャンプから頂上への高度差は約千メートル。大海のうねりにも似たプラトーの彼方に氷帽をかぶつた南峯がそびえている。頂上からは美しい「パイプオルガン」が幾筋も真直ぐ下方に走つている。

予期したように第二キャンプから上も新雪のラッセルで悩まされる。せまいテントで毎晩打合せが続くが、今となつては頂上に対し一歩一歩ラッセルを忠実に行うより他に方法がない。執拗なルート開拓が頂上へと向つて続けられ

た。胸まで潜る新雪の中を泳ぎ、地雷原のような危険なクレヴァスを越して、天国への階段が一歩一歩と刻まれていつたのである。

登頂の朝は実に静かで、そして快晴であつた。そこには緊張も興奮も起らず、あたかも涸沢のBCから前穂高へ出かけるような爽快な空気が漂つていた。きのうまで隊員が苦労して刻んでくれた氷壁のステップに、十二本のアイゼンをキシッ、キシッときしませながら、頂上目指し三名の隊員はそれぞれの生命を一本のロープに托して、処女峯に挑んだのである。

私達の下方には幾つものクレヴァスが蒼い大きな口をあけて、いまにも落ちてくるのを待ちうけているようだ。高度計はいま六〇〇〇メートルを示している。朝八時にACを出発して約五時間で八〇〇〇メートルの高度差を稼いだことになる。頂上からの支稜に取付いたとき、私はアイゼンの裏に新雪がへばりついているのに気がついた。早く落さねばと思いながら一歩右足を前に出した瞬間、足は何の抵抗をも感じず、いきなり私の体は六〇〇〇メートルの稜線上から、下の蒼いクレヴァス目がけて堅雪の上を滑り落ちて行く。トップの竹内が「あッ！」と大きな声を立て、恐怖の眼で私のアクシデントを見つめている。早く手にしたピッケルを打ち込んで、滑り落ちるのを止めなければと思うが、私の体と一緒にもつれたロープが落ちて行く。いまピッケルを打ちこめば滑りを止めるどころか、ロープを切断するに違いない。

だが、運良くもつれたロープが体からはなれてくれたので、機を逸せずピッケルを打ちこむ。手応えがあつてやつと滑り落ちる体をささえた時は、あと僅か数メートルでクレヴァスに向いダイビングをするところであつた。滑り落ちる時には何んとも思わなかつたが、停まつてから思わず足の裏が涼しくなるような戦慄に襲われたのである。

午後二時半、やつとの思いで頂上直下のコルに立つ。反対側のアウサンガテ北面は、岩壁と氷壁が入り混じつて荒削りの大絶壁を形成している。それにくらべ私達の登つてきた南面は白無垢の大氷雪原だ。南面を女性にたとえるな

ら、さしずめ北面は男性的な姿である。ここから頂上までは約百メートルだが、この百メートルはアンデス特有の氷帽であるため、丁度傘をさしたような格好をしている。どこから取付けばよいのだろうか？

偉そうなことをいうようだが今までの私の経験では、どんな山でも一寸見た瞬間にすぐ予定のルートが選択できたのだが、この時ばかりはじっと腕組みをしたまゝいつまでも考えさせられてしまった。最後の登頂がこんなに難しいとは、夢にも想像していなかったのである。

いつのまにしのびこんだのか、雨季特有の黒雲が頂上一帯に蔽いかぶさり、大粒の雹を降らしはじめた。あたりが急に薄暗くなって雷の音が段々と近づいてくる。

トップの竹内、ラストの麻植、それに私の三名は慎重を期して、この最後の難関百メートルにアクロバットな登攀を続ける。私のいる所からはトップの姿が見えないが、あたりに木魂するアイスハーケンの音、じわじわ伸びて行くロープ、そして彼の振うピッケルに砕かれた氷片で、トップがどうやら進んでいることが想像される。蒼黒い氷壁にガッシリと打ち込まれたアイスハーケンに身を托し、たった二本のツァッケで確保する。

頂上直下でこんな高度のアイステクニックを要求する山が、どこにあるだろうか？　私は登山家としての誇り、そして人間としての恐怖を回想しながら、ひたすらロープの伸び切るのを待つばかりであった。

降り続けていた雹は少し勢いが衰えたようだ。だが雷鳴は一向に遠ざかりそうにもない。頂上の格好は毒茸の姿に似て、傘をひらいたような形をしている。そして八十度以上もの急傾斜にはスポンジ状の氷が薄く、厚く蒼黒い氷壁に乗っている。こんなに高い所までクレヴァスが発生していて、私達の登攀を阻止している。トップの振うピッケルで砕かれた氷片が、いつの間にか私の腹まで、うず高く埋っていた。「まさに氷漬けだなア」と感心させられる。トップの姿もラストの姿も全然見えない。そのとき麻植が「隊長！　竹内が感電しているようですッ」と大声で叫ぶ。「大丈夫だろう。俺の所まで降りてくるように怒鳴ってくれッ」と彼に答える。まもなく竹内が私の傍まで降りてき

て「雷の電気がきますよ」と私の顔色をじいッとうかがう。「雷はヤッケの頭巾をかぶつて裾をズボンの外に垂らしておけば大丈夫、雹もやんだらしいから、まもなく雷も遠ざかるぜ」と激励する。

去年の偵察で私はもの凄い雷にあつた経験がある上に、この辺りの雷は岩石、それも金属を含んだ岩石の露出している山にしか落ちないということを識つているので、この点心強い。辺りは少しずつ晴れてきた。そして恐ろしい雷鳴もずつと遠くの方へ逃げたらしい。赤いナイロン・ロープが少しずつ伸びて行く。上から竹内が元気な声で「頂上ですよッ」と叫んでいる。頂上十メートルほど手前の地点に三人が揃つたとき、麻植と竹内の二人が「隊長！　さァ早く行つて貴方が真ッ先に最高点を踏んで下さい」と先頭を譲つてくれる。

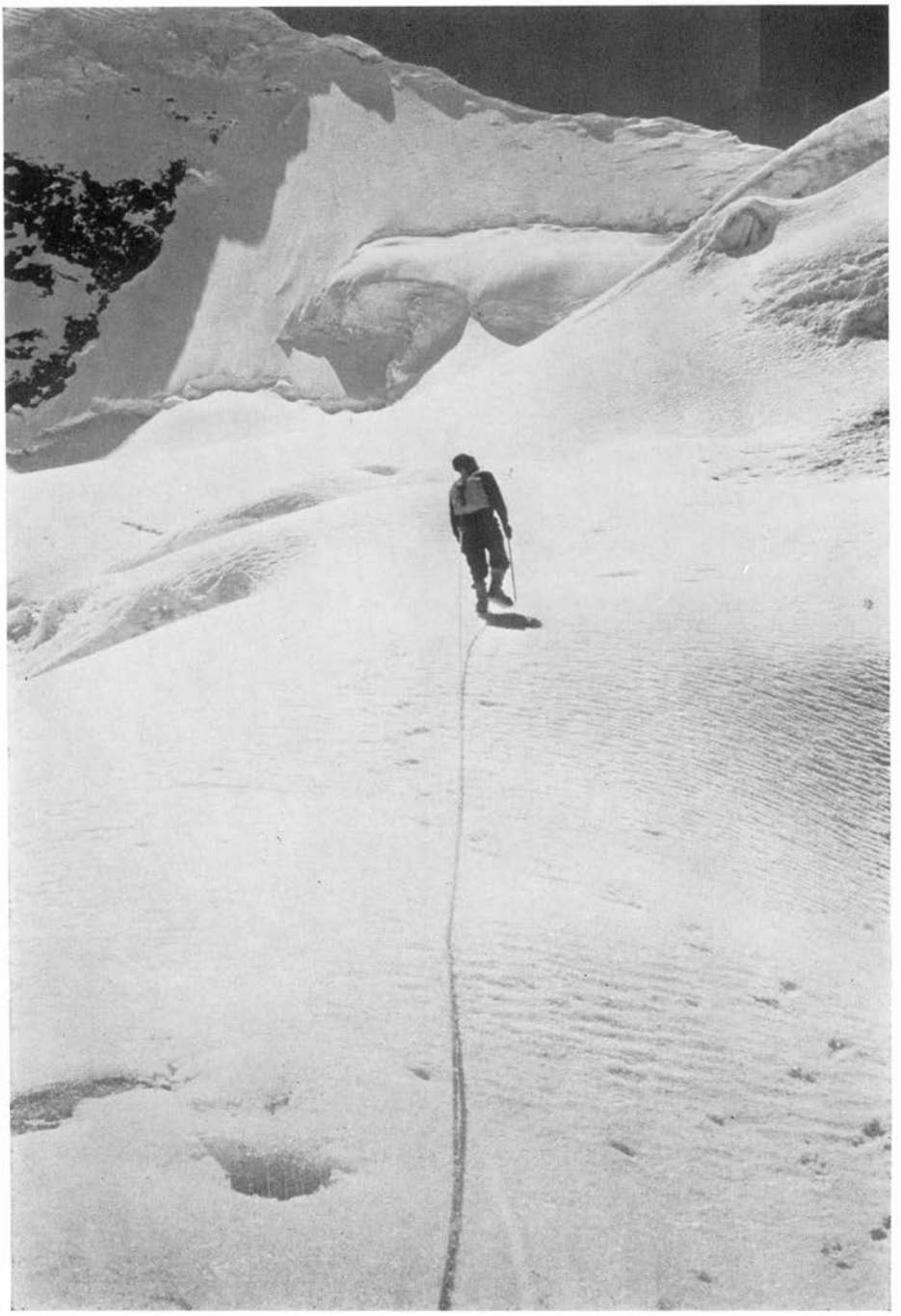
円い丘のような最高点に向つて、私は感激に震える足を一歩一歩踏みしめながら、遂に八月一四日午後三時四六分標高六二〇〇メートルの処女峯アウサンガテ南峯に立つことが出来た。死力を尽して闘いとつた処女峯初登頂の喜びは、胸につつみきれないものがある。お椀を伏せたような氷帽に立つた三名は、雪やけの真ッ黒い髭面に、とめどもなく流れ落ちる涙をぬぐおうともせず、固い握手をいつまでもかわしていた。意気地のない奴だ、感傷的だと笑われるかもしれない。だが此の処女峯に達し得たのは私達三名だが、この三名を頂上に立たせてくれるために、どれだけ数多くの援助者がいただろうと思うと、嬉しさと喜びが胸いつぱいにつまつて、男泣きに泣いたのである。この喜びをはるか故国の皆さんに通じてもらうために、東の方角に向い礼拝することにした。どの山もどの谷も、いまでは私達よりはるか下に見下ろせる。ボリビア領は夕暮れが訪れたのか、空が濃い紫色につつまれている。地の果てまで続くかと思われるような山なみが、チリー領の彼方まで走つている。「待てよ、ここから東となると大西洋を越えてアフリカだ。日本は西だ、西だ、おいッ、廻れ右だぜ」とあわてて西の方を向いて礼拝し、万歳と君が代を声高らかに唱つたのである。東が日本だとの勘違いは、六〇〇〇メートル級の高山呆けか、戦前派の私が受けた軍隊教育の東方遥拝が習性となつていたのかもしれない。ピッケルにペルー国旗と日章旗を掲げ、紐の先に一九五九年日本・ペル

ー・アンデス遠征隊と刻印のあるアイスハーケンを頂上に打樹てる。

ホッと一息ついて喫う煙草の味がすばらしく旨い。最後の瞬間まで雹と落雷で抵抗を続けたアウサンガテ峯も、今では頂上からの雄大な眺めを充分たのしませてくれる。処女峯に初登頂出来ることは、何百万いや何千万人に一人の比率であろう。幸運を喜びながら三名は、約二〇分間頂上に滞在したのち下山することになつた。私は頂上を振り返えりつつ心の中で、再び訪れることの出来ない最高点に一しお惜別の情を感じたのである。淡い月明りの氷雪原にACの灯が輝やいている。日中の暑さにくらべ夜ともなれば、痛いような寒さが襲ってくる。それどころか早く危険地帯を逃げきらねば稜線から氷崩が落ちてくる。だが綿のごとく疲れきった身体の前には、無数のクレヴァスが待ち構えている。疲れには油断が乗じやすい。登る時よりもさらに慎重にザイル確保を行なつて難関を通り越したとき、西村副隊長が温かいコーヒーを持つて迎えに来てくれる。三名が無事に第二キャンプに帰投したのは午後七時一五分、すなわち今朝出発してから一一時間目のアルバイトであつた。

一日おいた八月一六日、西村副隊長、阿形隊員の二人は南峯より東にそびえる無名峯（六二五〇メートル）の処女峯初登頂に成功し、それを Pico de Aroz（米の峯）と命名した。

その後、BCをアウサンガテ北面のアスルコチア（青い湖）に移動し、ここを基地にして Ritic-Yac 峯（五二五〇メートル）、E-21 峯（五六五〇メートル）の二つの処女峯に数次の登攀を試みたが、迫りつつある悪天候に阻まれて、頂上僅か十数メートルの地点から引返さなければならなかつた。落雷を伴つた降雪が毎日のように続く悪天候に対し、最後の力を結集してアウサンガテ主峯を北壁から試みたが、雪崩のような落石で第二幕営点からの登攀は完全に封じられてしまつた。主峯は既に一九五三年にハインツ・シュタインメッツの率いる独墺合同遠征隊により、南面から登頂されていたが、私達は北面から試みたのである。迷路のような懸垂氷河の間を縫い、幾つものピナクルにアクロバットな登攀を必要とした三組の偵察隊は、最も有望と思われる北東稜からのルートを探し当てることが出来た。



アウサンガテ南面にて、第2キャンプへのルート開拓

Ascending to Camp II on the southern side of Ausangate South, at about 4800 m.

日本隊が初登頂してピコ・デ・アロスと命名した6,250m峰

A 6250 metre-Peak, first ascended by the Japanese party and named "Pico de Aroz."

だが悪化した天候は落石という抵抗線で私達を阻止したのであつた。千メートル以上も続く蒼氷のナイフエッジ、その不気味な姿は一歩でも頂上に近づく者を、奈落の底へ振り落そうと待ち構えているようであつた。この北面は察するにアコンカグア南面どころの比ではあるまい。スイス山岳会もハーバード大学もアウサンガテ主峯北面に触手を抱きだしたようだ。だが、ここを初登攀するのは日本人であつてほしいと私は念じている。

遠征を顧みて

有力な山岳会や出身校の総力を結集して海外に送り出された従来の大遠征隊と違い、今回の私達は家族的な小遠征隊であつた。たとえが不味くて恐縮だが、いうなれば前者は交響楽団で、後者は軽音楽団だと思う。また、事実軽音楽団でもあつた。ということは麻植隊員がギターの名手で、その上ラテン音楽に明るく、彼のお蔭で隊は陽気に、そして音楽好きの現地人との間に、親善の役目すら果たしてくれたのである。

アウサンガテ南峯初登頂を祝して、ペルー国政府から国家紋章（エスクード）を授与されたが、それよりも大きな喜びは下山後リマの日本大使館で催された登頂祝賀パーティで、三浦大使より手渡された「アウサンガテ登頂成功を祝す、日本山岳会」の電報であつた。

（附記）本遠征については竹田吉文著『インカの山をさぐる―ペルー・アンデス探検』（昭和三五年十月・朋文堂）が刊行されている。（編者）

ランタン・ヒマール紀行

――サルバチュム登頂――

山田哲雄

一九五九年秋に、飯田山岳会からランタン・ヒマール遠征隊が送られた。戦後、信州の片田舎に生れたまだ幼ない山岳会が、ヒマラヤへ出かけるのには、幾つもの大きな障碍をのりこえなければならなかつた。しかし、計画がはじまつて以来、各方面から寄せられたあたたかい援助によつて、中学生や高校生のころから久して胸にだきしめていたヒマラヤへの夢が、やつと実現したのである。

経済的なバックがあるわけでもなかつたし、日本アルプスしか知らない若者たちばかりだつたので、四～五人の軽装備で行ける、しかもカトマンズからあまり遠くない山をさがしていた。そして、もう一つ、山への往復途中で、またベース・キャンプ附近で、地質や植物の調査をしたいという希望が重なつていた。

先年、ヒマラヤを訪れた深田隊の土産話を聞いて、ランタン・ヒマールは私たちのすべての希望条件を満足させることがわかつた。トリスリ・ガンダキに沿つて、ヒマラヤの地質構造の模型的な横断面が露出しているだろうという予想もついていたので、カトマンズからランタンへ入るルートも、あつさりきまつてしまつた。

隊員は、二〇歳台ばかりの会員の中からえらばれることになつた。せめて、隊長だけでも、関係筋をたよつて、もうすこし年輩の方に行つてもらおうという意見も強かつたが、結局私がその任を負うことになつてしまつた。そして北城節雄、松島信幸、寺畑哲朗、新井均がきまり、中部日本新聞社から笠井記者が参加した。

カトマンズ

日本から空路で先着していた慶応大学のダウラギリ隊、福岡大学のガウリサンカール隊に迎えられて、私たちがカトマンズへ着いたのは九月十五日であつた。その夜ビナヤ君は、日本からの三つの遠征隊を招いて、ネパールの踊りや料理をご馳走してくれた。春のヒマルチュリ隊の村木さんと松田さんを通じて契約してあつた四人のシェルパ、パサン・プタール一号、ダワ・トンダップ、アン・ダワ四号、パサン・テンバは、この夜ダージリンからカトマンズ入りをしたのである。翌日から連続十三日間は、ダージリン・シェルパの雇傭をめぐつて、交渉にあけ暮れた。ヒマラヤン・ソサイエティーは、わざと四人のシェルパをソロ・クーンブから呼び寄せて、私たちの着くのを待つていたのである。新登山規則の「シェルパはヒマラヤン・ソサイエティーを通じて傭うこと」の一条をたてにとつて、「ダージリンの四人は送り返し、ネパール・シェルパを連れてゆけ」という主張をくり返した。チョー・オユー隊、慶応隊によつて、すでにこの主張が踏みにじられたあとだけに、彼らは一歩もゆずれない立場にあつたらしい。交渉はゆきづまりネパール外務省へかけこんで、その仲介をたのんだ。それからは毎日外務省へ通つて、いつ結論がでるとも見当のつかないような三者会談が続けられた。この間にあつて、ヒマラヤン・ソサイエティー側は新聞記者に向つて、「飯田隊が一五〇〇ルピーの違約金を支払えば、われわれは彼らの希望を聞く用意がある」といきまいていた。日本を出る前から、私たちはダージリンから四人のシェルパを連れて行きたいという希望を伝えてあつたのに、無理に他のシェルパを呼び寄せておいて、違約金なんてトンデモないと腹をたてた。しかし、このフンマンは新聞記者などにぶちま

けられないので、グッと腹の虫をおさえた。一方ではホテル滞在が長びくので、出費がかさみ経理係は音をあげた。滞在費をきりつめるために、わざわざカルカッタから飛行機で直輸した荷物は、すつかり再梱包されてしまつた。いつでも出発できる態勢はととのつているのに、毎朝ホテルへ通つてくるシェルパたちも隊員も仕事がなくなつてしまつた。毎日、外務省へ交渉に通う私を除けば、ホテルにいても手紙でも書くよりほか、することがなくなつた。仕方なく、帰りの楽しみにとつておく予定だつたカトマンズ見物をすませることにした。

最後に出された政府の妥協案にそつて、やつと話しあいのついたのが二十八日だつた。四人のダージリン・シェルパを、一時的にヒマラヤン・ソサイエティーに加入させたうえで雇い、ネパール・シェルパを一人余分に連れて行けということになつた。私たちは、テンジン・ギルミンをあたらしくえらんだ。そして三人のネパール・シェルパの解雇料と、ソサイエティーの手数料として一〇〇〇ルピー要求された。そんな大金を払えば、私たちは日本へ帰ることができない。また、外務省へとびこんで、泣きついて、ついに半額の五〇〇ルピーにまけてもらつた。外国遠征隊のためのサービス機関として開設されたヒマラヤン・ソサイエティーは、とんでもない追剝ぎの集まりであつた。お蔭で私たちは二〇〇〇ルピー（約十五万円）、このトラブルのために損をしたことになつた。

ランタンへ

九月二十九日早朝、あざやかなシェルパたちの采配によつて、キャラバンはカトマンズを出発した。この朝になつて、私たちの隊へ派遣されるリエゾン・オフィサーが現われた。なんと、私たちがキャンセルしたヒマラヤン・ソサイエティーのサーダー、パサン・プタール二号だつた。

四一人のクーリーは、すべてヒマラヤン・ソサイエティーから用意された。前から何度も何度も雇つてくれといつて、ホテルへ日参して来ていたフリーのクーリーたちは、みんなあぶれてしまつた。出発を前にしてサーダーは、大

声をはりあげてクーリーたちに訓辞をたれた。何を言つているのか見当もつかなかつたが、私たちと話す時のように愛想の良い顔ではなくて、しかめつ面をして、たいへん貫録があつた。そして、私たちには彼がたいへんたのもしく見えた。

クーリーとは別に三人のローカル・ポーターを雇つたが、これはヒマラヤン・ソサイエティーに内緒であつたため私たちが目を覚ましたころ先に出発してしまつた。

キャラバンの出発を見送つて、私たちはやつと朝食をとり、身支度にかかつた。途中までタクシーで追いかけて、彼らのあとを追つた。やつとカトマンズを抜け出せたというホッとした気持ちで、いさみたつていたが、この第一日から歩くことが苦しかつた。田んぼの中でコーモリ傘の陰に入つて弁当をひらいたが、パサパサのパンは喉を通らなかつた。わずかにたまごとトマトだけで、あつさりすませてしまつた。いくら歩いてもクーリーたちの影もみえず、暗くなりかけた頃、ガスの中にカカニの丘のレスト・ハウスをみつけたときには、もうそれ以上歩く気力を失つていた。寒さにふるえながら、夕食をすませ、土間に敷かれたマットのうえに横たわつて、ネパールの土の臭いをかいだ。

二日目、暗いうちにとび起きて、明るくなつてゆくまわりの景色に、なつかしい美カ原の朝を想いだした。間もなくガスが晴れて、遠く大ヒマラヤの連峯が、そのテッペンから朝日に輝き始めた。美カ原から眺められる日本アルプスの景観とは桁ちがいに大きな、すばらしい景色だつた。ゴサインクンドの稜線はいつまでも黒々と、ガクガクと続いていた。あんなゴツイところを十二月の初めに通るのかと思うと、雪に降られたらどうしようかと案じた。ピョコンときりたつているヒマルチュリをみて、よくまああんなすごい山へ登る気になつたなーと、ため息をもらした。私たちが、それぞれ勝手に感激していた間に、クーリーたちは次々と出発してしまつた。

この日の昼頃はキャラバン中で最悪の日となつた。下り道とはいうものの、首すじから背中をカンカン照りにされ

て、亜熱帯の谷間へくだつたので、暑さにやられてしまつたのである。ぼだい樹の陰に入つて、黒山のように集まつた見物人の真中で弁当をひらいたが、チャパティーも精々二枚ぐらいしか喰べられなかつた。お茶だけがもつとほしかつた。リク・コーラの河原の田んぼ道を歩くときには、めまいさえ感じた。そして私たちの行手で、道がヤケドをするような熱い田んぼ水の中へ沈んでしまつていたのは、うらめしかつた。カトマンズからチベットへの主要な往還を通るというので、もつと楽な広い道があると思つたのに、田んぼの畔道や田んぼの中の稲の植えてないところが道とは驚いた。この日のうちにナワコットまで行きつく予定だつたが、ディグリ・バザールでストップしてしまつた。夕日の沈むころ黄濁した水の流れる河にとびこんで、行水としやれこんだ。泳ぐには、あまりに浅すぎるので、素裸で河の中をとびまわる私たちを、ネパールの連中は吊橋の上から見物していた。

第三日目からサーダーに言いつけられて、リエゾンは私たちと歩くようになつた。彼はリエゾンの肩書きだけはつけていたが、根つからのシェルパである。生水に渇えていた私などが水道のそばで立ちどまると、すぐ冷たい水をくんでくれたし、岩石の標本を採ると受けとつて運んでくれた。しかし、彼はクーリーたちを叱りとばして、先に歩く方がよつぽど好きだつたらしい。困つたことに、彼には英語が通じなかつた。リエゾンは通訳を兼ねて、政府からお目付役として派遣されるものと思つていたが、私たちの見当は狂つた。何を話しかけても、「オーライ、サハーブ」と返事はするが、トンチンカンなことを云つたり、したりした。すこし、まともに話そうと思えば、反対にダージリン・シェルパの通訳を介さねばならなかつた。このことは、彼の自尊心を大いに傷つけたらしいが、このために、彼が「俺はリエゾンだぞ」といつていばることが許されなかつた。私たちは、まあすこし給料は高すぎるが、シェルパを一人余計に雇つたと思えばいいさ、とあきらめてしまつたし、シェルパたちはかもいリエゾンだと喜んでいた。もう一人のソロ・クーンブ・シェルパのギルミンも英語は通じなかつた。しかし、こちらはネパール語とチベット語に関する限り、シェルパの中ではいちばん学者だつた。私たちと話す時は、いつも通訳を連れてきて用を達した。その

代り、この男はシェルパたちの手紙の代筆を引きうけた。

ナワコットの街では、茶店へ寄ってシェルパたちからお茶を御馳走された。また、ここでギルミンのためにシャツとズボンを調達した。余分の装備を一切用意してこなかったので、彼にユニホームさえ渡すことができなかったからである。おとなしい彼は、何も要求しなかったが、木綿の布を買ってテーラーに縫わせたのである。ここから、私たちはポカラ街道に別れて、トリスリ・バザールを横目でみおろしながら、トリスリ・ガンダキに沿って北上をはじめた。

前日のチャパティーの弁当に音をあげて、この日はとくに注文してジャガイモとたまごだけの昼飯を用意してもらった。生ぬるい川の水に足をつけて、はじめてうまい昼飯を食べた。そして、ベトラワチのテント場までまたモクモクと歩いた。

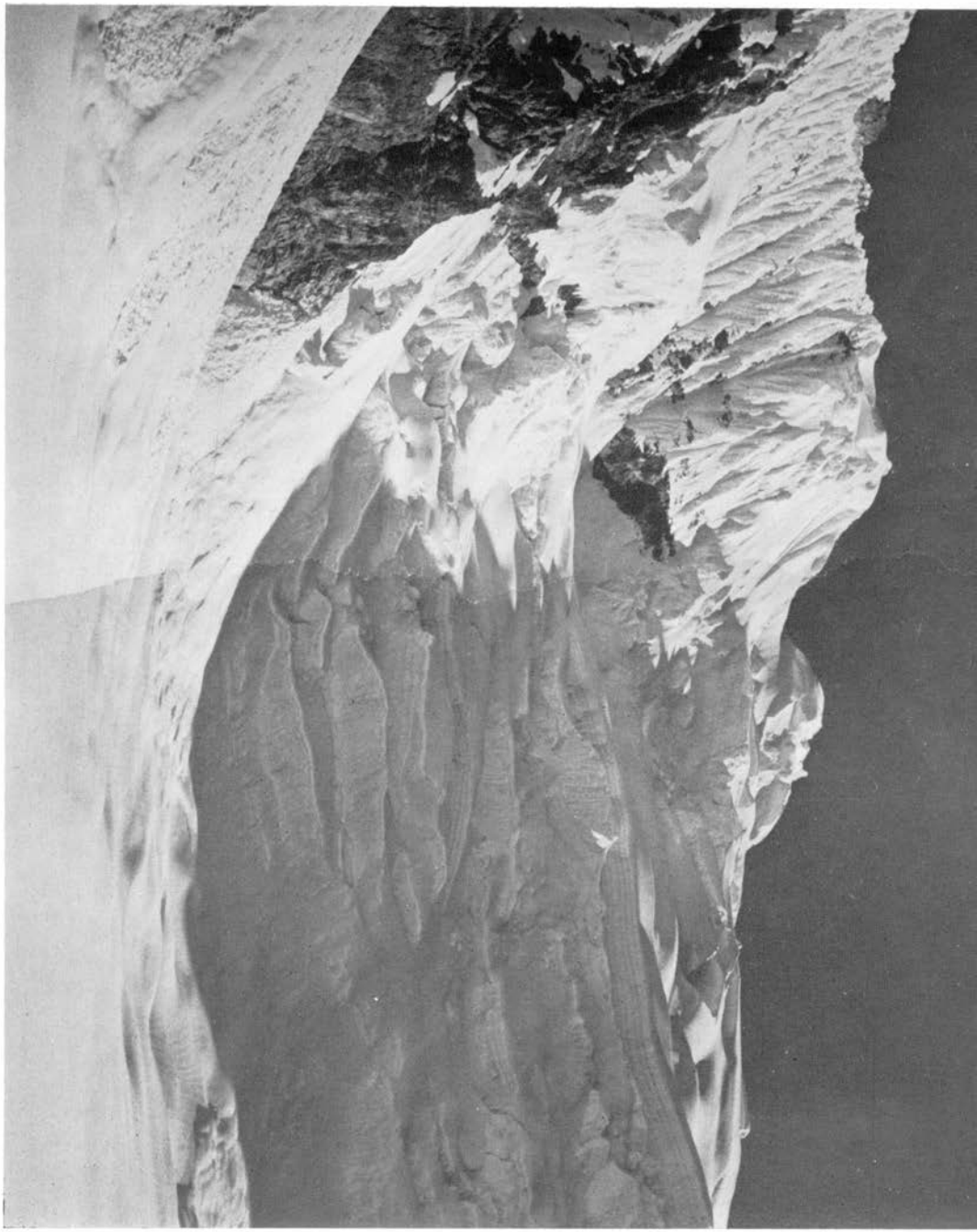
ナワコットから道ずれになったネパールの行商人は、英語を話した。彼の腕時計がこわれたので、それを修理してほしいと、歩きながらくりかえしてたのまれた。カメラのシャッターを分解することだけは習得して来たが、時計の修理法は知らなかった。修理道具をもっていないからだめだと突っぱねたが、行商人はあきらめなかった。私が休めば、彼も腰をおろし、岩石の標本を採ったり、写真をとったりする間も根気よく、離れずにつきまとっていた。彼らのような呑気な旅をしておれば時計など要らないだろうが、おそらく旅先のお得意さんに見せるために動く時計が必要だったらしい。

地図にあるベトラワチの橋は流されたままであった。私たちは支流を溯って、代りの吊橋のたもとで、はじめてテントを張った。夜、川へ手を洗いに行った寺畑が、懐中電灯の明りで魚をおびき寄せて、ホークで突きさしてきた。この辺に住む魚は、トンマな奴ばかりらしかった。この最初のテントの夜は雨に見舞われ、私は最初にヒルの夜襲をうけた。

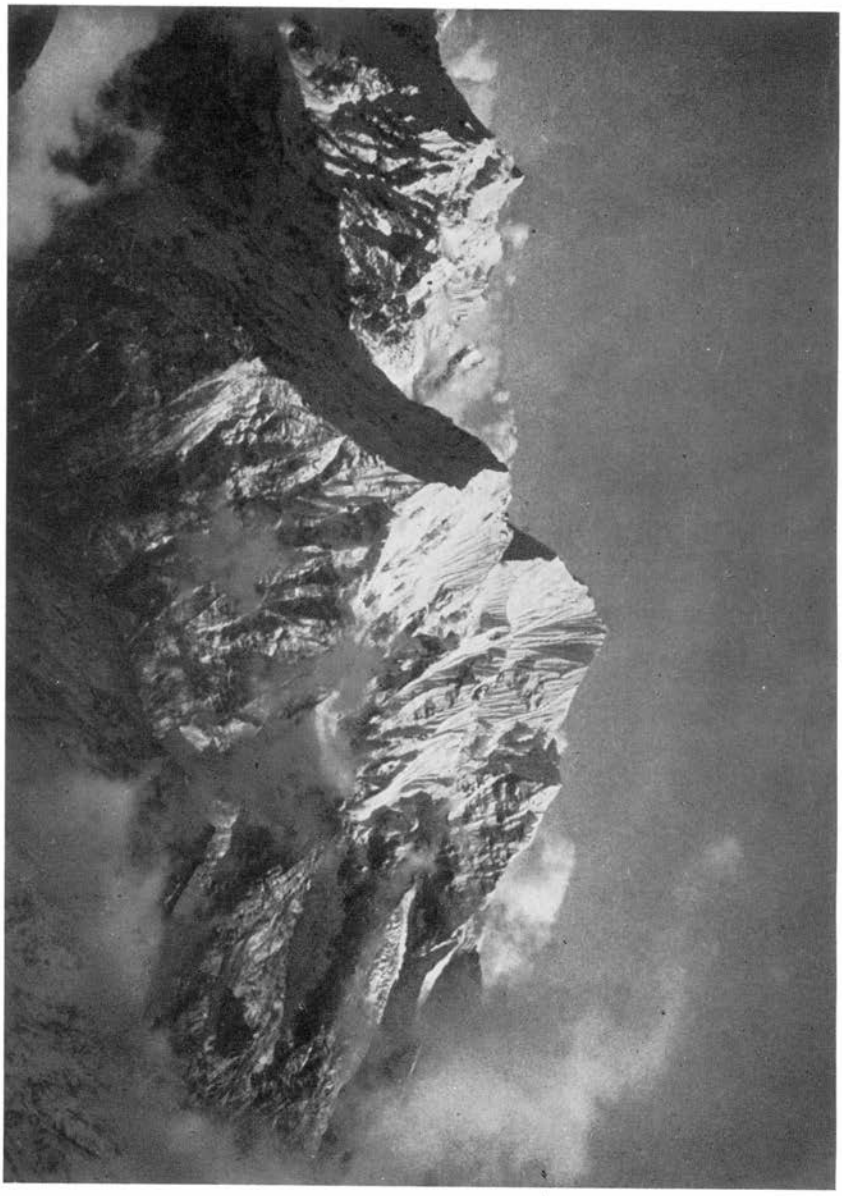
四日目、モンスーン中はトリスリ河沿いの道は通れないというので、高巻きの悪路を進むことになった。雨の中で朝食をすませ、吊橋を渡ると、いきなり鉄砲登りがはじまった。そして、この道には、山ビルが首をふって私たちを待ちかまえていた。終日、雨に降られて、ラムチェの手前で、ハリ・コーラに道端のわずかの平地をみつけてテントが張られた。ガスの切れ間から、はるか下の方を流れるトリスリ・ガンダキが蛇行して見えた。遠く対岸の高いところには、白く、高い瀑が懸っていた。テントへ着くと、さっそく珍奇な実験がはじめられた。「ヒルに対するナイロン・ストッキングの防禦効果について」とでもタイトルがつけられよう。結果は、九〇%良好であった。新品のストッキングは一〇〇%効果をあげたが、伝染病のはじまった中古のそれは、ほつれ目からヒルが首を突っこむからであった。シェルパたちは、珍らしいストッキングの配給に歓声をあげた。

五日目、雨はあがったが、ぬれた道にはやっぱりヒルの大群が待ちかまえていた。しかし、もはや私たちはそれほど気にしなくてもよかった。新らしい武器があるからだった。初めてはいたストッキングに喜んだのもつかの間、この靴下の贈主たちは大切なものを忘れていた。ガーターがなかった。この難題はやがて、ショートパンツの股にヒモを通して、両方のストッキングを吊る珍案で解決された。この日、チベットからカトマンズへ売られてゆく羊の大群に遭って、私たちのキャラバンは乱された。夢中で走る羊たちに角をひっかけられないように、石の上に逃げて見送らねばならなかった。ここで、私たちは新らしい敵を迎えた。毛むくじやらの足にはいた透明なストッキングが、羊を追う連中の目にとまってしまったのである。珍らしさのあまり、彼らは私の足に手で触れてみたいという衝動をおさえることができなかった。連中にかわるがわるスネやふくらはぎをなぜまわされて、くすぐったさにあやうく石の上からころげ落ちそうになった。しかし、この日、初雪に化粧されたガネッシュの前山を、チョットおがむことができた。だいぶんヒマールに近づいたのである。

六日目の夕方、目の前にいきなり跳び出したラングール猿におどろかされながら、やっとシャブルベンシに着い



第2キャンプからサルバチュムを望む。頂上は右側のドームの裏にかくれている
Looking up Shalbachum from Camp II. Its summit is hidden by the snow-dome at the right. (by T. Yamada)



第3キャンプからキャンジン（中央）とウルキムマン（左）を望む

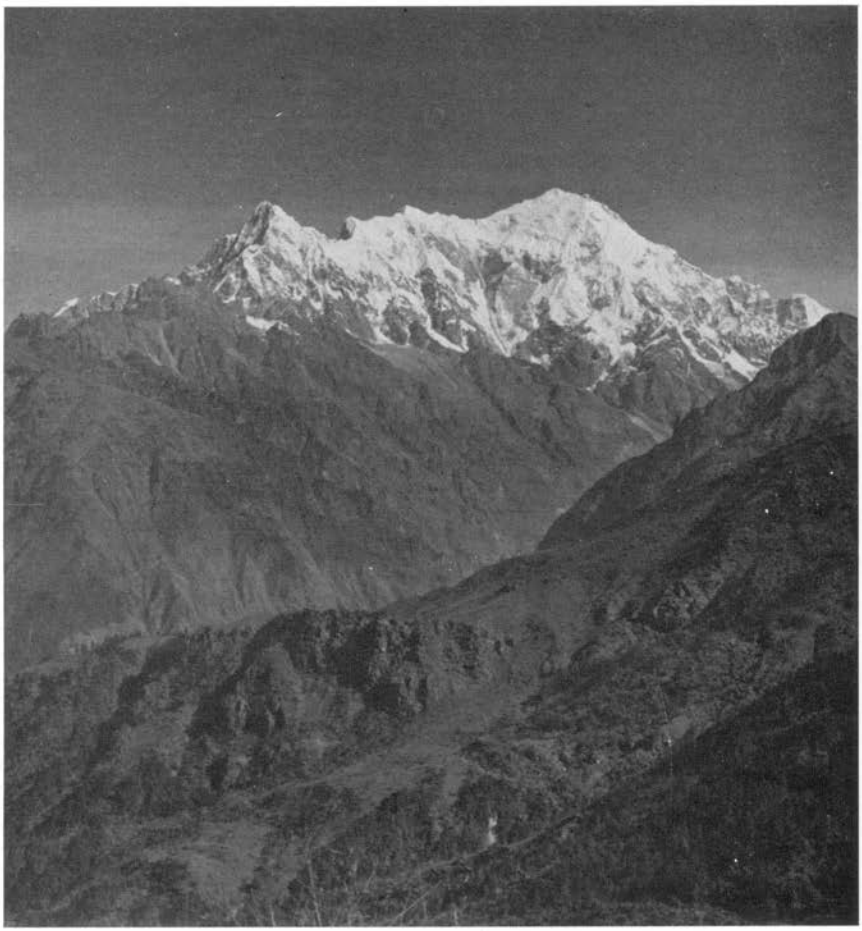
Kyanggjin (centre) and Urkimmang (left) seen from Camp III on Shalbachum.

(by T. Yamada)

ガンジャ・ラ下方のニャガン・カルカから見たリルン（左）とチョムギャムツ。中央はリルン氷河

Lirung (7245 m) (left) and Chyomgjamtu (6745 m) (right), seen from Neagang Kharka below the Gangja La. The Lirung Glacier is seen between them.

(by T. Yamada)



シャブルの上方から見たリルンの西壁と西尾根

The western face and ridge of Lirung (7245 m) seen from above Shable, Langtang Himal. (by T. Yamada)

た。国境のラスア・ガーリを通ってチベットへ溯るトリスリ本流と、ランタン谷の合流点である。マナスル分隊の竹節さんたちや、深田隊に続いて、三度目の日本隊として、ランタン川にかかる橋を渡った。

七日目、一気に一〇〇〇メートル登ったところで、私は軽い高山病にかかった。生れてはじめての経験だったが、急に気力がなくなって、腰の力が抜けてしまった。医療係の北城は、日本を離れてから初めてのチョコレートを私に与えた。間もなく腰抜けは治ってしまった。皆は、チョコレート・ノイローゼだとひやかした。頭はあいかわらず重く、フラフラして歩いたが、期待したガネッシュは雲にかくれて見えなかった。石楠の大木がまばらに茂っている。草の茂った急斜面をトラバースする道は、皆と離れて一人で歩くのにはすばらしい散歩道だった。

シャルパガオンに一泊して、八日目にやっとランタンの部落に着いた。暗い林の下を通りすぎ、何段かのモレーンを越えて夕やみのせまるころだった。ガスの中から浮かび出た水車小屋から、粉を真白にかぶった女や子供の顔がのぞいていた。急に今までと違った土地へ入ったような感じのする村人の姿だった。とり入れを終った畑には、真赤なソバの茎だけが残っていた。

九日目（十月七日）は最後のキャラバンであった。ガスの晴れた朝、私たちはU字谷の底にいることを発見した。今までV字谷ばかり見なれて来た私たちの目には、モレーンで埋められた広い平らな谷底や、両側の垂直な岩壁、そして高い岩壁の上から懸る白い瀑など、すべて目あたらしいものだった。教科書や山の写真では見ていたが、いま自分たちが、そのU字谷の中にいるのだという実感が嬉しかった。昨日の長い道のりにくらべると、今日は半日コースというので気も楽だったが、三四五〇メートルのモレーンの上で、先行の連中がエーデルワイスをみつけていた。道端の「ここにエーデルワイスあり」という書置きと、その花とを一しょにみつけた。

十一時ごろ、キャンヂェン・ギャンへ着いた。北から、ランタンの本流へ向ってリルン氷河が押しだしていた。白壁のゴンパ（僧院）とスイス人のチーズ工場があり、その前の広場に水色のナイロン・テントが二張りあった。カトマ

ンズにいた時ビナヤ君が、「ヨーロッパの地質学者がランタンへ行くといっている」と教えてくれた。こちらはシェルパ問題が頭にきていて会えなかったが、そのうちに出発してしまったと聞いたのを思い出した。とたんに、背の高い紳士たちが現われた。カメラマンと称する男が、他の紳士たちを紹介してくれた。その時うかつにも、私はティッチー博士の名前を聞き流してしまった。「チョー・オユー隊はどうした」と熱心に聞かれたが、「ノー・ニューズだ」と答えると「残念だナー。私たちは五日前からここに来て、山の映画を撮影中だ」と言った。北城・寺畑たちがキャンプ・サイトをさがしに、リルン氷河の方へ行ったあと、ヨーロッパ人たちはお茶をいれてくれた。背の高い、眼鏡をかけた紳士が名刺をくれた。オーストリー、ウィーンの上に Dr. H. Tichy と印刷されていた。「ウアッ、ティッチーだ」とびっくりした。チョー・オユーの初登頂隊長として、国際女性登山隊の行動を知りたがるはずだった。「あなたの名前は、日本でもよく知られているんだが、さっきは聞きもらして失礼した」と詫びると、「私は、日本語の『モシモシ』だけしか知らなくて残念だ」とほほえんでいた。私たちのことは、すでにカトマンズで聞いていたらしい。おしゃべりしている間に、キャンプ・サイトがみつかって、みんな移動をはじめた。「リルンはとても良い山だ、成功を祈っている」とはげまされ、私たちは、予期しなかった山男と会えたことを喜びあってモレーンの中の凹地へ入りこんだ。そこは、リルン氷河の末端が溶けて、湖の底が一部乾あがった平地だった。クーリーたちとも、お別れである。クーリーたちに番号札の順序で給金を払うと、横にナイケが附いていて片端から一ルピー半ずつとりあげては、彼のズタ袋の中へ放りこまれた。堂々たるピンハネである。クーリーたちの帰ったあと、いよいよ十五人だけ（隊員六人、シェルパ五人、ローカル・ポーター三人、それにリエゾン）の生活がはじまった。この日、リルンはすこしも姿を見せなかった。ベース・キャンプの海抜は三八五〇メートルであった。日本を出るときには、ベース・キャンプは四八〇〇メートルと予想していたのに、これでは一〇〇〇メートルも低いことになった。しかし、チョット石運びなどの労働をすると、とたんにドカッと高度の影響を感じた。

サルバチュムへ

翌日は丸一日休養をとり、九日に二隊に分れてリルンを偵察した。晴れている間にみたリルンの東壁はものすごく急で、大きかった。氷河から、いきなり二〇〇〇メートルぐらい、雪のつかない岩壁がそそりたつて、その上に厚い雪で覆われたプラトーがあつた。偵察隊が帰つて、結果にもとづいて合議した。上のプラトーへとりつくまでが至難という点で意見は一致したが、初志貫徹でリルンにいどむか、他に転進するかで意見はわかれた。リルンと東の三本槍（チョムギャムツ）の間から落ちるアイス・フォールに沿つて登る以外にルートはなさそうだつた。しかし、かりにそこにルートがあいても、その先の雪原へとりつくために、高い氷の壁を越さねばなるまい。その氷の壁のルートは正面にはなく、陰になつてみえないところに唯一の期待がかけられそうだつた。

みんなの意見を聞きながら、考えてみた。テントは全部使つても六張りしかない。あの高い壁を越すのに、ザイルは足りるだろうか？　食糧はもともと充分なはずはなかつた。しかも、全食糧をここで使いはたしたくなかつた。ツンガ氷河を溯る時にそなえて、できるだけ残しておきたかつた。モンスーンは、私たちがランタンで降られた雨を最後に明けたらしい。いつまで、この天気は続くだろうか？　ジェット・ストリームの吹きだすのは、すこしおくれるかも知れないが、ただばくぜんと十月二十五日ごろと予想しても、残り十五日しかなかつた。強風の吹き出す前に登山行動は終了したかつた。それに私たちは、みんなヒマラヤ一年生だつた。どんな困難に会うかわからないが、尾根までとりつけないかもしれなかつた。低くても、一つのピークに登つた方が私たち自身のために良いのではないか……。今日みたところでは、第二目標のサルバチュムは行けそうだつた。よし、決めた。リルン放棄だ。念のため、サーダーとダワに意見を聞くと、「リルンは危ない。バラ・サーブやめましよう」と暗い顔をしていた。「明日からサルバチュムだぞー」と叫んだ。シェルパたちも「OK、やりましよう」と喜んだ。

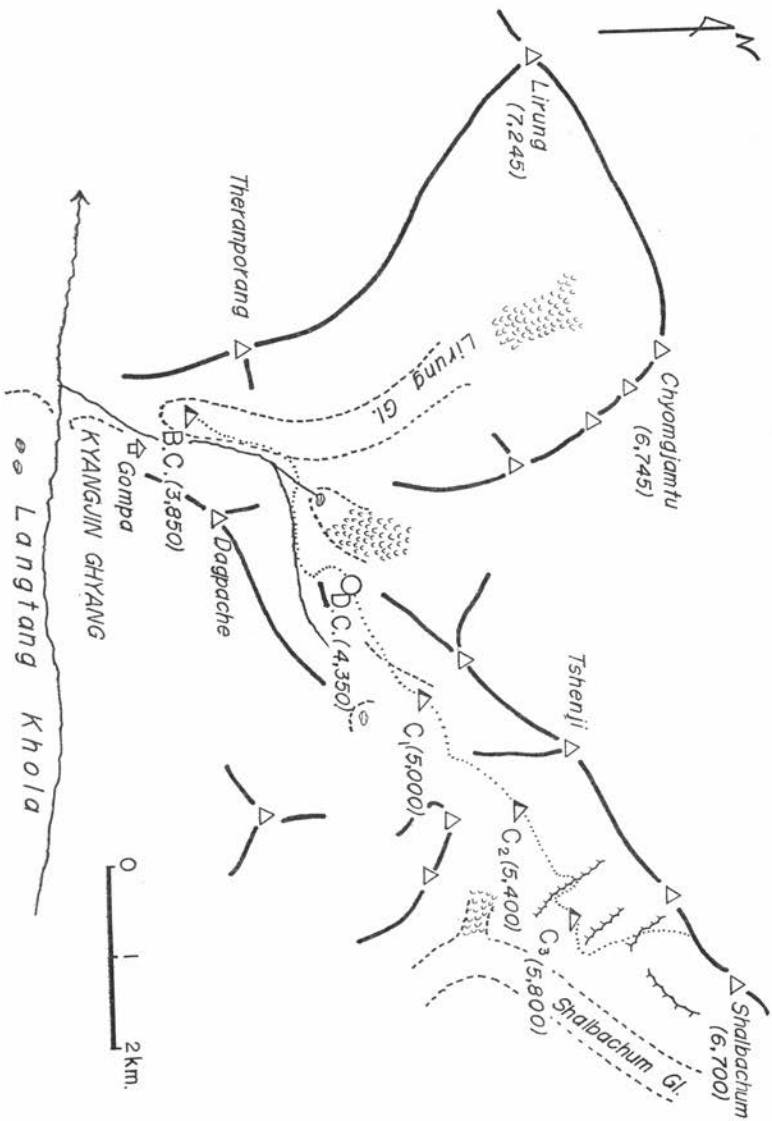
この夜、私は生れて初めて、これからの全体の行動予定表をつくつた。明日は、北城、寺畑、サーダーの三人は、雪原の端に張る第一キャンプ地と、そこから上のルート偵察、私と笠井、シェルパ二人でモレーンの上の道路開発、他は食糧配分と分担をきめた。

全員が、均等に高度馴化はできないかもわからぬが、とにかく十七日までに第三キャンプをつくる。そこであらためて頂上攻撃隊をきめる。調子の良いものからドンドン先にキャンプを進めるラッシュ戦法にした。

十一日、リエゾン一人を残して全員がベース・キャンプを出発した。四三五〇メートルの最高のカルカをデポ・キャンプに使つたのである。リエゾンは、「私は雪の上で充分働けるから連れて行つてください」と志願した。しかし、サーダーは「彼はシェルパではあるが、今回は政府の肩書をつけてきている。これ以上つきあうのはゴメンだ」とうけつけなかつた。いままでに、何度かリエゾンのために苦い思いをさせられたサーダーにしてみれば「坊主にくけりや、袈裟まで憎い」というのだろうか？　結局、彼は一人淋しくキャンプ・キーパーをつとめることになつた。みんな荷あげにでかけると、彼は昼飯や茶の用意をして待つていた。

デポ・キャンプに泊つた先進隊は、十二日に第一キャンプを設置した。

十三日、全隊員、シェルパの殿りをつとめて私もベース・キャンプを離れた。みんなの出かけたあと、ルックを背負つて一歩踏みだした時、モレーンの上に人影をみとめた。ティッチー博士たちだつた。冷たい川を裸足になつて渡つてきた。「明日、ガンジャ・ラを越えてカトマンズへ帰る」と挨拶に来たのであつた。リエゾンに茶の用意をさせて、おしやべりをはじめた。「やはりリルンへ向うか？」というので、偵察の結果を話し、サルバチュム転進を告げた。「それはよかつた。たしかにリルンは難かし過ぎる」とはじめていつた。私たちの到着する前に、彼はリルンを観ていたはずであつた。しかし、私たちが自分で判断する前に、彼は彼の意見を口にしなかつた。すべて、彼の話しぶりには奥ゆかしさがただよつていた。山男はこうありたいものだと感じさせるような人柄だと思われた。アンダー



サルバチュムへの登山ルート略図

シャツ一枚で失礼だと思つたので、カッター・シャツを引きずりだした時、「やめたまえ、私もこんなセーターで来たんだ。コンフォータブルに話すには、この方が良いだろう」といつて、写真までそのまま撮らせろといつた。私たちが、ルックやテントの布地に使つていたビニロンにふかい関心を示し、「さわつても良いか？　口をつけても良いか？」とことわつては、息を吹き通したりしてテストした。そして、はじめてみたビニロン礼賛をはじめた。修理用にもつてきた端切れでも見本にさしあげようと思つたが、あいにく見あたらず、私なりの知識でビニロンの能書きを話した。他の装備もみたいと云つたが、すでに私の個人装備のほかは、ぜんぶデポ・キャンプにあげられていた。食糧のポリエチレン・パッキングもほめて、缶詰の重すぎることをこぼしていた。さかんに、時間を気にして、私にめいわくになるだろうと腰を浮かしたが、話ははずんで、二時間ぐらい過した。そして、また逢えるようにと願いつつ、サヨナラをした。（彼がカトマンズを離れる前に、ガウリサンカール隊の遭難さわぎがあつて、彼自ら救援隊に加わることを申し出られたということを、カトマンズに駐在していた遠山さんから聞いた。）

十六日、荷あげは順調に進んだ。私自身も一日ごとに荷あげをするのがだんだん楽になつた。そして、この日、また殿りで第一キャンプ入りをした。氷の上ではじめての夜だつた。そして、また私の誕生日でもあつた。しかし、明るいうちに用意された夕飯は、残念ながらアルファー米のオジヤだけだつた。こんなことなら、大いに宣伝すればよかつたかナとも思い、また反面、誰も気がついていないことに満足した。

ランタン谷をへだてて向う側の、雪の斜面で、真赤な夕日が反射して、すでに日陰になつた暗い、寒い私たちのテントを照らしつけた。この美しい光景を、一人だけで楽しまなければならないのは残念だつた。だけど、隣りのテントの連中から、下手な感嘆詞を聞かされたくなかつたので、真赤なテントの吹き流しから顔だけだして、ひつそりと、記念すべき日の夕景色を楽しんでいた。

十七日、予定通りにすすめば、第三キャンプはできあがつて、北城、寺畑、ダワ・テンバの建設隊は第二キャンプ

へ降りてくる日だった。しかし、私が第二キャンプへ着いたとき、平らな雪原（ここをグラウンドと呼んでいた）の先の氷壁の途中に、二組のザイル・パーティーがあっちこっち動いているのが目に入った。下の方から偵察していた時には、予期しなかった氷壁であった。雪原はなだらかに尾根の下まで続いているとばかり思っていたのである。やがて四人は、あきらめて帰って来た。「三日目になるが、クレバスが網目のように走っていて、まだルートはつけられないんだ」ということだった。たった三〇〇メートルぐらいの壁だが、たいへんな苦労をしていたらしい。「二人のザイル・パーティーでは、片方が落ちこんだら引きあげることができない。明日は三人で組んで、今日みてきた最後のクレバスを突破しよう」という言葉をきいて、明日に期待するより仕方なかった。

十八日、あたらしく私も加わって、五人はふたたび急斜面にとりついた。私はここで、はじめて雪原の断面をみた。降り積った雪は、夏の間にその表面が溶けて氷になるので、一年ごとに雪の年輪がきざまれていた。いちばん上の、オーバーハングした壁の下に細く長いクーロワールが右の方へ続いていた。あそこえとりつくよりほか道はない。崩れ落ちた氷塊が埋めているクレバスを、三人で確保されながらテンバが渡って、クーロワールへとりついた。慎重に足場をきって、踏張ってからテンバが招いた。やっとクレバスを渡って頭の上を仰いでキモを冷した。クーロワールの上には、雪の年輪とよんだすべての氷の層から、無数のデッカイ氷柱（つらら）がぶらさがっていた。クーロワールを歩いている途中で、こんなツララに直撃されたら、私たちは田楽ざしになってしまうだろう。ここでまた私は軽い高山病に見舞われた。すでに、この高度で数日苦闘していた四人にくらべると、カルカからいきなり上ってきた私は、呼吸の乱れをなおすのさえつらかった。それに、ツララ・ノイローゼが重なったのかもしれなかった。しかし、この日、クーロワールに沿って道は開通し、上のプラトーへ出て、第三キャンプの位置もきまった。ここですぐ帰ればよかったが、クレバスに散々悩まされた四人は、第三キャンプから先のルートを心配しはじめた。疲れているし、ガスもまいてきたからと留めたが、昼食までの三〇分間だけ先をみに行ってくるといって出かけた。アゴをだした私は、

雪の上に腰をおろして待つことにした。もし、またこのプラトーの先が切れていたら、ここまで荷物を上げても仕方ない。ここから、いきなりヒマラヤ・ヒダの急斜面にとりつくこともできないから、その時は五八〇〇メートルの第三キャンプから退却だな、とぼんやり考えていた。三〇分たつても帰つてくる様子がない。何度も大声をあげて呼びもどしたが、返事は聞えなかつた。一時間の余たつて、やつと四人が下りてきた。こちらからみていると、アン・ザイレンして歩きながら、雪の中へころんでいる。腹がへつたのと、過労が重なつて弱りきつていた。私の待つている所へたどりつくと、「やつぱり先は切れている」とポツリッといつたまま腰をおろしてしまつた。一時間あまりの労働が、彼らをこれほどまでに衰弱させるとは思わなかつた。さつきまで、いちばん弱つていた私が、どうやらいちばん元気になつてしまつたようであつた。陽が当れば、身のおき所もないほど暑い雪原も、ガスにまかれると、一ぺんに寒くなつてしまう。みんなをはげまして、ビスケットとテルモスのジュースで軽い食事をして帰路についた。

この日あらたにサーダーが第二キャンプへ入つた。下からの輸送だけが順調に進んで、先がつまつたので、第二キャンプには荷物が一ぱいになつてしまつた。今日の調子では、みな衰弱してしまつて明日は動けそうもない。無線を持たない私たちは、下のキャンプへ連絡もつけられないので、明日は第二キャンプだけ休日にしよう。

第三キャンプまでのルートは開けた。しかし、その先にもう一つ前進キャンプをあげることは、日数がかかるのみならず、氷壁を越える輸送もたいへんである。すこし遠いかもわからないが、第三キャンプから頂上攻撃隊を送ることにきめた。そして、この夜攻撃隊人選の腹案をきめた。

二十日、第一次攻撃隊の寺畑・テンバの二人を先発させ、第三キャンプ上のクレバスを越すルートをさぐらせた。サポート隊は私とサーダーに第二次攻撃隊の北城・ダワと、昨日あがつて来た笠井を加えて五人であつた。昨日の休日に氷壁上部のクーロワールの西続きは崩壊して、前にこわごわと渡つたクレバスは、新らしい氷塊で埋められていた。近くにうろついている時、あんな崩壊に遭つたら、あおりを喰つて腰を抜かしたことだつたろう。第三キャンプ

を、五八〇〇メートルに設置して、寺畑たちの帰ってくる前にサポート隊は下へくだった。この日は、松島、新井、アン・ダワが第二キャンプへ入った。

二十一日、目を覚ましたら吹雪であった。だんだん明るくなるのに吹雪はおさまりそうになかった。「今日はだめだナ」とつぶやいてテントから出ようとしなかった。九時ごろ上の方から声が聞えた。テントから這いだすと、ガスのきれ間から上の雪原の端で赤旗が揺れ動いていた。一生懸命どなって旗を振った。無線がないので打ち合せはできないが、これが唯一の「明日を待つ」合図であった。一日中、寝ぐるしいテントの中で、なるべく体を動かさないようにじっとしていた。動けば、寝がえりをうつだけでも呼吸が乱れるからである。シェルパが運んでくれる飯をポチのように、テントの吹流しから入れてもらって食べているだけであった。それでも、ときたまテントの外へ出て、まわりに吹き積る雪をはらいのけなければならなかった。

二十二日、ふたたび吹雪であった。もう、第三キャンプの連中は下へくだるより仕方なかった。もし明日天気になっても、食糧が充分ないはずであった。しかし、氷壁のあちこちで表層ナダレがひんぱんにおこって、私たちが下から迎えにゆくのは危険であった。昼すこし前、吹雪の中を寺畑たちはおりて来た。せまいテントの中に押し合って入った。何となくホッとした気持ちがした。ギルミンは、吹雪の中を一人で、足りなくなったケロシンの補給にあがってきた。ツェニーの頂上ちかくから雪崩がおちて、岩壁の下を通る私たちの交通路はおびやかされていた。彼の帰路をあやぶんだが、第二キャンプは満員御礼でとめるわけにもゆかなかった。といって、誰か附いて一しよに降りると、明日の荷あげが困る。彼は、大丈夫々々と云いながらまた吹雪の中を一人で元気に帰った。

二十三日は快晴だった。最後のチャンスだろうと確信した。それにしても、深い新雪のラッセルと、第三キャンプからの長い道のりは、二人の攻撃隊ではとても頂上まで行きつけそうにもない。第一次、第二次と分けていた攻撃隊を一ぺんに送ることにした。昨日おりて来て半日しか休めなかった寺畑とテンバには気の毒だったが、メンバーの

交代は不可能だつた。残つた全員がサポート隊になつてテントをもう一つあげることにした。氷壁の最後のフィックスをたよつて、上のプラトーへ出たところで猛烈なブリザードに見舞われた。たちまち、手足の先がしびれてしまつた。すぐ風もおさまつて動きはじめた。第三キャンプのテントはつぶれていた。雪の中から掘りだして、もう一つ新らしいテントを張り、北城、寺畑、ダワ、テンバの四人を残して引きあげた。明日天候が悪かつたら、撤収せよと確認し合つて、ただすがりつきたいような気持ちで、明日の晴天を祈つた。

二十四日。しめた。快晴だつた。プラトーの上へかくれた攻撃隊の出発を見送つて、今日こそは成功だぞとこおどりした。登頂したら今日のうちに第三キャンプを撤収してしまいたかつた。私は、すこし無理して痔痛で動けそうにもなかつた。新井、笠井、アン・ダワの三人をサポートに送つた。第二キャンプでサルバチュムのドームを見守つていたが、深い新雪とクレバスは、この日攻撃隊に尾根にとりつくことまで許さなかつた。四時になつて、サポート隊の三人だけが氷壁をくだり始めたのをみて、サーダーは沈みこんでしまつた。「この季節に三日も晴天の続くことはなかつた。明日はもうだめでしよう」といつた彼の言葉は、私たちを暗くしてしまつた。

ところが、二十五日はまた快晴だつた。だが、食糧も、天気も、みんなの健康状態も、もうこれ以上の長居は許しそうになかつた。新井に、第一キャンプ以下の撤収を任せて先に下へくだらせた。最後のサポート隊は、私と笠井、アン・ダワの三人であつた。私たちが第三キャンプへ着くころ、攻撃隊は快調な足どりで、尾根からドームのうら側へ消えた。成功まちがいなし。しかし、彼らがふたたびドームのこちら側へ姿を現わすまでの時間はかなり長かつた。腹ごしらえをして、尾根からくだる彼らを十六ミリにおさめるべく、キャンプの上の平地まで這いのぼつた。カメラはベラボウに重く、数歩踏みだすと、呼吸をととのえるために、突きさしたピッケルに上体を覆いかぶせるようにして、しばらく休まねばならなかつた。ようやくにして、キャンプから一五〇メートルばかり登つたところで、プラトーはクレバスで切れていた。その端で望遠レンズをかまえた。「ヤッタゾー」という声が聞えてきた。ノミのよ

うに小さな四人が、急斜面をくだるのに苦労していた。

ガスの中から、クレバスを遠巻きした四人がすぐ横に現われた。ころげるようにして馳け寄つた。四人はてれくさそうにほほえんでいたが、握りしめたお互いの手には力がこもつた。予定していたギリギリの日まで頑張つたのであつた。アン・ダワが用意してくれた汁粉を飲んで、第三キャンプはたたまれた。さあ、引きあげだ。

二十六日、みんな力一ぱいの荷物を背負つて住みなれた第二キャンプをあとにした。荷が頭の上へかぶさつて、新らしいデブリを越す時には足元があぶなかつた。足の速いギルミンは、カルカから途中まで迎えにあがつてきた。もつぱら、下のキャンプの間の輸送をひきうけてくれた彼は、ギューッと私の手を握つてニッと笑つた。何も言葉を口にしなかつたが、お互いの気持ちは十分通じあつた。すでに撤収された第一キャンプの跡は、雪が溶けて汚れていた。テントの跡は三〇センチも凹んでいた。この頃から雪がまい始めた。すでに危険な道は通り越してしまつた。カルカに着くと、日本からの便りが待つていた。そして、ポスト・ランナーの口伝えで、チョー・オユー隊の遭難を知つたのである。

紅白のテープと、ありつたけの旗で飾られたベース・キャンプへ着いたのは、おそかつた。祝宴は明日にしよう。ゆでたてのジャガイモがとつてもおいしかつた。この夜ベース・キャンプにも湿つた雪が降りつもつた。大きな私たちのテントは、布がはりさけるように垂れ下つて、ために何度も雪払いをしなければならなかつた。もし、この雪が二日早くきたら、私たちは氷壁をくだることだけでえらい苦労をして、もちろん登頂などできなかつたろう。

ランタン谷の散歩

シェルパたちは、みんなおめかしをして、日本から持つてきたわずかのウィスキーで成功を祝つた。ベース・キャンプでのわずかの酒は、サーブたちを討死させた。祝宴も終つて、読経のすんだサーダーたちのテントは静かになつ

てしまつたが、私たちのテントは、討死しそこなつた連中のバン声で破れるばかりだつた。ロレツの廻らない音痴たちのがなりたてる日本の歌を、もしランタンの連中が聞いたら何と思つたであろうか？

翌日は、シェルパたちがチャンを仕入れてきて、祝つてくれた。羊頭の丸焼きや、ラマの仏に感謝する読経のあとで、大きなコップになみなみとつがれた無気味なソバ酒は、酒の好きでない私には、田舎の肥だめの中のものを連想させた。シェルパたちの好意を無にするわけにもゆかず、眼をつむつて喉を通した。お蔭で私はジンマ疹にかかつて、以後ネパールの地酒と絶交した。

リルンの尾根には大きな雪煙がたちはじめ、冬の強風が吹きはじめたことを示した。三日間、氷河のほとりを散歩したり、お世話になつた人々への便りを書いたり、調査をしたり、皆思い思いに勝手なことをして休養した。

十月の晦日に、モレーンの下へ、ベース・キャンプを移した。これからの行動に都合のよい、日あたりの良い場所をもとめたのであつた。西部劇の映画にでてくるような、大きな転石で囲まれた風の当らない場所をシェルパがえらんだ。石室を台所に使えるし、ネコヤナギの立木も多かつたので、シェルパたちは喜んだ。しかし、カーペットを敷いたように、牛糞がその地を覆つているのには面喰つた。夜石室のまわりに集つた牛族の遺産であつた。サーブたちはみんな嫌な顔をしたが、シェルパたちは良好な燃料が足元でかき集められる利点を力説した。結局彼らに説得されて、そこに住むことになつたが、この時から私はまた牛糞ノイローゼに陥つた。出たり入つたりする度に靴下につけて運びこまれた牛糞のかけらは、テントの中だけでなく寝袋の中まで侵入した。食事の時には牛糞カーペットの上のテーブルには、踏み砕かれた粉が舞いあがつた。牛糞のフリカケを御馳走になつたわけである。毎日の晩さんは牛糞の焚火ではじまり、その灯りで煙の臭いを十分に吸いながら食べた。ある夜見物にきたイタチは、この煙に酔つぱらつてまよい出て、生捕りにされてしまつた。食事が終つてからも、しばらくはコークスのように燃える残火をかきまわして談笑し、鈍感な連中はジャガイモをこの中で焼いてほおばつた。

十一月二日、ツンガ氷河の探査隊第一陣は出発した。ツンガ・ヒマールの探査と、ゴサインタンの位置とルートをさぐるのは、一つの目的であった。三日に続いて第二陣も出発したが、私は数日らい痔の出血多量のため貧血症状に陥って、出発を延期した。

この頃、ツンガ氷河の方へ行っていたヤクや羊は、一せいにランタンへの引揚げをはじめた。ヤクの首にぶらさげられた鈴（鉄のチューブに振子をつけたもの）の奏でる音楽はすばらしかった。スイスの牧場にいるのではないかと錯覚をおこさせるほど、映画などで聞きなれたスイスの鈴ににていた。違うのは、ランタンで自分の耳で聞いているということであった。

予定以上に食糧を使いはたし、五日、六日と続いた天候不順のため、ついにゴサインタンを確認できないまま、先発隊はランシサ・カルカへもどった。おくれて行った私は、サルバチュム氷河を溯って、サルバチュムの東南壁をみた。上にいた時は、ガスに埋められてみることのできなかった、高さ二五〇〇メートル、横幅五〇〇〇メートル以上の岩壁があった。その壁の南端には、私たちの住んでいたグラウンドから、せまい氷瀑がサルバチュム氷河へ懸っていた。シェルパの言によれば「サルバ＝巨大な、チュム＝絶壁」という山の名の意味があるということである。ジュガールの裏側へまわりこんだパーティーは一日おくれたが、十日には全員ベース・キャンプへもどった。

牛も羊も村へ帰って、仕事がヒマになったランタンの男たちは、私たちのカトマンズへ帰るのも近いとみて、クーリーの売こみにやって来た。毎日村からベース・キャンプへやってきては、一日中テントのまわりにたむろしていて夕方になるとまた村へ帰って行った。チャンをさげてきて、牛糞のカーペットの上で酒盛りをやる連中もあった。

カルカッタからの連絡で船の出航の日がきまり、私たちも十一月十八日ランタン出発と予定がきまった。その前に、ガンジャ・ラ側へのぼって、せめてゴサインタンの遠景だけでもおがみたかった。散歩を兼ねて、ニャガン・カルカへリエゾン一人をのこして全員で出かけた。深田隊の泊った同じ石室へ分宿した。夜中に誰かにほおをなでられ

た夢をみて目を覚ました。何と相手は乾草の上の乾いた牛糞だつた。腹をたてて小屋の外へ出ると、満月が明るくランタンの山々を照らしていた。谷は水平な雲海に埋められ、大きなダムをみているような景色だつた。

ベース・キャンプにもどつて、最後の訪問として、スイス人のチーズ工場を訪ねた。私たちのキャンプへよく遊びにきたシェルパのダワ・ノルブが、淋しく留守番をしていた。このチーズ工場も、もし男たちの風采がちがい、後ろにゴンパがなければ、ヨーロッパ・アルプスのどこかにあるようなものだつた。チーズそのものは、写真でみたスイス・チーズそのものだつたし、棚の様子も全く同じだつた。ダワ・ノルブに記念として贈つたハーモニカの返礼に、大きなチーズ一個をもらいうけた。こんなうまい話の交換はないだろうと悦に入つた。ランタンの連中も、薬を求めてイモや卵、チャンなどを持つてかわるがわる交易にやつてきた。現在病気中の者ばかりでなく、仮病をつかつて、不時の病気にそなえて薬をもらいにくる気のきいた奴もいた。ヤクの下痢をとめてほしいといつて来た男に、サルファ剤を与えたところ、二、三日してピタリ治つたと喜んで、またジャガイモの追加を礼にもつてくる義理がたい男もいた。こんな時、サーダーは得意になつて、ランタン人と私たちの間の通訳をつとめた。

カトマンズへ

十一月十八日、いよいよランタンに背を向ける日である。ベース・キャンプから半日でランタン村へ着いた。牛の糞から解放された記念日でもあつた。シャブル・ベンシまでは同じ道をもどつた。往く時はガスにかこまれ通しだつた道も、連日の快晴で見晴らしもよく紅葉も美しかつた。

シャルパガオンでは、ランタン川をはさんで対岸にシャブルの長い家並みがみえた。直線距離では四キロメートルぐらいで、ひとまたぎとでも見えるが、シャブル・ベンシまでくだつて降り登りで二日かかるのである。シャルパガオンの朝、男が大きな白雲母を持つて来た。一荷あるから買つてくれといわれたが、運賃を考えればめいわくな話で

あつた。しかし、日本ではメッタにみられないような大きなものだつたので、標本にするため三枚ばかり買つてやつた。はるか下の方の谷底附近で採れるらしかつたが、このような資源も輸送手段が楽にならない限り、開発価値は問題になりそうにもない。

二十日、シャブル・ベンシのくだりにかかるところで、目の前にガネッシュの山々が見えた。また途中で満開の金センカや桜の花に遭つた。十一月下旬がヒマラヤの花盛りらしかつた。リエゾンはチェリ・フラウアーという単語を知らないらしく、桜んぼ（手まねで）のなる木であることを強調した。

ミルクとバターを混ぜて塩で味つけした紅茶を飲めない私は、「シャブル・ベンシで砂糖が買えるかも知れない」というシェルパの言葉に期待をかけていた。しかし、そこでは砂糖も煙草も、それに塩まで買えなかつた。お蔭で五日間砂糖との縁をきられてしまつた。

シャブル・ベンシからシャブルまでは半日の登りだつたが、ポーターたちは食糧の買入れを理由に午後の休みを要求した。最初ゴサインクンドで一日休むことにしていたが、毛布一枚しか寝具をもたない彼らは、薪のない寒い湖畔で休むより、ドブ酒のある部落で休む方が良いと思つたのであろう。給料の仮渡しをもらつたポーターたちは、その夜ゴンパの横で盛大な酒盛りをした。若いシェルパとサーブたちも、焚火のまわりの輪にくわわつて飲みかつ踊つた。細長い桶にドブ酒が一ぱい運ばれてきたが、朝までに飲みほされてしまつた。

二十二日、昨夜の酒が過ぎて、二日酔のポーターがでた。テンバはピンチ・ランナーをさがしに部落をはしりまわつた。一日でゴサインクンドまで登りつけないというので、途中の草原でテントを張ることにした。赤い厚い僧衣をまとつたチベットのラマ僧と道づれになつた。ダライ・ラマのあとを追つて、インドまで歩いてゆくという若い坊さんであつた。この日、サーブたちは歩きながら、ラマ僧やポーターたちから、はぜトウモロコシやいりマメをすすめられて食べた。小麦粉や米に食いあきていた私たちには、雑穀の味がなつかしかつた。しかし、この御馳走は多くの

サーブたちが下痢に悩まされる因となつた。登りの途中でふり返ると、ガネッシュからチベットの遠くかすむ峯々が見渡せられた。知られざる七〇〇〇メートル級の峯々であつた。まだ、ランタン・リルンの西壁がよく見えた。リルン氷河側の東壁より、さらにとりつきにくいと思われる様相だつた。西に続く稜線から判断すると、リルンの北壁はチベット側へ向つて急傾斜でおちているようだつた。

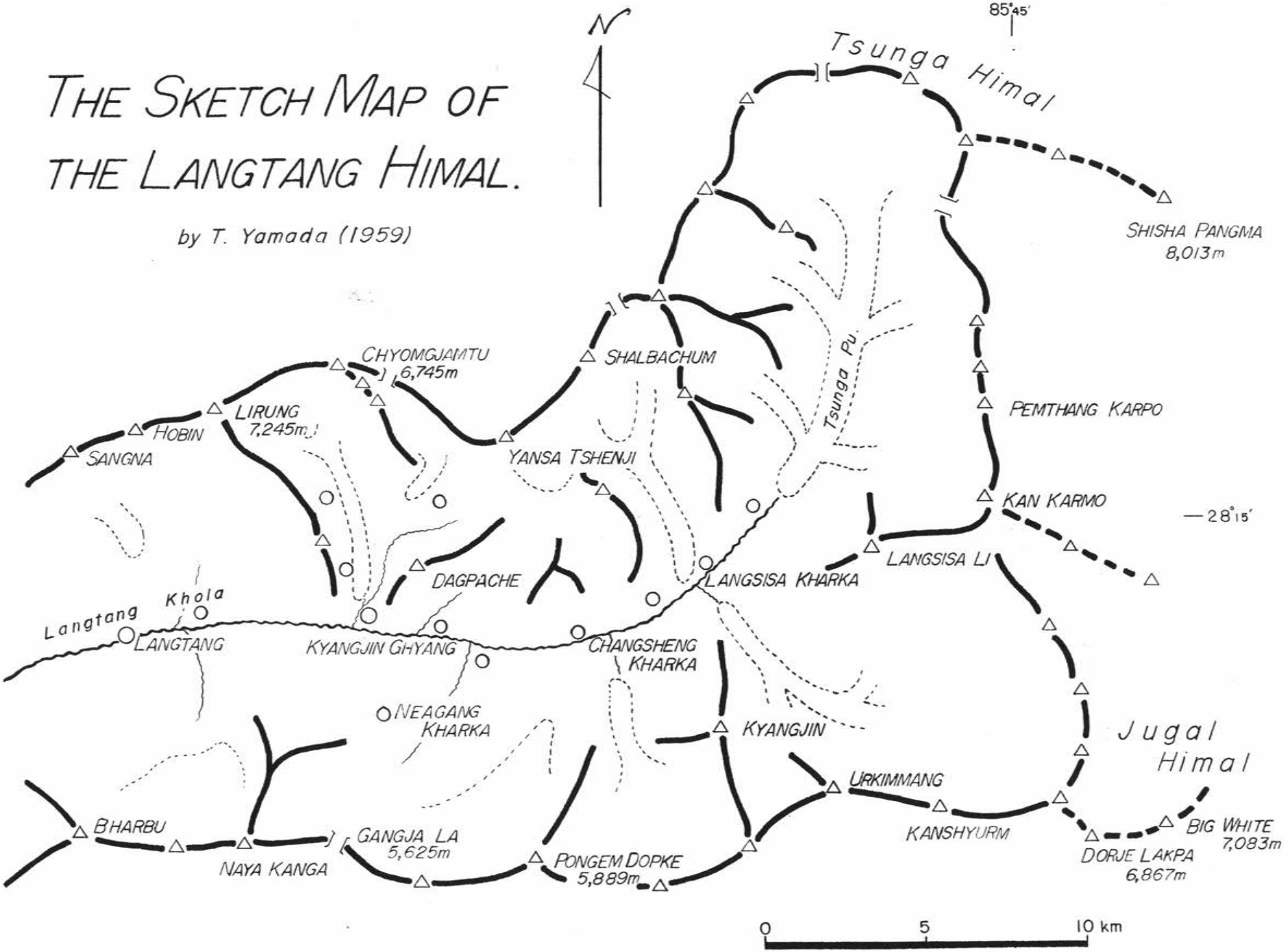
二十三日、いよいよゴサインクンド稜線にとりついた。ここで、久しぶりにまたヒマルチュリ、マナスル連峯を眺めることができた。稜線沿いの道には、ガルネットが羊の糞のように洗い出されてころがつていた。サーダーなどは腰をすえてガルネット拾いに夢中になつてしまつた。

ゴサインクンドの湖は、氷期に発達した小さな氷河が階段状に流れたあとの凹みに水のたまつたものである。形のくずれたU字谷に沿つて、七ツ以上の小さな湖が集まつている。いちばん大きな湖のほとりに、政府の手で創られたレスト・ハウスがたち並んでいて、私たちはその一つに陣どつた。九月の初めに、たくさんの巡礼たちがここにやつて来て、二、三日この湖で沐浴して身体を清めてゆくらしい。しかし、十一月の下旬ともなれば訪ねる人もなく、ひつそりと静まりかえつていた。また、四五〇〇メートルにちかい高さのために、夜は寒かつた。この夜、寺畑は胃けいれんの発作に苦しんだ。食べなれないトウモロコシのたたりであつた。彼のうなり声に目を覚ますと、北城が投薬し水筒の湯たんぽをだかせたあとだつた。彼の苦しむ様子をみているうちに、私は前年、山の中で同僚が盲腸炎になつた時のことを思い出した。胃けいれんだと思つてパパスコなどでおさめようと一生懸命になつていたが、ついにおさまらず翌日一日掛りで村へ送つたのに、盲腸炎で手おくれになる寸前だつた。もし、寺畑が盲腸炎だつたらどうしようか、と心配し始めると朝まで寝つかれなかつた。遠征期間中、医者のいないのを悲しく思つたのは、この時だけだつた。

二十四日、なだらかな道を峠までのぼれば、あとはターレ・パチまでトラバースである。朝になつて、アドルムと

THE SKETCH MAP OF THE LANGTANG HIMAL.

by T. Yamada (1959)



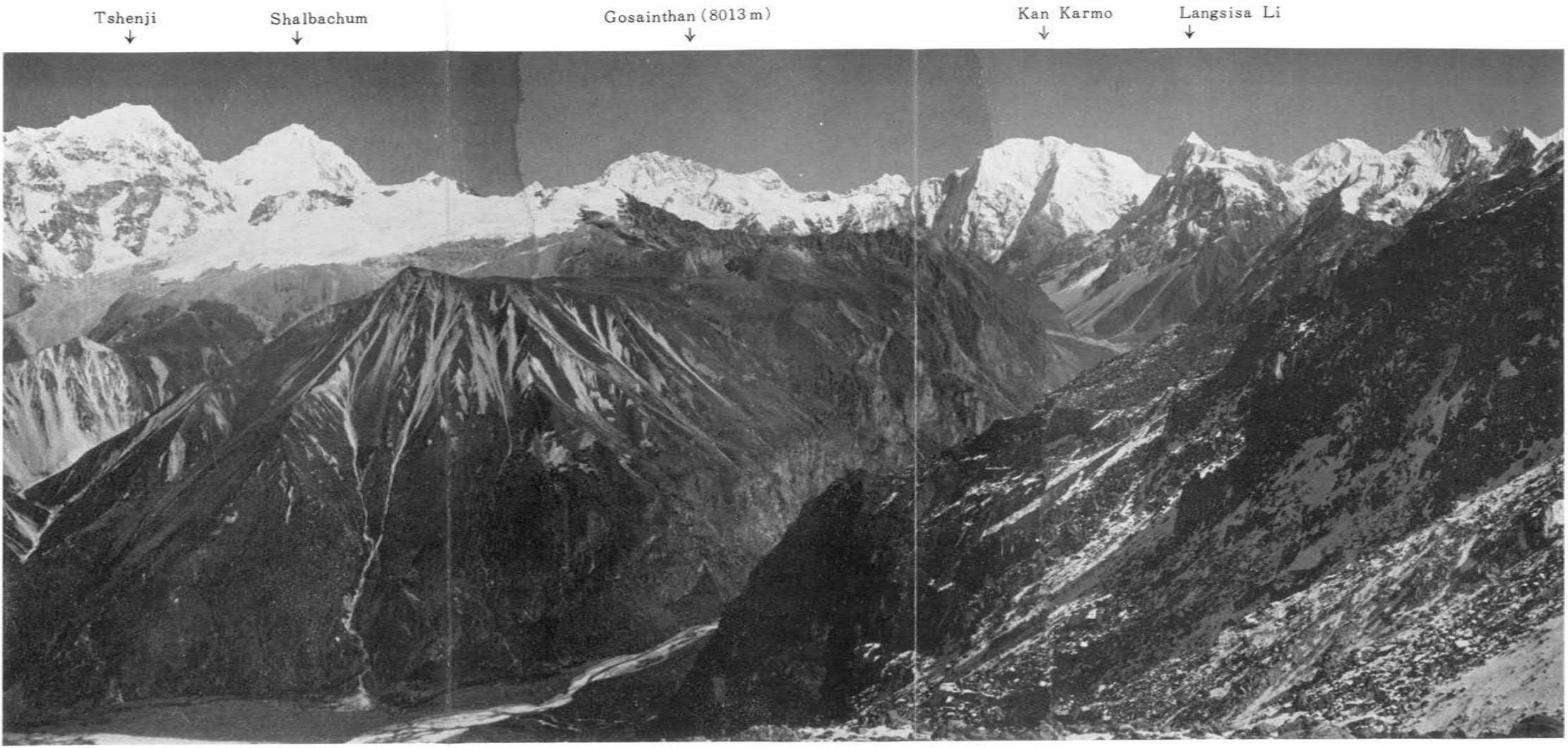
鎮痛剤が効きすぎた寺畑にとつては悲愴な日になつた。食糧事情はもう一日滞在することを許さなかつたので、私とシェルパが両側からかかえるようにして歩きはじめた。他のサーブたちも、みんな下痢に悩まされ、北城などは「誰も話しかけるなヨ」と宣言して歩き出した。返事をするだけでも腹にこたえるということだろう。峠を越えてやれやれと思つたが、実はトラバースにかかつてからがたいへんな道であつた。鋸の歯のように、登つたり、おりたりして小さな尾根を突つきるのであつて、水平にちかい廻り道などはまつたくなかつた。胃の中が空つぽの寺畑などには、地獄の針千本を歩くようにつらかつたと思われる。遂に、この日はターレ・パチにでると、道は尾根筋に沿つて南下しはじめた。この尾根道は、おそらくヒマラヤの展望道路としては、もつともすばらしい道ではなかろうか。東にはジュガール・ヒマールから遠くガウリサンカール、ロルワリン・ヒマールまで見渡せるし、西はガネッシュ・ヒマールからマナスル、アンナプルナ、ダウラギリまで、七～八〇〇〇メートル級の山々を一八〇度見渡せるのである。三六〇度のパノラマ写真をとりたくなるような絶好の散歩道だつた。ゴサインクンドへ通う巡礼たちの踏みかためた道には、ところどころにレスト・ハウスがあり、好きなところで泊ることができる。

カトマンズへ近づくにしたがつて、山のテッペンまで耕された段々畑が見渡せるようになると、民家も山の斜面に散在するようになり、また行きかう人々も典型的なグルン族になつた。鼻に輪を通した女たちや、雲助さながらの格好をした男たちが、同じようにカトマンズへ向う私たちの道づれになつた。この頃になると、私たちがランタンから連れてきた連中がいちだんと汚なく見えるようになつた。

パティ・バンジャンで、すつからかんになつた食糧を補給して、ひさしぶりに砂糖の入つたお茶やニワトリ料理にありつけた。ゴサインクンドをまわつて追いかけてきたポスト・ランナーは、たくさんの手紙を運んできて、私たちは展望道路を歩きながらなつかしい便りをむさぼり読んだ。

シオプリー山稜の峠でヒマラヤの大景観に別れて、一気にカトマンズ盆地へかけくだり、スンダリジャールの紙すき場に最後のテントを張つた。見物に寄つてきた女性たちは、まぶしいほどにきれいだナーと感じられたカトマンズから、この部落までは自動車が走れる道が通じており、ランタンの連中は自動車が通るたびに、なにごとかささやきあつて見とれていた。

十一月二十八日、いよいよカトマンズ入りの日である。クーリーたちはキャンプの横からトラックに乗つて、荷物といつしよに都入りをした。サーブと半分のシェルパは途中まで歩いて、迎えにきたビナヤ君のジープに乗つた。初めて自動車に乗つたランタンの連中は、途中で車に酔つて大騒ぎをしたらしい。乾期に入つて明るくなつたカトマンズの街は、私たちに大都会にでたような錯覚をおぼえさせた。



ガンジャ・ラから見たランタン・ヒマール及びゴサインターン (by T. Terahata)

A Panoramic view of Langtang Himal and Gosainthan, seen from Gangja La.

メンルンツェの西稜からガウリサンカールを望む

The east face, the north ridge and the north-west ridge of Gaurisankar (7144 m) as seen from the west ridge of Menlung Tse (7180 m).

(by H. Katô)

ガウリ・サンカール紀行

加藤秀木

私は以前から、もしヒマラヤに行けるならカトマンズの東――それもエヴェレストの周辺に行ってみたいと思っていた。この地域はネパール開国以来、多くの遠征隊が訪れたところで、現在ではエヴェレストを始め、殆んどのジャイアンツが登頂されてしまった。従って、ヒマラヤ行に初登山とか探検とかを期待すれば、あまり魅力のあるところではない。しかし、登山史上一時代を画したエヴェレスト登頂に興味を持ち、英国やスイスの先輩達の足跡をしのびたいと思っていた私は、どうしても訪れたいところであった。この希望は一九五九年ポスト・モンスーン、福岡大学ヒマラヤ探査隊に参加することによって達することができた。

ガウリ・サンカール（二三、四四〇呎）とギャチュン・カン（二五、九一〇呎）の偵察を目的とする三人編成（加藤秀木（38）OB、阿部盛明（30）OB、尾石光治（21）学生）の小さな遠征隊であった。

カルカッタとカトマンズ

昭和三十四年八月二十五日午後二時三〇分、私達を乗せたスイス・エヤーの飛行機はダムダム空港に着いた。私は

香港あたりから胃痙攣を起し、みじめな気持で空港に降りた。そこでは総領事館の茨木正雄氏が出迎えて下さつて色色と指示して頂いたので、税関の検査も極めて簡単に終つてしまつた。茨木氏の車で宿舎リトン・ホテルに行く。印度博物館の近くの閑静なホテルであつた。先着の慶応隊も泊つていた。予定では、カルカッタには一週間位の滞在でカトマンズに向うはずであつたが、船荷が延着したうえに運悪くゼネストに出会つたため、九月三日まで滞在を余儀なくさせられた。心配していた船荷の通関は、日本遠征隊になれたバルワラ氏に依頼して、彼のあとをついて廻つて、訳の分らない書類にサインをしている間に済んでしまつた。昼は茨木氏や旭ガラスの中村氏の令嬢が市内見物に連れて行つて下さるし、夜は総領事や東京銀行支店長がレセプションに招待して下さるので、すつかりカルカッタ通になつてしまつたが、身体の方も完全になまつてしまつた。

九月三日の夜、いよいよ出発できるようになつて、ゼネスト中で殆んど人通りのない街をあとにして、ハウラー駅からデリー行の急行に乗つた。九月四日午後一時、パトナ空港からカトマンズに向う。モンスーンはまだ終つていないらしく、飛行中は雲の中ばかりであつた。楽しみにしていた機上からのヒマラヤ初見参は駄目になつてしまつた。約一時間後、カトマンズ盆地に出て街が見え出したと思つたら、あつけなく着陸した。空港は凄い人出なので、何事かと思つたら外務大臣とナジャール・マン・シン氏が外遊するのであつた。カトマンズではインペリアル・ホテルを宿舎にした。豪華な名前のこのホテルは、開業したばかりの二流ホテルであつたが、広々とした前庭があつて感じの良いところであつた。ここでも慶応隊と一緒になり、後日飯田隊も泊り合せた。九月六日、ネパール外務省に行き新任の登山担当官S・S・S・J・B・ラナ氏に会つて必要な手続をした。その足でネパール政庁のすぐ近くにあるヒマラヤン・ソサエティ（H・S）に行つた。貧弱な事務室でN・M・シン氏の息子がここのディレクターであつた。

出発前、シェルパのことが頭痛の種であつた。最近ネパール政府は、ヒマラヤ登山隊は必ずH・S所属のシェルパを使うように強く要望している。ところが、H・Sの内容と所属するシェルパの質が分らないのである。当地にきて

分つたのはH・Sに所属するシェルパの殆んどはダージリンのシェルパ・クライマーズ・アソシエイション（S・C・A）に所属していた者である。なかには両方の組合に所属している。それで私達は何もネパール政府の反対を押してまで、ダージリンのシェルパを使わなくても、良いことが分つた。どうしてもダージリンのシェルパを使いたいなら、そのシェルパを一応H・Sに入会させれば良いわけである。H・Sは目下勢力拡大中の組合なので、喜んで入会させるが、ダージリンの親方――例えばテンジン・ノルケイあたりが猛烈に反対をしてトラブルが起り勝ちである。

私は予約していた通り、次の四名を雇うことにした。探査隊の目的地――ガウリ・サンカール、ギャチュン・カンに精通していることが必要条件であることはいうまでもない。

アン・テンバ（サーダー）一九五三年マナスル遠征隊のシェルパとして同行し、プラトー附近で派手にスリップをしたという男である。しかし彼の経歴は素晴しいものがある。英国、スイスのエヴェレストをはじめ、一九五七年のチャールズ・エヴァンズ指揮のカンチェンジュンガ遠征では、二五、〇〇〇呎以上の高度でめざましい活動をして、ヒマラヤン・クラブからタイガーズ・バッジを貰つていた。サーダーとして山行をするのは、今回が初めてであるため、非常に張り切つていたが結果的には少し若すぎたようだつた。しかし、有名なダワ・テンジンの聟であつて、シェルパとしての家柄なので将来が楽しみになる男であつた。

アン・ダワⅢ　日本隊と同行するのは、今回が初めてであつた。アン・テンバ同様、英、スイス隊とエヴェレストで働き、一九五三年の時はサウス・コルに二度も荷上げした優秀なシェルパで、エリザベス女王から貰つたメダルを誇らしげにさげていた。近くはアルフレッド・グレゴリーとアマ・ダブラムに行つた。

クンガ・ノルブ　クンデの村長の息子である。山歴としては一九五六年スイス隊とエヴェレストに行き、A・エグラー隊長から「クンガ少年は初めは良く働いたが後では働かなくなつた」と辛い点数をもらつていたが、今回は大人になつたせいか良く働いてくれた。なお、彼がのソロ・クーンブ・ブランチの支部長であつたのは、英語が多少読み

書きできるせいかも知れない。

キルケン・シェルパ（コック）　W・ノイス著の『サウス・コル』によると「拳闘家のようなタイプの男」といつている。英、スイスのエヴェレストにコックとして行き、その後もN・G・ディレンフルト、R・ランベール等とゴジュンバ氷河やランタン・ヒマールに行つている。又彼はR・ランベール、C・コーガンと一九五四年ガウリ・サンカールに行つたこともあつて、外の三人のシェルパがガウリ・サンカールに未経験なため随分重宝した。ただし、彼の料理は彼が自慢したほど美味しいものではなかつた。ベースキャンプで私達はキルケンの鼻をあかしてやろうということで、コロッケを作つたところ見事に失敗、出来あがつたものはライス・カレーであつた。それ以後は決してキルケンの料理の文句はいわないことにした。

以上の四名のシェルパの外にシェルパ・クーリーというのを五名雇うことにした。即ち、ニム・テンジン（キッチンボーイ）、ナンガ・ドルジェ、プテシ、ヌルブ、パサン・スナである。シェルパ・クーリーというのは、過去の遠征隊の報告にはあまり例がないので説明すると、キャラバン中はクーリーとして荷物を担ぎ、賃金もクーリー並みである。雪線以上になるとシェルパになるが賃金はクーリー並みであるという便利な存在である（もちろん装備は与えなければならない）。一般に使用される高所用ポーターのようなもので、違う点は高所用ポーターはあくまでポーターであつて技術的には心細いけれども、シェルパ・クーリーはもともとシェルパとしての技術も訓練を経ている。従つて、彼等はある時はシェルパとして遠征隊に同行し、ある時はシェルパ・クーリーとして同行するのである。これは、専ら雇傭する時の状態による。ネパール政府は、私達のリエゾン・オフィサーとして、イスワル・マン・シン・プラダハンという二十一才の大学生を任命した。彼はN・M・シンの甥で芸術家志望の優男であつた。ベースキャンプ滞在中、小説を八編も書きあげたといつて私を驚かせたが、案に相違して山の方でも頼もしい男であつた。彼は大抵のL・Oのようにベースキャンプに留つているだけでは満足せず、私達と一緒にどこまでも行動した。私達が高度

順化ができず、頭痛に弱っている時でも彼だけはけろりとしていて癪にさわることもあつた。

カトマンズからベエディングへ

九月十七日曇。いよいよ出発の日である。カトマンズは盛大なお祭りで賑つていた。隊員とL・Oはジープ、シェルパ達と荷物（約二トン）はローリーで行く。空港の近くで右に廻ると、もう私達の知らない道であつた。モンスーンで荒された道は想像以上に悪く、それでもバドガオンまではどうやら無事であつたが、バネパの近くで遂にローリーが転覆してしまつた。近所の住民達の加勢を得て宿泊地バネパの丘までやつと荷物を運びあげた。ここにはS・G・ストレージという米人の医師が、その家族と一緒に住んでいて、色々と私達の世話をして下さつた。最初の晩はサーブもシェルパ達も勝手が分らず、夕食をとつたのは午後一〇時すぎであつた。

九月十八日、曇時々雨。到着したカトマンズのクーリー五十一名に荷物を分けるのに閑がかかつて、出発できたのは正午すぎであつた。総勢六十四名のキャラバンで、フクセという部落まで内地の田舎道そつくりの処を歩く。この日コックのキルケンが作つた夕食は、コンソメ、鶏丸焼、パン、馬鈴薯フライ、卵プッディング等で、この程度なら現地調達の食事で結構いけると安心した。次の日は七哩先のナヤパティという部落まで行つた。モンスーンは未だ明けきらず、空はどんよりと曇つて時々雨が降つた。途中スン・コシとタマ・コシの合流点であるドラルガットは、キャラバン中一番低いところ（二三〇〇呎）でバナナやパパイヤを入手することができた。午後の行程は急坂が続き、クーリー達が遅れて困る。坂の途中にはチャン売りが待ち構えているので、クーリー達は素通りすることができないらしい。午後四時ナヤパティの民家に泊る。果して夜中から雨になつた。

九月二十日、ひどい霧の中を出発する。チャウバスまでの道は高原に灌木がぽつんぽつんと立つていて、九州のどこかを思い出させた。昼食の時、水浴をしたら風邪を引いてしまつた。午後は例日の通り雨となり、午後四時三〇分

リシンゴー（五九〇〇呎）に着いた。ここで初めてゴンパを見た。いよいよシェルパの国に来たという感じがした。ゴンパの中庭に天幕を張りキルケンの作ったチキンマカロニを賞味する。天気が良ければガウリ・サンカールがみえるのだそうだが、生憎の霧で眺望はなく、ゴンパの屋根に立てられた幟が風にはためいて寒々としていた。翌二十一日はクーリーが全部出発してしまうのを見とどけて、サーブ達が出発する。ペダまで一気に降って朝食を済ませ、午後は今日の泊り場マンガデオラリ（七五五〇呎）まで登りばかりである。一日中、霧雨の中を歩き今日も民家に泊った。この辺の民家は見るからに貧しそうであったが、人々は親切に私達を迎え、もてなしてくれた。

次の日も天気が悪く午後から雨になった。午後三時チャリコット（六二六六呎）に着いて、寺小屋の教室に泊ることになった。当地は東ネパールの交通の要衝でパスポートの検問所があり、バダハキム（BADE HAKIMS）の所在地である。一九五一年以来、エヴェレストへのルートとして遠征隊に良く踏まれた道も、ここまでお別れである。九月二十三日午前五時寺小屋のドアーを開くと、待ちに待った光景が展開された。ガウリ・サンカール、メンルンツェ、テシ・ラプチャ等、私達が夢にまで見た山々がくっきりとスカイラインを画していた。双眼鏡や望遠レンズを奪い合っているうちに、やがて朝日が昇ってしまうと、一面のガスとなって視界がとざされてしまった。一日中ボーテ・コシを遡り、午後五時トリケに着き附近の草地に天幕を張った。チャリコットから先は道が悪くなったので多くのクーリーが足を痛め、キャンプ地で治療してやるのが大変だった。次の日は久し振りに快晴となった。今日は殆んど河床を歩いた。鬱蒼たる樹林地であった。ラダックへの近道として吊橋を渡った（私達の使用している地図には、この橋の記号がないので、ずっと迂回するつもりだった）。吊橋はヒマラヤの写真集でよくみられる危げな鎖の橋であった。大斜面の中腹にあるブルング（七三三三呎）という部落の近くに露営した。たちまち部落民に露営地の周囲をとりかこまれてしまった。病気の老人がやって来た。診ると脱臼をして四カ月もたっている。これでは私達には手のほどこし様もないので、湿布してやるくらいが関の山であった。ここからみるガウリ・サンカールは益々大きく、その南

壁は絶望的といわれている理由が良く分つた。

九月二十五日、晴時々雨。午前七時一〇分出発。ボーテ・コシの右岸に細々した道が続いている。ターリーで昼食をすませ、午後四時ゴングール直下の河原に露営した。附近に野生の大きなレモンがあつたのでクーリーに命じて集めさせ、レモン・ティーを何杯も飲んだ。久し振りの珍味であつた。九月二十六日、昨夜は一晩中雨が降つたので野外に寝たシェルパ達やクーリー達にとつては辛い出発であつた。今日も午前中はボーテ・コシの右岸を巻く。午前一一時三〇分チエチエに降りて吊橋を渡り対岸に移ると、そこからシミガオン（六四六六呎）まで胸をつく急坂である。ボーテ・コシとも別れるのである。村人に珍らしがられながら、村の最高所にあるゴンパの庭に天幕を張つたのは午後一時であつた。過去の遠征隊のキャンプ跡らしい。キャンプ地から国境のラモバガーを眺めることができ、その先はチベットの荒涼たる高原に続いていた。九月二十七日、出発の際、クーリー達が一寸したストライキを起し始めた。彼等のいい分は、ベエディングからの帰途の料金として、十二日分を支払つてくれというのである。この点については、カトマンズにおいて、H・Sのシンおよび現に同行しているナイケ立会の下で八日分を支払うと約束済なのである。今更何をいうか、と要求を撤回させてしまつたが、出発時間が遅れてしまつた。

これから先はロルワリン・コーラに沿つて登るもので、道はいよいよ悪くなり、よくもこんな所に道をつけたものだと思う。午後三時五〇分ケルチョ（八七三三呎）という湿地に着いた。大きな山蛭が沢山いるので、一刻も早く立去りたいと思つたが、今朝の出発が遅かつたので予定していた露営地まではとても行けない。仕方がないのでここに泊ることにして、早々寝袋に入り入口を固く締めて眠つたが、一晩中気味の悪い夢に悩まされた。翌日もロルワリン・コーラを遡つた。この谷は実に立派な谷だ。黒部を何倍かにした渓谷が、誰にも知られずにあるということが不思議なような気がした。正午頃、T・ワイア著の『イースト・オヴ・カトマンズ』の中にある写真で見覚えのある丸木橋を渡り、右岸に移つた。この辺は高度もかなりあるのだろう、紅葉が美しくなつてきた。午後三時ついにベエディン

グに着いた。やつと十二日間のキャラバンが終つたのである。ベエディングでロルワリン・コーラは広い川底となる。部落は急な斜面に点在し、その中心はゴンパであり住民の全部がシェルパ族である。

私達はここに休養と前進準備のため二日間滞在した。その間にカトマンズからのクーリーを解雇し、ベエディングのクーリーを新らたに雇い、又さしあたつて必要のないギャチュン・カン用の装備・食糧を残して行くことにした。梱包が開けられて新しい装備が次々と隊員とシェルパ達に支給され、私達は早速セーター、長ズボンに着替えた。ベエディングは標高一二、〇〇〇呎あつたのである。

ガウリ・サンカール

十月一日、出発の朝ゴンパでラマ僧が私達の前途を祝してくれた。怪しげな仏像や器具を次々に取りだして、長々とお経をあげだしたので、出発時間を気にしていた私はいらいらするのだが、シェルパ達や新らしく雇つた三十四名のベエディング・クーリー達は如何にも有難そうに頭をさげていた。そしてラマ僧が酌むチャンを飲んでなかなか御機嫌であつた。そのため、出発は午前一一時三〇分になつてしまつた。その日のコースは、村はずれからベエディングの真上の岩壁に巧みにつけられた道をジグザグに登りつめ、村人達が夏の間ヤクの放牧場にしているゴルンカルカ（一四、〇二五呎）に行くのである。

ここには平坦なところがないので、石造りのカルカの跡に屋根の代りにグランドシートをかぶせて泊ることにした。植物は這松のようなものが生えているのみである。次の二日間は一日中冷雨が降つた。未だモンスーンが終つていないのである。今年は異常な天候ではないかと心配になつて来た。経済的な理由からクーリーを一応ベエディングに帰すことにした。午前一〇時、雨が一時止んだので、残留させてあつたナイケ（彼はラマ僧であつた）の案内で、隊員とリエゾン・オフィサーおよびシェルパ二人が次のキャンプ予定地のタイカ（一五、八〇七呎）まで登つてみた。ゴル

ンカルカから少し登ると雪がでて来た。途中フィックスド・ロープをつけたりして、午後三時一〇分タイカに着いた。ここは氷河の途中で、頭上には氷壁があり、安全なキャンプ地だとは思えなかったので早々に降る。下降中、小さな雪崩に遭い驚いてしまった。その夜は、また雨が激しく降った。十月四日は停滞するつもりだったが、クーリー達がベエディングから登ってきたので午前一一時から登り始めた。昨日ロープを張ったところで、シェルパニが荷物を落したが大事にならずに済んだ。午後二時三〇分タイカに着き天幕を張り、クーリー達はゴルンカルカに降した。

十月五日、朝は快晴でロルワリン谷の対岸の山々――ドルゼパンマやメンルンブルムが美しい。ヒマラヤのこれら五千米級の山々が登られるのは何時のことだろう。午前一〇時、隊員、シェルパ、ナイケの六人で氷河を登ってみる。その時は曇っていたが、氷河上はプラス三四度という暑さであった。いざ氷河の中にはいると、一面にかかったガスのために視界がとざされ、新雪に隠れたクレバスもあって遅々として進めない。そのうちに雪崩が落ちだしたので、登行を中止した。シェルパ達の言では、この氷河はクーンブ氷河の第二アイスフォールと同じ位の悪場だという。強行するのは危険なので、腰を落ちつけて天候の回復を待つことに決めた。

二日後の十月八日は朝から晴れたので、隊員、リエゾン・オフィサー、シェルパ四名、シェルパ・クーリーとで、今日こそは峠まで行ってみることにした。氷河の途中で三隊に分れ、(1)右岸の岩場ぞいのルート、(2)中央のアイスセラックスの多いルート、(3)左側の大きなクレバスのあるルートを偵察してみた。氷河の上部で三隊が合流して、それぞれのルートを検討してみると、(3)のルートが一番良さそうだということになった。一カ所だけ心細いスノーブリッジを渡るところが危険なだけで、その他のクレバスは固定綱で底に降るなり、又は飛び越すなどして処理できるのだった。アイスフォールの悪場を乗り越すと、あとは大した困難もなく午後二時、峠（一八〇〇〇呎）に着いた。この峠はR・ランベールはハ・ディンギィラ、A・グレゴリーはラデエンゴウといっているが、シェルパ達はハデエンゴウという。何れが正しいのか私達には分らなかった。峠に立ち真正面にメンルンツェ、遠くにメンルン氷河をへだて、チ

ョー・オユーをみた時はいささか感慨無量であった。帰途は峠から一時間半でタイカ着いた。天候は回復したのにクーリー達が登って来ない。折悪しくベエディングでお祭りがあったためである。

十月十日、尾石とアン・テンバはクーリーを集めるため下山。加藤、阿部外三名のシェルパは峠に登りキャンプ。次の日私はBC予定地であるメンルン・ポカリ（一六、二〇三呎）を往復した。途中の氷河が割に楽なので安心した。

初めて下降したメンルン盆地は全くの仙境で、本で読んだナンダ・デヴィの内院もかくもあらんかと思う。十月十二日、尾石の連れたクーリー達は早朝ゴルンカルカを立ち、その日のうちに峠を越して午後五時に全員がBCに着いた。隊員が各自別々の天幕を持ち炊事場や食堂天幕も樹立されて、久し振りに顔を合せてみると、長かった峠越えのことが思い出されるのだった。

翌日、サーブは下山するベエディング・クーリー達への支払や、BCの補強で忙しかったので、私とシェルパのクンガ・ノルブの二人だけでガウリ・サンカールの東面をみるためにBCの東にある尾根に登ってみた。

だが、そこからみたガウリ・サンカールの東面は、短いアイス・フォールの奥に九〇〇〇呎もの岩壁をみせていて希望のない光景であった。一九五四年に訪れたR・ランベールの報告で東面に望みのないことは分っていたが、今、自分の目で確めてみると矢張り相当のショックであった。さらにロンシャル谷を俯瞰すると、そこには氷河もなく広い河原で、ところどころにヤクの放牧が双眼鏡で認められた。夕食後、急に冷え込んできた食堂天幕の中でサーブ達と今後の方針について打合せ、次の結論を得た。

(1)ガウリ・サンカールの東面と東北稜は登攀不可能と認める。（R・ランベールの報告確認。）

(2)ランベールが報告書の中で「登れるかも知れない」と書いている北西稜を調査する。ただし、この稜はチベット領のロンシャルチューに深く落ち込んでいるので、私達はロンシャルチューまで行かないで対斜面のできるだけ高い処から偵察する。（この案を実行するため、メンルンツェの北側に行った。）

(3)ガウリ・サンカールの偵察が終つたら、BCの北側の未登峰ハーカン(二一、九七〇呎)を試登後、メンルン・ラを越してソロ・クーンブに向う。(ハーカンとはシェルパ名で、A・グレゴリーは Lundartsubugo といつている。)

十月十五日〜六日はロンシャル谷とメンルンツェの東側のコルを偵察した。ガウリ・サンカールの北西稜を調べるためには、メンルンツェの北側のできるだけ高所に登らなければならないと決心はしたものの、すぐさまロンシャル谷に下降するのは躊躇するものがあつた。私は、ロンシャル谷はチベット領ではないと確信していたが、中共軍が駐屯しているロンシャルチューから五〜六時間で簡単に登つてこられるのが不安であつた。安全策としては、メンルンツェを一周してBCに帰ることだつた。幸い両日の偵察によつてロンシャル谷に人影のないこと、メンルンツェの東のコルが越せそうなことが分つた。

十月十七日は夜来の大雪がきれいにあがつて物凄い快晴になつたせいか、夜が明けると同時にメンルンツェ、ハーカンなど周囲の山の側壁から落ちる雪崩がすばらしかつた。できるだけ軽装にしたが、シェルパなど八〇ポンドを越す荷物になつたので谷の真中を流れる小川を徒渉する時など大変だつた。その日はロンシャル谷の中央で露営して、次の日は一日中メンルンツェの山腹を歩き、夕方その西稜の一四、三八八呎の地点にキャンプした。途中のルートからは中共軍のいるトリンタン部落がよくみえるので気味が悪かつたが、今夜の泊り場は尾根の陰になつているので、安心して豪勢なファイヤーを楽しむことができた。

次の日は西稜を越してメンルンチューの上流に降りたため、露営地の上の小さなコルを越えるつもりでいたが、さて一寸した岩登りをしてコルに登つてみると、向う側がずんと切れていて降りることができない。もし、これが降りられないと、私達の行動はロンシャルチューとメンルンチューの合流点まで迂回せねばならぬ。そうなると、中共軍の目につくかもしれないというので、L・Oもシェルパも大変な心配のようすなので、もう一日滞在して降り口をさがしてみることにした。シェルパ達の大活動でやつと可能な降り口を見付けたが、昼頃になつてしまつたので予定ど

おり滞在して、サーブ達は西稜を出来るだけ高くまで登ってみることにした。久し振りにロープをつけて足場をきざんだり、岩登りをしたりして一六、〇三八呎まで登った。

これから先は氷のオーバーハングなどがあって、遊び半分ではやれないところだった。周囲のどこを見ても素晴らしい眺めであった。特にチベットの名も知らない山々の果てに、一きわ大きく見えたゴサインターンには引きつけられるようであった。しかしガウリ・サンカールは依然として、「ノー・ルート」であった。今夜も豪勢なファイヤーを囲み、シェルパ達の歌がはずんだ。

十月二十日、昨日シェルパ達が偵察してくれたルートをメンルンチューの上流に降りた。それはキャンプ地の真上の岩尾根を越えて、危つかしい岩壁を巻いて降りるものであった。氷河といっても、この辺はゴロタ石の河原と変らない。何度目かのモレーンの丘に立った時、突然下方にエメラルド色をした大きな氷河湖を発見した。それは、今迄にたびたび見た氷河湖とは桁違いに大きく美しいものであった。対岸はところどころに倭樹と芝生の大斜面で、カモシカが五十頭以上も遊んでいた。私達のキャンプサイトは、この池の附近であった。仙境で眠れることを感謝しながら歩いていると、私は一枚の紙切れと空缶を拾った。それは、中共軍の伝単と軍用缶づめの空缶であった。ロマンティックな夢も一遍に吹き飛んでしまった。次の日は朝から雪が降っているので出発が遅くなって午前九時三〇分に歩きだした。一時間も登ると氷河になったので荷物を置いて偵察に行くことにした。サーブ三人とシェルパ二人でメンルンツェの北壁の直下を巻いて、BC出発前、南から偵察しておいたコルを見に行った。雪が激しく降りだして視界もきかなかったので雪崩を心配して早々に引きあげ、氷河の中央の安全なところ（一五,三六八呎）で休息していると北壁からは物凄い雪崩が落ち始めた。

二十二日から二十三日にかけて大雪が降った。露営地は安全なところなのでいいようなものの、実に多くの雪崩が出ている。夜通しどこかで雪崩の豪音が聞えた。メンルンツェの北側は記録がないようである。恐らく登山者として

は、私達が最初ではあるまいか。氷河から殆んど垂直な六〇〇〇呎以上の氷と岩の壁で、途中に氷のオーバーハングなどがある。これに較べると南壁の方がまだ良いくらいである。

十月二十三日、昨夜は最低マイナス十七度であったせいか、天幕の中に霜が降りている。昨夜のことを忘れたような快晴である。私達はこの機会を利用して、ガウリ・サンカールの北西稜と、メンルンツェを南側に越えるコルの偵察を一挙にしなければならない。何故ならば、シェルパ・クーリー達の食糧が不足してきたからであった。BCを出る時、十日分の食糧を携行するように命じてあったのに、荷物が重かったせいか、彼等は一週間分しか持ってこなかったのである。今更彼等に文句をいっても仕方がないので、今日はサーブ達は二つに分れて行動することにした。私はシェルパ二人を連れて露営地の北にあるタサンピークの尾根に登って、ガウリ・サンカールの北西稜を偵察するため双眼鏡と望遠レンズをつけたカメラを持って出発した。(タサンピークとは私達が便宜上名前をつけた二四、〇〇〇呎位の無名峰である。)

午後一時に一六、五〇〇〇呎の尾根に達し、充分に目的を達することができた。即ち北西尾根は確かに登路として可能である。それに取り付くためには、北稜と北西稜の間の氷河からは最後が壁になっていて登れない。どうしてもロンシャルチューまで降りて、北西尾根の末端あたりから登らなければならない。結局、ガウリ・サンカールに登れるものは今のところ中共かソ連の遠征隊以外にないということになる。私はすっかり意気銷沈して天幕に帰った。一方、阿部サーブ他は氷河の中で大いにがんばってコルの中復まで登ったが、それから上は氷壁になっていて、私達の隊力では登れないことが分り、これもがっかりして帰って来た。なお、彼等の偵察によると、氷河はこの少し先で三つに分れ、真北に廻っている氷河を登れば、低いコルを越してどこかへ(勿論チベット領)行けそうであるが、残りの二つの氷河をつめても最後は高い氷壁になっていて行き詰りだそうである。

十月二十四日、快晴。再び来ることのない土地と思えば名残り惜しく、何度も振り返りながら歩く。煙草と食糧が

なくなつて帰心矢の如しというのか、往路五日間もかかつた行程を二日で飛ばして、十月二十五日の夕方BCに着いた。留守中に雪が降つて荒涼としていた。夕食にスープ、ボイルドチキン、サーディン、サヤ豆の煮付、白米、それにデザートに白桃とウィスキーを入れた紅茶をとつてもまだ寒くて憂鬱だつたが、天幕に帰つて乾いた下着と取り替え、寝袋の中に入つたら暖かくなつて独居とパイプを楽しめる境地となつた。今夜は久し振りにBCに帰つたせいか各天幕に遅くまで灯がついていて、ラジオがセイロンのジャズなどをやつていた。

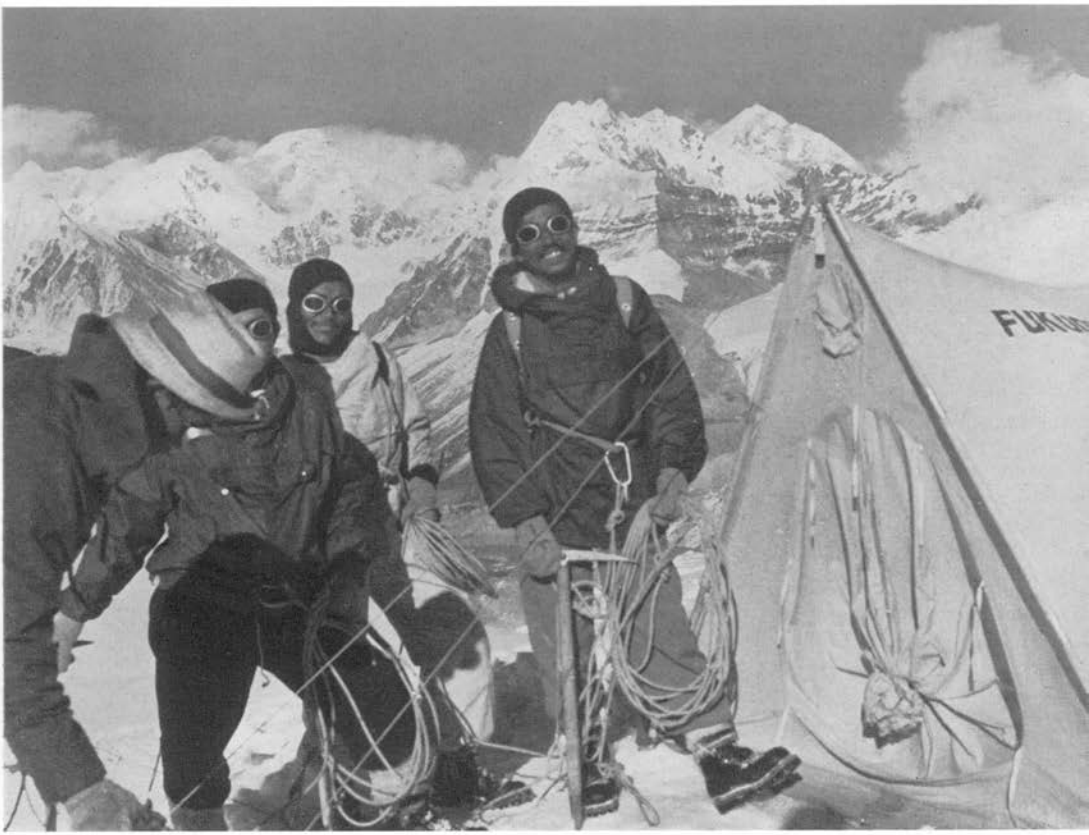
ハーカン

ガウリ・サンカールにネガティブな結論がでたので、私達は休む閑もなくハーカンの試登をすることにした。ハーカンは前にも述べたように、BC東南の未登峰（二一、九七〇呎）でガウリ・サンカールやメンルンツェと対照的な全山真白な氷の山であつた。

十月二十六日、私と尾石サーブおよびシェルパ二名でBC附近のモレーンの丘に登つて偵察してみたところ、ハーカンを攻撃するためにはBCをドウド・ポカリに移動させねば遠すぎると思つたので、二十八日まで全員がボッカに従事し以後は前進キャンプに行く組とボッカをする組とに分けて能率をあげた。私は二十八日の午後ドウド・ポカリの新BCに移動したが、なかなか気分の良いところであつた。この池もメンルン・ポカリと同様に神聖なものらしく、池の岸には経文を封じた素焼の瓶が沢山置いてあつた。

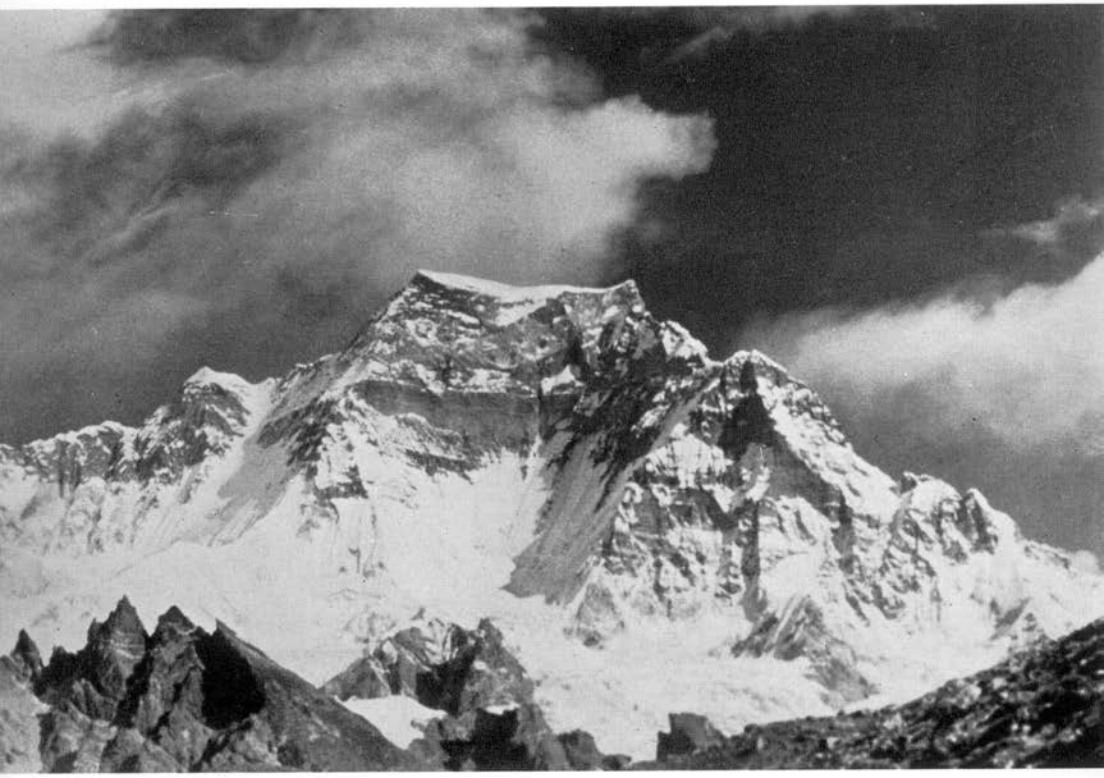
十月二十九日、阿部、尾石サーブとアン・テンバはハーカンの氷河上にC1を樹立し、そこからハーカン・ラに登つて、その後の偵察をしてみることになつた。ハーカン・ラとはハーカンとリピムツェ（二〇、八二〇呎）間のコル（一八、九〇〇呎）で一九五五年グレゴリーが越えたことがあつた。ハーカン攻略はこのコルから上の痩せ細つた尾根を、如何に処理するかに懸つていた。次の日、私はBCで朝から双眼鏡でハーカン・ラ直下のアイスフォールを眺めていた。生憎

Cho-Oyu ↓ Menlung La ↓ Pangbuk ↓



ハデンギイ・ラの前進キャンプとチョー・オユー

The advace-camp on Hadengi La. Cho-Oyu (8153 m) and Pangbuk (6561 m) in the background. (Left to right) Ang Dawa-3, M. Abe, Kilken, H. Katô (leader).



ゴジュンバ氷河からギャチュン・カンを望む

Gyachung Kang (7897 m) as seen from the Ngojumba Glacier.

とBCからC1はみえないのである。余りに遅いので事故でもあったのかと心配になりだした頃（午後一時三〇分）、三人の姿が視界に入ってきてその後は、ぐんぐん登って、午後三時三〇分頃にはコルに達したようであった。後で聞いたところによると、平坦な氷河上では、昨日の午後に降った新雪が膝くらいまで積っていたのであった。コルから上部のルートが可能なものであることを祈って、その夜はなかなか寝つかれなかった。

十月三十一日、C1に登るつもりで荷物を整理していたら、思いがけず二人のチベット人が来訪した。用件を聞くと、放牧していたヤクが逃げたので捜索に来たのだという。お茶やお菓子を出して話をしているところへ、C1のアン・テンバが阿部サーブの手紙を持って降りてきた。それによると「コルには適当なキャンプサイトがあるが、それから上部の尾根はとても悪い。荷物をあげることは困難だからコルにC2を置いて、コルからラッシュでやる以外に方法はないと思う。とにかく隊長自身がコルまで登って断を下してもらいたい」という内容であった。大分食指が動いて、すぐにでも登ってみたいと思ったが、前記のチベット人の話によると中共軍が近くにいるから余り長居はしない方がよいということである。また阿部サーブの手紙にもコルから上のルートが余り見込みがなさそうに書いてあったので、この辺でハーカン否ガウリ・サンカール地域に見切りをつけて、ギャチュン・カンに向う方が利口かもしれない。それで阿部サーブには、以上のことを書いて(1)ハーカンは中止する。(2)ベエディング・クーリーを集めるためにキルケン外二名を下山させる（彼は十一月五～六日頃クーリーを連れて帰ってくる）。(3)私は明日から二日間の予定で、L・O、シェルパ二名を連れてメンルン・ラを偵察する、と連絡した。

キルケン達をベエディングにやる際、私は溜っていた手紙の束を渡して、ベエディングでポストランナーを仕立ててカトマンズに送るように指示した。この十日間、私はカトマンズのビナヤ氏が出してくれることになっているポストランナーの到着を待っていたが、それは遂に姿をみせなかった。後で判ったことだが、このポストランナーは予定通り十月二十五日にベエディングに着いたものの、新雪におおわれたハディンギィ・ラを越すことができないまま、

ゴンパに手紙を置いてカトマンズに帰還してしまったのである。

実に無責任な話で、そんなこととは知らず待っていた私も呑気すぎたと思う。しかし私がキルケンに持たせた手紙が、手ぶらでカトマンズに帰ったポストランナーが不用意に喋ったことから、「全員が遭難した」ということになって世間をさわがした事件に対して、ピリオドを打つことになろうとは知るよしもなかった。

十一月一日、私はL・O、クンガ・ノルブおよびシェルパ・クーリー三名を連れてメンルン・ラに向った。BCからだらだら登るとメンルン氷河である。ガウリ・サンカール地域で最大の氷河だけあって、さすがにセラックスやクレバスは今までの何れの氷河よりも大きい。A・グレゴリーの地図と対称しながら歩き、この辺は確かな測量だと感心した。午後二時三〇分、リピムツェ直下の氷河に露営して、二人のシェルパ・クーリーをBCに帰した。頭上はリピムツェの氷壁で附近はデブリで一杯であるが、キャンプ地はモレーンの蔭になっているので安全だということに決めた。氷河が移動するのか、グラウンドシートの下で時々妙な音がする。翌日は朝早く出発して、氷河の中央を歩いた。この辺には新雪が三呎も積っていて、オーバーシューを持参しなかったことを後悔した。セラックスを避けて歩いているうちに、ルートを間違えてパンブック(二一、七五〇呎)に登りかけてしまった。中腹からメンルン・ラのルートがよくみえるので、ここから偵察をすることにした。パンブックを午後二時三〇分まで登り、途中でL・Oがへたばったので引き返してキャンプに帰ると、阿部サーブの手紙が来ていて彼等も明日ここまで登って来るということだった。

チベット人来襲

十一月四日、私はパンブックを阿部、尾石サーブ達にまかせて、L・O、クンガ・ノルブおよびシェルパ・クーリー一名を連れてBCに降ることにした。食糧も心細くなっていたし、二〜三日後に到着するはずのベエディング・クーリーを迎えて転進準備をしなければならなかったためである。メンルン氷河の途中で、BCに留守番をさせておい

たシェルパ・クーリー二名が食糧を荷上げしているのに会った。私達は氷河の中央を歩き、彼等は右岸を通っていたため、辛じてヤッホーをかわしたのみであった。彼等はリピムツェ直下のキャンプが食糧不足の頃だと気付いて、自発的に荷上げしていたのだろう。午後二時、BC近くのモレーン地帯まで降りて来た時、シェルパ・クーリーが、ポニー（チベット馬は日本馬に較べて小さい）に乗って、こちらにやって来る二人のチベット人を発見した。シェルパ達は顔色を変えてバックしましようといったが、今更逃げるわけにもいかない。度胸をきめて、チベット人と一緒にBCに降りてみた。すると、そこには彼等を含めて九名のチベット人が食堂天幕から私達の炊事道具を持ち出して、茶を飲んでいる最中であった。彼等は一時間位前に到着したと語った。留守番に残しておいたシェルパ・クーリー二名は、既に荷上げのため出発していてBCは全く無人だったのである。

チベット人は長銃、短銃、長剣（チベット剣）などで全員武装していて、私は彼等に彼り巻かれてしまった。早速、英語↓↑ネパール語↓↑チベット語という方法で会談に移った。頭目の五十年配の男が「自分達は中共軍の命令できた。ここは中共の領土だから遠征隊の全荷物を没収し隊員とL・Oを中共軍のところに連行する」といった。私は彼に、ここは過去にスイスや英国の遠征隊も来たことがあって、決して中共領ではないことを強調したが、そんな話の分る相手ではなかった。

幸い頭目の男はさすがに落ち付いていて、急に暴力を振う様子もなかったが、手下の若い者の中には、随分気の早いのがいたので油断がならなかった。シェルパ達には今の状態が非常に危険であるらしく、全く意気沮喪していたが、L・Oは実に落ち付いたもので、私の意志を完全にチベット人に伝えてくれたのには、とても二十一才の大学生とは思えなかった、私はこの時ほどL・Oが頼もしくみえたことはなかった。チベット人が私の話をなかなか了解してくれそうにもないので、私も腹を決めて、中共軍のところに行って大いに談じ込んでやろうと決心しかけていると、L・Oとシェルパが私を物蔭に呼んで次の様なことをいった。(1)彼等チベット人が果して中共軍の命令で来たかどうか怪

しいものだ。何故なら頭目はシーガツウインラという男で、ロンシャル地方の名高い悪党で、その外は彼の子分達である。(2)仮りに中共軍の命令で来たとしても、彼等のことだから、連行の途中で私達を殺して物を盗ったうえで、中共軍には遠征隊は逃亡してしまったと報告するだろう。(3)無事に中共軍のところに連行されたとしても、ロンシャルチューに駐屯している部隊はとても程度の低い兵隊だから、有無をいわせず投獄するか銃殺してしまうだろう。

私は黙って聞いていたが何れも可能性のあることだと思った。では如何にしてこの場を切り抜けるかと相談した結果、金品をやって話をつけようということになった。シェルパ達の話では一九五五年、A・グレゴリーも私達と同じような目にあって五〇〇ルピーで難を逃れたという。

さて、以上の方針で頭目と交渉してみると、金で解決しても良いという素振りをみせ、金額は一人当り二五〇ルピーの九人分合計二二五〇ルピーを要求した。それは高すぎるというわけで八時間の交渉の末、値切りに値切って、ようやく五〇〇ルピーで手を打った。いよいよ金を渡す時になって気が付くと、隊の金は会計係の尾石サーブが保管しているので、この場にはないのである。これは困ったことになったと思っていると、頭目が金袋を私の前に出してきたのには驚いてしまった。彼等は無人のBCにきて、私達が帰るまでに一応全荷物をチェックしたらしい。そして、尾石サーブが私用トランクの中に入れて残置していた隊費を一応全部取りあげ、今、私の前に出してきたわけである。頭目は金袋を私に返す時「金には手をつけていないから一応改めてみよ」とタンカを切ったが、金袋の中に幾ら入っていたか知らない私には改めようがなかったのである。(後日、クムジュンで尾石サーブが改めてみて、私が頭目に渡した五〇〇ルピーの外に約二〇〇〇ルピー亡くなっていることが判った。)

頭目は私から金を受け取ると、今度は自分の懐中から金を取り出して、私達六名(昼間荷上げしていたシェルパ・クーリーも帰幕していた)に一ルピーずつ渡した。奇妙なこともあるものだと思って訳を聞くと、どちらも金を受けとったのでこれで相子だという。彼等らしい論理である。その晩彼等はBCに泊ることになった。夜襲でもかけられ

はしないかと、シェルパ達が怖れていたが、幸い無事であつた。もし彼等が中共軍の命令で来ていた場合、その報告に不満をもつて中共軍自身が登つて来ると、今度は助からないので今夜中にどうしてもエスケープの準備を完了しておかなければならなかつた。L・Oやシェルパがその仕事をしているかたわらで、私は阿部サーブに手紙を書いた。

「チベット人が来たので、加藤隊は再びハディンギィ・ラを越えて、キルケンの率いるクーリー隊に合流（現在ベエディングからBCに向つている）、一たんベエディングに引き返し、テシ・ラプチャ（一九、一〇〇呎）を越えてクムジュンに転進する。阿部隊は現在滞在しているパンブックのキャンプからBCに下山しないで、そのままメンルン・ラ（一八、八一〇呎）を越えてクムジュンに向われたし。同地で再会しよう。」

十一月五日、チベット人と別れた私達は昨夜のうちに仕分けした装備、食糧および撮影済のフィルム等を持てるだけ持つて中共軍の幻影に脅えながらハディンギィ・ラの氷河を登つた。その日は氷河の途中で露営、翌日は一日中双眼鏡でBCを監視して、残してきた荷物の回収策を考えた。

十一月六日、峠に立つと向う側からキルケンの率いるクーリー部隊が登つてきていた。キルケンは思いがけない私達の出現に、しばらくは声も出ない様子だつた。彼はベエディングでC・コーガンの遭難を知り、不安になつていたので、てつきり私達の誰かがやられたに相違ないと思つたらしい。

私が事情を話して、彼にBCに残置してある荷物の回収を依頼すると、調子はずれの声でイエス・サーと云つて、私の双眼鏡とナイフを貸してくれといつた。ここでキルケンと別れて私達はその日のうちにゴルンカルカまで下山した。翌日、キルケンはBCの荷物を全部回収したうえ、クーリー三名を阿部サーブに追及させるという気のきいた手配をして、凱旋将軍のような足どりでゴルンカルカに帰還した。

一方、パンブックに登ろうとしていた阿部、尾石サーブとアン・テンバおよびアン・ダワの一行は、順調に登行を続け十一月五日にはC2（二〇、二三〇呎）を樹立し、次の日には尾石サーブとアン・テンバが頂上にアタックするはず

だつた。そこにBCから伝令が到着したので登頂をあきらめ、急いで荷物を整理してメンルン・ラを越えた。アタック用のわずかな食糧で重い荷物を背負い峠を越すのは辛かつた。

途中でBCから追及してきたベエディング・クーリーと一緒になつて、幾分楽になつたけれど、十一月十二日クムジュンに着いた時は空腹で正に倒れる直前だつた。

テシ・ラプチャ越え

十一月九日午前一〇時、ゴルンカルカからナ・ガオンに向つた（ガオンとは「村」の意味でベエディングの夏の村である）。山腹の道を五時間アイスアックスだけ持つて、ぶらぶらクーリー隊について行くのみ。空はあくまで青くガウリ・サンカールがするどい姿で見送つていた。ナ・ガオンでは民家に泊つた。クーリーに雇つた娘の家であつた。翌日、一九五五年A・グレゴリーが泊つたというゴルジェを過ぎると、もうそこは氷河で、凍つた大きな氷河湖があつた。道は右岸のモレーンの上を通るのであるが、迫つている右手の岩壁から絶えず落石があつて、非常に危険である。新雪が降れば雪崩の巣であろう。とにかく、この辺の景色は凄惨なものであつた。午後三時、大きな岩の下に天幕を張つた。といつてもサーブ用の天幕がかろうじて一張樹立されただけである。シェルパ達は場所がないので附近の岩の下でビバークした。午後八時、ラモバガールの警官が到着した。私達の被害調べであつた。今朝シミガオンを発つてきたということで、ヒマラヤのお巡りさんも御苦労なことだ。

十一月十一日、午前九時三〇分出発。昨日にまして落石の多い道である。真正面に見える二二、〇〇〇呎位の真白な山に、ルートがあるだろうかなどと考えながら歩く。正午すぎ氷河の曲り角に来て、シェルパから「峠の道はこれだ」と頭上の岩壁をさされてびつくりした。日本なら初心者は当然ロープをつけるべき岩場である。こんなところをクーリー達はロープもつけず重荷をかついで登るのである。岩壁を少し登つたところのラチトと呼ばれる一寸したテ

ラスに露営した。今日はヒマラヤの峠越えのきびしさを改めて見なおす感があつた。

十一月十二日、午前九時三〇分、三～四人が先発する。露営地の真上の岩壁にたくみに作られた道を登るのであるから、先発が登つたあとは、暫く落石があつて登れない。結局グループ毎に登らねばならぬので、えらく時間がかかる。やつと困難な岩登りをすませて岩壁の頂上に立つ。風がとてもひどいが、初めて見るテシ・ラプチャとトロンボー氷河が印象的であつた。頂上から岩壁を巻きながら少し降りるとタイカという所である。高い岩壁の真下で落石の不安はあつたが、天幕を一張りして私とL・Oが泊る。シェルパ達は場所がないので今日もビバークである。

十一月十三日、午前八時三〇分、露営地の急斜面を降りてトロンボー氷河に降り立つた。連日の快晴で新雪がすつかり消えて、氷河には青氷が出ている。トロンボー氷河もこの辺になると、坦々とした氷原である。氷河の真中から見ると、氷河の両側にそびえている山々には登れそうなのがかなりあるが、それらは既に一九五五年A・グレゴリーの一行に登られてしまつていた。先ず最初にこの地域にキャンプを進めたグレゴリーの頭の良さに、今さらながら感心した。

テシ・ラプチャの登りにかかつてクランポンをつけた。大きなクレバスが口をあけていたが、登路はこれをさけて登れるからロープはつけなかつた。途中何度も休息し、殊に峠近くではクーリー達のためにステップカッティングをせねばならなかつたので、遅々として進めなかつた。午後〇時三〇分、峠を越えた。想像していた所とは全く違つて狭い峠であつた。その上、風が強くて、シェルパニ達には男のクーリーが各々付き添つてやらねばならぬほどであつた。峠の向う側の氷河も新雪がなくてクランポンが快適にきいた。間もなくガレになり、いやという程モレーンを歩き、くたくたになつてタンボというタミの夏村に着いて泊る。翌日は露営地から少し降りた所で、クムジュンのシェルパが送つてくれた馬に乗つた。悪路を乗馬で行くのは気味が悪かつたが、折角の好意を無にするのも悪いと思つて、やせがまんをしているものの、楽ではなかつた。タミではキルケンの家で長い間休息して、卵、ジャガイモ、チ

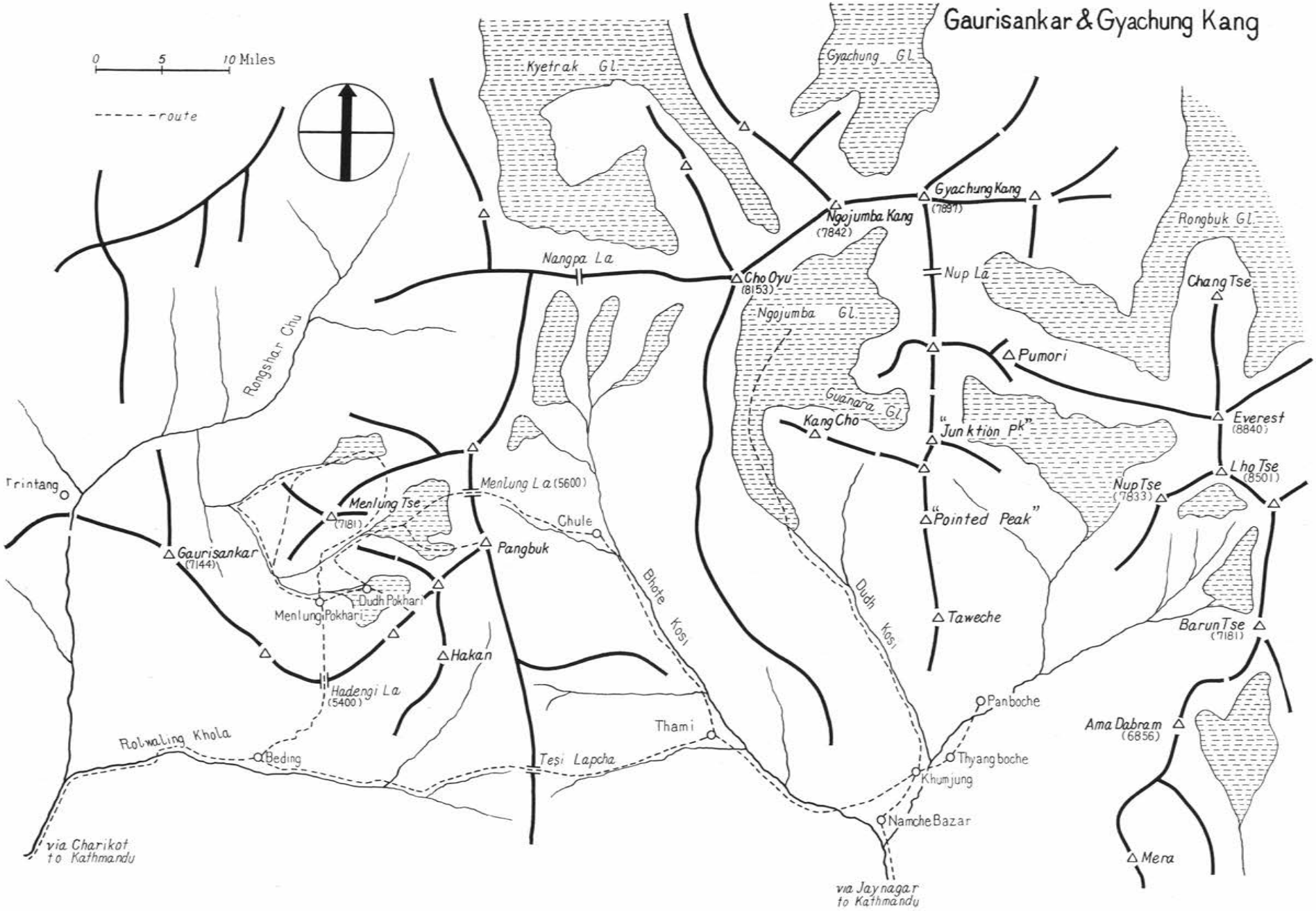
ベット茶をたらふくとつた。正午、乗馬で出発。タミからクムジュンに行く高原のような道は、ロルワリンの蔭鬱な峡谷を通つてきた私にとつて、非常に明るく、いよいよソロ・クーンブに来たという感じが強かつた。夕方、一寸した峠を登つて目の下にシェルパの国クムジュンを眺めた時、部落の中央にオレンジ色の天幕が三張りくつきりと立つているのを見た。

ガウリ・サンカールの旅もこれで終つたのである。

追　記

編集者から与えられた紙数が大分超過したが、その後の行動を簡単に述べると次の通りである。

クムジュンに四、五日滞在して休養をとり、その間に十一月十五日チャンボチェ僧院の年に一度というお祭りを見に行つたりした。たまたま、その晩、在カトマンズ遠山一郎氏から手紙が来て、私達が遭難したということで、地元は勿論、日本でも大変心配されたことを知つた。これには私達の方も驚いてしまつて、すぐにも帰還せねばなるまいと思つたが、遠山氏の手紙に依れば、私達が無事であるということが既に判明して、実はそのお祝いの文面だつたので、すぐには帰る必要もないように思われた。そこで遠山氏には当方の行動について詳細なレポートを送り、私達は第二の目標ギャチュン・カンの調査に向うことにした。ガウリ・サンカールにおいて予定以上の日時を費し、又チベット人に襲われたりして財政的にも不如意であつたので、当初予期したとおりの偵察はできなかつた。クムジュンから四日間ドゥド・コシを遡り、十一月二十三日、ゴジュンバ氷河中の岩峰（一七、八二〇呎）から目的を達することができた。この岩峰からはチョー・オユー、エヴェレスト、ローツェ、マカルー等のジャイアンツを近くに眺め、山に登る者の幸福を一身に集めたような感じがした。目的のギャチュン・カンのルートが手強わそうなのには驚いてしまつたが、これとて精鋭をすぐつて攻めれば不可能ではあるまいと思つた。


Gaurisankar & Gyachung Kang
0 5 10 Miles
route
Kyetrak Gl.
Gyachung Gl.
Gyachung Kang
(7891)
Ngojumba Kang
(7842)
Rongbuk Gl.
Nangpa La
Cho Oyu
(8153)
Nup La
Chang Tse
Ngojumba Gl.
Pumori
Rongshar Chu
Guanara Gl.
Kang Cho
"Junktion Pk"
Everest
(8840)
Lho Tse
(8501)
Nup Tse
(7833)
Trintang
Menlung La (5600)
Menlung Tse
(7181)
Chule
"Pointed Peak"
Gaurisankar
(7144)
Pangbuk
Bhote Kosi
Dudh Kosi
Dudh Pokhari
Menlung Pokhari
Taweche
Barun Tse
(7181)
Hakan
Hadengi La
(5400)
Panboche
Ama Dabram
(6856)
Thami
Rolwaling Khola
Beding
Tesi Lapcha
Thyangboche
Khumjung
Namche Bazar
via Charikot
to Kathmandu
Mera
via Jaynagar
to Kathmandu

十一月二十七日クムジュンを発ち、エヴェレスト以来有名な道を十六日間でカトマンズに到着した。カトマンズには八日間滞在して「遭難事件」で御迷惑をかけた各方面に挨拶をし、十二月十七日、ニューデリー日本大使館の胆入りで在カトマンズの政府関係者、英・米・印度大使館関係者、各新聞社等約百名をロイヤル・ホテルに招待して、正式にお礼を申し上げる機会を持つた。その時、E・ヒラリー卿やJ・O・M・ロバーツ大佐が出席されたことも、山に登る者として嬉しいことであつた。

冬のソロ・クーンブ

山崎英雄
大塚博美

一九五九年十二月から六〇年二月にかけて冬のソロ・クーンブ地方を訪れる機会に恵まれた。それは所謂雪男を求めての調査旅行であつたが、今シーズンは稀に見る当地の暖冬異変に禍いされて、雪は遂に一回も降らず、足跡を発見することも出来ずに終つてしまつた。

私達が特に厳冬期を選んだのは、雪男を含めて冬眠しない動物は、当然雪と寒さを敬遠して低い所に食を求めて降りてくると思つたからであつた。

私達一行六名は、十一月十日に日本を出発した。カルカッタ及びカトマンズで通関、荷物の輸送、シェルパの問題などに案外時間が掛つて、全員がキャラバンの出発地ダーラン・バザールに揃つたのは十二月一日になつていた。シェルパの問題などは詳しく述べるべきだが、紙面の都合上他の機会にゆずらねばならない。それにシェルパの問題は、猫の目のように常に変り、私達が下山した時には情勢は全く往きと変つていた。

今回特にシェルパのことで頭を悩ましたのは、ガルツェン氏のことであつた。今回のような特殊な調査には、雪男

に理解と熱心さを持つ人でなければならなかつた。その点に於てもガルツェン氏にはどうしても参加して欲しかつた。然しカトマンズに先行した隊長等の大変な努力によつて、最後にはサーダーでなく、隊員として参加することをネパール政府に認めさせ、ここに七人からなる国際探検隊が出来上つたわけである。

ナムチェ・バザールに行くには、カトマンズから、ビラトナガール及びジャイナガールからの三つのルートがある。実はキャラバンが出発してから確かめられたわけだが、どのコースも同じ日数がかかることがわかつた次第であつた。私達は全く迂闊な話だが、ビラトナガールからの道が最短ルートであると思いこみ、荷物もここに直送する予定をたてていた。しかし結局、連絡の行き違いから荷物は直送出来ず、カトマンズ経由という日数と経費とに、大変な無駄をしてしまつた。

カトマンズからビラトナガール迄は、飛行機で約一時間、ロイヤル・ネパール・エアラインがエヴェレストラインと自慢するだけあつて、ヒマラヤの連山を眺めるには全くいいコースであつた。それに十一月末のヒマラヤの空は、あくまでも澄み切つて、アンナプルナからカンチェンジュンガまでを次々と手にとるように見ることが出来た。

草原のようなビラトナガールの飛行場につき、ここから、約六十キロ奥のダーラン・バザール迄は、二年前に完成した立派な補装道路が通じている。このダーラン・バザールには英国の士官を含む印度軍が駐屯している。道のりの前半はまだインド平原の続きで、道の両側は一面の水田が続くが、最後になつてタライのジャングルをつき抜ける。補装道路は黒い森林を切り開き、ジープは路上の猿の群を驚かせながら約三十分で通り抜けると、平地はつきて山にかかりすぐダーラン・バザールの町につく。先発隊のキャンプは町はずれの河原で、待ちわびた百余名のポーター達がテントを囲んでいた。

十二月二日、漸く待ちに待つたキャラバン出発の日である。ネパール政府とのラチのあかぬ交渉から開放されて、今日から歩ける隊員の顔も明るく、それに一週間も出発を待たされたポーター達も今日から仕事にありついて、一同張切つて出発した。然し出発したものの、すぐ一三〇〇メートルのサグリ・バンジャンの急な登りで大汗をかき、すつかりのびてしまつた。ヒマラヤの旅は例によつて、登つては下り、下つては登りの繰り返しなのである。翌日は最後の文明の地ダンクータを過ぎて、やつとキャラバンの調子が出て来た。

尾根上にあるダンクータの町をこしても、なお広々とした尾根の道は続いている。その日ある峠にさしかかつた時、突如遥か遠くに三角型に輝く白い山が現れた。マカルーであつた。エヴェレスト及びその周辺の山々は、マカルーとそれに続く左の山々に隠れて、こちら側からは見えない。あの向う側にある目的地に行くには、幾重にも重なつた前山をひとつひとつ越えて行かねばならないのだ。

いい道が尾根の草原を通つたり、部落を抜けたり、菜の花の咲くのどかな畑を横切つて私達はのんびりと歩いた。人通りも多く、ダーラン・バザールの英国の士官の遠足の人達にも会つた。日中の風の無い時は半袖、半ズボンで歩き、日が落ちるとセーターが欲しい程冷えて来る。キャラバンは毎朝七時半から八時の間に出発して、夕方は三時から四時までに最後のポーターが泊場に着かないと暗くなつてしまう。一日の行程は春に比べると大分縮めなければならない。このコースは夏に小パーティなら十三日間の行程とのことである。

ネパールの秋景色を楽しみにしていたが、南部には日本のような紅葉というものが無いらしい。木の一部が多少色づいているものもあるが、全体として三、四月頃の景色と殆んど変らない。水田も低い所では刈込前の所と、刈込み中の所が半々位である。

最初のうちは、道々パイナップル、ミカン、バナナを安く手に入れることも出来、背中に山と積んだパイナップルをダーランに運ぶ人達と随分行き違つた。

ダーランで雇つた私達のポーターはいかにも逞ましく、四十キロ近い荷物も軽々と慣れた足どりで運んでくれる。道々ポーター達は、畑仕事の女達と歌のやりとりをしながら進む。

女「お前達は一体どこに行くのですか」

ポーター「どこに行くのかわからないよ。サーブだけが知つている。私は重い荷物をもつてひたすらに歩くだけさ」

こんな意味だとリエゾンが教えてくれた。

ダーランから三日目、道は尾根より下りに下つてアルンの川沿いに北上する。チベットに源を発するこの川の水量は多く、河原も実に広い。然し谷は大きく開け、むしろヒマラヤらしくない穏やかなものである。道は左岸の広い河原や崖の中腹についているが、トムリンタールの辺りでは大きなテラスの上にでる。この附近は殊に広々とした所で、テラスの上に水田や畑もあるが、水の不自由な所である。アルン川に下つてまる二日、広い流れに沿つて北上してから対岸に渡る。渡場では川幅は約百メートル、流れはここは急であるが、船頭は巧みに丸木船をあやつる。全部のポーターが渡り終えるのに舟二隻で約三時間を費した。

アルン川を渡つて三日目、ソロ地区に入るサルパ峠を越す日である。標高三千メートルを越えるこの峠は、往きのキャラバン最大の登りであつた。十二月に入ると何時雪がくるかも知れない。裸同然の低地のポーターが寒さに参ることを心配したが、この日は素適な快晴に恵まれた。峠からは眺望は、右手からの大きな尾根にさえぎられて、ドウド・コシの西のヌンブール山塊しか見られなかつた。この峠を越すともうソロで、峠からは大きなチョルテンが見え始め、家の作りも人も急に変つてしまう。標高が高くなると針葉樹林となり、北斜面の濶葉樹はすつかり葉を落として一足とびに晩秋の景観を呈する。この峠も、他の大きな峠でも、峠の南側はいずれも石南花(しやくなげ)の大木の密林があり、春の花盛りはさぞ見事かと思われる。

この峠をこすと朝夕はめつきり冷えこみ、ダーランからのポーターは遂に寒さに悲鳴をあげて、大部分が土地の人

と交替した。ソロに入つてもシェルパは比較的高い所に住んでおり、低い所には南からネパーリが入り込んでいる。ソロのシェルパは雪の山では殆んど働くことが出来無いという話である。

サルパ峠をこしても、ドゥド・コシの本流に達するには、まだ二、三の高い峠を越さねばならない。峠から四日目に最後の峠をこして、ドゥド・コシの流域に入り、やつとナムチェ・バザールに向つて北上した。然し本流の両岸は高く立つて最初は川づたいには行けぬので、左岸の高い中腹を巻きながら進み、ガートで初めて川に降りた。この附近はすでに所謂クーンブ地方に入つたことになつているが、ソロとの境は、はつきりしたものではないらしい。私達が北上するにつれて、チベットからの避難民が次第に目につくようになる。

ナムチェ・バザールは、ドゥド・コシとボーテ・コシの合流点の上の高い台地にある。水際より急斜面を一気に五百メートルばかり登らなければならない。この登りの途中からエヴェレストが見られる筈であつたが、この日は生憎国境は密雲に閉ざされていた。

ナムチェ・バザールは約七十軒の同じ作りの家が数段平行に雛段のように並んでいる。最近まではチベットとの交易の要所として栄えたこの部落も、国境問題が難かしくなるにつれバザールとしては衰えるばかりだという。部落の右端のチェックポイントにインドとネパールの役人が同居して、カトマンズと無線連絡をとつている。私達はここに挨拶をすませて、ナムチェの西方約三キロのプールテに午後早く着いた。出発以来十六日目であつた。ポーターの中にはダーランから最後まで頑張つた者も幾人かいた。彼等は特別のチップを貰つて暖かい南の国に下つて行つた。

今回のキャラバンは最初のうちは、インド・ルピーが通用し、ナムチェではネパール・ルピーと両方が使われており、それにどこに行つても紙幣が通用するのは特に有難いことであつた。

ベースキャンプ及びその周辺

私達のベースキャンプはプールテ（三五〇〇メートル）と決まつた。これはナムチェは人が多すぎるし、今回の調査には少し東に寄りすぎていること。又冬期の寒さを考えて水と薪も容易に手に入るプールテにあるシェルパの家を借りたいこと。そしてプールテにはガルツェン氏の親戚が多く、家の借入れが容易であるなどの理由であつた。部落は全部で十軒ばかり、ボーテ・コシから三百メートル上つた南斜面の畑の中に散在している。私達は部落の一番上の家を借りた。ダン・ノルブという人のいい青年が一人で住んでいた。この附近の家の作りが皆同じであるように、この家も一階が家畜小屋、二階が人の住む場所である。二階に薪ストーブを据えつけガソリンランプをともすと、もう立派な文化住宅となつた。下のヤクは夕方になると裏山から戻つて来る。呑気な家の持主ダン・ノルブ君は、ヤクの数に無頓着で毎日頭数が違つていた。夜、用たしにはしごを降りるとヤクの背中に足をのせてしまうことが度々あつたが、ヤクは小供のせいか実におとなしい。

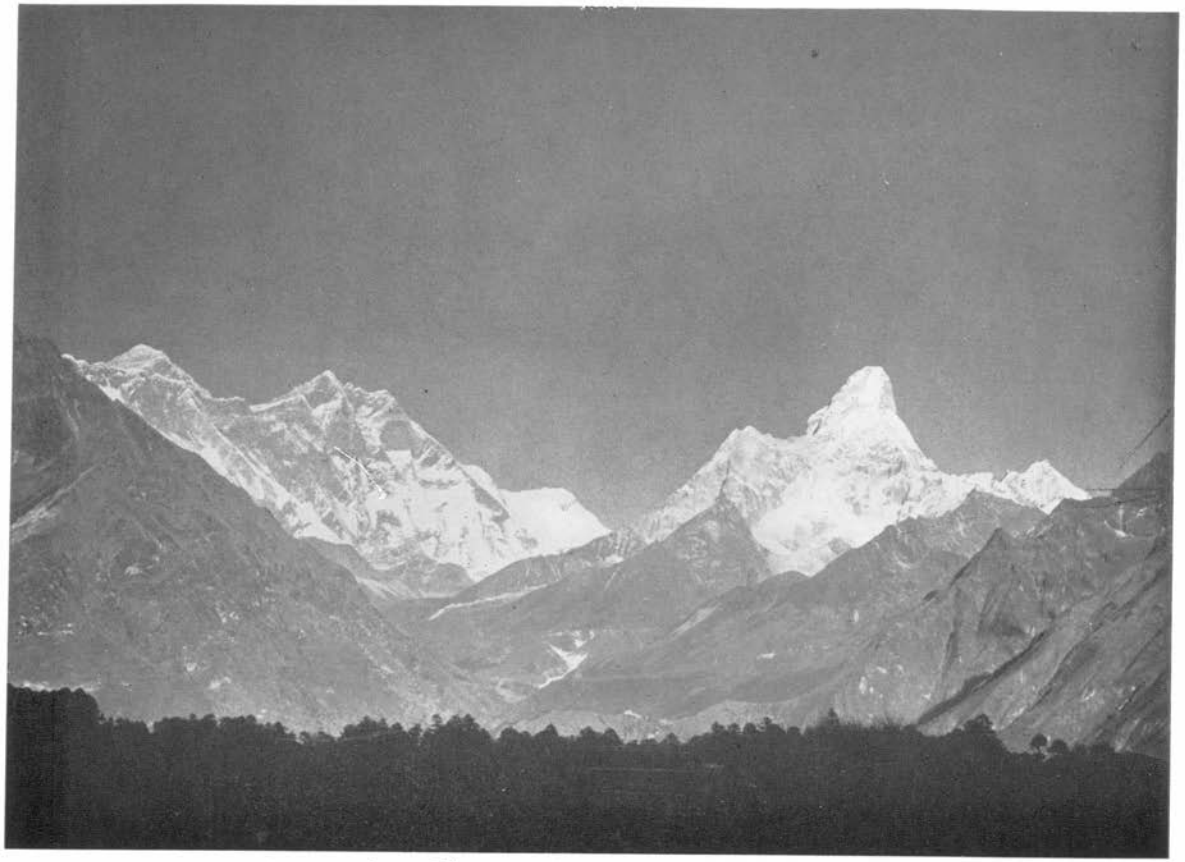
このプールテの部落の下から見事な針葉樹林がボーテ・コシの水際まで続き、この中に棲む虹雉はしばしばベースキャンプの食卓を飾つて呉れた。部落の上の方は以前下と同じに森があつたらしいが、昔の大雪崩で全部倒されてしまつたという。私達の借りた家もその時吹き飛ばされ、その後新築したものである。ベースハウスからはボーテ・コシの深い谷を隔てて、正面にクワングデの岩壁を高く仰ぎ、西にはテシ・ラプチャの手前の七千メートルの峰が空を切り、東にはイムジャ・コーラの対岸にカンテガの尖峰が、いながらにして眺めることが出来る。冬の日は低く、午後二時をすぎれば陽はもう正面のクワングデに隠れるが、東にあるカンテガは附近にすつかり夕暗が迫つてもなお赤く輝いていた。

プールテから東に約一時間で、ナムチェの上のションブチェの丘に立つことが出来る。この丘はすぐ下にクムジュンの部落を眺める広々とした草原で、まわりは針葉樹の疎林にかこまれたのどかなところである。この丘はエヴェレスト、ローツェ、アマ・ダブラムを一望のうちに眺められる一大展望台である。ヤクの鈴の音を聞きながら、エヴェ

レストの夕焼けを眺めるのは正に壮観そのものではあったが、高い峰々の先が夕日に焼ける頃は急にぞくぞくと冷え込んで来た。

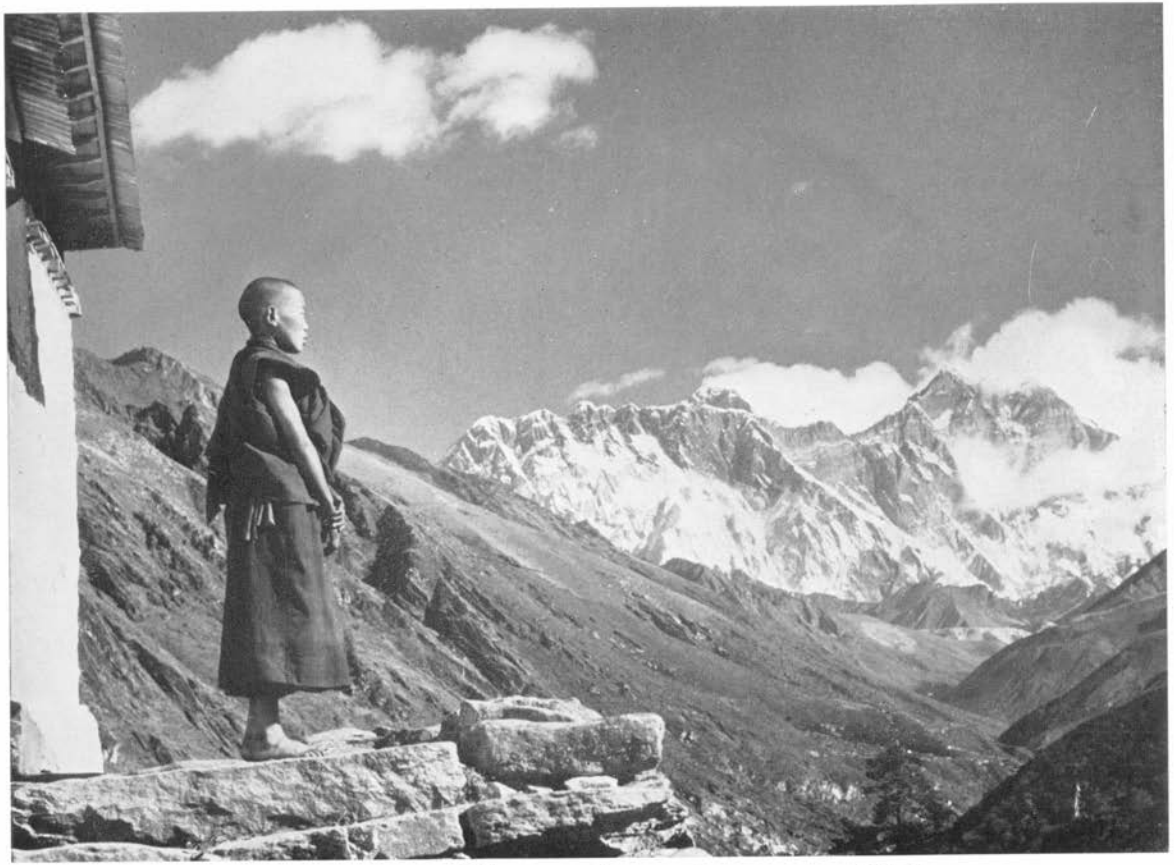
クーンブ地方はシェルパの本場だけあって、顔見知りのシェルパによく会うことがある。彼等は各国の登山隊に加わったものが多いので、服装もハイカラで、家に入って見ると何かしら外国登山隊の印のついたものが置いてある。ここの部落の人達は勿論、どこに行ってもマナスル方面と違って実に親切でとても気持がいい。私達が使っているシェルパやポーターは殆んど家の近くで仕事をしているわけで、親兄弟が訪ねて来たり、何かお土産をもって来たり、大変便利なことも多かったが、あまりお客が多い時には迷惑なこともないではなかった。それにシェルパ達はまわりに自分の家があるので時々家に帰りたがることがあった。プールテに着いて最初の二、三日の間はナムチェにあるヒマラヤン・ソサエティのボスが、ポーターといえどもソサエティのシェルパを使えといって、ダージリンから来たシェルパと喧嘩をしたこともあった。彼等にしてみれば、春の登山シーズンの前に、それもすぐ近くで職があるということは大変な魅力であるに違いはなかった。然し、こんな小事件があったにしても有難かったのは、どこに行くにもシェルパの家を容易に借りられることであった。それで私達はベースキャンプは勿論、最後まで高所用のテントは一回も使わずに、カルカからカルカへと泊り歩くことが出来たし、雪が降らなかったせいもあって、燃料は全部ヤクの糞を使用するなど、登山隊とは違った珍らしい経験をすることが出来たのであった。

食糧は冬期のこの地方の食糧事情が分らないので、相当余裕をもって持参した。ベースキャンプから上はベースキャンプ用と行動用の二種類だけに限った。キャラバン中の米は大体に於いて上等な米が手に入った。クーンブ地方はジャガイモが豊富にとれるために、ラマ教が栄えたといわれる程立派なものが安く手に入る。然し、ここに於いても野菜は非常に乏しい。むしろ食べないといった方がいいかも知れない。大きな蕪が作られているが、コックも野菜に興味がないせいか仲々使わない。ヤクの餌に使うものをサーブに出しては悪いと思うのかも知れない。土地の野菜で



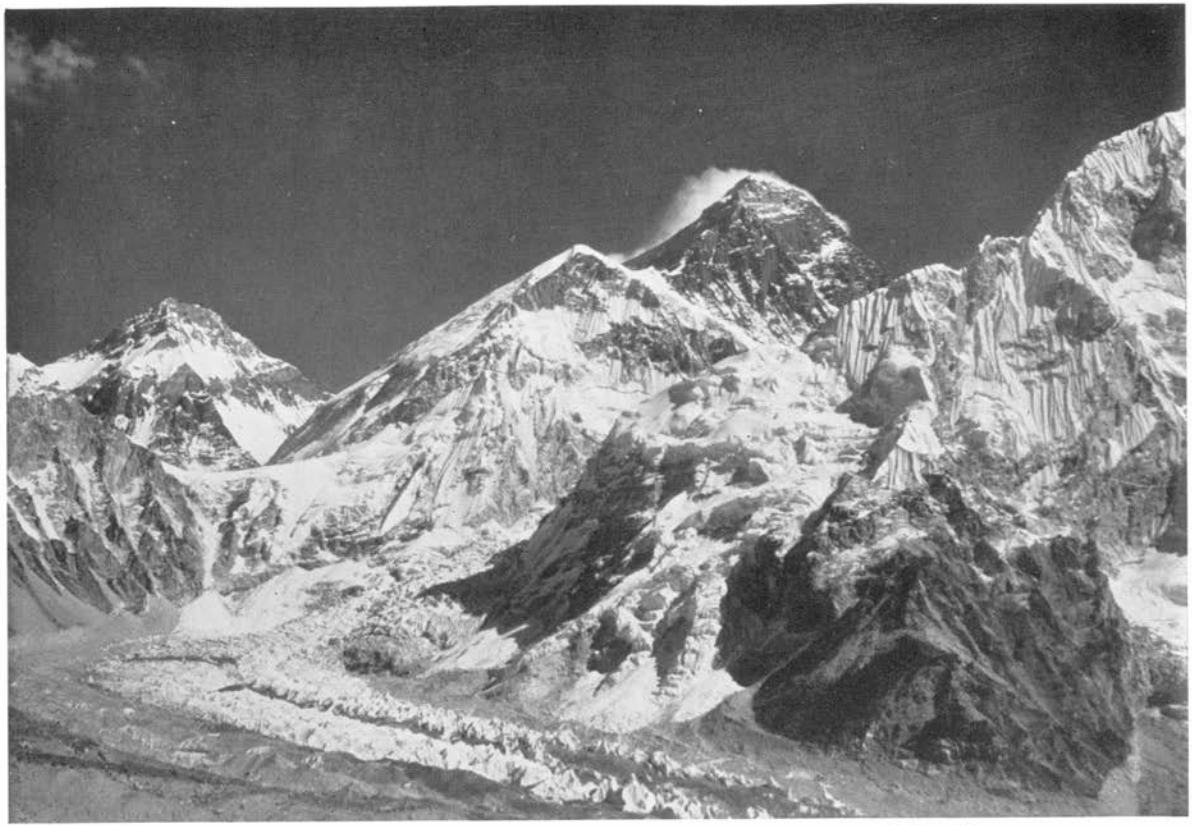
ションブジェの丘から眺めたエヴェレスト、ローツェ、アマ・ダブラム

Everest (8840 m), Lho Tse (8501 m) and Ama Dabram (6856 m) as seen from the hill of Shombuje. (by F. Yamasaki)



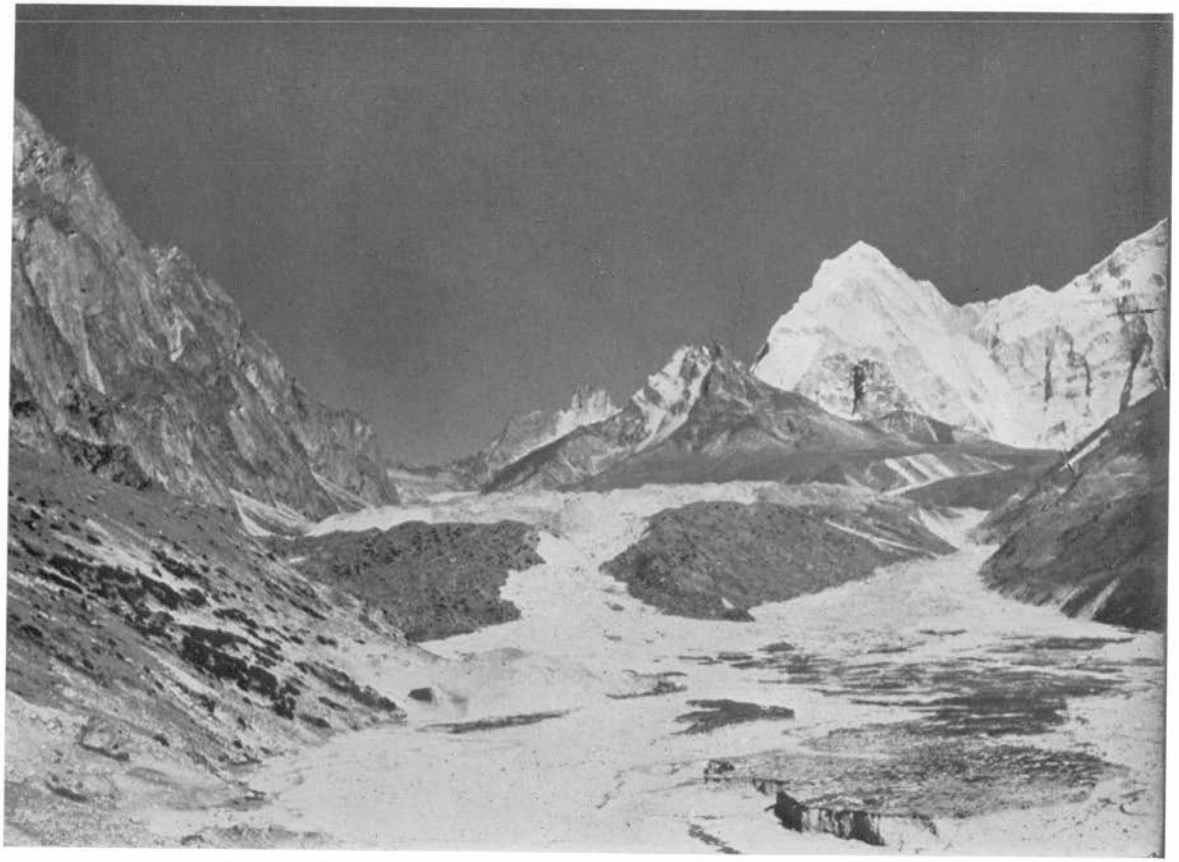
チャンボチェ僧院からエヴェレスト、ローツェを望む

Looking at Everest-Lho Tse massiff from Tyangboche monastery. (by F. Yamasaki)



プモリの支尾根からチャンツェ、エヴェレスト及びクーンブ氷河を望む

Chang Tse (7538 m), Everest and the Khumbu Glacier as seen from a spur of Pumo Ri (7068 m). (by H. Otsuka)



ナンパ・ラ（チューレより）

Nangpa La seen from Chule.

(by F. Yamasaki)

特に好評だつたのはシェルパの漬物であつた。菜葉の塩漬けに唐辛子や匂い草などを入れた日本の漬物と同じようなものであつたが、これもあまり豊富なものではないらしかつた。問題は今回は非常に安く手に入つた。中共軍に追われたチベット人が、家畜と共にソロ・クーンブに逃げて来て、金に困ると次々に売るのでいつもの半値以下にまで値が下つていた。その他この地方に棲む四種類の雉がしばしば食卓に上り、肉にかけては随分恵まれたものであつた。

調　査　旅　行

十二月十七日にベースキャンプに到着してから、二月上旬に引上げるまでの約五十日間、三回にわたり全員をあげて雪男の捜索を行い、何とかして少しでも確証を掴みたいものと全力を尽した。

即ち第一回の調査旅行は十二月二十三日より三十一日まで、ボーテ・コシの上流、特にラングモチェ渓谷に主力を注ぎ一部を更に上流のチューレ方面に派遣した。第二回目は一月六日より十八日までイムジャ・コーラの上流を調べ、又一方ラングモチェ渓谷にも一隊を送り、第三回目は二十二日より三十一日までドゥド・コシ上流と、ラングモチェ渓谷及びボーテ・コシ上流のレンジョ方面に隊を送つた。

十二月中は、この地方では雪の来ないことが多いが、一月半ばには気温も下つて本格的な降雪期になるといわれている。然し今回は帰るまで遂に雪は降らず、全く贅沢な話だが毎日天を迎いで嘆息したものであつた。雪男は勿論だが、私達の感覚では動物を追跡するには雪上につけられた足跡を追う以外は極めて困難なことなのである。

今回はこんなわけで目的そのものの成果は殆んど見るべきものは得られなかつたが、一方雪が無いために相当広範囲にわたつて歩くことが出来たのであつた。

a　ボーテ・コシ方面

プールテから西に次々と連なる部落を通つてボーテ・コシを遡ると、約二時間でターミに達する。ここにはター

ミ・コーラが西から合流し、この川の源頭は北に大きく廻り込んでテシ・ラプチャに達し、ターミから一日半の行程である。ターミからターミ・コーラを見ると谷はU字型に広がつているが、右岸はクワングデの続きの高い岩尾根が屏風のように切り立つている。ターミの裏山を越えるとボーテ・コシは急に大きく開け、木も殆んど無くなつて雄大な明るいチベット的な谷となる。真冬になると人々はこの附近から上流のカルカをたたんで、ターミ或いは下の冬の住居に移るわけで、ボーテ・コシの上流には無人の部落がいくつか存在する。

ラングモチェ渓谷はターミ・コーラの一本北の谷で、ターミから一時間足らずで行くことが出来る。この谷の入口は狭いが中は割に広い。入つてすぐ三つばかりの部落が続き、私達はその中のツォーシェルポという部落の一軒を最後まで借りていた。更にこの谷のどんづまりのデイックにも一軒借りて、十二月はここに小人数がこもつていた。

この谷の右岸の斜面を登ると五千メートルのコルがあり、ターミ・コーラが目の下に見える。ここにはチョルテンもあつてターミ・コーラの上流と通じるパスになつているらしい。この斜面は北を向いているので四千六百メートル位から残雪が現われる。この雪は昨年十月、チョー・オユーの国際女性登山隊遭難の時に降つた大雪の名残りである。それ以来雪は降つていないとかで、残雪は強くしまつている。この雪も一月末には更に高くまで後退してしまつていた。

このラングモチェ渓谷は現在まで外国人が入つたこともなく、雪男の噂も特に多く、それにガルツェン氏が前から進めていた谷でもあつたので特に力を注いだのである。

ラングモチェより半日でボーテ・コシの上流のチューレに行ける。ここには西から広いチューレ・コーラが合流する。谷の中は湿原が多く凍らない清流が所々に湧いていた。私達はチューレの家を一軒借りたが、家の中の半分は乾草がびつしりつまつていた。これらのカルカは三月の末から十二月初めまで、下からヤクを追い上げて来たシェルパ達の夏の住いである。家のまわりの草地には夫々持主があり、勝手に放牧するわけにはいかない。チベットからの避

難民は仕方なく、自由な、はるか高い尾根の上の草を食べさせることになるわけである。シェルパ達は雪の来る直前までカルカにとどまることが多いから、不意の大雪に備えて常に何日分かの乾草を用意しておかなければならない。ところが新参のチベット人はその家畜用の貯えが無いから、もし例年のように雪が来たら全滅するより他ないという。だが今年は未だに雪はなく彼等の財産は無事に冬を越すことが出来そうで、これはダライ・ラマの神通力によって雪が降らないのだと、ダライ・ラマの株はとみに上昇している。

ボーテ・コシの本流の流れはチューレ附近まで来ると、川の半分は凍っている。チューレの先から広い河原となってそのままナンパ・ラよりの大きな氷河のモレーンに続く。

チョー・オユーの大きな三角型から左へ次第に低く真白な国境の山々が続いて、急に低く切れこんだ所がナンパ・ラである。チューレより一日半の行程である。この峠は国境の峠としては最も利用されるものの一つだが、十二月に入るとそろそろ雪に閉ざされるのが普通である。ところが今年は私達が帰る時まで、チベットの避難民が家畜をひきつれて峠をこえてやって来た。あるときは小さな子供たった二人で実に五百頭の山羊をつれており、彼等の強さには本当に感心したものであった。峠には雪がないといっても気温は相当に下るらしく、背中の子供の両足指がひどい凍傷になって治療を受けにやって来たものもあった。

ラングモチェとチューレの丁度中間よりボーテ・コシの左岸を斜めに五、六百メートル登ると、レンジョという湿原に出る。四千七百メートルの所でカルカが一軒ある。私達はこの家の縁の下の家畜小屋にもぐり込んだ。レンジョの湿原の上には三段になって湖があり、いずれも硬く凍っていた。湖の落口はどこも水面が出て、ここに立つさざ波が湖全体に張った氷に反響して不気味な音をたてていた。一番上の湖の上には小さな氷河がかかり、その横のガレを登り切ると、ドウド・コシへのパスに立つことが出来る。このパスは五千三百メートルの高さで、両方の谷の分水嶺の最低鞍部というだけのことで、人が利用することはない。狭い尾根の岩と岩との間にヤクの毛で作った紐が張って

あり、これは通行止めのしるしであるという。ここから見ると真東にエヴェレストが一段と高く他の峰々を圧し、すぐ右に続くローツェと共に右側に盛に雲を湧かせていた。ローツェの右には少し離れてマカルーが、今は裏からその全貌を見ることが出来、噂さ以上の素晴しい眺めで、この日ばかりは雲一つない晴天に心から感謝したものであつた。パスの東側はすぐ下から氷河となり、ドゥド・ポカリに落ちていて、氷河の上に楽に立つことが出来た。ドゥド・コシの本谷には、ギャチュン・カンとチョー・オユーの両方からくる巨大なゴジュンバ氷河が横たわり、ザイテン・モレーンの西側にドゥド・ポカリが真白に凍つて、一部分溶けた水際にドゥド・ポカリ班の泊つているカルカが望まれた。

パスの東側にある残雪に、大きな足跡が残されていたが、何としても判断の下しようも無かつた。然し何か動物のものであることは間違いなく、私達がこのパスから下りてくるときも、下から登つて来る狼とバッタリ顔を合せてしまつた位だから、野獣の通路に利用されていることは確かであろう。

（以上山崎記）

b　イムジャ氷河とクーンブ氷河方面

有名なチャンボチェ寺院は、ドゥド・コシの合流に向つて、イムジャ・コーラに直角にとび出した尾根の上にある。数十年前の大地震で全壊し、その後新築されたもので古いものではない。然し、この附近最大の僧院として、又エヴェレスト登山隊の記録などにより、その名はあまりにも有名である。この僧院の附近は針葉樹、白樺、それに石南花の見事な森である。僧院からは本流の正面にローツェからヌプツェへの岩壁が立ちふさがり、エヴェレストはその壁にさえぎられて僅かに頂上附近しか見えないが、右手高くアマ・ダブラムの異様な山容が近く迎がれ、ラマ教の聖地としては全く申し分のないところである。よく本などに載つているこの寺院の写真は、僧院の先より下流に向つて撮つているわけで、寺院の向うに見える山々は、ベースキャンプの正面のクワングデの山々であることがわかつた。私達はこの寺の一部を中継基地として使用させてもらい、往き帰りに泊めてもらつた。

チャンボチェより森の中をだらだら下つてイムジャ・コーラを渡り、又対岸を暫く登るとパンボチェ寺院がある。

雪男の頭皮なるものが保存されている僧院である。この頭皮はこの他、クムジュンに一つと、ナムチェのゴンパにもあるが、この寺院のが一番立派でナムチェのものは一見して人工的に作つたものであつた。

森林はこのパンボチェで殆んど切れる。川沿いの道を約二時間でチョラ・コーラの合流点に達する。私達は右の本流に約半時間入つたディングボチェを前進基地として家を借りた。この部落はこの谷の中では特に大きく、薯と小麦の産地である。ここはクムジュンなどよりはむしろ暖かく、雪解けも早く豊かな部落だが冬期は誰も住んでいない。

ディングボチェ基地は日に三度、太陽が光を投げかけた。それはイムジャ・コーラをへだてて南にそびえるアマ・ダブラムが、陽光を遮るからである。西、ナムチェから遠望したアマ・ダブラムは怪異そのものの姿であつたが、その山すそにそつて、イムジャ・コーラを遡つて北西、或いは北側からこの山を見ると、実におどろくべき山容の変化に目をうばわれた。ここディングボチェから見た山容は、四方に派出した尾根が頂を中心にバランスがとられて実に見事であつた。この山に登り、行方不明になつた英国の連中は、この尾根の何処に希望ルートを見出したのであろうか。同行のシェルパ、チョタレはあの尾根だと指さしたが、絶望的なルートとしか思えなかつた。

雪の降らない今冬、荒涼としたヒマラヤの山奥に根強いシェルパ達の生活は、こんな処にも煙を上げていた。山を下るヤクの鈴の音が、澄み切つた大気の中に爽やかに鳴りひびいていることは驚きの一つであつた。

この広大なイムジャの源流を探ぐるには、更に歩を一歩進める必要があり、私達は前進基地をチュクンに設けた。標高四六〇〇メートル、殆んどローツェの基部といつてよいだろう。ローツェの東壁に鮮かに色どられたイエローバンド、青い空と、素晴らしい氷のヒマラヤひだと黒い岩、茶褐色の大地、この静寂の中で動きのあるものは雲だけであつた。

イムジャ源流は、雪男の捜索に欠くことの出来ない地区である。ヒラリーやピーターバーンがバルン渓谷からイムジャに降つた時も、屢々怪しげな足跡を発見しているからであり、又地形的に見てもクーンブ氷河—ドゥド・コシー

ボーテ・コシと一連の低いコルによって、雪男の通過の可能性は十分にあるからである。

一月十二日、ここチュクンに集った林、依田、尾崎、大塚隊員の他シェルパ二名は、イムジャ氷河の偵察に出発した。林隊員とペンバ・テンジンは待機部隊として残り、他は一気にアマラルゼン・パスまで長駆した。身を切るような寒さの中を、イムジャ氷河を横切つた。広いモレーン地帯は未明の中で、大きなウネリのように見えた。ここを一度通つたことがあるというシェルパのニン・プタールの案内で、左岸に渡り、ザイテン・モレーン沿いに遡行する。歩きにくい道であるが、僅かながら踏跡はつけられている。物音は何一つなかつた。氷河の動く音も、雪崩の音も、ただ身体の温まるまでぐんぐん歩いた。ところどころに放牧の跡の気持のよいカルカがあり、きれいな水が真白に凍つていた。三時間位歩くと、イムジャ氷河は三つに分れた。左は北に向つてローツェの東壁に、右は真直ぐ南に曲つてバルンツェへ、そして正面はバルン氷河への乗越へと。

一息ついて、この大きなスケールに心を奪われ飽かず眺める。陽はポカポカと温かく、風一つなく、全くよい気持だ。この辺は五〇〇〇メートル位だろうか。休むとなかなか腰が上がらない。依田カメラマンはしきりと、シャッターを切る。伸びたヒゲに白いものが交つて来たベテランの目は、獲物にとびつく狩人のように鋭い。ヒマラヤ新人の尾崎カメラマンは、重いムービーを脚に据えて、この大きなスケールと取組んで、高度の苦しさに悩まされながらも必死に廻している。独り私は、双眼鏡でローツェ東面のアイスフォールをしきりとのぞいていた。それは東京を出発する前に、「ローツェの東面をよく見て来て下さいな。もし登路があればローツェも面白いですからねー」と松田君からいわれていたからだ。良くはなかつた。五二〇〇メートル位から六〇〇〇メートル位までのアイスフォールは、約四十度の滑り台に積み重ねられているようだ、何処にも途中に懸崖はなく、抜けられそうにも見えない。上部はガスがかかつてよく分らないが、問題はこの下部のアイスフォールだけであろう。遠くからのプリズムによる偵察が信用できないことはよく知つていた。山は、取組んで、その山肌にふれて偵察して見ないと本当のルートは分らないか

らである。しかし、この東面はまるきり、安全とはいい切れない。可成り困難はあるに違いない。パスへの道は、左岸のザイテン・モレーン沿いの気持よい芝地となって、最奥の氷河まで続いていた。丁度アマ・ダブラムの北側から東尾根のすそをまいて行くことになる訳である。

十二時頃最奥部についた。五三〇〇メートル位である。涸れた池の鉛色の砂地が二つ、何かそのきらきら光る鈍い鉛色は無気味であり、印象的であった。殆んど休まず、歩きずめであったのでさすがに疲れを覚えた。氷壁と岩の壁にかこまれて、パスはどこにもありそうにも見えない。ニン・プタールに聞くと、あそこだと指さしたが、これはキャラバンの越えられるパスではない。少数の足の揃ったパーティのみが越えられそうなもので、放牧の跡も、ここまでであった。この辺一帯、何か足跡はないかと探したが、涸れた砂地の上にも、あたりにも、動物のそれらしいものはなかった。キャンプの跡であろう、さびた缶があちこちに見られた。

ホングー氷河へのパスへ着き、そこから東側のホングー・コーラ、更にバルンやアマ・ダブラムの乗越しなどを是非見たいと思い私ひとりパスへ向った。依田氏との約束は午後二時までということで。目と鼻の先のように見えたパスは遠かった。高度差も距離も大してないことは確かだが、ルートは悪く、雪と岩、ガラ場、それに最後の岩場は悪いので捗どらなかった。途中、五四〇〇メートルぐらいの残雪の上に、明瞭な動物の足跡を発見した。残念ながら、何のものかはつきりしないが、四本の爪の跡から、多分狼か何かと思われる。この足跡は岩と雪の間を縫って、パスへと続いている。私は勿論、この足跡を追って行ったが、遂に時間切れとなった。気分は爽快であった。息もそう切れないが、ピッチは極めて遅く、慎重に登らなければならず、パスまでは一〇〇メートル位だが、まだ一時間位掛りそうなので、あっさり諦らめた。未練は充分にあった。せめてものなぐさめは、マカルーⅡの頭とバルンツェの秀麗な氷壁を目のあたりに見たことであった。

かけるようにして降り、待っている連中に追いついた。待つ身は登るより辛いものだ。この寒さの中で時間がオー

バーして待たされた依田氏は、ブーブーこぼしていたが、とに角、日のくれぬうちに氷河を横断しようと急いだ。夕ぐれのガスが谷から湧いて来た。歩き通しなので、全く嫌になつてしまう。真暗の中を、迎えのランプに導かれてヤク小屋についたのは六時少し前、十一時間歩きづめであつた。全くよく歩いた一日である。疲れ過ぎて食慾がなく、渋茶がやたらにうまかつた。身体がほてり、寝付きも悪く、うとうとしただけのような浅い眠りで朝を迎えた。

十三日、チュクンからクーンブ氷河のロブジェへ。

十四日、クーンブ氷河の奥へ。

「東奔西走とはこのことだろうな」と依田隊員と冗談を飛ばしながら、今日はエヴェレストの南側のクーンブ氷河へと基地を移動した。

昨夜、満月の素晴らしさに、寝付かれぬまま時を過したが、それでも今朝は疲れは抜け元気一パイであつた。身体はすつかり山に馴れてしまつている様子であつた。林隊員とシェルパ一名は、なおここに残つて待機、偵察し、依田、尾崎、大塚とアンツェリンとニム・ドルジェと馬一頭が、クーンブへと向つた。

雪男の餌のために前庭に置いてあるヤクの死骸に、しだいにキツネ、テン、カラスなどが集まりだした。ここの仕事は林隊員にまかせて、足の伸びる三隊員は早朝に出発した。

第二次マナスルのとき、私についたアンツェリンは今や二五歳、二児の父となつて立派な青年になつていた。昔ながら人なつこい、よい顔立、温厚で実直な性格はその弁髪と共に少しも変つていない。彼が提供してくれた小型の馬は、私達の捜索活動に大いに力になつた。この辺りは、クムジュンに住むアンツェリンやニム・ドルジェには、自分の庭のようなものだ。馬の首につけられた鈴の音がチリンチリンとのんびりと鳴り、私達の心を慰めてくれた。

ディングボチェから北側の丘を越えて、チョラ・コーラ沿いの左岸の広い台地を進む。南のタウェチェが素晴らしい全貌を見せてくれる。まだこの辺にヤクが放牧され、シェルパの子供達が薪を集めているのに出会つた。四時間ば

かり歩くとチョラ・コーラとクーンブ氷河との出合いにつく。タウェチェからのモレーンでチョラ・コーラがふさがれ、氷河湖が白く凍っているのが遠望出来る。この奥にもドゥド・コシに抜けられるコルがあると聞いていたが、プリズムで眺めると、それらしいものも見られた。

道はクーンブ氷河のモレーンのツンゲを廻り、右岸に渡ってザイテン・モレーンに沿って行く。荷が少しこたえて来た。ヌプツェの基部の岩壁が眉を圧するように偉容を見せて来る。四七〇〇メートルだろう、更に一頑張り、エヴェレストとプモリの間の低いコルのロー・ラが見えて来た。もうじきだなと思いながら一汗かくと、気持のよいカルカの跡にヤク小屋がポツンと一軒、ここがロブジェだ。午後三時、四八一〇メートルである。きれいな小川も前に流れ、ゆるやかな草地にかこまれたロブジェは全く快適なキャンプ地だ。燃料のヤクの糞も豊富にあり、静かな温い一夜を過す。明日は待望久しきクーンブ氷河の偵察の日だ。エヴェレストの山懐に入る日である。

明れば一月十四日、快晴である。プモリの支尾根、五四〇〇メートルの地点に立った隊員達は、興奮して言葉もない。依田、尾崎両氏は仕事の鬼となっている。そして私は、ひそかに恋いこがれたエヴェレストを今この目で近々と仰ぎ、息をつめて、四周を眺めている。身も心も満ち足りて、幸せで心がうずく。生きているんだという喜びと、この大空の下での自由な開放感に大声をあげて呼びたくなる程だ。暫らくは何も手につかない。この大きな眺めに心を奪われて雪男のことも忘れてしまった。

足下に連なるクーンブ氷河の大きなモレーン、ヌプツェの氷壁の左側からクーンブ氷河のアイスフォールが、デコレーションケーキをつぶしたように落ち込んでいる。全くこのルートを開拓した先人達の慧眼と努力とに尊敬の念を抑え難い。予備知識があればこそ、あそこを登ったんだなと思うが、余程でないと、クーンブ氷河からウェスタン・クームを経るルートは気がつくまい。本で読み、写真で見ていたこの風景を目のあたりにして、つくづくシプトン一行の偉業に頭の下る思いである。南、クーンブ氷河の彼方にはアマ・ダブラムが特徴のある姿を見せている。目を転

じて西にはタウェチェからドゥド・コシの分水嶺が、チベット国境のギャチュン・カンの尾根まで続いている。ドゥド・コシへのコルはここと同じ位の高さであろう。氷河のうねりの彼方に茶褐色の岩肌を見せている。北はロー・ラからプモリの国境稜線が氷の屏風となつて立ちはだかつている。これらの大きなスケールの中で、ひとり、不愛想に頭を右に傾けて、雪もつけず、黒々と青空にそびえているのが、東の王座エヴェレスト。雪煙か、いや雲を呼んでいるのであろう。強い陽光を浴びたウェスタン・クームの温かい空気が上昇して、上層の冷い強い偏西風に当つて雲となつているのであろう。

雲を呼び、大空にそびえるエヴェレストは、壮麗さを感じさせない。荒けずりで、人を威嚇するのみで、何人も寄せつけまいとする圧迫感が身に迫る。それにしても、あの頂を目指して、人類は長い間苦闘を重ね、遂にそこに足跡を残したのだと思うと、人間の意慾の激しさと、その可能性、一致協力の素晴らしさ、山に登ることの価値と意義が無言のうちに私を励ましてくれた。それは、その場に置かれて、苦業を積んだ者の共通の理解が、そうさせたものであろう。

冷い風に吹かれて、正午四時まで、私達は悔いのない仕事をした。暗くなつても心配はあるまい。明るいうちにモレーンを横切つてしまえばいいのだ。急ぐことはない。この恵まれた一日、明日はここを去るのだから。

暗いなかを、ランプを持つたシェルパが、温かい紅茶をたずさえて出迎えてくれた。依田氏の思いやりからである。心うれしく礼をいう。誰もが満ち足りた気持で、久し振りに話がはずむ。依田さんは、もう帰つてからのエヴェレストを中心とした写真展のことを思い浮べているのであろう。尾崎君はズームでねらつたエヴェレストの物凄さを身振り宜しくやつている。

生涯の最良の日というべき一日だつた。

c ドゥド・コシ方面

第三次捜索の一隊として、再び報道メンバーは同じ顔ぶれで、ドゥド・コシからドゥド・ポカリへと足を向けた。そして学者班の林、山崎両隊員は、再びラングモチェとボーテ・コシ上流のレンジョ方面に出発した。一月二十二日から三十一日までである。

ドゥド・コシとは「ミルク色の河」の意味である。それかあらぬか、ナムチェに入るまで、この河沿いにキャラバンを進めたが、明らかに乳白濁している。上流に氷河のあるしるしである。この激流はチャンボチェの下で、二股に分れ、北上してチョー・オユーへと向つている。他は、北東に向いイムジャ・コーラとなる。

未だ見ぬドゥド・ポカリへの夢は多い。デイリーメールの派遣した雪男探検隊のレポートには、この地区の捜索のことがよく書かれていたが、矢張りこの目で確かめないとピンと来ないからだ。

ドゥド・ポカリの基地まで三日の行程である。未だ雪は降らない。雪男の足跡を発見するチャンスは薄い。しかし、雪のないおかげで広い範囲を歩くことが出来た。デイリーメール隊は降雪に敗退したと報告しているが、私達はその逆のコンディションに置かれている。ここまでの三日間の行程も、三〇センチの積雪があつたら難行のルートだ。高い岩壁をまいた道や、急な登りなど、考えただけでも容易ではない処ばかりである。

シェルパのプー・ドルジェのカルカをベースハウスとした(四七〇〇メートル)。勿論、燃料はヤクの糞である。ドレ、ケレ、ルーザ、マチャルマ、点々と夏小屋の点在する道を進む。耕し、水と薪のある処はすべて人臭い。プー・ドルジェやアンツェリンは、この辺にあちこちと夏小屋を持つており、自分の庭を歩くようだ。人のよいアンツェリンの父は、私達の荷が多いのでヤクを二頭貸してくれ、途中まで運んでくれた。マチャルマから私達と分れ、対岸のツォンモアのカルカへヤクを引いて行つた。そこには一番下の息子が一人番をしているとのことであつた。冬のさ中に、こんな山奥に、ただ一人年若いシェルパは未だヤクを放牧しているのだ。世界中で、チベット人の子供くらい早くから、大人顔負けの仕事をする種族も他にはあるまい。彼等の自立心と頑強さは、この大自然のたまものであろう。

ドウド・コシが伏流となつて凍つてしまうと、ゴジュンバ氷河の舌端である。右岸のザイテン・モレーンを一登りすると、忽然としてコバルトブルーの池が見えた。ロバンガだ。思わず馳け寄つて荷を下す。美しい「アカツクシガモ」が五羽遊んでいた。これを襲うワシ、シェルパは大声で追う。そして私達に説明してくれた。

「あの鳥は神の使いの鳥です。私達は大事にしています」

「デイリーメールのサーブ達は、あれを射つたじやないか?」と聞くと、

「アッチャーナイ（ノーグードの意味）」とプー・ドルジェは淋しそうな顔をしていた。サーブがどうしてもというんなら一羽位はいいと言つたが、どうして私達にこの愛らしい鳥を射てるものだろうか。

ポカリ（池）は続いて姿を現わした。タウジュン、ゴーキョと。厳しく凍つた湖面の氷は厚く、そして硬い。波立つ湖水が、凍結した氷面を叩くのであろう、ドボーンドボーンと無気味な音が不規則に聞えて来る。

チョー・オユーが大きく正面にそびえ、その左にギャチュン・カンがいかめしい。南のタウェチェも素晴らしい。私達はもうヤク小屋にはすつかり馴れてしまつた。湖畔に立つて、飛雪の作る美しい、しま模様の氷結湖面を見る。一陣の風と供に模様が変る。ドボーンドボーンという音。ここには、自然の息吹がある。他の地区になかつた湖がここにあるからであろうか。真冬の、死と、眠りの世界の中で、湖だけは生き物のように鼓動をつづけていた。

ここを中心にして、北へ更にゴジュンバ氷河をつめて、タナク、ムズーバ湖をさぐり、チョー・オユーの基部まで、ギャチュン・カンを指呼の間に望む四九〇〇メートルの丘に立つた。ムズーバ湖を一望の下に眺める丘の日溜りでの昼食は楽しかつた。東にはエヴェレストが頭を見せ、相変らず雲を呼んでいる。この地区は、クーンブ氷河とボーテ・コシの中間で、雪男が通過可能のパスはいくつかある。頭の中で、あれこれと低いパスを結びつけると、いくつかの重要な地点が出て来る。その一つが、ゴーキョをへだてた、基地正面のレンジョへ通ずるパスだ。二十六日には、このパスで山崎パーティと会う約束になつており、ここにも足を延ばした。高度馴化は出来ているので、峠までは一

ピッチ、二時間で飛ばせた。五三〇〇メートル、待てど山崎サーブとガルツェンは来ず(翌日尾崎隊員と会う)、何物とも分らない動物の足跡のみで、雪男の証拠はつかめない。しかし通過には興味のある地点だ。このパスからのエヴェレスト、マカルーの眺望は全く素晴らしかった。雲が湧き、飛雪が陽光にキラキラ光る。これで捜索も終りだな、と思うと、何かしら急に物悲しくなって来た。何か訳の分らない不満が俄かに頭をもたげて来た。「山崎の奴、何をグズグズしているんだろう」と約束を守らないことに当りだす。プー・ドルジェと、お茶と白桃の缶詰を皆喰べてしまう。プー・ドルヂェはチョー・オユーの婦人遠征隊に参加したので、その話をしながら冗談をいって時を流して行く。気が落付いて来た。下ろう。こんなにいい眺めにも恵まれたし、健康だし、私達は充分に仕事をしたし、悔いることはないんだ。さあ下山しようー、そして、次の探検隊のことを考えるんだ。

翌朝、この探検隊を通じて気温は最低を示した。零下二十度である。一同元気に、無事にプールテに帰着し、三次に亘る捜索の幕を閉じ、あらゆる資料の検討を始めた。

(以上大塚記)

帰　路

一月は遂に雪は降らず、二月に入ると天気は益々春めいてくるばかりであった。気温もはっきり上昇を示し、ベースハウスの横の小川の氷はすっかり溶けて、今年の真冬の過ぎたことをつげていた。始めの予定は二月十日迄となっていたが、この調子では近い中に雪のくる様子もないので、少し早目にベースキャンプを引き上げることになった。

遂に二月五日、例によって快晴のプールテをあとにする。約二カ月の間楽しかった部落の人々と別れるのは些か名残り惜しい。十二月の末から村の家々に次々と招かれたりして、実に心暖まる楽しい生活であった。プールテの一老婆は「日本人との生活は実に楽しかった。明日から訪れるものは又冷たい風だけだ」といったと言う。

ナムチェ・バザールのチェックポストで帰りの挨拶をすませ、ついでに気象のデーターを見せてもらう。気温のデ

ーターはなく、天気と積雪のみが観測されている。それにここには昨年の分のみしか無かつたが、それによると昨年は一月に七回、二月二回、三月に五回の降雪がある。一月の雪は十七日に降り始め一月末には二メートル半にも達しているのを見ると、今年の冬は異常といわれるのも本当らしい。然しまだ二月の上旬、今年の雪はただ少しおくれているだけなのかも知れない。これから三月にかけて本格的な雪がくるかも知れず、想像していたクーンブ地方の雪景を見ずに下るのは残念でもあつた。今回のベースキャンプで測定した最低温度は一月十七日の −12.4°C で、殆んど−10°C 以内であり、二月に入つてからは最低が +7°C という日もあり、少くとも温度に於ては異状であつたことと思う。なお山の中では四七〇〇メートルのレンジョとドウド・ボカリの −20°C が最低気温であつた。

ナムチェを下る途中、この日はエヴェレストが良く見え、最後の眺めを楽しんだ。下りは登りと違つてボーテ・コシに下り、仮橋を渡つて本道に出た。

往きのキャラバン最後のキャンプ地も正午に通過して、初日はガートの少々上流の草原に泊つた。ベースハウスの生活は暖くて快適ではあつたが、雪の無いため終始、ほこりに悩まされたが、この日は久し振りにそれから解放され、月影のさす天幕生活が殊にうれしく感じられた。下るにつれて、来るときは砂ぼこりの立つていた畑地にはもう麦が二三寸ものび、空気も柔かくなんとなくかすんで、本当に春が来た感が身に泌みる。

カルテで往きの道に分れ、カリ・コーラに下る。川まで下るとバナナの木が目立ち、この日の露営地ドロではミカンが木にたわわになつていた。ナムチェから僅か三日目の所だが夜の空気は生暖かく、高度の差に今更ながら感心する。この部落附近はネパール人が殆んどを占め、同時に水田と水牛が出てくる。

私達はジュビングを通らずに、ドロの下でドウド・コシを渡り、対岸の沢に入つて峠の下のタクシンドに泊つた。ここには大きな新しいゴンパがあり、森の中を抜けて霧の切れ目にこれを見た時には、日本の山の温泉宿を思い出した。タクシンド・パスののんびりした道を下ると麦が青く、北にヌンブールが谷の正面にそびえ、一寸ヒマラヤ離れ

した美しい所がある。この下で道は二手に分れ、南に下るオカールドンガに行く立派な道がある。

私達は西のジュンベシ経由の道をとつた。ジュンベシ迄は草付の急斜面を巻きながらいい道が続く。ジュンベシは小じんまりした部落で家の作りは殆んどシェルパ的である。ジュンベシの西のラムジュラ・バンジャンは、往きのサルパ峠よりやや高い全キャラバン最高のもので、これを越えると大きな峠は無い筈だと聞いていたが、峠に立つとまだまだ山なみが重なつている。川はすべて北から南に流れているのだから、最後まで峠越えは覚悟しなければならないわけである。然し帰りの道はダーランからの道に比べると、一般にはるかに立派なように思われる。そして高度が高くなると、住む人はシェルパ、低くなるとネパーリと、交互に変りそれが西に進むにつれてシェルパは次第に消えてゆき、この峠が大体ソロの西の境であるらしい。

ラムジュラ・バンジャンの下りでは、はるか北方にガウリ・サンカールの山々が石南花(しやくなげ)の木の間に見えかくれしていた。石南花は今回は諦めていたが、二千メートル位の日当りのいい所には、真赤な花を一杯つけている木が見えはじめた。

リクー・コーラを渡つて、対岸の広い盆地に出て又次の峠にさしかかる。どの登りも同じようなものである。峠には何条にも並んだ大きはメンダンがある。西に進むにつれて、チョルテン、メンダンが古びてくるのは、次第にラマ教徒が今のソロ・クーンブ地方に追われたものではないかと想像される。峠の近くにスイス人のチーズ作りが住んでいるそうで、円形の大きなチーズを独特な背負子(しよいこ)に載せたポーターの一団が、カトマンズに向けて私達の行列と前後する。

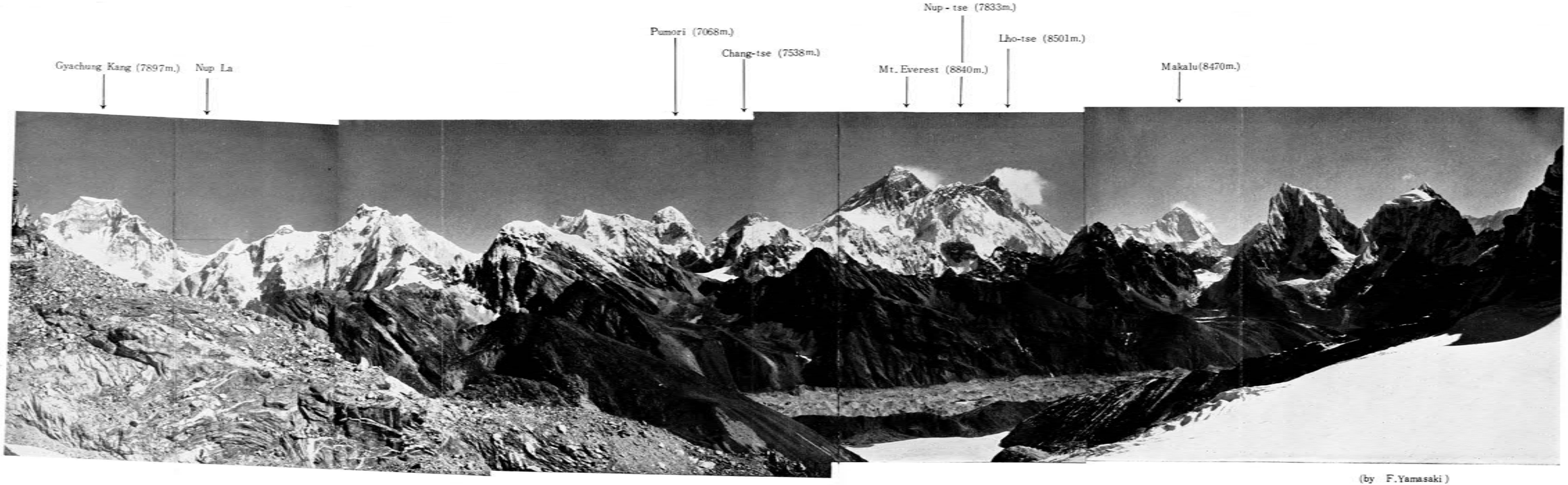
カトマンズへのほぼ中間にあるトーセの町は、この街道では大きな部落で完全なネパーリで、ここに来ると急にヒンズー教の影響が目につきはじめる。初めてみる店屋の前を、ポーターと共に珍らしげに行つたり来たりしてしまう。トーセから少し下つてクニムト・コーラの対岸の谷に入り、シクリという部落で一日休養した。

帰りのポーターの大部分はナムチェのヒマラヤン・ソサエティーの斡旋によるものだが、それにプールテ及びその近くの人達で是非カトマンズに行きたいというものが加わり、全部で四十五人ばかりのキャラバンであつた。然し実際の行列はそれ以上になつた。それは家族一同打ち揃つてついてきているものもあるからである。小さな子供が隊のものを持つていたりして最初は不思議に思つたこともあるが、親父のものを分けあつたり、兄弟の荷物を交替でかついでいたりしている。勿論こちら側としては一人前の給料しか払わないから、いくら人数が増えても一向かまわない。四十数人のポーターの約三分の一近くはシェルパニで、中には尼さんも含まれていた。彼女達は男と全く同じ荷をかつぎ、むしろ男より強い位であつた。それに実に陽気で、歩きながら大声で歌を和し、全く楽しそうである。又男のポーターの中には高所で働く本当のシェルパが何人かいた。彼等はカトマンズで春の外国隊に雇われることになつており、どうせ行くならポーターで往きにも稼ごうというわけなのだろう。こんなわけで、帰りのキャラバンは実に和気あいあいたる愉快な行進であつた。

休養の翌日はまた峠越え。シクリ・パスである。パスを越えると典型的なネパールの田園となり次々と農家が続く。然しまだまだ古いチョルテンが所々に立つている。

ボータ・コシには立派な鉄の釣橋がかかつている。地図の位置よりは大分上流にある。川を渡つて小さな峠でチャリコートへの道と分れ私達は近道の下の道をとる。小さな釣橋を渡ると道は再び登りとなり美しい三葉松の林を抜け、次の峠にかかる。この峠附近はタモンと呼ばれる人々がかたまつて住んでいる。マナスル隊のポーターの中にこの出身が大分いたのを思い出した。

チャウンリ・コーラに下りレシンゴへの登りの途中、天気が急に変つて、一陣の突風と共に雹がすさまじい音をたてて落ちて来た。あわてて納屋に逃げこんだが、みるみるうちに地面は白くなつて、ここに来て初めて冬景色を見ることになつた。嵐がすぎ去つて、リッシンゴ・ゴンパの登りの時にはさきほどの雹はすつかり溶けて、ゴンパに着い



(by F.Yamasaki)

レンヂョ・パスからの東望

A panoramic view east taken from the Lhenjo Pass (c. 5300 m).

た時には夕日が暖かく照つて、国境の雪の峰々を赤く染めていた。ここのゴンパは極彩色の大きな寺で、前庭には先人のキャンプの跡がいくつか残されていた。シェルパは残り少ないキャラバンの夜をおそくまでダンスに興じていたが、隊員達のテントからも夜が更けてもなおタイプライターを打つ音がきこえていた。

リッシンゴから一旦小沢に下りてからまた一気に登り始める。高く登るにつれて視界は開けて、マナスルからヌンブールまでを一望にする一大パノラマを展開してくれる。それに尾根筋の道も立派で歩き易い。ここまでくるとカトマンズへとぶ飛行機が斜め頭上をこえてゆき、いよいよキャラバン最後を思わせる。涼しい尾根から道は急速に下りとなり、スン・コシに近くなるにつれてひどい暑さとなる。シェルパのポーターは暑さが苦手と見えて、土地のポーターを個人で臨時に雇う者まで出てくる始末。

スン・コシとインドラワティ・コーラは共に立派な鉄橋で、両方の川に狭まれた岬にレストハウスがあり、キャラバン最後の夜はそこに泊つた。

さて最後の日はチャク・コーラに入つて低いパスを越えてジュク・コーラに入つたが、下りた所は広い盆地で、以前はここまでジープが来たという。この道は所々がこわれているが、東の丘の中腹を一直線に横切つてバネパについているのが分る。バネパの登りは木の葉が部分的に紅葉し、春になつて漸く秋らしい景色にぶつかつた。それに土は赤く一種異様な風景である。今来た道をふりかえると遠い雪の峰々は雲の中に包まれてしまつている。ここが最も最後の峠である。晴れていたらカトマンズから最も手軽な絶好の展望台といえるであろう。峠をこえると道はすぐ石畳となり、道の両側はすつかり青くのびた麦の緑が続き、バネパの古い寺が夕日に金色に輝く。バネパの新市街の手前の草原に最後の天幕が張つてあり、十五日間のキャラバンも遂に終つたのであつた。キャンプのすぐわきには米国のミッションのしやれた病院があり、久し振りに見る自動車も珍らしかつた。夕方の新市街の町に出てみたが、道端に山と積まれた野菜に目をみはつた。帰りのキャラバンはここに来るまで遂に野菜を思うように手に入れる事が出来

ず、大分野菜にあこがれていたものだ。

翌日の朝早く車のエンジンの音を寝袋の中で聞いて一瞬不思議な気がした。荷物は全部大型ジープに載せ、私達は三十年代のフォードに乗り込んだ。ポーター達も金を出し合ってトラックに乗り、大声で歌をうたっていかにも嬉しそうである。途中バドガウンに寄って見る。カトマンズより古い都と云われるだけに落着いた町であったが、この日は丁度ネパールの独立記念日とかで大変な人出であった。雑踏の中をもまれていると、昨日までのキャラバン道中が遠いことのように思えて来る。

翌日カトマンズのホテルでポーターへの支払いを済ませ、三日後隊長以下三名はカルカッタに先行した。荷物の輸送などの事務をすっかりすませ、残りの三名は二十六日にカトマンズを離れた。飛行機はビラトナガール経由のエヴェレストラインであった。

帰りの空はなんとなくかすんで、往きに比べると大分眺望は失われていたが、それでもなおエヴェレストは相変らず黒い三角形の尖頭に雲をなびかせて、一際くっきりとまわりの白い山々の上に君臨していた。

（以上山崎記）

奥峡湾偵察（一九五九年）

——極地に於ける軽量橇の性能テスト——

中村純二

近代の極地遠征に、航空機と雪上車が有効不可欠であることは、論をまたないが、それらが事故で使用出来なくなつたような緊急事態の際の行動や、根拠地を起点として行なう小パーティーの行動、或いは山岳地帯・氷河地帯・薄い海氷地帯等に於ける調査行では、人力や畜力に依存した軽量橇の果す役割もまた極めて大切であると考えられる。この報告は第三次南極越冬隊が行なつた小型犬橇による奥峡湾偵察行を中心に、軽量橇の性能や限界について述べようとするものである。

1 人曳橇

傾斜の急でない氷雪地帯を行く場合、荷物をかつぐよりも、橇で曳いた方が能率がいい。この場合何kg位の荷物を曳くのが合理的であろうか。外国隊の例では一人当り五〇〇lbという記録もあるが、犬橇の場合、一頭当り丁度自重程度の物を曳かせると最も能率のいいことから推して、人間、特に日本人の場合一人当り八〇kg程度ではないかと考えられた。

五月七日から一三日迄、中村、川口、平山の三名は、オーロラの高さを二点観測から求める目的で基地南方約六〇kmのシェッケ（Skjegget）岬に出かけた。この際約二一〇kgの荷物を三名で約三日間曳いて歩いた。結果は一日の平均進行距離一五kmであつて、予想より少なかつたが、その原因として次の諸点が考えられる。

(1) ランナーの材料としてグラザイトにポリエステル塗装したものを使用したところ、塗装不完全なためしばしば雪が附着したこと。

(2) ランナーの間隔は四〇cmであつて狭すぎたため、強風の際しばしば横転したこと。

(3) ランナーのアップターンが低く（一五cm）、高さ三〇cm程度のサスツルギにもよく突つかかつたこと。

(4) ラッシングにナイロンロープを使用したため、荷がゆるみ易かつたこと。

以上の他この頃は日射時間も一日四〜五時間になつていて、実働時間が制限された点等もあるが、最大の原因は一人あたり七〇kgという積荷が少し重過ぎた点にあつたように思われる。雪面の状況にもよるが、機敏な行動を行うには一人当り六〇kg内外におさえる必要がありそうである。

人曳橇の場合にも犬橇に於ける先頭犬と同様な先頭人が必要であつて、三人曳の場合一人は曳綱を少し長くして方位を定めながら歩き、他の二人はこれにならつて歩くと順調に進むことがわかつた。ナイロンザイルは低温でも弾力性に富むため、曳綱としては理想的な材料であることも判明した。クレバスやサスツルギに遭遇した場合、多少まわり道になつても必ずこれ等に直角に通過すべきであることは勿論である。

2 人犬兼曳橇

軽量橇で長期旅行を計画する場合、五月の人曳橇の経験からランナーの材質を適当に選び、その間隔を六〇cm程度に拡げ、積荷の高さがあまり高くならないだけの長さをもつた、軽い橇を試作する必要が感じられた。基地には予備観測の際一二頭曳の犬橇に用いた長さ七mの重い橇があつたので、これを北村と改造することにした。先ず重量を軽減するため、鉄製のブレーキやバンパーをはずし、長さを五mにした。ランナーには強度的に弱いセルタナやテフロンの代りに、グラスライトを貼りつけた。ランナーの間隔は、八〇cmとし、籐製のドカ（橇を操縦し積荷を便にするためのアーチ形の枠組）と走行距離計をつけた。このため七八kgあつた橇は三〇kgとなり、滑り易いものとなつた。欠点はランナーに縦溝がないために横すべりし易いことと、ランナーを短かくするにあたつて、前後の高いアップターン（二五cm）を生かすため、中央部を切落したが、このためランナー中央部の継ぎ目に僅かの段が生じたことであつた。

冬があけると共に村山隊長、北村等が中心になつて始めた樺太犬の橇引訓練もいささか成果が上がつて来たので、中村、北村の二名は一一月六日から三日間ラングホブデ（Langhovde）並びにインドレ（Indre）島方面に樺太犬四頭を連れ、改造した小型橇の試走に出かけた。

樺太犬は一年間無人越冬したタロー、ジローと、今度連れて行つたアクとトチで、いずれも訓練が中断されているか、不充分である上、四頭では絶対量として不足なので、最初から人間と犬が共に橇を曳く計画をたてた。犬橇の速度は普通人間の馳足程度のもので、兼曳橇の速度を幾らにするかということと、人と犬が曳綱につく配置をどうするかという二点が問題であつた。

橇の速度を人間の駆足と速歩の間で様々に変え、人間の位置も何種類か試みた結果、配置としては中央の主綱に樺太犬を二

列に左右交互におき、左右の補助綱に人間が一人ずつついて、人間の位置が先頭犬より一～二m前方に来るようにした時、比較的順調に進み、また方向変換出来ることが判明した。但し、雪面のいい所で樺太犬が走り出すと人間は遅れがちとなり、曳綱のもつれる欠点があつた。このような場合には人間は直ちに曳綱から離れ、一人は橇の前方一〇～一〇〇mを歩き、一人はドカの傍らに位置して号令をかけると共に、橇の舵をとるのが最も効率がよかつた。四頭の樺太犬の中、愛嬌者のトチは甘やかされて育つたため、絶えず人間に近寄ろうとして隊列を乱すので大いに悩まされた。前方に曳かないばかりか時には後方に曳こうとするので、トチだけ曳綱から放したところ、他の三頭がすべてトチに気をひかれ、あらぬ方向に走り出したこともあつた。結論として、その後の橇旅行にトチは同行させないことに決めた。

試走が目的なので余分のケロシンや食糧も積み込み、総重量二〇〇kgにして出かけたところ、予定通り二一kmを一〇時間で走ることが出来た。即ち人犬兼曳は可能であつて、この場合にも人間及び犬の体重の総計程度の積荷を曳くことが可能であることがわかつた。しかしながら走行時間の約半分は駆足になるので、人間は疲れ易く、他の半分は速歩になるので樺太犬の消耗が大きく、理想的な橇曳方法ではないと思われる。バラストのケロシンや食糧はラングホブデにデポした。

3　奥峡湾犬曳橇

春の小型橇旅行として、最初は人犬兼曳橇によるクック（Cook）岬への約五〇日間の旅行を計画したが、人手と時期の点で変更を余儀なくされ、中村、平山の二名がタロー、ジロー、アク三頭を連れ、一一月二〇日から奥湾（ハブスボツン Havsbotn）の偵察に出かけることになつた。

一一月二〇日（金）高曇

二〇日分の食糧と五日分の予備食を満載し、八時五〇分全員に見送られて基地を出発した。村山隊長は鎖に繋いだトチをお供に途中迄同行し、しきりに写真等うつしている。気温は零下二・六度C。テオイヤ（Teöya）島を過ぎる頃から風速三m/secの追風となつたので、橇に帆を掲げて南進した。午前中は犬達は極めて元気なので、完全な犬橇として走つた。一二時半、基地から一〇kmの地点で人間も橇曳に加わり夕方迄速歩で歩いた。我々は五月の人曳橇旅行の際シエッケにデポして来たα米、粉卵、乾燥野菜等の食糧並びに人犬兼曳橇試走の際ラングホブデにデポした燃料と食糧を利用することを予定して出かけたので、積荷の最も重くなるのは二日目の二二七kgであり、第一日目は総重量一八八kgであつた。基地から一三kmの地点で昼食、その後暫く進んだ所で村山隊長と別れた。隊長はトチにスキーをひかせて基地迄戻る予定であつたらしいが、トチは状況を察してしきりに橇の方に戻ろうとする。止むを得ずトチをひ

つぱりながら隊長は帰つて行つた。その後約一時間、基地から一五kmの地点で急に樺太犬が騒ぎ始めた。見るとトチが半分に切れた鎖をひきづつて橇のまわりを歩いている。暫く様子をうかがつたが隊長らしき人影は全く見えない。今更トチを連れ帰るわけにも行かないので、トチが或程度足手まといになる点並びに犬の食糧が窮屈になることは判つていながら、トチを旅行に連れて行くことに決めた。後になつて判明したことであるが、トチ自身は最後迄よき曳犬ではなかつた。しかしながら、トチがいるため他の樺太犬の士気は大いに上り、二日目以後は完全に犬だけで橇を曳いてくれた。かくして人犬兼曳の予定で出かけた偵察行は、犬橇で完蹈されることになつたのである。

一一月二一日（土）晴

五時起床、気温零下一二・二度C。一点の雲もない快晴で雪面は堅くクラストし、橇旅行には絶好の条件である。犬達にとつてももぐらない橇を曳くことは極めて愉快なリクリエーションであるらしく、人犬兼曳どころか人間を橇につけたままどんどん走る。途中ペンギンがルッカリーから見物に来る等の一幕もあつたが、一一時には早くも一三kmを走つて二日目のキャンプ予定地ハムナ（Hamna）岬に到着した。折から太陽には綺麗な七色のハローがかかつた。ラジュースでお茶を沸かして昼食、食糧をデポして午後は更に南下を続けた。氷舌端の先に氷山が密集して並び、恰かも港に船が停泊しているように見えるので、名誉波止場（ホノールブリッガ Honhörbrygga）と名附けられた悪場を約二時間かかつて通過した。五月はブリザードに遭い何回も橇が横倒しになる上、ランナーに雪が附着して困つた場所であるが、グラスライトのランナーは堅牢で、殆んど雪がつかず極めて順調に橇を進めることが出来た。グラスライトの板を切つて釘でうちつけるようなことをせず、最初から横滑り止めの縦溝とアップターンの弯曲をいれて成型し、接着剤で貼りつけた橇を用意するならば、一頭当りの荷重を三割程度増しても余裕をもつた行動が出来ると思われる。名誉波止場の左岸近くに高さ四〇m余りの無名島があり、丁度波止場を見下す灯台のように見えるので、五月に灯台島と名附けた島があるが、ここを二日目のキャンプ地にした。この日の走行距離は二七km、平均時速三・一kmであつた。春も漸く酣わで太陽は二一時近く迄沈まない。夕食後、燈台島並びにその近くのアザラシの繁殖地を散策し、悪路のためゆるんだスレッジメーターを補強した。

一一月二二日（日）晴

午前六時起床、気温零下一二・一度C、蜃気楼がよく見える。アザラシに気をとられている犬共を督促して、七時五〇分出発、九時に三日目の予定キャンプ地であるシエッケのデポ地点についた。予定していた食糧の他、ハムやベーコンも天然の冷蔵庫に保存され、品質は変つていないので携行することにす

る。犬もハムの分け前にあずかつて大いに元気を出す。一一時スカルブスネス（Skarvsnes）海峡に到着すると驚いたことには五月に比べて積雪量激減し、海峡入口附近は岩が所々に露出している。一時間余りシャベルで雪を運び漸く橇道を作つてこの難所を通過した。帰路は外洋を通ることに決める。午後ヒュッケバーク（Kjukevag）の氷舌帯を迂回する。ここでリードやプレッシャーリッジを何本か渡つたが、新米のアクとトチは尻ごみして渡ろうとしない。止むを得ず鎖からはずし、人間とタロー、ジローが力を合わせて渡つた。一七時一〇分、二一km強進んだ地点でキャンプをはる。

一一月二三日（月）快晴

朝の気温は零下一五・八度C、最低寒暖計は昨夜気温が零下二〇・二度C迄下つたことを示している。併し日中は零下五度C乃至一〇度Cであつて、越冬した身に殆んど寒さは感じられない。寧ろ白夜となつた南極は日射が物凄く、かつ乾燥しきつていて、連日の快晴は正に焦熱地獄であつた。犬橇を駆る場合、人間は犬の歩調に合わせ、半ば走るような状態となるので、すぐ汗ばんで来る。シャツ一枚になりたい位だが、首すじ等少しでも露出しようものなら、忽ち陽焼けで痛んでくる。私達は頭からヤッケをかぶり、片時も雪目鏡を離さず、陽焼けを防ぐお嬢さんのようにマスク迄かけて暑さに耐えて進んだ。僅かにピッケルを素手で握つて息ぬきをする有様だ。同行の平山はそれでも雪目になつて涙を溜め、私自身は皮のむけかけた唇にマーキュロを塗つて、土人のような顔をしていた。

正午、ヤルトーイ（Hjartöy）島西岬着。食後、島の偵察に出かける。この島はスカーレン（Skallen）と同様、東西方向に無数の氷河削痕が穿たれ、太いものは人間が横たわつてはいれる位ある。高度計で最高点の標高を計つたら一〇一mあつた。午後大きいプレッシャーリッジを迂回し、凹凸のはげしい海氷面に時間をとられながら、一七時、曳犬の名を記念したTochi露岩についた。夕陽が美しく、プリンス・ハラルド（Prince Harald）陸地の上にボツンヌーテン（Botmnuten）山がキラキラ輝いて見えた。二三時頃急に風が強くなりテントのステーを張りなおす。その後二時間で風はおさまつた。

一一月二四日（火）快晴

五時半起床、気温零下一三・六度C。八時出発、Aku露岩前を通り、九時半フレインオイヤ（Fleinöya）島西岬に着く。この島の西方及び西北方約五kmの地点に無名島が点在するのを発見する。島を偵察後ルンドバーグスヘッタ（Rundvagshetta）向けて直進した。一四時、円丘氷山群の中にはいりこんだ。この老朽氷山は勾配も小さく、いつ氷山の上りにかかつたかわからない位であるが、やがて蒼氷が出て縦横にクラックがはいり、或る場所では絶壁になつているので、初めて氷山の上にいることを知ることが出来る。氷山群の中にはいると、途端に視

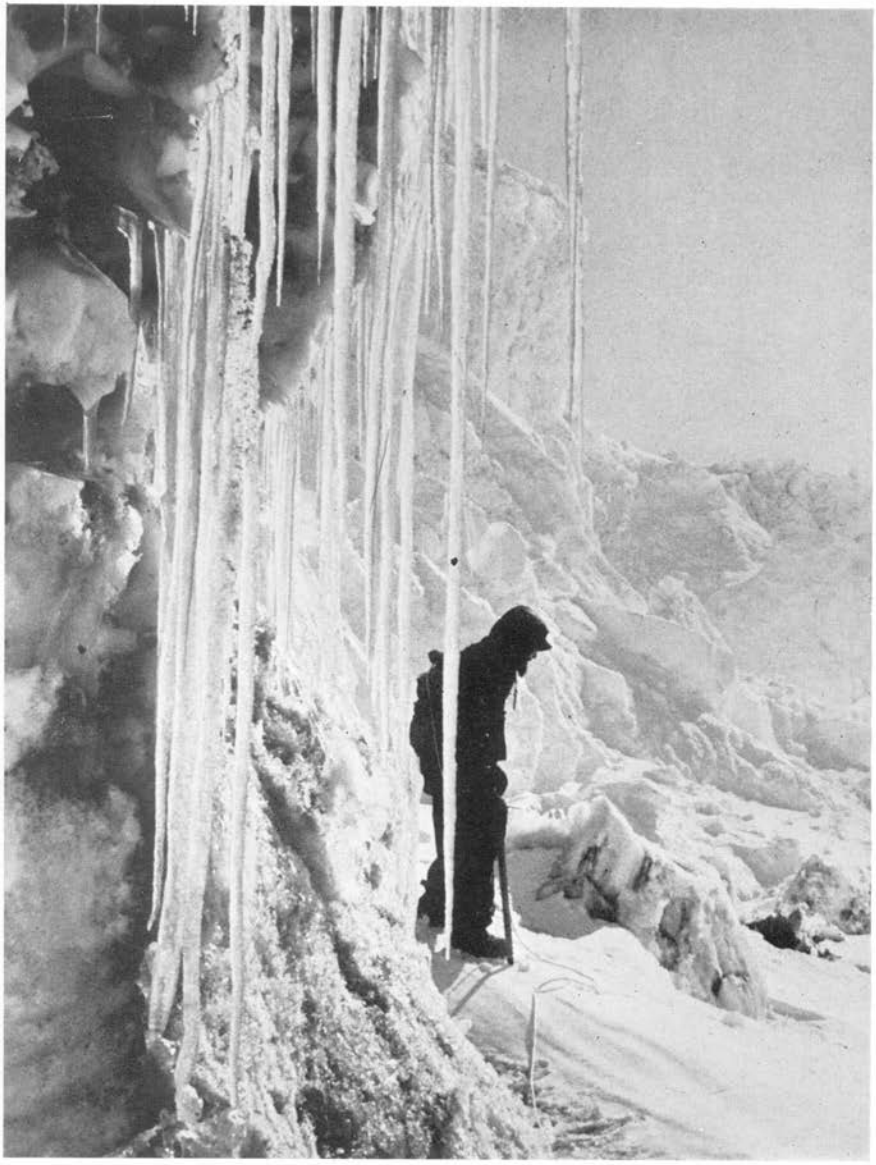
界はきかなくなり、コンパスだけを頼りに航行を続ける。氷山の降りにスピードを出しすぎてはじめて橇が転倒した。一七時ルンドバーグス ヘッタ西岬着、基地からここまでの走行距離は一一六・二kmである。

一一月二五日（水）曇

五時四五分起床、気温は零下一四・八度C。見ると足元にチーズの空箱が転がつている。不思議に思つて、帰路のためにデポした食糧包を調べると、冷凍肉とバターとチーズが盗まれている。昨夜タローとアクを鎖からはずしておいたのがいけなかつた。今回は計画外のトチが同行したため、もともと犬の食糧が不足勝ちなのであるが、特にタローは無人越冬をしたために、すつかり魚の味を忘れていた。それがわかつたのは旅行に出てからであつて、出発に際してはそうとは知らずに、基地に一種類しか残つていなかつた魚粉が主成分のペミカンを、犬の食糧として持つて来たのである。タローが最初ペミカンを残すのは、胃の工合でも少し悪いのだろう、くらいに考えていたのであるが、この事件でタローの餌が絶対的に不足していることが判明した。この日から昼食用のサラミソーセージとチーズはすべて犬に与えることに決めた。

幸い空は曇つていて、素晴しい行進日和といえる。ふりかえるとルンドバーグスコーラネ（Rundvagskollane）の秀峰が雲の上に鮮かに見渡される。Jiro島の前を通り、九時過ぎ円丘氷山群の中へはいる。急に雪が深くなり速度は落ちる。暫く進んだ時、平山は運悪く深い雪に隠れたクレバスに片足をとられ、軽い捻挫をおこしてしまつた。併しゆつくりなら歩けるというので、先頭人として橇の前方を歩いて貰う。氷舌を過ぎ最後の氷山のかげをまわると、正面に初めてインステオッデン（Insteodden）が顔を出した。そこまでは平坦な海氷である。この旅行はリュツォホルム（Lützow-holm）湾の奥を調べる目的で計画されたものであるが、大きい氷河のため、奥湾内部はおそらく氷状悪く徒歩でしか歩けないと考えられていた。そのため橇の終着点はベルオッデン（Berrodden）となつていたのであるが、橇の速度も予期以上に速く、橇曳に予定した六日目の午後早くもインステオッデンに橇で行き着ける幸運にありついた。インステオッデンの尖端にも地図にない幾つかの島が見出された。平山は早速クリノメーターで位置の測定をする。

正午突出海岸（ストランドネッバ Strandnebba）着、平山が足の手当をしている間に、突出海岸の前峰に登つてコースの偵察をする。予備観測の宗谷接岸時に撮影された航空写真と比べると、春なお浅く、クラックの数は少ないが写真で大きいリードになつている部分は、現在もやはりリードとなつており南北に走つている。併し、やがてその中に狭くて航行可能な場所を一カ所みつけることが出来た。目を左に転ずるとインステオッデン迄の海岸線が一望の下に眺められる。普通大陸の海岸線は



ルュツォホルム氷河の中を行く平山隊員

Z. Hirayama going through the Lützow-holm Glacier.

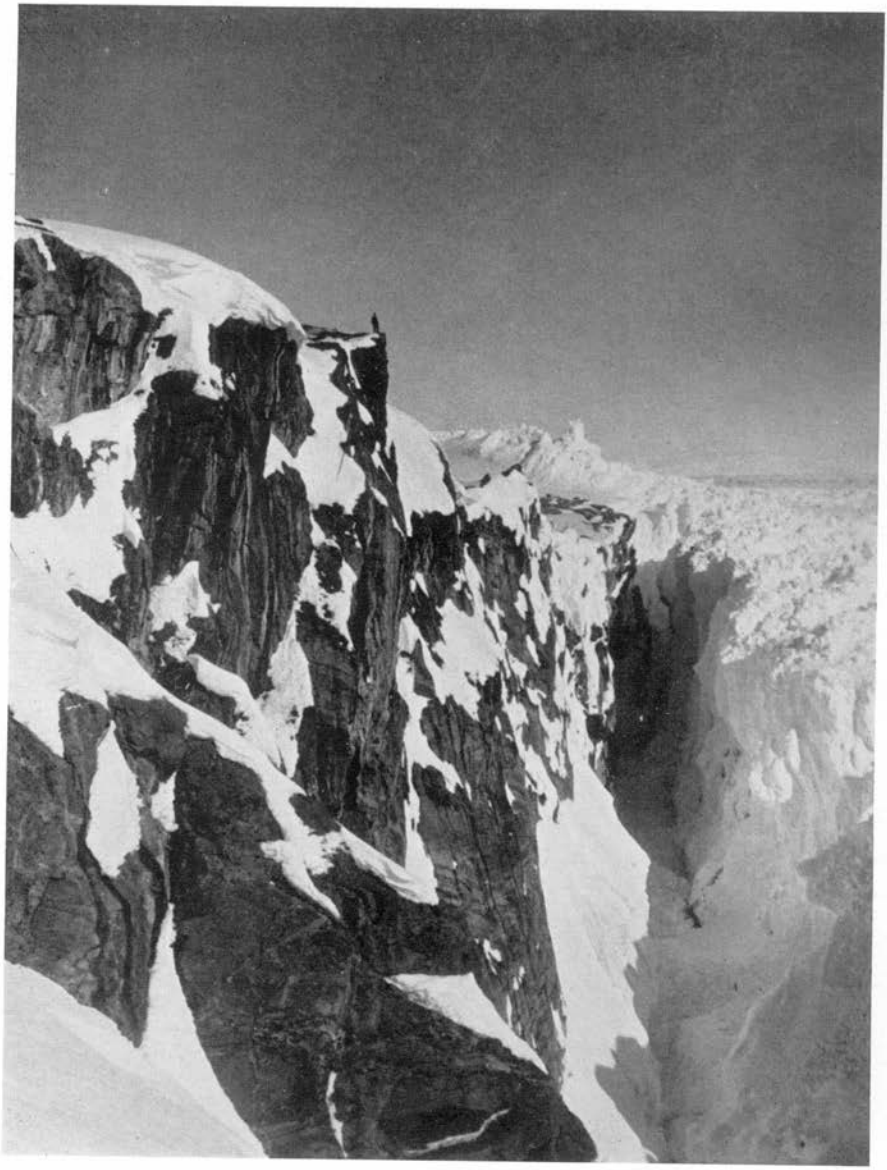
(Nov. 27, 1959) (by J. Nakamura)

名誉波止場で憩う犬橇、橇には走行距離計(右)と帆がついている

Dog sledge resting in Honhörbrygga; which has a sledge meter (right) and a sail. (Nov. 21, 1959) (by J. Nakamura)

奥氷河岳からルュツォホルム氷河を望む、氷河は左から右へ流れている

Lützow-holm Glacier as seen from Okuhyoga-dake. The glacier flows from left to right. (Nov. 26, 1959) (by J. Nakamura)



氷河の侵蝕作用で造られた高さ200mの岩壁。その頂に立つのは筆者
Cliff of 200 m high made by erosion of glacier, at the top of which stand the author. (Nov. 27, 1959) (by Z. Hirayama)

棚氷とよばれる高さ三〇m位の氷の崖となつているが、この部分は全く棚氷がなくて海岸から緩い氷の斜面がエステクレパーネ（Ysteklepane）の赤い岩峰迄続いている。これならば橇を上げることも可能であるが、今の場合、日数も限られているので、予定通り海氷上を進むことにする。

一四時半、インステオッデン着。基地から丁度一三〇kmの地点である。ここは正に奥峡湾インステフィョルデン（Insteffjorden）の玄関口という感じだ。右は氷河の無数に亀裂のはいつた氷塊の列、左は高さ五〇mにも及ぶ大陸棚氷、その間にクラックの多い海氷面が細長い露路のようにのび、行手は高さ二〇〇mのインステクレパーネ（Insteklepane）の大岩壁にさえぎられている。これから先、流石に道は悪く、隠れたクレバスや無数のプレッシャーリッジに屢々迂回を繰返す。氷河の土手は近づいてみると、平均高度八〇mにも及び、峡底をゆくような感じだ。夕陽を受けたインステクレパーネの巨岩が、少しずつ大きくなつて来た時、急に犬が吠えだした。見るとアザラシが一頭、氷盤の間に横たわつている。これ迄はペンギンやアザラシがいると必ず犬をよく監視して、互に傷つけ合わないよう注意して来た。併し今は状況が少し異る。犬の餌にする獣肉は不足を告げ、しかも数日間私達はここで滞在する。犬四頭で四日間かかれば、アザラシ一頭分の肉は大して無駄になることもない。かくして心ならずもアザラシ狩を行うはめに陥り、ピッケルで仕止めた上、直ちに調理用ナイフで肉を切り出した。この報いとして、その後数日間、私達は獣臭いチーズ片や羊かんを食べることになるのである。午後六時遂に最終キャンプ地である。インステクレパーネ直下のモレーン地帯に到着した。しつかり赤いナイロンテントを張り、ビフテキとパイン缶で豪勢な夕食をとり、犬にはアザラシ肉を与えた上、快よい睡眠におちいつた。

一一月二六日（木）曇一時晴

六時起床、気温零下八・九度C。昨夜はバリバリミシミシと氷河が絶えず音をたて、如何にも生きているという感じを受けた。夜中に少し風が出たが、起きてみると晴間も見える。出来るだけ南進すべく、ツェルトと二日半分の食糧を用意し、四頭の樺太犬も綱から離して連れて行くことにした。ステップを切つてインステクレパーネⅢ峰への急な斜面を登り始める。漸くのことで氷河のデブリの頭と同高度の地点に達し、高度計を見たら海抜八〇mあつた。遠くからだとせいぜい高さ十数mの土手にしか見えなかつたので、この時迄はずいぶん遠近感など誤まつていたわけだ。ほんの三〇mそこそこのスロープだと思つていたのが、実は一五〇mあり、小さな崖だと思われていたⅢ峰の西壁は高さ二〇〇mのオーバーハングした大絶壁であつた。最も心配した大陸斜面のクレバスがこのあたりには殆んど無いので、アンザイレンしないでⅡ峰、更にⅠ峰へと登つて

行つた。I峰の標高は四七〇m、併し、なお南東方向に大陸斜面は高度を増し、氷河の奥がよく見えないので等高線に沿つて南進することにした。これ迄の地図では70°08′Sあたり迄しか記入されていず、その南で果して氷河が南へのびているのか、或いは東の方に大きく迂回しているか不明であり、また氷河の両岸が航行可能であるか、或いは傾斜が鋭く全く人間を寄せつけないのか、ということもわからなかつた。今度の旅行は、この点を確かめるのも一つの目的になつていた。

午後から空は晴れ、犬達も雪面に転がつたりじやれ合つたりして元気がよい。ボツンヌーテンはますます近く、三つの岩峰と少し離れた北峰の様子もよくわかる。併しながら一つの丘を越すとまた先に丘が見え、なかなか氷河の奥を見とおせる場所に行きつかない。時間も容赦なく過ぎて、もう引返そうかという意見も出た時、遂に最後の氷丘をきわめることが出来た。ここからだとリュツォホルム氷河の本流が一〇〇km位先迄も見え、氷河は南南東方向に一直線にのびていることがわかつた。しかも氷河の奥は比較的緩い蒼氷の扇形に開いた斜面になつているらしい。今迄氷河の右岸は航行に不適と考えられていたが、突出海岸とインステオッデンの間で大陸に登りユステクレパーネ附近で高度を四〇〇m程度に高め、以後等高線に沿つて南進するならば、プリンス・ハラルド奥地の山岳地帯に行くことも可能と思われる。眼下にはこの地域での最南露岩と思われる奥氷河岳が見える。兎も角そこ迄行くことにして急な斜面を降り始める。途中から雪はなくなり蒼氷となつたのでアイゼンを着ける。更に傾斜が急になつたのでアンザイレンする。犬達もよく滑るのでもはや遊びまわらず、人間のステップ通りにゆつくり降りて来る。奥氷河岳の手前で海氷面に出たところ、驚いたことにはアザラシのいた形跡が見られた。殆んど隙間のないデブリの間に僅に溜つた海水の中を潜り続けて、よくここまで来たものだと、ただただ驚く他はない。

一六時半、アイゼンをつけたまま奥氷河岳の頂上に立つ。航空写真から判断してほぼ70°06′S, 38°39′Eの地点だ。岩石磁気や地質のための岩のサンプルを集め、クリノメーターで地形を調べ簡単な気象観測を行う。リュツォホルム氷河は対岸との幅一〇kmの谷間を隙間なくデブリで埋め、南から北に一直線に流れている。今回はこれより奥にはいる必要もない。幸い白夜で空も明かるいので、強行だがこの日の中にキャンプに戻ることにした。

氷河沿いに右岸をたどる。この辺りは傾斜も緩く蒼氷もないので安心して歩いていると、突然片足が沈み、続いて他の足も沈み忽ち胸迄クレバスに落ちこんだ。両手で漸く体を支える。平山にも手伝つて貰つて這い出してから下をのぞくと、クレバスの幅は約五〇cm、斜面に直角に斜に一〇〇m近くも亀裂がはいつている。新らしい場所を歩く時はアンザイレンするのが鉄

則だ。この後私達はザイルを絶対離さないようにした。

一九時半、中氷河岳着、陽は漸く傾き風も強くなる。夜食を食べていると急に寒さを感じて来た。犬も疲れて来たらしくあまり歩きまわらない。チーズ等与え二一時半、一四時間のアルバイトを終つてテントに帰つた。気温零下一一度C。

一一月二七日（金）晴

九時迄朝寝をする。テントの外には既にまばゆいばかりの青空が拡がり、絶好の氷河偵察日和だ。インステクレパーネの切り立つた二〇〇mの絶壁と氷河の間のデブリの中に、アンザイレンしてはいりこむ。アクとトチがついて来たが雪庇に乗らないかと心配で、少し先へ行きそうになると呼び戻す。タローとジローは一昨日のアザラシの肉でも食べに出かけているらしい。時々氷壁の一角が崩れて一〇秒近く継続する雪崩となり、また絶えずミシミシ音をたてているので、あまり気持はよくない。次第に奥に分けいるに従つて岩と氷の隙間は狭くなる。この附近の氷河の壁は岩壁に削られてテラテラ光り、水平に無数の条痕がはいつている。よく見ると壁の中には氷河に削られた岩屑も沢山含まれ、岩が氷河に削られている様をまざまざ見せつけられた気がした。基地附近にはラングホブデの北壁やシエッケの南壁等高さ数百メートルの垂直な岩壁があつて、これ迄はその生成理由がよくのみこめなかつたのであるが、この時になつてこれ等はすべて氷河の偉大な侵蝕作用に因るものであることを、よく確信することが出来た。北壁や南壁はかつてこの地方が東から西に向かう大氷河におおわれていた時代に、その侵蝕によつて作られたものであるに違いない。スカーレンやヤルトーイに見られる東西方向の氷河削痕ともつじつまが合う。氷河の動きは鈍く滞在中にも移動の量を測ることは出来なかつたが、物凄い力で北に押し出している事実は、その下流がインステクレパーネを出た後も幅を変えることなく、蛙島（パッダ Padda）附近まで直線的に伸び、その先に更に円丘氷山群を形造つていることからもうかがわれる。氷河の流れのスピードは一般に年間約二〇〇m乃至三〇〇mであると考えられている。

一一月二八日（土）晴

六時起床、気温零下一三・一度C。今日は一九五四年富士遭難の日にあたる。遭難者のためにモレーンで高いケルンを積んだ。帰路は未踏の露岩地帯を飛石づたいに歩き、岩石のサンプルを集め、標高や地形を調べるのを任とした。氷象や地学の調査を始め出すたびに、もしその方面の専門家がこのような宝庫に来れば、どんなに有益な仕事が出来ることかと想像された。私達はインステオッデンからインステクレパーネまでの露路のような海氷面での主風方向が、北西方向に落ちている広大な大陸斜面に支配されて、南東風となつているのに感心し、ラングホブデから奥氷河岳まで露岩の種類が殆んど変らないのに驚き、氷河のスケールの大きさに心を打たれるばかりであつた。

インステオッデンをまわる際、近路をとることによつて、橇を実際大陸に上げられるかどうかをテストしたところ、このテストは完全に成功した。

帰り道になると樺太犬はそれと察して確かに元気づく。ベスレクナウセン（Vesleknausen）の先の円丘氷山群も、往路に二〜三割勝る速度で通過し、一八時三〇分ルンドバーグスヘッタ西岬に到着した。方向感はタローが最も優れているので、普通タローを先頭犬としたが、難路になると老年のせいかしきりに道を選んで迂回しようとするので、アクを先頭犬とした。ジローは最も力があり、終始曳犬の中心勢力となつて働いた。トチは絶えず周囲の状況が気になり、最後まで一人前に曳くことをしなかつた。またひとたびクラックに直面すると曳綱からはずされても渡ることが出来ず、好物の乾肉を示されることによつてやつと渡るという有様であつた。この日の午前中など遂に海水の中に落ちこむ醜体迄演じた。

さて、第一次越冬隊の旅行経験から案出された、犬橇荷重に関する公式と称するものがあり、次式であらわされる。

$$W_t=\frac{4\,rtfgaW_dN}{V}$$

但し W_t は橇を含めた全荷重（kg）。

V は走行速度（1日の走行距離 km/走行時間）。

r はランナーの材料で悪い場合〇・八、滑り易い場合一・三の程度。

t は気象条件の係数で向い風や気温の苛酷な時〇・八、普通の時一・〇の程度。

f は犬のファイトを表わし〇・八〜一・二。

g は地面の状況を示す係数で深雪やサスツルギ多い場合〇・二、固くて滑らかな場合一・七の程度。

a は犬の健康状態や訓練状況を示し〇・八〜一・二の値をとる。

W_d は犬の平均体重（kg）。

N は犬の頭数を表わす。

例えば第一日目は $W_t=188$ kg、八時間で二一km歩いているので $V=2.65$, $r=1.5$, $t=1.0$, $f=1.0$, $a=1.0$, $NW_d=121$ kg であるから、$g=0.67$ となる。実際第一日目は雪が深く、スカブラが発達していて、$g=0.7$ 程度と考えられた。一二月四日に私達は犬が滑らない平坦な蒼氷という最良の条件に出合つたが、この時は人間も橇に乗つたため、荷重は二二三kg、平均時速四・一〇km、犬の総体重一一一kgで $g=1.75$ という値が出た。各々の係数の決定には多分に個人の主観がはいるけれども、上の公式は数頭だての小形犬橇の場合にも適用されることが明らかとなつた。今後犬橇で時速三・五km程度の快適な旅行を行なおうとする場合、上の公式は積荷をどの程度にするのが合理的かを、単的に知るのに役立つと思われる。

一一月二九日（日）曇後ブリザード

漸く天気は崩れ始め空は鉛のように重い。明方零下一〇度C近くあつた気温はどんどん上り、九時には零下三・四度Cになつた。空身でルンドバーグスヘッタの偵察に出かける。輝石角閃岩が多く、エギーユ・ド・何々と名付けてよさそうな針峰がそこここに見られる。面白い形の迷い子石も見られる。最高点から東の谷間に降りて来ると半分雪に埋まつた湖が見えて来た。氷河湖である。湖畔に地衣類など見られるので周遊を始め、丁度半周した時サラサラと云うせせらぎの音が聞えて来た。標高にして一〇m程下に、もう一つ別な氷河湖があり、春の雪解け水が上の湖から下の湖へ注ぎ込んでいるのである。越冬中すべての氷は凍りつき、用水にも不便を感じていた私達にとつて、この快いせせらぎの音は、一挙に暖い豊かな世界に引戻されたような錯覚を呼起すに充分であつた。犬達は喜んでペロペロ舌を出して水を飲み、私達は氷柱の垂れた一枚岩の上を、小波さえ立てて流れる清冽な水を飽きずに眺め、スケッチをしたり、写真に収めたりした。

正午過ぎキャンプ着、コラーネ（Kollane）まで行く予定であつたが、降雪激しくブリザードになつて来たのでテントに入り昼食、沈澱と決める。気温は一八時零下一・六度C迄上り、風速二六mとなつた。二二時頃から降雹となる。

一一月三〇日（月）ブリザード

六時四〇分起床。気温は相変らず高く零下三・八度C。視程は少しよくなり、時々コラーネの頭も見えるが、地吹雪激しく、今日も沈澱と決める。一度ブリザードになると長い時は約一週間続く。そのつもりで食糧は制限しなくてはならない。予備食を規定通り食べ始める。橇旅行には何と云つても荷重の大きいのが致命的である。この意味から予備食は出来るだけ軽く一人日 Net 800 g に抑えた。これで二八〇〇カロリー位あるから生命に別条のないことは確かである。しかしながら連日の重労働の末の八〇〇 g ではやはり量的に不足で、空腹感はまぬがれない。一〇時頃には昼食をとり、一五時過には早くも夕食をとつた。合間にドストイェフスキイも読むが、話は自然食糧問題に落着き、結局徒歩又は犬橇旅行のような労働の必要な旅では、予備食は少くも一人日一三〇〇 g、三五〇〇カロリー以上携行すべしという結論を出した。又当然の要求として含水炭素よりも脂肪や蛋白質をより多く欲する。一時的に嗜好まで変化するのは不思議な位であるが、絶対にそれは確かな事実であるらしい。このような見地から肉と脂を主成分としたペミカンの出現の、一日も早からんことを祈つて止まない。橇旅行で経験した最も切実な問題は、実はこの予備食の問題であつて、ヒマラヤ遠征はもとより、内地の登山に於いても、優秀なペミカンの効用は測り知れないものがあると思われる。（詳しくは《農産加工技術研究会誌》第七巻第四号、一九六〇年、一七一～一

七七頁、中村「極地の行動食について」を参照。）

一二月一日（火）曇後晴

五時五〇分起床。気温零下六・八度C。ブリザードは止んで高曇、橇はすつかり雪に埋つているので掘出作業にかかる。犬も食糧を平常なみに与えられ元気がいい。円丘氷山群を通過するのにも馴れ、一〇時半にはコラーネ直下に達した。

主峰（三九二m）、奥峰（四一六m）、前峰（一七五m）の独立した三つから成り立つルンドバーグスコラーネは三面共氷河に囲まれ、岩の形も面白く、眺めもよい。下りはグリセードを大分楽しむことが出来た。山の上では一緒に歩いていたジローとトチの中、トチの姿が途中から見えなくなつた。暫く橇の傍で待つていたが、戻つて来る気配もないので、いい気なトチの散歩に苦笑しつつ、橇を動かし始めた。四〇分位進んでも未だ現われないので、今度は心配になり、本格的に捜索に乗出すこととなつた。名前を連呼しつつ、氷山や氷丘脈の間を廻つているとき、円丘氷山群の周縁部でトチのけたたましい叫び声が上つた。果してクレバスにでも落込んだのか、アザラシでも見つけたのか、兎も角そちらの方に歩き出した時、やつと姿を現わした。失踪事件に気付き捜索を始めた時は橇の位置を変えたことも悔まれ、先ずコラーネ直下に戻り、その後更にルンドバーグスヘッタまで引返して一晩明かすこと迄考えたが、こうしてアザラシのいる所へ遊びに行つていたことが判明すると、急に腹立たしくなり、ポカポカなぐりつけて、今後トチだけは曳綱から外さないことを申渡した。こうなると余計トチの足は重くなり、旅行が終るまでトチの曳犬としての効用は零か負で押通される結果になつた。

二〇時半ベルオッデン（Berrodden）着。タイド・クラックの内側にテントを張る。

一二月二日（水）晴

午前中ベル岬の散歩。スカーレンと同様氷河の侵蝕のあとすさまじく、岩も比較的石英が多い。露岩地帯の上には奥地から氷河で運ばれて来たモレーンが、幅数十メートルの縞状に積上げられている。西方はデュプビクネーセ（Djupvikneset）丘とデュプビカ（Djupvika）湾に対し、岬の先端にあるスリーピング・ビューティと名付けられた何かの寝姿のように美しい丘がはつきり海峡で岬と分かたれ、大陸の一部でないことなど判明した。橇の積荷も日毎に軽くなり、橇曳も調子づいて快調に走る。

ここで積荷のことに触れるならば、食糧は二名二五日分、一人日一・五kg、予備食一人日一・〇kg（いずれも包装、カートンボックス共）計七一kg、燃料一日〇・六l缶、一・五缶、二四日分計二八kg、犬用ペミカン一日一頭一・五lb、計五〇kgで、これ等は一部以前にデポした品物を利用し、又往路の各所にデポしながら進んだので、平均六〇～七〇kgを常に運んでいた計

算になる。使用した結果、夏の旅行ならばケロシンは一日一缶で足り、沈澱の際の暖房用に別に四缶ほど用意すればいいことが分つた。食糧は肉や粉卵、砂糖、バター等に重点をおき、予備食の量を増すべきこと前述の通りである。

装備は計六〇kgとなつた。その内訳は次の通りである。

2人用ナイロンテント一式（ウインパー）	8.5 kg
エアーマット 3（予備 1）	2.1
シュラーフ（一重但しカバー共）	9.0
ラジウス 1（メタ 3 箱）	2.0
炊事具一式	2.5
ナイロンザイル（15 m、9 m/m）	0.5
ピッケル 1、アイゼン 2、カラビナ 4	2.6
シャベル 1、ブラシ 1	2.0
帆（帆柱はゾンデにも使用）	2.0
ツェルト	1.7
シュトック 1 組、犬用ステー 2	1.8
修理具一式（グラスライト予備を含む）	1.5
医療品一組	0.4
計器類	3.0
ラッシング用麻ロープ 2 本	1.0
犬用鎖及予備ハーネス	1.4
私物（カメラ、衣類、日用品）2人分	18.0

月 日	積荷重量 (kg)	犬橇走行距離 (km)	走行時間 (h)	犬橇平均速度 (km/h)	g	偵察の為の歩行時間 (h)
Nov. 20	116	21.7	8.0	2.65	0.67	—
〃 21	185	26.7	10.3	2.60	0.75	1.0
〃 22	176	21.3	8.0	2.67	0.99	0.5
〃 23	156	23.7	8.0	2.95	1.06	1.0
〃 24	151	23.5	8.5	2.77	1.10	0.5
〃 25	134	20.6	8.5	2.42	0.77	1.0
〃 26	129	—	—	—	—	13.8
〃 27	124	—	—	—	—	7.0
〃 28	136	21.6	8.0	2.70	0.92	3.5
〃 29	131	—	—	—	—	3.0
〃 30	126	—	—	—	—	—
Dec. 1	125	16.6	6.0	2.76	1.07	6.5
〃 2	142	17.1	6.2	2.80	1.04	5.2
〃 3	142	24.3	7.8	3.10	1.04	0.2
〃 4	141	8.2	2.0	4.10	1.75	7.8
〃 5	156	29.7	8.5	3.60	1.66	3.5
〃 6	160	3.7	0.9	4.10	1.59	5.5
〃 7	155	4.3	1.75	2.45	1.64	7.0
計		262.3	92.5			67.0

エアーマットは非常の際リードを渡るゴムボートにもなるもので、ふいごを持つ代りに予備を持つたことは結果的に見てよかつた。私物中の羽毛服は一度も使用しなかつた。代りにウィルド、双眼鏡その他の器械類を携行すべきであろう。炊事具も

材質と個数を考慮することにより数割軽くすることが可能である。

この他に石や地衣類のサンプルが途中から採集され始め、最終日にはその重量が約五〇kgに達した。又人間が積極的に橇を曳いてマイナス六〇kg分位かせいだこともあり、橇に乗つて平均五〇kg程度の積荷になつたこともある。この結果日割別の全荷重や平均速度、gの値は別表のようになる。

夕刻スカーレビクハルセン（Skallevikhalsen）着、羊背岩で覆われた三〇〇m高点や、リュツォホルム湾沿岸中最大と思われる氷河湖など偵察する。しかしながら茲までは第一次越冬隊も来て、専門家が調査をされている。このあと橇のグラスライトランナーがはがれて張替を行つたり、夏の訪れと共に氷山脇に発達した深さ六〇cmのパドルに橇全部が浸つて難行したり、スカルブスネスに湖面が海面下三八mの氷河湖が存在し、その水の塩分は海水程度であることを確めたり、海峡の出口に新しいペンギンルッカリーを見つけたり、ブレイドバーグニパ（Breidvagnipa）という素晴らしいゴルジュや岩峰を抱いた散歩の別天地に感激したり、スノーピジョンの巣を発見したり、彩雲やレンズ雲、乳房雲を眺めたり、最後に一二月七日の夕刻ハムナ岬で雪上車隊と劇的会合を行い、橇も雪上車に載せて一気に昭和基地に帰ることとなつたが、その時自由になつた四頭の樺太犬は皆よく走つて全員の賞讃を得たこと等、幾つかのエピソードもあつたが、一つには既に何名かの人間が足跡を印した場所での出来事であり、一つには主題を離れた問題でもあるので、これ以上立入らず、以下この旅行によつて得られた橇旅行の結論のようなものを述べるに止めたい。

この一八日間の旅で樺太犬は四～五頭のチームの場合にも、完全な一〇頭以上のチームにおけると同様、十分能率よく橇を曳くことが実証された。最初考えたように人と犬が力を合せて曳いたのは第一日目と、クラックを渡る場合、並びに急坂を登る時だけで、他は一人がドカの傍に位置して犬に号令をかけ、一人が先頭犬に行先を示す意味で橇の前方を歩けばよかつた。また橇に関する限り重大な故障は起らず、グラスライトランナーを接着剤ではりつけ、簡単なブレーキをつければ、ほぼ完全な軽量橇の期待出来ることも明らかとなつた。この結果から判断して、よく訓練された樺太犬四～五頭を使用出来るならば、二名乃至三名の実働日数三〇日、予備日数一五日、計四五日の軽量橇による極地旅行が可能となり、更に冬期海氷の厚い時期に雪上車で適当な前進基地に食糧、燃料のデポをおく等の処置をとるならば、実働二箇月、総期間三箇月の奥地旅行も十分可能であると考えられる。

（一九六〇・九・九）

（最近南極の地名が幾つか公式に命名され、これまでの仮称リュツォホルム氷河は「白瀬氷河」と呼ばれることになつた。—中村）

マッターホルン登山鉄道

――アルピニスムの終焉――

ギド・レイ
日高信六郎訳

……年七月十四日朝まだきから、ゼルマットの町では、お客(ツーリスト)や住民のむれが、マッターホルン登山鉄道開通式に列席するため、停車場にむけて急いだ。

広場には望遠鏡の砲列が敷かれ、そのピカピカみがき上げた砲身は、最初の列車登攀のあとを追つて行けるように、山の方にむけられ、そのどれにも札がさがつて「望遠鏡でマッターホルン登り、タッタ二フラン」とある。

鉄道の駅は総樅づくりの、サッパリとして軽快な、彫刻をほどこした様式で、スイス風と呼びならされているものだが、実はあの詩的な山小舎(シャレ)とは似てもつかない。むかしのよい時代に、スイス風景の特徴をなしたあの山小舎は、今日ほとんど見当らなくなつて、山奥のすみつこに押しやられてしまつた。

万国旗が駅の建物の上にひるがえつている。今日は国際的のお祭りなのだ。出札小屋は沢山の色とりどりの大広告看板の下にかくされている。中にも眼だつのは、ある生命保険会社の広告で、登山鉄道の事故で死んだ人には、数百ポンドの保険金を支払うといつて、よその登山鉄道で起つた事故と支払つた保険金の例を挙げており、マッターホルンのあちこちに建つことになつている高山療養所を経営する会社の広告は、胸のよわい人たちに呼びかけている。

わたしは往復切符を買つた。

マッターホルンの頂上はパイプをくゆらしている。しかしこれは、例の嵐の前ぶれの雲ではなくて、そこに停つている機関車の烟だつた。

停車場で、公式の招待客を最上の儀礼をもつて迎えたのは、アメリカ人の支配人デヴィソン氏と高級職員で、みな外国人であつた。

会社の下級職員はこの辺の人たちで、そのほとんど全部がガイドやポーターあがりである。かれらは、登山鉄道が出来ると、商売があがつたりになると見切りをつけ、ピッケルやザイルを草むらの中に打つちやつて、もつとやさしくもつと金のもうかる新らしい仕事についたのだ。いずれもくだらぬガイドたちで、自分の職業が好きでやるのではなく、金ほしさにやつていた連中、もとはつまらぬ兵隊、今は脱走兵なのだ。かれらは、ま新しの制服が身につかず、ガッシリしたいかつい身体に破れた黒服を着込み、ムッツリして、さげすみの眼をかれらに注ぐ一むれの人たちの前に立つて、気恥かしそうに見えた。

この人たちこそ、昔ながらの本もののマッターホルンのガイドなのだ。かれらこそ、五十回もお山にのぼり、山の岩場を自分たちの家の敷石のように、隅から隅まで知りつくしているのだ。今まで、かれらが自分たちのものと信じていたけわしい頂上に、この鉄道がのぼつて行き、アルピニスムのにが手とされている聖なるお山にふさわしい尊敬などは考えもしないで、お祭り気分の手合いが、気がるに登つて行こうとするのを、かれらは黙りこくつて、いたましげに眺めているのだナ。

この小さな列車が電鈴の響きにつれて動きだし、諸国の避暑客が声をあげ、ハンケチをふるうちに、登りはじめたとき、わたくしはあらためて、この黒衣無言のつわものの一むれに眼を転じた。この小さな列車と共にかれらの一切の過去が消え行くのであり、かれらの心に大きな廃墟が出来るのだと思つた。

*　　*

客車は美しく上品だつた。腰かけは作りつけでなく、どんな傾斜を上下するときにも水平になるように、うまく工夫がしてある。定員は二十人ばかり、人智の巧をつくした強力な蓄電池で動く簡単な機関車が、小さな列車を三本のレールの上で、少しの動揺もなく推して行くのである。

わたくしは、むかしあんなに汗を流し、息を切らして登つたこの山の急斜面を、こんなにも速く、楽々と引きあげられるのを感じて、全くあたらしい感慨に打たれた。軽気球のつり籠から見おろすときのように、谷底がだんだん遠ざかつて行くのが見える。あたかも自分たちはジッと動かずに、大地がズリ落ちて行くようである。

ゼルマットから黒池までの線路は、らくな斜面をつたつて、はじめは牧場のなかを、少しのぼると高山植物の叢や、石

楠花の花さく潅木のあいだを、ゆるいカーヴを画いてのぼつて行く。下の方に見おろされるのは、ひろい谷を流れる大河のようなゲルナー氷河のあおい波涛だ。その源はモンテ・ローザの根もとはるか、グレンツの高いところに認められる。

二十分のうちに二千七百メートルの黒池についた。そこには百の客室をもつ堂々たるホテルがあつて、トリノから取りよせたヴェルモットを、われわれに接待してくれた。

ホテルの前の小さい広場で、英人の子供たちが数人、ザイルを結び、ピッケルをもつて、小さな岩によじのぼり、登山の真似ごとをして遊んでいる。今にしくじつて、見はつているお母さんからお尻を叩かれるだろうと気になつて、……年から以後、アルピニスムは子供の遊戯になり下つたと思いながら、わたくしはそこを離れた。

むかし登山家に向つて用心しろと忠告したこわがり屋たちは、この駅でわれわれを見すて、われわれだけで登山をつゞけた。

登りはだんだんけわしくなり、まわりはだんだん荒涼として来る。われわれはいよいよマッターホルンそのものに近づいたのだ。山は突如として、われわれを圧してのしかかり、いちばん気のつよい鉄道登山客にさえも、尊敬の念を起させるのであつた。

鉄道はヘルンリとマッターホルンのピラミッドとをつなぐ長い山稜をよじ登つて行く。まだあちらこちらに、まばらな草むらがいくらかあつたが、間もなくいつさいの草木はなくなつてしまう。ヘルンリ小舎の近く、三千三百メートルのところで、二度目のみじかい停車をする。トーマス・クック旅行社から、ロンドン―ゼルマット―マッターホルン往復の通し切符を買つて来た二人のお客は、切符にはこゝに療養所があるように書いてあるのに、まだ建つていないと文句を云つた。

隠退したガイドが居て、お金を出すと、いかつい二匹の野生山羊（クン）の剝製（ブーク）を見せてくれる。これもアルピニスト族と同じく、この世から消えうせてしまつた、気高い獣の一族のあわれなきがらである。

＊　＊

ヘルンリからあとは、マッターホルンの本体にとりつくのだが、そのそうとうの部分は、かつて登山隊が声も立てずに急いで通つたのとおなじ、危ういみちを辿るのであつた。

いちばん落石がひどいところでは、堅固な鉄板を断崖にさしかけて、線路を保護し「雪崩に注意」と十カ国語で書いた制札が立ててある。この崖を半分通りすぎたかと思う間もなく、だんだん強くなつて来る鈍い（にぶ）響きがわれわれをゆさぶつた。覆いの上に小石が跳ねるとすぐ、続いて上のほうからなだれ落ちる岩と雪とのどえらい塊りが、すごい響をたてて覆いの鉄板をうち、はね返つて、大きな抛物線をえがいて奈落の底に消え去つ

た。

これがマッターホルンの大砲、すなわちこの山の最初の征服者ウィンパーが記した、おそるべき「砲撃」である。

列車は速度をはやめて登つて行くが、お客は最も気のつよい鉄道アルピニストさえも、青くなつて、引きつつた唇に酒瓶をあてがつている。

支配人のデヴィソン氏は、われわれがこわがるのを見て、気持よさそうにほほえんでいた。

列車は第一トンネルに這入つた。われわれは快適な座席にもたれ、山のおなかのなかをつきぬけて、眼もくるめく絶壁を見なくて済むので、気がらくになつたのはありがたかつた。

トンネルの長さは二百メートル、傾斜は四十五度ある。五分のちに外に出た。客車はシグナルをすれすれに通りすぎて、線路工夫の小舎に近づく。電鈴がなりひびき、列車はかるいショックとともに停まつた。

「上の小舎（アルプ・ヒュッテ）」と車掌が叫ぶ。お客は窓から、物珍らしそうに眺めている。二千メートルの断崖のうえにさしかけてある、せまい足場のうえに降りたつ気は起らない。

* *

われわれは今ふるいマッターホルンの小舎にいる。これは四十年あまりまえに建てられた、スイスがわ最高の避難小舎だつたのだ。

小舎は岩に背をもたせかけ、身をよじらせて建ててある。まつたくの鷹の巣だ。

嵐はこの高根のぬしで、はげしく吹きぬけるが、この小舎とは知り合いで、大事にしているように見える。此処より以上に、世を遠ざかり、生きものから離れたところを想像することは出来ない。

しかし、こんなひよわい板囲いが、山で夜をふかしたり、不意のあらしに遭つたりした、不要心な連中を何人たすけたことだろう！　マッターホルンでみちを失い、死が身ちかに迫るのをヒシヒシと感じるとき、どんなにかこの小舎が恋しく思われたことだろう！　成功の期待や、失敗の落胆や、勝利のはげしい息づかいを、この何の奇もない避難小舎がいくたび宿したことだろう！

ところが、今やここには孤独もなければ神秘もなくなつて、列車ごとに、好奇心にもえるやからが通りすぎるだけだろう。

「上の小舎」は「ゼルマット――マッターホルン幹線工事小屋第四号」になり下つてしまつた。

列車が動き出すころ、われわれは、二百メートルほど下のところに、変手古な人間が二人、丁度ちいさな砂丘を登ろうと、無駄骨を折る蟻のように、骨を折つて、くるしそうに、けわしい斜面をよじのぼるのを見つけた。

多分アルピニスト最後の生残り、あの年老いたタルタラン

が、いま一人ガイドの生残りをつれているのであろう。

デヴィソン氏はかれらを見て、あわれみの微笑をうかべた。われわれはかれらに呼びかけた。かれらはチョッと立ちどまつて、上をながめ、いまいましげに拳をつき出して、のぼり行く列車を呪つた。

その頃になると、ヴァリスの高い山々のみねは濃い雲に覆われた。それはあたかもこの山々が、かれらの輝しい敵手が辱しめられるのを見るに忍びず、草を被つて姿をかくしたものの如くであつた。間もなくそのマッターホルンも、不吉な日にするように、灰を頭にふりかけるのであつた。それは膚を刺すようなこまかい雪で、閉めた窓から車のなかまで這入つて来るので、同車の人たちは重たい毛皮を着込んだ。

この雲につつまれていると、われわれは、力つよい自然がその悲しみのうちに、われわれに与える、あの何とも知れぬおそれを感じ、山々の神の怒りがわれわれにおしつける畏敬の意義を、はじめて体得した。一語を発するものもなかつた。

*　　*

「遭難解説者」すなわち、お客にアルプス登攀の惨事のスリルを満喫させる役をつとめる鉄道の職員は、最も名高い遭難事件の話しをはじめた。

マッターホルンの復讐のうち、最初でまた一番すごい話しからはじめた。かのウィンパーが、頂上を征服してから降りる途中、なかまの三人を失つた話しをして、色を失なつたお客たちに、惨劇の原因となつたザイルの切れはしを見せ、この出来事の直後、ウィンパーと生きのこつた二人のガイドの眼のまえの雲のあいだに、大きな円るい虹があらわれ、その後光につつまれて、中空に二つならんだ十字架が見えたことを語つて、聞き手をふるい上がらせた。

それから、アメリカ人のモズレーが、この小舎の近くで、無用心にもザイルをとき、辷つて墜死したという第二の惨事を談り、かれが用いたザイルを見せた。

列車が遭難現場のそばを通つて行くあいだ、こんな陰惨なはなしがつづいた。そんなふうに、おどかされつづけで、われわれは名高い「赤岩」についた。鉄路は、ツムットとフルッゲンと二つの懸崖のあいだにはさまれる峻岨を、あやうい劔の刃わたりをやりながら、しばらくのあいだ「肩」のところを、えらく急な傾斜でのぼつて行く。

案内者は調子をおとして、むかしの登山隊が、最後のアタックをかける前に、ひと休みして弁当をつかつたところを示し、その証拠として、今も岩のうえに散らばつているわれた瓶や、鰯のあき鑵などを指さして、これから困難に立ちむかおうとするアルピニストたちが、早く頂上にたどりつこうと、焦つて頬ばつた食べものの質素なことを歌い、鉄道による新式登山の安全快適なことを自賛した。

はるか下のほうに、雲のわれ目を通して、テオドルの大きなホテルが現われた。そして、ちよつとの間、この峠の上に騾馬にまたがつた数百人のハイカーを数えることが出来た。かれらこそは登山道(アルピニスム)なごりの修験者なのだ。

乗り合いの客はこれを見て、自分たちとあんなアルピニスム仲間との間には、どえらい高さのちがいがあることを思つて、自分たちの登山についてすつかり得意になり、騾馬ではこんな高いところまで登れまいと、この小さな蝿みたいな連中に向つて、自信に満ちたヤッホーのかけ声を送つた。われわれは最後のトンネルに這入つた。長さ四百メートル、これを出ると頂上である。速力がおそいので、みんなそろそろ到着を待ちきれなくなつていた。だれもがジッとしていることにウンザリして、この箱から出たくなつていたのである。十分あとにわれわれは雪に覆われた細長い頂上の一端にはき出され、列車長は誇らかに叫んだ。〝マッターホルン頂上、御下車を願います。〟

みんな降り立つた。人のいい支配人は感激に眼をうるませて、われわれをウィンパーが建てたケルンのそばにつれて行き、四十五年まえに、ウィンパーがかれのテントの柱をたてて、それにガイドのクロッツのシャツを飜えしたその同じ場所に、エキセルショール鉄道会社の旗をつき立てた。われわれは、むかしの登山者の風習にならつて、めいめいの切符を供え、つゞいて堅い握手が交わされた。あいにくの風が吹きすさみ、霧がひどく濃かつたので、われわれはすぐ駅舎に引きさがつて、ストーヴのそばに集まり、それでわかした湯でつくつた、会社提供のうまいホットウィスキーであたたまつた。

それから、われわれはまつたく無関心で、アルプスの羊のむれのように、ふたたび車のなかにつめ込まれて、降りはじめた。

はじめは単調、ブレーキのきしむ音はとてもうるさく、漠然たる不安がすべての人の気持をおしつけた。井戸のなかのような暗らさ、窓ガラスがはげしい寒さのため曇つて、そとは見えない。しかし、あたたかい車室のなかで、人々は少しずつそとの出来事をわすれて、みんなシャベリはじめた。

＊　＊

わたくしはデヴィソン氏にむかつて、万一事故がおこつたら、鉄道の評判にさわる気遣いはないかと尋ねたところ、かれはその心配はないと答え、山の遭難事件が都合よくときどき起らなかつたら、マッターホルンはとつくの昔に名声をうしなつてしまつたであろうし、この鉄道はリギやソペルガ（トリノ郊外の丘）のありふれた奴とちがいがなくなるだろうと説いて、事故は小さなものだつたら、われわれにとつて悪るくないのだとつけ加えた。世界中で話のたねになるような、この種の出来事がなかつたら、エキセルショール鉄道会社株の値はあがらないだろう、と気もちよさそうに、フランス語でくりかえすので

あつた。〝そうです、われわれには事故がいるのです。しかしチョッとしたのが。そうすれば成功うたがいなしです。〟

これは聞き手をふるいあがらせるような話であつた。が、これを聞きながら、わたくしはこの堂々たる経営者の実際的才能と、財政的直観とにたまげた。かれは作法はただしく、眼界はひろく、先入にとらわれず、まことに現代大企業家のすぐれた素質をそなえていた。かれはいろいろ将来の計画をわたくしに話してくれた。

マッターホルンの頂上に観測所を建てる。それは沢山の避雷針で守られ、そこには月が手のとどくくらい近くみえる大望遠鏡をすえつける。ヘルンリにはすばらしいホテルを建てる。そこの温室いつぱいの熱帯植物は、マッターホルンの中腹、海抜三千メートルのところで見ると、まつたく珍らしいだろう。マッターホルンをこの儘にしておけば、持病もちの老人のように命数がつきるのだが、山のひだに木を植えて、山くずれを防ぎ、全体を天然記念物に指定して、その保存をはかる。さらに将来イタリア側にくだる鉄道の計画もある……

こんなオシャベリをしていて、われわれは降つていることに殆んど気がつかなかつた。とうとうわれわれは霧からぬけ出て、ふたたび森と牧場のみどりが見えて来た。高山の単調な黒と白だけに疲れた眼は、この新鮮な色彩に多大のなぐさめを感じた。だれもがマッターホルンに登つたことに満足していたが、同時にそこからおりて来たことには、なおいつそう満足した。

ついに列車は停まり、楽隊は国歌を奏し、喝采が起つた。ゼルマットについたのだ。

熱狂的歓迎のことは略す。ただ、停車場を出ると、鉄道当局の好意によつて、登山客の一人一人に「マッターホルン……年七月十四日」と彫りつけた記念のアルペンストックが贈られたことを記しておこう。あとで聞くと、この棒とつるはしは、御用ずみになつた武器となつて、ゼルマットの売店の物置のおくにころがつていたのを、会社が二束三文で買い取つたものだそうだ。

*　　*

登山は、長い停車時間を含め、上り下りで八時間かかつた。わたくしは大いそぎでホテルに帰つて、礼服に着かえ、やつとその夕の祝賀大晩餐会の間にあつた。

大ホールはまぶしく照りかがやき、旗や山の獲物で飾られて、壁にはマッターホルンにかけてあつた鉄鎖のさびたのを、占領した城の門から分捕つた鎖のように、しめなわのようにかけてある。長いテーブルのまわりには、世界のすみずみから集つた物めずらしげな人たちが、着かざつて坐つた。この連中は、着ているきものと、とりすました冷やかさ——これが今日国際礼式の通則になつている——とがみんな同じであるほか

は、似てもつかぬ人たちであり、かれらを駆つて世界中のホテルをとまり歩るかせる、あくことを知らぬ好奇心の刺戟のほかには、なんら共通の理想のつながりを持たない、コチコチの利己的な手合いなのだ。

わたくしは役つきのお歴々と、勇敢な初期の登攀者のために設けられた主賓席についたが、思いはあんなに無邪気で、あんなによかつたむかしの山のぼり仲間の食事に馳せていた。そこではお互いのこころもちも、お互いの食慾も、仲よく足なみをそろえていたのだつた。

わたくしは、そのむかしあんなにたびたび、少数のえりぬきの仲間と、時にはガイドだけをつれて、出かけたながい登攀からヘトヘトになつて帰りつき、小さい山の宿でたべた質素な夕食が、しみじみと楽しかつたことを思いやり、また、きりのない困難や、自分の健康の自信によろこびを感じ、自分の心臓や脚がよくはたらいたことを知つて、ひそかな深いよろこびを味つたことを思いうかべた。それは危険によつて結ばれた友情が、つよくたしかなことを感じることからわき出る、おちついた信頼感と、真情吐露の瞬間でもあつた。こんなめしの終りには、気はまだたしかなのだが、だんだん肉体のつかれにかなわなくなり、とうとう疲労によるあまい陶酔にはまりこんで、みんなねむり仆れてしまうのであつた。この疲労のうちに、人間らしい、血のかよつた、アルピニスムの詩の境地をうかがい知るのである。この詩は力闘の詩であつて、決して、鉄道などが作ることも、打ちこわすことも出来ないものなのだ。

しかし、今夜の晩餐では、だれも疲れていなかつた。われわれのように、数時間のあいだに三千メートルあまりを上下したものでさえも。

デザートコースに入ると、まずゼルマット町長が立つて、演説をはじめた。かれは、うまい思いつきで、マッターホルンを、むかし土地の人が見つけ出し、ちかごろデヴィソン技師がそこで無尽蔵の新らしい鉱脈を発見した金鉱にたとえた。かれのながい生涯のあいだに、有名なアルピニストたちがゼルマットを通過するのを見たし、その大ぜいを知つており、いろいろ注意をあたえたこともある。が、今や鉄道にのつたアルピニストという新らしい種族があらわれた。かれはこの人たちを、第一類の人たちと同じように歓迎する。それは、みんなひとしく、かれの故郷の山々の光栄のためにも、ゼルマットの繁栄のためにも、貢献するからである、といつて、新らしいアルピニスムの使徒デヴィソン氏のために乾盃した。

デヴィソン氏は立つて答辞をのべ、新時代の人らしく、なりひびく大声でズバリとやつた。むかしのアルピニスムは、自分たちだけで山を独占しようと欲した、少数貴族のきちがい沙汰だと云い、間もなく、アルプスには、便利な鉄道網がしかれ、山の驚異はすべての人々、不具者にまでも知れわたるようにな

る、と予言した。

かれはマッターホルンやアルプスの巨峰を、名だたる山賊だとののしつた。マッターホルンは十人、モンブランは七十人のいのちを奪つた。が、今やこの二つとも鎖につないでしまつた。アルプス登山鉄道は、家庭のまもりであり、よろこびであらねばならぬ。

あんなに苦労して、自分の脚でのぼつたあわれな亡者たちを、かれは拍手のうちに嘲笑した……。

わたくしは息がつまりそうになつて、このところでスックと立ちあがつた。反駁しようと思つたのだが、感情がたかぶつてのどをふさいだ。わたくしが、一生のうちで、もつとも純、もつとも聖なるものとして、あれほど愛していたものを、こゝでかれが踏みにじつているのだ。

* *

わたくしはそとに逃がれ、ひとりになつてくらいところで、近くの氷河から吹いて来るさわやかなそよ風に頬をなぶらせ、広場までのぼつて石にこしかけて、シオンの廃墟に泣くエステルのように、涙をながした。神秘的な月の光が、広い谷いつぱいに注ぎかかつていた。夜はすばらしかつた。わたくしの前には、モンテ・ローザの偉大な連嶂が、うす気味わるく中ぞらに立ちひろがつており、ブライトホルンの円頂は、おだやかに、力づよい曲線をえがく、そのそばには、マッターホルンの尖頂が、黙りこくつて、黒くつき立つている。この巨人のだまつた、おごそかな存在のうちには、不気味な魅惑があつた。わたくしは不動なるもの、永遠なるものを身近かに感じ、これにくらべて、このドッシリとして立派な偉大なるものに立ちむかう、向う見ずな人間のはかない弱さを、つくづくと感得した。わたくしには、この途方もなく巨大な怪物が、鉄のおきてにしばられて、おとなしくなつてしまうとは、安心しきれなかつた！

わたくしは自分が登山をはじめた頃のことや、初心者としての熱烈なあこがれや、山の神秘な奥殿に詣でるためにうけた、くるしい試練などを、思い起していた。この殿堂は、ながいあいだ俗人にとざされていたのが、今や不信心な連中にむかつて開けはなたれ、イソップのお伽話に出てくる、はねまわる蟇がえるのような奴等が、かれらに与えられた材木の王様マッターホルンにのぼつて、これを汚しているのだ。

* *

それから二十日たつたある日、ゼルマット発のみじかい電報が、世界中の新聞にのつた。マッターホルン鉄道の第四号列車が「肩」のところで嵐にあい、風の力でレールから持ちあげられ、千メートル下のティーフェンマッテン氷河まで、まつさかさまに落ちた。死者十八名のなかには、鉄道会社の支配人がいた、というのだつた。

可哀そうなデヴィソン氏！　かれののぞみはかなえられたのだ。ただ、かれがあんなに望んでいた「チョッとした事故」が度をすぎただけだったのだが。

マッターホルンは電車にのつたアルピニストに対しても、やつぱり反抗しつづけていたのだつた！

そこで、わたくしには、むかし風のアルピニスムが、まだまつたくおしまいになつていないことが、わかつた。

あとがき

一、本訳稿は特にイタリア山岳会を通じ、発行所モンテス社から「山岳」誌上に掲載を認められたものである。その好意に対し謝意を表し度い。

二、この風がわりの夢物語りは、ギド・レイの死後一九三九年トリノのモンテス社から刊行された「アルピニスムの終焉」La Fine dell' Alpinismo に集録された諸篇の巻頭を飾つているもので、この書名はまた本篇「マッターホルン登山鉄道」Al Cervino in Ferrovia の副題となつている。

三、いつ頃この一文が草せられたかを、訳者は確かめることが出来ない。

マッターホルン登山鉄道の計画は、ずい分ふるくからあつたものらしく、一八五九年に遡るといわれる。そのときには反対があつて、沙汰やみになつたが、一九〇六年に再燃して会社が出来、翌年には鉄道敷設の権利を連邦議会からもらつたが、スイス国内に猛烈な反対運動がおこり、英国の山岳会がこれに呼応し、ドイツ、オーストリアの岳界も立つて、その阻止に成功したいきさつがある。（この項については会員島田巽氏の御示教に負うところが多い。記して謝意を表する次第である。）

四、他方この本文の中で、マッターホルンの頂上を叙するところに「四十五年まえにウィンパーがかれのテントの柱をたて」云々とあるところ、ウィンパーの初登は一八六五年だから、それから計算すると一九一〇年にあたり、ギド・レイまさに五十一才、はじめてドロミチの岩峯にアクロバチック登攀を試みた年にあたる。

五、自然を賛美して山を熱愛し、何よりもその冒瀆を憎み悲しんだギド・レイ、かれが最も親しんだマッターホルン南麓のブルイユまで、自動車みちが通じようとしたとき、〝うえまで路がついたら、わしはこの土地を見すてるだろう〟と云つて、郷里トリノに引き込んだわが山岳詩人が、マッターホルン登山鉄道の計画を知つたときの憤りと悲しみは、想像にあまりあるのであるから、かれがこの一篇のうちに、ありつたけの皮肉をこめて、胸中のうつぷんをぶちまけたのは、前記一九〇六年の計画発表について起つた議論のあとをうけて、一九一〇年ころに脱稿したものだろうというのが、訳者の推測である。

六、ちなみにこの種の計画は、その後もくすぶりつづけて、ときどき頭をもち上げていたが、数年前イタリア側とゼルマット側とで、その計画がすゝめられたとき、英国側からはげしい反対が起り、欧洲各国で九万五千にのぼる人々が反対陳情を出し、国際登山協会連合の主導の下に、反対運動を展開した各国の登山団体は四十七を超え

たという。かくてゼルマット（一六二〇メートル）からマッターホルンの基部にちかいシュワルツゼー（二五八九メートル）までのケーブルカーは建設許可になり、今日運行しているが、その際スイス連邦政府は、今後これを延長して、マッターホルン或はフルッゲングラートに及ぼすことを許さない旨を明らかにしたのである。

イタリア側では、マッターホルン南麓のプルイユから、巨峯の東南にあたる、前記フルッゲングラートの下端テオドル峠（三三二二メートル）まで、ケーブルカーが開通し、数年まえに会員黒田正夫君がこれを利用して、中間駅でスキーを楽しまれたことを聞いた。

イタリア政府でも、その後風景保護の現行法を活用して、マッターホルンまでの企業計画を認可しないことに決定したそうである。

（会報第一五四、一六七号島田巽氏記事参照。）

附記　「山岳」第五十一年所載の拙訳「タルタランの死」に長短二種のテキストがあることについて、「あとがき」の中で疑問を提起したのであるが、今回の一篇を訳するに当つて、台本としたギド・レイ全集第三巻を読みかえしていたら、編者のノートとして「本巻にはギド・レイの作品のうち、今日は絶版となつているいろいろな刊行物に散在するものと、講演の原稿そのままとを集録した。二三の章は、他人との共著として刊行された際に、省略校訂されているものがある。われわれはこれらを原文にもどして採録した。その方がわれらの偉大な詩人が践み来つた、安易ならぬみちを、好事家に知らせるよすがとなろうと考えたからである」とあるのに気がついた。

従つて「山岳」所掲一九三九年発表の長文の方が原文であつて、「アルプスの前奏曲」という表題で、一八九七年に友人との共著として刊行された分が、省略改訂されたものであることがわかる。

この機会を利用して、前記「あとがき」の思い違いを正しておき度い。

本誌前号の「登山界のあゆみ」の末尾に、昭和三十三年十二月の早、慶、日、北大等の遭難報告は、紙面の都合で本号に掲げる旨を記したが、その後東大の滝谷、早大の富士山等の遭難も惹起し、現在としては前記のものだけを掲載するのも如何かと思われるので、割愛することゝした。執筆された四大学山岳部の諒承を請う次第である。なお、原稿は資料として会に保存しておきたいと思う。

（編者）

茨木猪之吉君の追憶

高野鷹蔵

明治四十三年の夏、小島、高頭、三枝、中村の諸君と赤石山に甲州側から登つた紀行は『山岳』第五年一号に皆さんの名で書かれている。

出かける前に、小島さんから「僕の知己の画家で茨木猪之吉と云う男がいるが、つれて行つても良いか」と云う話があり、一体どんな人かなと考えていた。

小島さんと茨木君とは出発の日、横浜線で八王子駅に出で、他の吾々は飯田町から乗つて、八王子で会つたわけであるが、私の記憶では、どうも富士登りをして大月駅頭で会つた様にしか思えない。此れが茨木君と私達（小島君以外の）との初対面である。

私なぞは画家と云うものに知己がないので、且つ小島さんが連れて来ると云うのだから、山にも相当の猛者であろうと思つていた。八王子でも大月でもかまわない、兎に角プラットフォームに立つている、余り大きくはないがヒゲツラの何んとなく強よそうな、何んだか大風呂敷に穴をあけて、首を突つ込んだ様な着物をつけた男を「茨木君だよ」と紹介されて、内心大いに驚いた。

蓋しそのツラ構えは先ず「山男」と云うにふさわしい。尤も未だ御互に若かつた頃であつたから、彼れの晩年の頃の如き風貌はないにしても、第一その服装からして、台湾の生蕃（地下で怒つているであろうが）を連想したものである。

尤も、その大風呂敷に穴をあけたやつとは、後で覚えた事であるが、洋画家や彫刻家の用いる「ガウン」であつたわけである。

後で段々聞いた事では、茨木君の養父が小島さんの大人と友人であつたのだそうで、その縁故で小島君が山につれて行く事になつたのである。彼れの生家は確か今日の静岡県富士市の奥

の富士根村だと聞いていた。画歴などは遂い聞いていないが、若い頃には横浜で何んとか「バスケ」と云う水彩画家に師事していたかに聞いた。此の「バスケ」と云う人は、其頃横浜で外人のハマ土産にひさいでいた日本画の如き水彩画を画いていた人である。だから茨木君の前期の画は水彩画ばかりであり、油絵は晩年になつて画いているが、私などは初期の水彩画に茨木君として良いものが多いのではないかと思う。

彼れの「北国街道」と題して当時の帝展に入選した、四切大の信州追分の露の街道などは、全面グレー一色であつたが、街道筋を一人の旅人が歩んでる姿、今に彼れの傑作の一つではなかつたかと思つている。此の絵は私の手元で、大正十二年の関東大震災の折、私の家と共に焼けてしまつた。惜しい気がしてならない。茨木君の養父と云う人は、横浜で羽二重商を営んでいた人だそうであるから、ハマにいたわけであろう。斯く申す私も「ハマッ児」なのであるが、蓋し横浜向きの男とは云えなかつたのであろう。

此の赤石行の時は甲府で汽車を降りて鰍沢に一泊、そこで人夫や食糧をととのえて平林峠を越えて西山温泉に二泊、茲で総ての準備をととのえて人夫十一人を具して出発、白峰山脈より分派せる一支嶺、新沢峠下に幕営した。茲迄来た頃には一行とは新顔の茨木君が、すつかり弱つてしまつた。人夫の中にも一、二落伍者が出た。此等人夫の中には山は初めてと云う人間もいたが、茲迄来て赤石山系の山々を遠望したり、周囲の山景の荒涼たる景観に恐れをなしたものと思えた。

後で考えて見ると、茨木君も山は初めてであつたらしく、聊か此の自然の風物に圧倒されて、先ず第一に精神的に参つたらしく、それが後には山に心も身もさゝげて人生の終末をつけた彼れとしては、吾々は今に思い出深いものである。

新沢峠の露宿のあと、茨木君はとうとう帰る事に決定したが、そこで小島君は「僕がつれて来たのだから、茨木君独りで返えすわけに行かない」と云い張つたが、お山の大将格の小島君に帰られては、続行するわけに行かぬと云うわけで、幸い、人夫の落伍者をつけて送り返えす事になり、翌朝それこそ西と東に別れた。

これが縁となり、吾々と茨木君とは親しくなり、何んのかのと彼れを酷使したものである。勿論それは山即ち当時の日本山岳会に関してであるが『山岳』の表紙や挿画には彼れを労したものは極めて多い。私が今に思い出すのは『高山深谷』(写真集)の何輯であつたか、写真帖を二枚のベニヤ板に挟み、その板の表に焼絵を画き彩色をしたものを作つた。

此の時は彼れを私の家に、今で云う缶詰にして、焼絵の道具一式を与えて、幾日かかかつて、約五、六十部の絵、然かも同じものは困ると文句つきで、彼れを労した事である。よくやつてくれたものと、今更らに吾々の我儘を地下の彼れにわびる外

はないが、此れもあれも「会の為めに」と云う、昔で云う滅私奉公、只、会の為めと云う感念からである。私は未だその頃は横浜で、先祖伝来の家業を継いでいた頃であり、一人や二人の人間が幾日いても困らぬ家業でもあり、彼れも独り者の画学生を以て任じていたので、洵に御互に呑気千万な応対であつた。

その頃の彼れの私生活は全くの画学生と云うべきであり、私の老妻（その頃は勿論皆んな若かつた）は、彼れの私生活を見て、着物羽織下駄まで、しつらえて彼れを迎えた事もある。

大正十二年の震災で横浜を去つた私一家は、今の所に移り住んだが、それからは彼れも亦一画家として、たまには訪ねて来たが、往年の如く画学生として待遇する機会は全くなくなつていた。

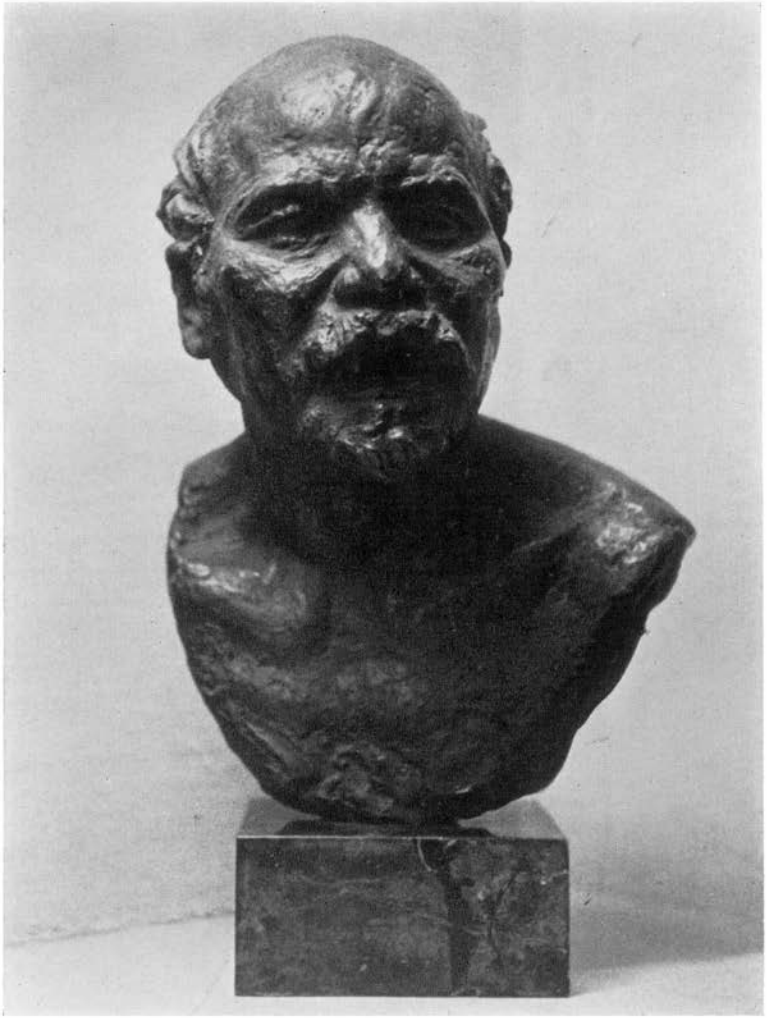
何時であつたか、勿論戦前の事である。或日突然やつて来て「僕も今度結婚する事になつたよ、一度ワイフを見に来いよ」と云われて、私も老妻も、今にその時の彼れを時々話題にして思い出話に興をやる。

私の家と小島（烏水）さんの家とは十五分程のへだたりであるが、茨木君は余り小島さんの所にも立寄らなかつた様である。

晩年油絵を画き出した頃の習作的の絵が二三、私の手元に残つている。何んと思つて持つて来たのかわからない。実を云つて私には絵はわからないが、彼れらしくない絵である。外に只一枚、彼れが小諸にいた頃の、浅間つづきの籠の塔山の水彩八ツ切が残つている。此れは横浜時代に私の手にあつたのを、私の実弟に与えたものが、大正の震災で残つたので私の手元に取り戻したものである。冒頭に書いた、彼れの「北国街道」時代のもので、茨木君らしい趣のものと、今に珍蔵している。

昨年末に茨木君の追憶の集りがあり、やがて彼れのお墓が出来て有志がお墓参りをした（私は不参した）。お墓は横浜である。私の菩提寺も亦横浜である。尤も彼れの永久の居住地は穂高の裏の方であろうか。最初の山におののいた（と云つたら彼れが怒るかも知れないが）茨木君が、穂高の山ふところに永遠の寝床を作つたと思うと、山男の様な彼れの風貌が目の先に浮かぶ。

（附記） 昭和三十四年十一月五日国際文化会館で開かれた茨木猪之吉氏の追悼会のことは、「会報」二〇八号に概記されているが、高野氏の本稿は、当夜の談話をもとに執筆されたものである。挿入の茨木氏のブロンズは佐藤朝山作のもので、茨木氏の油絵、水彩画、画帖、旅信などと共に当日会場へ持参された。曽て小杉放庵氏が「あのブロンズは茨木以上によく似てるよ」と云つたとは、当日出席された会員石井鶴三氏の思い出話のなかの言葉である。（編者）



茨木猪之吉氏の像（佐藤朝山作）

A bronze of the late Inokichi Ibaraki (the famous mountain painter) sculptured by Chôzan Satô. (photo by K. Hiroha)

三木高岑氏
Kôrei Miki
(1887—1960)

追悼

三木高岑氏（一八八七―一九六〇）

関西岳界の大先輩のひとりで、かつて日本山岳会の関西支部幹事や、R・C・Cの総務をつとめ、大正から昭和初頭にかけ、転換期にあつた山登りのすぐれた指導者だつた港都神戸の岳人、三木高岑氏が去る二月二十九日、七十三才で亡くなつた。氏は一九二〇年に本会に入り、会員番号も七六〇番で、故人は別として関西在住の岳人では中原繁之助、小島栄、二木信次、直木重一郎、田中薫、山口季次郎の諸君とともに三ケタ台の古いメンバーだつた。

氏はもともと「日本アルプスの父」と慕われる故ウォルター・ウェストンの伝統をうけ継いだ、神戸在住の内外人で組織されていたK・W・S（旧神戸徒歩会）の有力なメンバーで、塚本永堯、米沢牛歩、後藤正彦氏らとともに、古くは六甲や神戸背山の開発、あるいは日本アルプス方面の山行にしたがつた。もつとも、その頃はわが国の登山界も大きな転向の機運をはらみ、当時行われていた徒歩主義、ないしは享楽本位の山行をいさぎよしとせず、ようやく革新的な動きを見せていた。そうした折も折、人知れず芦屋のロック・ガーデンに立てこもり、岩登りに専念する一派があり、R・C・C（ロック・クライミング・クラブ）と呼ぶ結社を作つてさかんに活躍していた。それらは直木重一郎、セオ・パワース、西岡一雄、津田周二、中村勝郎、小川正十郎、水野祥太郎などの面々で、三木君もむろんその中心人物だつた。

もつとも、R・C・Cの結成とK・W・Sとは不可分の関係があつた。というのは、その頃の神戸徒歩会は再度山（ふたたびさん）にシーダー・カテージと呼ぶ山荘を所有し、スキーやピッケルはもちろん、アルパイン・ロープなどの登山用具をそなえていて、若いメンバーの好奇心をそそつた。それは多分ウェストン、ドーント氏らがヨーロッパから招来し、日本アルプスの山行に使用した由緒あるものと信じられた。したがつて、このカテージの雰囲気や、そこでの会合は新奇な誘惑をささやいた。そして私はしばしば三木君や直木君らと、軽金製のフックのついたロープを担ぎ出し、妙号岩で岩登りのまねごとをしたのも今は懐かしい思い出だ。それから堡墨岩や播州の雪彦（せつひこ）山で行つた初期のトレイニングには、かならず三木君の顔が見られたし、また氷ノ山や鉢伏、蘇武などのスキー登山の開拓期には行を共にした。しかし昭和五、六年頃には体力のせいか、岩登りを主とした山行にはしだいに足が遠ざかり、もつぱら高川秀夫君らといつし

よにスキーに出かけ、もつぱら好きな酒に親しんでいたようだつた。

三木君は兵庫県の産で筆者と同じ明治二十年の生れ、大阪商工の工業科を卒えて神戸ガスに勤務し、R・C・Cの同人となつた頃は、すでに社員として重要の地位を占めていた。神戸徒歩会時代から日本アルプスの山行に出かけ、大正九年の夏には早くも槍ガ岳の頂上に立ち、引きつづき常念に登り、さらに同十三年には四国の石鎚山に出かけている。そして昭和五年にはK・W・Sの理事となり、同じ八年の夏には南アルプスに出かけ、駒—仙丈—北岳—広河原—鳳凰山の大縦走をこころみている。もちろん、右にかかげた山行以外にも、より大きな、意義のある記録が秘められていることは想像にかたくない。しかし、三木君が岳界に残した業績は、むしろ著述に負うところが多いと信じられる。それは昭和四年、R・C・C同人の中原氏が経営していた黒百合社が出版した「山岳征服」一巻が、当時わが国の山登りにもたらした感化と影響は、じつさい想像以上のものがあつた。それにしても「山岳征服」の書名は、著者からの求めによつて筆者が命名したもので、当時としてはトカクの評もあつたようだし、三木氏自身もいささか迷惑を感じたと思われるフシがないでもなかつた。しかし著者が、誤解を招くのを恐れて書いたと信じられる序文がすばらしい名文だつたため、「征服」の意義が明確にされたことは、命名者だつた筆者のケガの功名ともいえよう。この書は初版が出たまま久しく絶版になつていたが、去る三十一年に望月達夫氏の斡旋で「世界処女峰初登頂物語」と改題、改訂されて実業之日本社から出版され、現に江湖の渇を癒やしている。なお本書は序文にも示されているように、著者が四十年を超える登山歴を通じ、前半は実践に、後半は主として机上登山、すなわち古今の原書をあさり、それらの興味の深い個所を選んで集録編著したもので、内外を通じて類例のない好読みものである。

それにしても、筆者は久しく上京中で、晩年の三木氏について親しく接する機会がなかつた。それに去年の暮れに帰京した際には、R・C・Cの古い仲間が集つて一席を設けてくれたが、あいにく三木氏はすでに病臥中で会うことができず、そのまま明暗境いを隔ててしまつた次第で、返す返すも残念である。

（藤木九三）

三木高岑氏略歴

明治二十年十二月二十三日　兵庫県揖保郡小宅村末政一番地にて誕生（旧名は与三郎）。
明治三十九年　大阪関西商工学校工業科卒業。十月　神戸ガス株式会社に奉職。
大正九年十一月　日本山岳会入会（会員番号七六〇）。
大正十年四月　高岑と改名。
昭和四年十月　「山岳征服」を黒百合社から出版。（翌年九月再版）。
昭和七年　神戸ガス株式会社退職。貿易、鉱山業自営。

昭和三十一年十二月　「世界処女峰初登頂物語」を実業之日本社から出版。
昭和三十五年二月二十九日　胃潰瘍のため自宅にて逝去、享年七十三歳。

追悼

岡本信三氏（一九〇三―一九五八）

岡本信三君は函館の産である（明治三十六年一月生）。一九二三年の夏、大島亮吉、大賀道昺、田中三晴、相馬康等の岳友と北海道然別山塊や音更川の流域を十日余り旅行したのを始め、内地の山もよく歩いた。

林檎のように丸く明るい同君は、何時も陽気に三田の山岳部に出入りして部員と仲よく行を共にした。信三君には秀才らしい臭味は全くなかつたので、優等生であることを知つたのは余程後のことである。本科一年の時二人掛けの机に並んで受験したことがあつた。急所を教わるさもしい根性で坐つたのは勿論である。同君がよどみなく書き続けるきれいな答案を、ぼんやり心細い気持ちで眺め通した。同君は答案を読み返しながら、所々赤鉛筆で線を描き入れたりするのである。試験もこのように段が違うと、聞いてものぞいても無益なことが判つた。以後同君のそばで試験をうけることはしなかつた。

信三君は卒業の時在学中の成績が優秀だつたから、丸善の商品券で中上川奨励金をもらつた。塾監局は奨励金で山に出かけたり仲間にのまれたりしにくいように、切手で渡すのだろうと話し合つた。

信三君は慶応義塾卒業（大正十四年）と共に第一銀行本店に入社し、行員たちと山岳会をつくつて山登りやスキーをたのしんだ。又同君は学生の頃からよい本をひろく集めることを趣味としていた。限定本は必ず入手し、予め第五〇号を申込み、気に入つた本は同じものを二冊注文するのが例だつた。

第一銀行に入社して三年目、昭和二年の夏からイギリスをふり出しにフランス、ドイツ、スイス、スエーデン、デンマーク、イタリー、アメリカを歴訪して見聞をひろめ、銀行には前後十六年精勤を続け、昭和十八年から家業のウロコ製作所の、更に函館製網船具株式会社の社長に就任した。この頃から丸い同君は更に丸々と肥り、専ら紙上登山で我まんするようになつた。函館では商工会議所の副会頭や市の財政委員等の要職に就き、多忙な毎日を送つていたが、昭和三十三年の暮に病歿、五十五才だつた。恵まれた環境で明るく育ち、酒も烟草ものまず、壮健だつた同君の死は意外に早く残念至極である。山やスキーの合宿で、同君の歌は格別うまかつたように記憶していな

いのに、晩年俳句の外にけいこを始めた小唄を、中々うまかつたとほめる人もあるが、これはあやしい。

岡本君が本会に入会したのは昭和六年十一月で、会員番号は一三四三番であつた。

（佐藤久一朗）

龜岡英一氏（一九〇一―一九五九）

会員亀岡英一氏は昭和三十四年十一月二十二日の朝方、腎臓腫瘍（癌性）のため順天堂病院の一室で永眠された。

亀岡さんは明治三十四年一月十五日大阪市北堀江にて誕生、大正十三年三月東京商大卒業後三井信託株式会社に就職され、昭和三十四年一月常務取締役を辞任されるまで、三十数年間を三井信託に勤め、社内では無論のこと、信託業界でも重きをなした。そして退任後は野村不動産（株）の顧問に迎えられた。

私は亀岡さんの山登りについて詳しいことを知らないが、生前氏自身から聞いたことは、多分中学時代であろうか、関西の古い岳人故影山寅造氏に山登りの手ほどきをうけたそうである。おそらくその時代に、会員粟飯原健三氏などとも、一緒に登山をされたのではないかと想像する。

昭和十二年四月から十一月まで欧米の視察旅行に赴かれた折、多年あこがれていたスイスに遊び、アルプスの山岳展望を恣にされたことは、非常な喜びだつたと後年よくその時の話をうかがつた。人一倍旅行を好み、山野の跋渉を愛された亀岡さんにとつて、左大腿骨々折（昭和十八年五月）と小児マヒ（同二十四年一月）との、二つの大きな苦しみが相ついで襲つたことは、何としてもお気の毒なことであつた。二十五年四月からは、どうにか歩行の自由を恢復し、ステッキをつきつき社務に精励されたのだが、若い時代のように徒歩旅行の楽しみは殆んど思い切らねばならなかつた。

だが、亀岡さんが日本山岳会に入会された年月を手もとの会員名簿で調べると、昭和二十一年七月（会員番号二三四一）となつている。これが名簿の誤植でないとするなら、まだ敗戦の傷あとの癒されぬ、誰しも衣食住の不如意な時代に、氏はどういう心境から入会されたものか、生前一度うかがつておくべきだつたと思う。二十三年頃よく、肉体的栄養失調にばかり世人の注意がむけられ、精神的栄養失調のことがなおざりにされている点を指摘され、精神にもできるだけ栄養を与えようと話しておられたことから考えると、本会入会の動機も或いはそんなことが一つの理由だつたのではないかと想像される。

会員としての亀岡さんは、小児マヒに冒されたり、社務が多忙だつたりで、実際の山登りはおろか会の催しにも殆んど出席

されなかつたが、ガストン・レビュフアの講演会があつたとき珍らしく出て来られたことを覚えている。しかし「山岳」や会報にはよく目を通されていたようだつた。また信託協会のマナスル登山への寄附のときは、蔭になつて有力な助言もされたように記憶している。

亀岡さんの山好きは、隆志、直司の子息にうけつがれ、殊に隆志君は東雲山渓会のメンバーとして活溌な登山をやつていた、全く気持ちのいい青年だつた。「隆志が随分むずかしい登山をやつているようでね——」と、雑談の折などに漏らしておられたこともあつた。隆志君はヒマラヤの文献などを見に、後年会員となつた神原達君とつれだつて、私の家へも遊びに来たことがある。その隆志君が、まことに不運にも三十三年六月、丹沢の沢登りで遭難し亡くなつてしまつた。

亀岡さんが受けたショックは大きく、私は全く慰める言葉もなかつた。その悲しみの癒されぬ間に、今度は亀岡さんを死に至らしめた業病が、氏の肉体を蝕みはじめたのだつた。三十四年の春に入院し、夏の初め頃お見舞したときはかなり良くなつたかに思えたが、秋になると病状は日一日と重くなつた。偶々亡くなる前日だつたかお見舞したとき、奥さんはもう最悪の事態を御存知だつたのか、特にお目にかからせて下さつたが、そのとき亀岡さんはよくまわらぬ舌で、コバルト照射の苦痛を訴えておられ、ひどい面やつれであつて、私は心の中に烈しい疼痛のようなものを感じ、殆んど言葉を発することさえできなかつた。これがお目にかかつた最後となつた。

亀岡さんの趣味は広汎に亘つていたが、書物蒐集、ことに日本人の海外旅行記の蒐集は記しておくに値するものだつた。そのうちでもフランス旅行記の部類は殆んど漏れなく集めておられた。また洋酒瓶のミニュアチュアの蒐集も知人間には知られていたし、手品は素人離れのした隠し芸だつた。

亀岡さんは極めて清廉な人であり、清らかな雰囲気を身につけていた人であつた。そして一口に云つて、非常にいい人であつた。こんないい人が、残酷きわまりない業病にさいなまれて亡くなることを思うと、世の不合理を痛感せざるを得ない。もし天国というものがあるなら、今はそこで隆志君と共に楽しく山野を歩きまわつておられるのだろうと思う。

なお二男の直司君は東京急行電鉄(株)に勤め、スキーが堪能なので、たしか八方尾根の東急スキー・ヒュッテの建設には一役かつたように聞いているが、東急の観光事業に関係していた会員竹節作太氏がいつだつたか「あれはまつたくいい青年だよ」と直司君のことをほめていたのを聞いて、人一倍子煩悩だつた亀岡さんが聞いたら、定めし喜ばれたろうと思つたことである。

(望月達夫)

大ヒマラヤ展の記

日本山岳会では毎日新聞社と共催により「日本人の記録による大ヒマラヤ展」を昭和三十五年七月二十三日より八月二日まで、十日間にわたり、東京池袋の西武百貨店八階SSSホール（五〇〇坪）を会場として開催した。

この展覧会はたまたま昭和三十五年七月、西武百貨店がその八階に五〇〇坪の広さをもつ展覧会場「SSSホール」を開設するに当り、日本一という広さの会場に相応しい大きなスケールの展覧会として、毎日新聞社が企画立案したもので、日本山岳会の全面的協力により実現したものである。

本展覧会開催の主旨は要約すれば大略次のようなものであつた。即ち

「戦後本格的に行われるようになつた日本のヒマラヤ登山も、一九五六年のマナスル登頂についで、一九五八年にはチョゴリザ、更に一九六〇年にはヒマルチュリ、アピ（ノシャックは当時未登頂）と相ついで登頂されるに及び、漸やく地についた感がある。この機会に一九〇〇年の夏に河口慧海師が、日本人としてはじめてヒマラヤを越えて以来、六十年間にわたる日本人によるヒマラヤ登山の記録をまとめ、記録写真、蒐集品、著書その他の記念品を一堂に集めてみることは非常に意義のあることであろう。」

かくして第一回の準備委員会を四月十五日に開催し、以後三カ月の準備期間を費やして準備を行つた訳であるが、この展覧会に関係した準備委員会の委員は左記の通りであつた。（順不同）

槙有恒、日高信六郎、三田幸夫、今西錦司、深田久弥、望月達夫、加藤泰安、折井健一、金坂一郎、中尾佐助、川喜田二郎、村木潤次郎、小方全弘、松田雄一、古市美津雄、依田孝喜の各氏。

他に西岡京治、高山竜三、沖津文雄、木村勝久、山野井武夫、竹田寛次、小池文雄の各氏をはじめとする各登山隊関係者、出品を快諾された各大学、各博物館、ならびに毎日新聞社事業部、西武百貨店宣伝企画部、会場構成を担当された株式会社東京スタヂオ等関係各位の絶大な協力があつた。

会場構成は、会場の前半をヒマラヤの概念的なもの、後半は各個の日本隊の成果が年代順に並べられた。その主なるものは、

○大ヒマラヤ鳥瞰図（パノラマによる概念図）
○ヒマラヤの地形図
○日本人の記録によるヒマラヤ足跡図

日本人の記録による大ヒマラヤ展、会場の一部

The Exhibition of Japanese Himalayan Expeditions (held on July 23 ～ August 2 at S S S Hall of Seibu Department Store)

大ヒマラヤ展をご覧になる秩父宮妃殿下

The Exhibition of Japanese Himalayan Expeditions. Left to right: T. Katô (Sub-leader of Chogolisa Exp.), Y. Maki (Hon. member), Y. Mita (Vice-president), Princess Chichibu and S. Hidaka (President).

○日本人の記録によるヒマラヤ登山年表（会報二一〇号附録参照）
○八千米十四巨峰の大写真、登路図、登攀小史解説
○極地法登山解説
○エヴェレスト周辺の立体模型
○ヒマラヤの気象（観測記録）
○ヒマラヤの地質解説、標本展示
○ヒマラヤの動、植物（昆虫、植物分布図、雪男に関する資料の他、六甲植物園出品のヒマラヤより移植に成功した高山植物も出品された）
○ヒマラヤの民俗分布図並に各隊蒐集による民芸品、衣裳等
○ヒマラヤ住民の血液、指紋等の標本、
○参考出品として提供された外国隊装備
　アルパイン・クラブ出品（エヴェレスト隊使用ミード・テント）
　フランス山岳会出品（マカルー隊使用ピッケル、アイゼン、羽毛服、ジャヌー隊使用高所用天幕）

後半の各遠征隊別の記録としては、左記各隊の記録写真、ルート図、代表的装備品、蒐集品、刊行物、記念品等が年代順別に展示された。

1　河口慧海師によるチベット行
2　大谷中央アジヤ探検隊
3　鹿子木員信氏によるシッキム
4　長谷川伝次郎氏のカイラス巡礼並にナンガパルバット偵察行
5　三田幸夫氏による冬のローター・パス
6　立教山岳部によるナンダ・コット
7　マナスル登山隊（踏査隊より第三次槇隊迄）
8　京大学士山岳会によるアンナプルナ遠征
9　中根千枝女史によるアッサム調査行
10　京大カラコルム学術探検隊
11　京大探検部によるスワート・ヒンズークシ学術探検
12　京大学士山岳会によるチョゴリザ登頂
13　深田隊によるジュガール、ランタン・ヒマール探査行
14　西北ネパール学術探検隊
15　中尾佐助氏によるブータン探検
16　ヒマルチュリ（先遣隊、村木隊、山田隊）
17　飯田山岳会によるランタン・ヒマール
18　慶応登高会によるダウラギリⅡ峰偵察隊
19　福岡大、ガウリサンカール探査隊
20　雪男探検隊
21　東海岳連、ジュガール・ヒマール隊
22　同志社山岳部によるアピ登山隊

大略以上の通りであるが、これらの中での圧巻は、何といつ

ても会場の中央部にところせましとばかりかざられた、十四巨峰の大写真であつた。しかしこれらの写真がすべてわれわれ日本人の撮影になるものであり、この点からみて極めて意義深いものであつた。数多いヒマラヤ登山国の中でも十四巨峰の全写真を揃えられる国は、日本の他には、英国とスイスぐらいのものであろう。

一方河口慧海師の釈迦牟尼仏坐像をはじめとする一〇四点に及ぶ尨大な蒐集品は、観覧者を魅了するに十分なものであつた。今を去る六十年前に、これだけの立派な成果を、しかも単独で、おさめられた慧海師の業蹟には頭が下がるばかりである。長い間、東北大に保管されており、多くの人の眼に接する機会とてなかつたが、今回のような機会がなければ、公開されるチャンスは永久に巡つてこなかつたかも知れない。こうした意味からも今回の試みは大きな意義があつたといつても過言ではない。

これに較べて、より大きな規模で行われた大谷探検隊の成果は『新西域記』にもみられるようにS・ヘディンやA・スタインに匹敵する業蹟がおさめられているが、今回は都合により数点しか出陳できなかつたことは残念であつた。

このように出展された各々について説明すればきりがないが、ともかく出陳数一千点を超える出品物に、さすがの五〇〇坪の会場も狭く、観覧者は一巡するのに一時間以上を費やすという有様であり、中には一回では疲れて見きれず、再び出直すという人もいる程であつた。

開会当日、午前中には義宮殿下も御覧になり、午後には秩父宮妃殿下をお迎えして大ヒマラヤ展開催記念レセプションも行われた。これに先立ち妃殿下には、日高会長、槙、三田両マナスル登山隊長をはじめとする多くのヒマラヤ関係者の案内により興味深く一巡された。他に会場にはたまたま来日中のアメリカ山岳会、マッシャーブルム登山隊員マックガーン氏夫人、中華民国台湾省山岳協会常務委員、王登火氏、駐日印度大使館付武官(ヒマラヤ担当)カンナ大佐等の珍らしい顔も見られた。

スケールの大きさと内容の充実さをキャッチフレーズとして開催された本展覧会は、昨今のヒマラヤ・ブームを反映してか連日一万人をこえる観覧者で賑わいつつ、盛況裡に十日間の幕を閉じることができた。これは日本のヒマラヤ登山が、こうした数多くの山の好きな、ヒマラヤに憧れをもつ人達を基盤としていることを、何よりもよく物語つているようでうれしいことであつた。この観衆の記録的動員数は、展覧会のもつ珠玉の内容にまことにふさわしいものであり、遠征隊一つ送れる程の予算までかけて開催した本展覧会の意義を、つくづくと認識させられたのであつた。そして松方三郎氏が開会当日「これは大へんな金がかかつているからね。みごとなのも当然だ」と云われた言葉を想い出さずにはいられない。これは展覧会の費用もさ

ることながら、今日迄遠征隊が使つた総金額のことなのである。

たしかに、日本も欧米の登山隊に伍してよくヒマラヤへでかけていく国だとは思つていたが、これら各隊の業蹟をこうして、一堂に集めてみて、はじめてそのエクスペディションの数が、個人の旅行や学術調査をも含めてて、いつしか三八隊にも達していることを知り、これに参加した延人員が一八八名もの多きに達していることを知つて驚きいつたのである。「日本人の記録によるヒマラヤ足跡図」に印せられた赤線は、東西二五〇〇キロに及ぶブータンからヒンズー・クシに至る広大な地域にわたる偉大な足跡を何よりもよく物語つていた。

そしてこのような機会を与えて下さつた毎日新聞社、西武百貨店に対し感謝せずにはいられないのである。

なお「日本人の記録による大ヒマラヤ展」と題した、B4版32頁総アートの写真の豊富なパンフレットが刊行されたことを附記しておく。

（松田雄一）

山岳　第五十四年

（一九六〇年三月刊行）

内容

チョゴリザ登頂（一九五八年）　加藤泰安

ヒマルチュリ偵察―一九五八年　金坂一郎

西北ネパールの山旅（一九五八年）　川喜田二郎・他二名

八千メートル峰登山のタクティックス（2）　松田雄一

登つた山々の覚書　林並木

故伊藤隼氏「登山暦」に思う　沼井鉄太郎

追悼　林並木氏（沼井・田部・壱岐）、石川欣一氏（藤島）、沼井鉄太郎氏（岩永・千々岩・冠）、別宮貞俊氏（岩永・西堀）、北田正三氏（西沢）、伊藤隼氏（織内・小林）、ニマ・テンジン君（松田）

登山界のあゆみ・会務報告・英文梗概

A5版二三〇頁・写真三十四葉・地図々表一〇面・

定価　七〇〇円

御希望の方は本会事務室或いは茗渓堂でお求め下さい。

会務報告

一九五九年十月～一九六〇年九月

◇十月理事会兼評議員会 十月一日（木）図書室

出席者 日高会長（理事）浜野、太田、金坂、山崎、千谷、越智、田島、松丸、田村、古沢、高橋（監事）野口、諸岡（評議員）入沢、成瀬、岩永、小原、望月（ヒマルチュリ登山隊）村木、石坂、松田、田辺、竹田、木村（東京支部）折井、外に辰沼、大塚

▽議事

一、ニマ・テンジン君追悼法要打合せ。

二、雪男探検グループ調査団に対する本会の後援依頼の件、承認。

三、山岳協会規約の件、各支部に経過報告し、十月十五日の理事会において最終決定の予定。

四、ヒマルチュリ登山再挙の件、三田、成瀬、小原、村木の四氏を準備委員として再挙をはかる。

五、セルバンシューズ検定の件、田村、松丸、山崎、徳久の四氏をメンバーとする小委員会において規格を作り検定する。

六、富士山頂研究所の件、辰沼氏の世話により厚生省と本会と共同で設立する。

◇理事会 十月十五日（木）図書室

出席者 日高会長（理事）浜野、山崎、金坂、田島、古沢、徳久、千谷、松丸、高橋

▽議事

一、ペルー・アンデス登山隊長竹田吉文会員に祝電の件。

二、体協オリンピック財務委員の件、日高、松方両氏を推選。

三、体協加盟団体長会議の件報告。

四、日本山岳協会の件、原案通り可決承認。

五、早大山岳部明神東稜雪崩遭難者慰霊祭の件。

六、学生部近況報告。

◇十一月理事会 十一月五日（木）図書室

出席者 日高会長（理事）太田、山崎、金坂、千谷、川上、田村、越智、日下田、古沢、松丸、高橋（評議員）岩永

▽議事

一、年次晩餐会の件。

二、第二〇一回小集会の件。

三、登山技術研究会の件、体協より二十五万円の補助金交付が決定したので、本会より所要の金額を追加し、指導者講習会を行う。登山技術研究委員会委員として浜野、折井、金坂、日下田、徳久、信濃支部小里の六氏を委嘱する。

四、神戸大学山岳会第二回日チ合同登山隊後援依頼の件、承認。

五、高校体育連盟岡山県登山大会（明年八月）及び福岡県山岳連盟剱立山登山講習会（明年五月）に講師派遣の件、適任者を選考する。

六、山岳協会の件、本会としては前回理事会において承認済みである

が、日本岳連から外貨割当の都合で明年五月まで設立を延期したい旨要望があった。

七、本会ヒマラヤ登山隊の装備の中から、しばしば要望のある展覧会用のセットを作る。

八、体協役員との懇談会の件、十二月初旬を予定する。

九、セルバンシューズ検定の件。

◇理事会 十一月十九日（木）図書室

出席者　三田副会長（理事）浜野、太田、金坂、越智、川上、田島、田村、古沢、千谷、松丸（監事）諸岡（評議員）望月、岩永（関西支部）津田、藤沢

▽議事

一、松丸理事大阪へ転勤につき会議終了後送別会を開く。

二、展覧会用の装備がまとまったので管理を竹田寛次氏に委嘱し、担当理事は金坂理事とする。

三、図書貸出の件、図書室からの持出しは当分の間厳禁する。但し本会の用務上必要とする場合は、図書担当理事の承認を得て持出しを認める。

四、福岡県岳連講習会講師の件、金坂理事に委嘱。

五、読売新聞社日本スポーツ賞候補者推選の件、未決定。

◇十二月理事会 十二月三日（木）図書室

出席者　日高会長（理事）浜野、太田、山崎、金坂、古沢、田村、川上、千谷、日下田、徳久、田島、高橋（評議員）岩永

▽議事

一、新入会員紹介者の資格につき意見あり、研究することにする。

二、山日記二十五輯贈呈範囲の件、一九六〇年三月三十一日までの新入会員及び従来の会員で同日までに会費完納の者とする。

三、会員名簿編集の件、前回は誤りが多かったので慎重を期したい。

四、昭和三十五年度国際スポーツ行事計画の件、十二月十八日までに体協に報告。

五、積雪期登山技術指導者講習会の件、三年計画とし、場所は第一回は西穂高、予算六十万円とする。

六、読売スポーツ賞の件、該当者なく辞退。

七、ヒマルチュリ再挙の件、四準備委員に金坂理事を加えて審議の結果、北壁以外の登路についても一考の余地あるため、来年のプレ・モンスーンに南面を主とした偵察隊を派遣すべきであると報告があり、この線で準備を進めることにする。

◇緊急理事会 十二月十日（木）図書室

出席者　日高会長、松方副会長（理事）浜野、太田、山崎、金坂、田村、川上、千谷、古沢、高橋（監事）野口、諸岡（評議員）交野、岩永、小原、望月、（東京支部）折井、他に辰沼、村木、松田

▽議事

一、慶応山岳部ヒマルチュリ登山の件

かねてから一九六〇年プレ・モンスーンのアンナプルナ二峰を目標と定めていた慶応山岳部は同峰の登山許可を得られず、今秋ダウラギリ二峰を偵察したが登頂見込みなく、ヒマルチュリを西面より登るべく計画変更、本会の承認を求めてきた。本会としても前回の理事会で決定した通り、本会の偵察とかち合うことになるが、慶応

山岳部の立場に同情して、本会の明春の偵察を一時中止し、慶応隊のヒマルチュリ登山を承認することにした。しかし慶応隊が登頂せざる場合、本会の計画は従来の方針通り準備を進めることを確認した。

二、一九六〇年度海外登山外貨申請の件

申請のあつた本会ヒマルチュリ計画（約二万ドル）及び京大サルトロ・カンリ計画（約二万二千ドル）を体協に対して申込んだ。

◇一月理事会　一月十三日（水）図書室

出席者　三田副会長（理事）太田、金坂、田村、日下田、越智、古沢、田島、川上、高橋（監事）野口、諸岡（評議員）成瀬、岩永（早大山岳部）吉阪、今村（同志社山岳部）津田、平林、江上、他に石坂、松田

▽議事

一、慶応山岳部及び中京山岳連盟より酸素器具借用願の件、承認。

二、早大山岳部マッキンレー計画及び同志社山岳部アビ計画につき外貨割当願の件、期待にそうよう努力してみる。

三、セルバン登山靴及びオニズカ・タイガーシューズ検定の件、厳冬期の高処の登山を除いて一般の登山に適当と認める。この旨各製品に明示することにより検定合格を承認。

四、二月小集会の件、蔵王で山形支部を中心とする東北各支部との懇親会を行う。

五、登山技術指導者講習会の件。

六、会員神原達氏（早大学生）ネパール留学につき挨拶あり。

◇海外登山審議委員会　二月四日（木）図書室

出席者　日高、三田、成瀬、渡辺、小原、金坂（委任状）今西

▽議事

一、ヒマルチュリ登山の件報告。

二、海外登山隊後援の件報告。

三、一九六〇年度海外登山外貨割当申請の件、本会ヒマルチュリ計画、早大マッキンレー計画及び同志社アビ計画につき二七、九八三弗の外貨割当を申請し、大蔵省と体協よりすでに非公式に全額の承認を得た。京大の計画は次年度申請とする。

四、本委員会組織変更の件

日本山岳協会の設立に伴い本委員会の業務を左記規約のように海外登山計画の審査に絞り、その他の業務は新設するヒマラヤ委員会に委嘱する。

＜海外登山審議委員会規約＞

第一条　本委員会は、海外登山審議委員会という。

第二条　本委員会は、本会理事会の質問に応じて、海外登山計画を審査する。

第三条　本委員会には、委員長一名および委員若干名をおく。

第四条　委員長は、本会会長の兼務とし、委員は理事会の決議により委嘱する。

第五条　委員の任期は三年とする。

第六条　本委員会の会議は、委員長が招集する。

委員として次の十七氏を推選した。日高信六郎、松方三郎、三田幸夫、槙有恒、入沢文明、今西錦司、渡辺公平、竹節作太、成瀬岩雄、堀田弥一、小原勝郎、加藤泰安、望月達夫、今西寿雄、辰沼広吉、金

坂一郎、村木潤次郎。

五、ヒマラヤ委員会設置の件

議案第四号にもとづき左記規約による委員会を設置する。

＜ヒマラヤ委員会規約＞

第一条　本委員会は、ヒマラヤ委員会という。

第二条　本委員会は、海外登山に関する調査、研究、企画および実施をなす。

第三条　本委員会の委員は、理事会の決議により委嘱する。

第四条　委員は互選で委員長を推挙する。

第五条　委員の任期は、三年とする。

第六条　本委員会の会議は、委員が招集する。

第七条　委員長は、必要に応じて、実行委員を委嘱する。

第八条　実行委員の任期は、一年とする。

委員として次の五氏を推選した。三田幸夫（委員長）、成瀬岩雄、小原勝郎、金坂一郎、村木潤次郎、

実行委員として次の四氏を推選した。石坂昭二郎、松田雄一、竹田寛次、山野井武夫。

六、その他

議案第四、五号に関連し、会報一九四号記載の「海外登山審議委員会規定」を廃止し、同委員会、海外登山研究委員会およびヒマラヤ登山準備委員会を解散する。

議案第四、五号は理事会に上程し、承認されれば即日発効とし、新委員は一九六〇年度委員として就任願う。

◇二月理事会　二月十一日（木）図書室

出席者　日高会長（理事）渡辺、太田、山崎、金坂、古沢、川上、田村、日下田、徳久、高橋（監事）諸岡（評議員）交野、望月、岩永、藤井（東京支部）折井、他に田辺、宮下

▽議事

一、慶応ヒマルチュリ隊隊員一名増加願の件、休協と折衝する。

二、海外登山審議委員会議事の件、承認。

三、登山技術委員会規約の件、左記の通り承認。

＜登山技術委員会規約＞

第一条　本委員会は、登山技術研究委員会という。

第二条　本委員会は、登山技術および登山事故に関する調査、研究および指導をなす。

第三条　本委員会の委員は、理事会の決議により委嘱する。

第四条　委員は互選で委員長を推挙する。

第五条　委員の任期は、三年とする。

第六条　本委員会の会議は、委員長が招集する。

四、ニュージーランド女子遠征隊後援願の件、審議未了。

五、蔵王小集会の件。

六、海外登山隊歓送迎会の件。

七、入会金の件、二千円くらいが妥当と思われるがなお研究する。

◇評議員会　二月二十四日（水）図書室

出席者　日高会長、入沢、望月、岩永、高山、津田（委任）藤木、島田、西堀、池田

▽議事

一、新年度評議員候補者推選の件。

◇**三月理事会**　三月九日（木）図書室

出席者　日高会長、三田副会長（理事）渡辺、浜野、太田、山崎、金坂、日下田、田村、古沢、徳久（監事）野口（評議員）望月、岩永

▽議事

一、登山技術指導者講習会の件。

二、駒ケ根市共催夏山講習会の件、高校を対象とする本会の計画につき市より承諾あり。

三、山岳協会の件。

四、毎日新聞社等の登山学校の件。

五、新年度予算及び事業計画の件。

六、入会申込の件、今後は理事会にて入会承認後に会費及び入会金を受領するよう手続を変える。

◇**理事会兼評議員会**　三月三十一日（木）図書室

出席者　日高会長（理事）渡辺、浜野、金坂、徳久、川上、田島、日下田、田村（監事）野口、諸岡（顧問）藤木（評議員）入沢、成瀬、辻、岩永（東京支部）折井

▽議事

一、体協コーチ会議出席の件報告（岩永）。

二、山形県山岳連盟積雪期登山技術講習会派遣講師報告（川上）。

三、西穂高積雪期登山技術指導者講習会の件報告。

四、体協団体長会議の件報告。

五、日本山岳協会の体協加盟の件、本日体協評議員会において承認された。

六、新年度役員および評議員候補者推選の件。

◇**通常会員総会**　四月二十三日（土）体協会議室

▽議事、報告

一、一九五九年度事業報告。

二、一九五九年度決算報告。

三、一九六〇年度予算案付議、可決。

四、定款変更の件、第六条、入会金五百円を二千円と変更（但し五月一日より実施）。

第七条、入会金と年会費を添えて「会員二名の紹介」を「会員二名（内一名は役員または評議員たること）の紹介」と変更。

第十三条、評議員の定員十五名以上二十名以内を三十名以上四十名以内と変更。可決。

五、秋田、越後、関西、石川、東京各支部報告。

六、一九六〇年度理事として、日高信六郎、松方三郎、三田幸夫、渡辺公平、浜野正男、折井健一、山崎安治、太田敬、金坂一郎、古沢肇、木下是雄、村木潤次郎、徳久球雄、高橋進、川上隆、日下田実、田村扇一、加藤元一、の十八氏を選任。尚会長日高、副会長松方、三田は任期一九六二年度迄従来通り再任と決定する。

七、監事（一九六〇年～一九六一年）として、野口末延、松本熊次郎を選任。

八、評議員（一九六〇年～一九六二年）として、神谷恭、藤島敏男、早川種三、成瀬岩雄、今西錦司、交野武一、小原勝郎、伊藤秀五郎、望月達夫、深田久弥、篠田軍治、今西寿雄、橋本三八、織内信彦、青木昇、藤井運平、入沢文明、及び各支部長（除東京）の諸氏を選

任。

◇五月理事会兼評議員会　五月十二日（木）図書室

出席者　日高会長、三田副会長（理事）渡辺、浜野、折井、太田、金坂、山崎、田村、川上、村木、古沢、徳久、加藤、越智（旧）（監事）野口、松本（評議員）神谷、藤島（敏）、深田、望月、織内、青木、中田、津田、岩永（旧）

▽議事、報告

一、業務分担を決定。渡辺（編集）、浜野（企画、支部、協会、遭難対策）、折井（総務）、山崎（指導）、太田（経理）、金坂（海外連絡）、古沢（会報）、木下（調査・研究）、村木（海外登山）、徳久（図書）、川上（総務）、高橋（集会）、日下田（指導）、田村（調査・研究）、加藤（山日記）、望月（山岳）

常務理事に渡辺、浜野、折井、太田、山崎、金坂の六氏。

常任評議員は入沢、成瀬、小原、望月の四氏。

二、登山技術研究委員会、松方、浜野、折井、山崎、金坂、村木、日下田、田村、川上、加藤（喜）、今西（寿）、梶本、石島（他に岳連より二名氏名未定）

◎国体関係の日本山岳会側代表　渡辺公平

◎啓蒙関係の日本山岳会側代表　折井健一

◎山日記編集委員　加藤理事、篠原、富岡。

◎小辞典編集委員　徳久理事、鈴木、高島、甲斐。編集関係総括を渡辺常務理事とす。

◎図書委員　徳久理事担当の他、深田、望月評議員並びに小林義正氏に依頼す。

三、産経新聞社、スイス展協賛の件、承認。

四、大阪市大　ヒマラヤ遠征計画の件報告。

来春三月にランタン・ヒマールを計画中。

五、登山技術講習会の件決定、高校生を対象として八月二日～六日、中央アルプス駒ケ岳、本会並びに駒ケ根市共催。

六、福岡岳連（剣岳）講習会、金坂理事講師として参加す。

七、ヒマラヤ展（日本人の記録による）開催の件決定。七月中旬、池袋西武百貨店、本会並びに毎日新聞社共催。

八、役員会は原則として毎月第一木曜日とする。

◇六月理事会兼評議員会　六月二日（木）図書室

出席者　日高会長（理事）浜野、折井、渡辺、太田、金坂、木下、田村、古沢、徳久、川上、加藤（評議員）青木、望月（監事）野口、松本（東京支部）辰沼、西川

▽議事、報告

一、ウェストン祭（六月四日～六日）日高会長、槙名誉会員、折井、加藤理事、佐藤（久）会員等参加の予定。

二、支部長会議開催の件、七月九日（土）に決定。（図書室にて）

三、交通公社、スポーツニッポン、国鉄共催の夏期登山講習会の件。

四、新潟鉄道局登山講習会に講師派遣の件。石坂、大屋両君派遣決定。

五、報知新聞社、夏の山岳展後援の件（白木屋）承認。

六、富士山頂研究所の件（会報第二一一号参照）。

七、物置増築の件、松本監事の厚意により施工に決定。体協の諒解は折井常務理事取付けのこと。

八、故別宮会長の遺作写真展開催希望の件。
九、小集会の件（月二回開催の要望があり、担当理事で具体的実施を進めること。）
一〇、中国登山協会に祝電（五月二十四日エヴェレスト登頂につき）。

◇七月理事会　七月七日（木）図書室
出席者　日高会長（理事）渡辺、浜野、折井、太田、山崎、金坂、村木、田村、日下田、川上、高橋（評議員）望月（監事）松本
▽議事、報告
一、山岳協会関係業務
(1)　遭難防止委員会、山岳会三名、岳連三名とする。
(2)　国体役員、岳連に一任する。山岳会側より日高会長、渡辺常務理事出席の予定。
(3)　登山技術委員会、岳連から斉藤、松山二名委員として今後出席する。
二、夏の旅、主催日本交通公社、東北朝日岳、穂高岳を中心として、講師を地元支部からも依頼する。
三、高校生登山技術講習会の件。
四、関西学院大学ペルー・アンデス遠征の件。
五、イタリー、トレント市における山岳図書展出品の件（外務省からの申入れ）。
(1)マナスル、(2)マナスル写真集、(3)山川氏画集、(4)岡田紅陽氏富士山、(5)風見氏写真集、(6)田淵氏高山蝶、(7)「山岳」及び「山日記」、(8)深田氏日本アルプス、(9)その他著者出版社と協議する。
六、図書委員委嘱の件、大橋晋、朝倉宏、近藤信行三氏に依頼する。
七、関西支部から「写真経緯儀による高山地帯の机上写真測量研究会」開催依頼の件。
◎望月常任評議員、札幌転勤につき、議事終了後送別会を開く。

◇九月理事会　九月一日（木）図書室
出席者　松方副会長（理事）折井、太田、木下、徳久、古沢、高橋、川上、山崎、加藤（評議員）成瀬、永井（大分支部）
▽議事、報告
一、高校生登山技術講習会報告
（主催）日本山岳会、全国高校体育連盟、長野県駒ケ根市、（後援）長野県教育委員会、毎日新聞社、参加三十県の代表高校生。
二、大分支部設立の件。支部長永井清一、副支部長野口秋人、会員二十名を以つて発足。
三、木暮翁記念碑改築の件、十月完成予定、経費、山梨支部側及び会員募金に依り施工。
四、山の美化運動につきボーデン氏（会員、米国籍）から申出あり、協賛決定す。
五、林野庁避難小舎建設の件。
六、日本山岳全集の件、朋文堂、創元社共に企画あり、山岳会としての監修はせず、個人的に協力すること。

×　×　×

◇小集会
▽第二〇〇回　十月十四日（水）国際文化会館
今回は第二〇〇回を記念して初期の小集会の顔ぶれを再現したく調査したところ、第三回小集会の講師武田久吉、高野鷹蔵、冠松次

郎の三氏が健在で、松方副会長の挨拶に引きつづき昔話をして頂いた。

▽第二〇一回　十一月十七日（火）体協会議室

雪崩シンポジウム　木下是雄氏、大井正一氏、谷口現吉氏

司坂金坂一郎氏

▽第二〇二回　十二月五日（土）体協会議室

冬山遭難予防シンポジウム　浜野正男氏、千谷壮之助氏、山田二郎氏

司会　太田敬氏

▽第二〇三回　二月二十日～二十一日（日）蔵王スキー懇親会

参加者東京日高会長以下二十一名、北海道一名、山形九名、宮城一名、福島十二名、越後四名、熊本二名、計五〇名。

▽第二〇四回　六月二十二日（木）体協会議室

西北ネパールの旅　川喜田二郎氏

▽第二〇五回　六月二十九日（水）体協会議室

雪男探検隊報告　大塚博美氏

▽第二〇六回　七月五日（火）体協会議室

南極越冬隊報告　村山雅美氏、武藤晃氏、芳野赳夫氏

付、立山の熊狩16ミリ映画　佐伯富男氏

▽第二〇七回　七月十二日（火）体協会議室

ペルー・アンデスの山旅　竹田吉文氏

第二〇八回　七月二十六日（火）体協会議室

台湾の山旅　西丸震哉氏

第二〇九回　九月十七日（土）体協会議室

マッキンレー登山報告　明大交野武一氏、早大吉阪隆正氏

× × ×

◇ニマ・テンジン追悼法要　ヒマルチュリ登山隊に参加、五月四日第二キャンプにて病死したシェルパ、ニマ・テンジン君の追悼法要が十月四日（日）午後三時から築地本願寺で行われ、式後別室において追悼懇談が行われた。

◇第十四回国体登山部門　十月二十五日～二十九日東京都山岳連盟の運営により奥多摩において開催、日高会長が終始参加された。

◇年次晩さん会　十二月十日　於国際文化会館。

◇海外登山隊歓送迎会　最近海外登山より帰国した、また近く出発する左の会員を招き、三月一日新丸ビル、ポール・スターにて歓送迎会を催した。（出発）山田二郎、田辺寿、宮下秀樹、川田善朗、村田茂、高塩甡、木村勝久（慶応ヒマルチュリ隊）、交野武一、高橋進、藤田佳宏（明大マッキンレー隊）、吉阪隆正、鬼頭万太郎、山本晃、菊島芳彦（早大マッキンレー隊）、津田康祐（同志社アピ隊）、神原達（カトマンズ）、（帰国）加藤喜一郎、石島襄二（慶応ダウラギリ二峰隊）、竹田吉文（ペルー・アンデス）、西丸震哉（台湾）。

◇西穂高登山技術指導者講習会　登山技術研究委員会の第一回講習会

として、全国を三ブロックに分け、今回は北海道、東北、新潟、関東の十五都道県より各二名の参加者を招き、講師として日高会長、リーダー金坂理事以下十五名、地元協力者高山信濃支部長以下七名のスタッフにより、三月十九日～二十五日西穂高小屋を根拠地として開催、天候不順にもかかわらず登山技術の基本修得に関し多大の成果をおさめた。

◇新旧役員懇談会　五月十九日（木）図書室

出席者　日高、三田、藤島、岩永、神谷、深田、渡辺、青木、松本、織内、折井、浜野、山崎、金坂、木下、古沢、千谷、徳久、加藤、梶本（関西）

◇南極観測隊、雪男探検隊歓迎会　五月三十日（火）丸の内、ポールスター

立見、村山、中村、菅原、武藤、宮原、松本、芳野、大塚の諸隊員を迎えて、会員六十三名出席、和やかな歓談が続いた。

◇第十四回ウェストン祭　六月四日（土）～五日（日）上高地にて。

記念講演は、日高会長、槙名誉会員、尾崎喜八、藤木九三、岡村精一、串田孫一氏等。

◇有志懇談会　六月十八日（土）小石川六義園心泉亭にて。

出席者三十三名。

◇支部長会議　七月九日（土）図書室

出席者　北川（宮城）、藤島、斉藤（越後）、中田（富山）、高山、清水（信濃）、三井、百瀬（山梨）、津田、今西（関西）、池田（石川）、西川、中島（東京）、日高会長、松方、三田副会長、渡辺、折井、浜野、金坂、山崎、川上、日下田、古沢、加藤、神谷、青木、辰沼、永井。

日本山岳協会設立経過とその後の情況、富士山頂研究所の開設並びに各支部情報、懇談。永井氏より大分支部設立の準備報告あり諒承。偶々同志社大学ヒマラヤ遠征隊長津田氏帰国し、岸田氏と共に立寄り挨拶と報告があつた。

◇富士山頂研究所開設　厚生省国立公園部所属管理人舎にて、七月一日～八月三十一日の期間をもつて開設した。

◇大ヒマラヤ展（日本人の記録による）開催、毎日新聞社と共催。七月二十三日～八月二日、東京池袋西武百貨店にて（本文参照）。

◇高校生登山技術講習会　八月二日（火）～六日（土）中央アルプス駒ケ岳にて、全国高校体育連盟、駒ケ根市と共催、受講者、八十四名。

×　×　×

◇大分支部設立　八月六日、大分市にて設立総会を開催、支部長、永井清一、副支部長、野口秋人、常務委員、利満成功氏を選任して発足する。

◇日本山岳協会　前号に予告した日本山岳協会は昭和三十五年四月一日より体協加盟を認められ、今後本会は日本山岳協会の海外登山及び登山技術向上に関する事項を、全日本山岳連盟は同じく国体登山部門及び登山の啓蒙指導に関する事項をそれぞれ担当することになつた。しかし体協に直接関係ない事項については従来通り両者任意に事業を継続することになつており、本会における実質的の変化としては、直接国体登山を担当しなくなつたことだけである。

▽設立総会　四月二十五日（月）本会国書室

▽発会式　五月十八日（水）体協会議室

役員　会長武田久吉。副会長　日高信六郎、専務理事　浜野正男、理事　入沢文明、渡辺公平、折井健一、金坂一郎、後藤幹次、藤島玄、三井松男、津田周二、高山忠四朗、中田勇吉、監事　太田敬（以上日本山岳会より）副会長　尾関広、専務理事　高橋定昌、理事　星野重、高塚和雄、斉藤情太郎、羽賀正太郎、鎌田久、大石実、武内重雄、橋本三八、村松清、松長晴利、監事　鈴木林治（以上日本岳連より）。

×　×　×

◇山岳　五十四年を三月二十日発行。

◇会報　二〇六～二一〇号の五号を発行。

◇山日記　一九六〇年版は第二十五輯を記念して全会員に無料配付された。

◇山の小事典　山日記の記事を発展させた小事典を単行本として夏山までに発行すべく編集中である。

×　×　×

◇物故会員　この期間に逝去された会員は左の通りである。本会は謹んで哀悼の意を表する。

一九六〇年度役員

会長　日高信六郎

副会長　松方三郎、三田幸夫

常務理事　渡辺公平、浜野正男、折井健一、金坂一郎、山崎安治、太田敬

理事　木下是雄、古沢肇、村木潤次郎、徳久球雄、川上隆、高橋進、日下田実、田村扇一、加藤元一

監事　野口末延、松本熊次郎

常任評議員　入沢文明、成瀬岩雄、望月達夫、小原勝郎

評議員　藤島敏男、神谷恭、早川種三、今西錦司、交野武一、伊藤秀五郎、深田久弥、今西寿雄、橋本三八、青木昇、篠田軍治、織内信彦、藤井運平

評議員支部長　津田周二（関西）、藤島玄（越後）、伊藤弥十郎（福島）、池田知幸（石川）、松方三郎（東京）、高山忠四郎（信濃）、中田勇吉（富山）、三井松男（山梨）、織田収（山陰）、後藤幹次（山形）、大室貞一郎（静岡）、三谷孝一（熊本）、岡田喜

SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. LV **Issued in March, 1961**

Contents

(in English)

Himalchuli, 1959 ····· By Junjiro Muraki ····· 1
Reconnaissance around Dhaulagiri II ····· By Kiichiro Kato ····· 4
The Road to Ausangate ····· By Yoshifumi Takeda ····· 9
Langtang Himal, 1959 ····· By Tetsuo Yamada ····· 12
Gaurisankar Expedition, 1959 ····· By Hideki Kato ····· 13
The Japanese Yeti Expedition, 1959-1960 ····· By Fusao Yamasaki ····· 15
Lützow-Holm Glacier, 1959 ····· By Junji Nakamura ····· 16
Bhutan Himalaya ····· By Sasuke Nakao ····· 17

(in Japanese)

Himalchuli, 1959 ····· By Junjiro Muraki ····· 1
Reconnaissance around Dhaulagiri Himal
····· By the Keio University Alpine Club ····· 33
An Expedition to Peruvian Andes ····· By Yoshifumi Takeda ····· 53
Langtang Himal, 1959 ····· By Tetsuo Yamada ····· 70
Gaurisankar Expedition, 1959 ····· By Hideki Kato ····· 95
Solo-Khumbu in winter ····· By F. Yamasaki and H. Otsuka ····· 118
Lützow-Holm Glacier, 1959 ····· By Junji Nakamura ····· 143
Guido Rey : The Matterhorn Railway (Al Cervino in Ferrovia)
····· Translated by Shinrokuro Hidaka (Translation authorized by
the publisher through courtesy of the Italian Alpine Club.) ····· 157
Recollections of the late Inokichi Ibaraki ····· By Takazo Takano ····· 168
In Memoriam :
Korei Miki, Shinzo Okamoto, Eiichi Kameoka ····· 171
The Exhibition of Japanese Himalayan Expeditions ····· By Yuichi Matsuda ····· 176
Club Proceedings ····· 180

Editor : Tatsuo Mochizuki
Associate Editors : Kohei Watanabe, Kenichi Orii, Ichiro Kanesaka.

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : No. 6, 4-chome, Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku Tokyo.

.....

(April, 1960~March, 1961)

President : Shinrokuro Hidaka
Vice-Presidents : Saburo Matsukata, Yukio Mita
Honorary Secretary : Kenichi Orii
Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki
Honorary Librarian : Tamao Tokuhisa
Honorary Treasurer : Takashi Ohta
Auditors : Suenobu Noguchi, Kumajiro Matsumoto

.....

Committee

Hajime Furusawa	Masao Hamano	Minoru Higeta
Ichiro Kanesaka	Motoichi Katoh	Takashi Kawakami
Koreo Kinoshita	Junjiro Muraki	Takashi Ohta
Kenichi Orii	Susumu Takahashi	Senichi Tamura
Tamao Tokuhisa	Kohei Watanabe	Yasuji Yamazaki

.....

Council

Noboru Aoki	Unpei Fujii	Toshio Fujishima
Kyuya Fukata	Sanpachi Hashimoto	Tanezo Hayakawa
Kinji Imanishi	Toshio Imanishi	Fumiaki Irisawa
Hidegoro Itoh	Kyo Kamiya	Takeichi Katano
Tatsuo Mochizuki	Iwao Naruse	Katsuro Ohara
Nobuhiko Oriuchi	Gunji Shinoda	

.....

Heads of Local Branches

Akita : Hiromasa Aramaki	*Yamagata* : Kanji Gotoh
Miyagi : Shoji Kitagawa	*Fukushima* : Yajuro Itoh
Echigo : Gen Fujishima	*Tokyo* : Saburo Matsukata
Yamanashi : Matsuo Mitsui	*Shinano* : Chushiro Takayama
Toyama : Yukichi Nakada	*Ishikawa* : Tomoyuki Ikeda
Shizuoka : Teiichiro Ohmura	*Kwansai* : Shuji Tsuda
Sanin : Osamu Oda	*KitaKyushu* : Kiichi Okada
Kumamoto : Koichi Mitani	*Oita* : Seiichi Nagai

.....

Adviser : Kyuzo Fujiki

Himalchuli, 1959

by Junjiro MURAKI

In the spring of 1959, the Japanese Alpine Club sent an expedition to Himalchuli (7864 m) which lies in the same range of Manaslu in the Central Nepal Himalaya.

This mountain can be seen from Kathmandu Valley, so every Japanese climber, who has been in the Nepal Himalaya, knows and appreciates the steep and distinguished summit of this mountain. So, they wanted to approach to Himalchuli in the future. Then, after the success of Manaslu in 1956, the Japanese Alpine Club determined to send an expedition to Himalchuli as an attempt succeeding to the Manaslu expedition.

Regarding this mountain, H.W. Tilman's and Kenya's two teams tried to approach the summit from the southwest side, and failed; according to their reports, the attempt from this side seemed very difficult and hopeless for them, and for us as well.

We wanted to try the northeast side, but this side also was left unknown. Then, in the autumn of 1958 we sent a reconnaissance party (two members and three Sherpas) to this area through Buri Gandaki Valley. They succeeded to find out a route leading to the foot of the final peak of Himalchuli. (See *J.J.A.C.* Vol. 54)

The preparation for the main party was begun from the autumn of 1958 and the expedition team was organized with eight members in the beginning of December. Their names and Himalayan experiences are as follows :

Junjiro Muraki, leader; Manaslu, 1953; Ganesh Himal, 1954; Manaslu, 1956.

Yuichi Matsuda, deputy leader; Ganesh Himal, 1954; Manaslu, 1956.

Shojiro Ishizaka; Manaslu, 1953; Himalchuli reconnaissance, 1958.

Senya Sumiyoshi, doctor.

Hisashi Tanabe.

Hirotsugu Takeda.

Takeo Yamanoi.

Katsuhisa Kimura, cameraman.

We sailed from Kobe for Calcutta on 13th of February. The sea voyage gave us a good chance of taking a rest after the busy days for the preparation of the expedition. On 8th of March we arrived in Calcutta, then entered into Kathmandu via Patna on 10th, excluding Matsuda who stayed at Patna for chasing out four tons of luggage. On 16th all of our luggage could be transported safely from Patna to Kathmandu.

On 21st of March we started to the mountain with one liaison officer, eight Sherpas, and 132 local porters. After fourteen days' journey through Buri Gandaki Valley wearrived at Namru village which lay to the east-northeast of Himalchuli.

We had to hire Tibetan porters for carrying our luggage to a high alp beyond the village, because the following a track covered with snow was difficult for Nepali porters. On the contacting with them there were some troubles with Namru villagers, but they were not so serious that we could settled in one day with the effective aid of the Sherpas' sirdar, Gyaltsen Norbu, and pitched the base camp in the Shurang Valley (4200 m) which was in the upper part of Namru on 6th of March. But the summit was very far; it could not be seen, about ten miles far from the base camp.

We divided fifty days' climbing period into five stages by about ten days in view of the acclimatization and the transportation. Following our plan, at least five camps were necessary excluding the base camp to reach the top.

On 10th of April we began the first stage transport of about two tons' luggage to the 1st camp (5200 m). On 23rd we finished the second stage transport and could complete the construction of the 2nd camp (5800 m). After the second stage all the members and Sherpas came down to the base camp and took a rest for two days.

During the third stage the fatal trouble happened; this stage was scheduled to carry our luggage from the 2nd camp to the 3rd camp (6500 m) and reconnoiter the route leading to the final peak. Over the third camp, the route to the final peak was blocked with an ice cliff about 300 meters high, so we again had to climb down this cliff and reach the foot of the

final peak through a snow field which was the head of the Chhuling Khola glacier flowing down to the east from Himalchuli.

On that time when we could fix the route of climbing down this ice cliff, Nima Tenzing looked something exhausted, so we got him to go down to the 2nd camp for taking a rest with one member and one Sherpa. But on their way his condition changed suddenly to the worse and died at the 2nd camp due to hemoptoe in spite of the tending with oxygen inhalation on the evening of 4th. All the members felt sad for his unfortunate death, then on 5th burried his body in a crevasse near the 2nd camp and the funeral ceremony was held according to the Buddhist custom.

After taking a rest for a few days we again proceeded according to our plan; four members and four Sherpas entered into the 4th camp (6100 m); the doctor, another member, and some Sherpas stayed at the 3rd and the 2nd camps in connection with the base camp. On 10th of May we pitched the 5th camp at the foot (6800 m) of the final peak and on the next day four members occupied this camp.

In the middle of May we expect to have several fine days which are good for the final attempt. But we faced the terrible snow storm in the every afternoon. Moreover, the increasing height seems to make hard the ice covering the slope leading to the crest, and it made very difficult to fix the rope to it and cut steps on it, so we could not make the safe route.

At last on 20th we caught a chance for making the final camp at the height of 7100 meters, and Ishizaka and Matsuda stayed there. On 21st they tried to get to the summit. But it was impossible for them to reach the summit in one day, because the final part of the route was on the very steep slope (about 60°) and covered with terribly hard ice. Then they could not climb over 7400 meters.

At that time our stock of food and of fuel was almost exhausted, we had to abandon our farther proceeding. On 22nd of May we began to retreat from the 5th camp; all the members came back to the base camp with all the equipment within four days.

In the near future we hope to try again by the stronger team.

(Himalchuli was ascended by a Japanese party consisted of the Keio

University Alpine Club, on May 24 and 25, 1960. The report of this climb will be shown on the next volume. —Ed.)

Reconnaissance around Dhaulagiri II

Keio University Nepal Himalaya Expedition 1959

by Kiichiro KATO

In celebration of the centennial anniversary of Keio University, the oldest school in Japan, we, alumni planned to carry a mountaineering out to Mt. Dhaulagiri II in 1960.

In view of this project we visited Nepal to reconnoiter around said mountain range in the post-monsoon 1959. The party was consisted of four members, Kiichiro Kato 38 (leader), Hideki Miyashita 28, Joji Ishijima 29 and Tsuneo Kambe 26. We carried 33 pieces of luggages including food and equipments of app. 2000 lbs. by boat.

We started Tokyo Air-port on 21st August and arrived at Kathmandu where many difficult problems waited for us. Most of them were troubles about employment of Sherpas required for every expedition with Chapter 15 of Nepalese Government Mountaineering Regulation. Every expedition party is requested to hire Sherpas only through the hand of the Himalayan Society in Kathmandu which was authorized by Nepalese Government.

A many good Sherpas were found in the list of Sherpa of the Himalayan Society, but almost of them were from Sola-Khumbu, not from Darjeeling. Last seven years, every Japanese expedition used to hire the Darjeeling Sherpas, so we had been keeping a good connection with the Darjeeling Sherpas.

This time, we also wanted to hire some of them. Prior to our starting Tokyo, we send a message to the Himalayan Society to hire the two Sherpas of Darjeeling. But it seems that there were some misunderstandings about the application which had previously been submitted to the Nepalese Government. As we had no reply to our letter up to the date of our leaving Japan, we thought that the Society would not have any objection.

We instructed two Sherpas of Darjeeling, Lakpa Tenzing and Gundin, to wait for us at Kathmandu. Upon arrival at Kathmandu we were forced to contact with the Himalayan Society by Nepalese Government, however our proposal of employment of Darjeeling Sherpa was rejected by the Society.

We made many negotiations with the Himalayan Society and Foreign Ministry and Tenzing Norkay (Darjeeling), but we could not find any conclusion or agreement. Because Tenzing had no will to make join the Sherpas of Darjeeling who are in under his control to the Himalayan Society.

Also the Himalayan Society never agreed to recognize Darjeeling Sherpas as the member of the Society. At last, we met the Prime minister of Nepalese Government, and asked him to give us a decision.

So, he gave us one compromising plan to settle the problems, that was :

1) Give a temporary membership of the Himalayan Society to Darjeeling Sherpa.
2) Pay cancellation charges for two Sherpas from Sola-Khumbu through the Himalayan Society.

We accepted the plan and could left Kathmandu to Pokhara on 19th Sept. just after one month staying in Kathmandu.

19th Sept.		Left Kathmandu by air to Pokhara.
20th 〃		Stayed at Pokhara to arrange the equipments for porters.
21st 〃	(cloudy)	Left Pokhara with 36 porters and reached Koshi.
22nd 〃	(〃)	Arrived at Lumle
23rd 〃		〃 Ulleri
24th 〃		〃 Falate, we could see magnificent east face of Dhaulagiri I.
25th 〃		〃 Fakang
26th 〃		〃 Ghasa
27th 〃		〃 Lete
28th 〃		〃 Tukucha
29th 〃		Rest Day
30th 〃		〃
1st Oct.	(cloudy)	Arrived at Jomsong

2nd	Oct.	(cloudy)	Arrived at Falak
3rd	〃	(〃)	〃 Flank Kyapa
4th	〃		〃 Sandagaon. changed mules with 20 yaks.
5th	〃	(rain)	〃 Khokgaon
6th	〃	(snow)	〃 Laniwar. Crossed over Khok-la.
7th	〃	(snow)	〃 Phertang. 〃 Tieje-la.
8th	〃		〃 Hunjoe. 〃 Mu-la. On Mu-la we had the first sight of Dhaulagiri II.
9th	〃		〃 Mukutgaon, Base Camp.
10th	〃		Rest Day
11th	〃		Preperation to begin reconnaissance work.
12th	〃		No. 1 party, Kato and Kambe, with two Sherpas left for Barbung Khola and No. 2 party, Miyashita and Ishijima with one Sherpa, left for Mt. Kangrewa.
13th	〃		No. 1 party went to Pemlingaon village and observed the upper part of East-Churen Khola. No. 2 party looked around Dhaulagiri II from the top of Kangrewa (C. 18,000 feet). This was the first ascent of the peak.
14th	〃		No. 1 party went inside of Churen Khola for three hours till their returning point, after crossing the river more than ten times at waist depth. No. 2 party arrived at B.C.
15th	〃		No. 1 party went inside of East Churen Khola, but it was quite impossible to pass through. No. 2 party started to make route in the Ice-fall and came back to B.C.
16th	〃		No. 1 party went inside of Churen Khola again. After four hours climbing, they had to stop by a big fall.
17th	〃		Kato went to Kakkot Khola. Kambe and a Sherpa went to North ridge and found out the trace about two or three hundred years ago (Chorten route).

	No. 2 party established Camp I to make a good route in the Ice-fall.
18th Oct.	No. 1 party arrived at B.C., while No. 2 party used 25 pieces of ice-pitons and 1,300 feet of hand line and press up over the Ice-fall of app. 3,000 feet high.
19th 〃	Kambe observed the North-east side from Kangrewa. All members and Sherpas arrived at B.C.
20th 〃	All members with Sherpas settled Camp I and II in the Ice-fall to have a look in the hidden glacier.
21st 〃 (cloudy)	Route finding for the further camp inside the glacier.
22nd 〃	No. 2 party gave up the route due to the many snow avalanches and crevasses.
23rd 〃	Came back to camp I after an unsuccessful attempt.
24th 〃	All gathered at B.C.
25th–26th	Rest Day
27th 〃	Shifted B.C. from Mukutgaon to Barbung Khola.
28th 〃	All members followed Chorten route and came back to B.C.
29th 〃	All members left B.C. to settle Camp I and II.
30th 〃	Left Camp II to find out a good route and came back to Camp II.
31st 〃	Left Camp II, Miyashita and Ishijima, reached about 16,000 feet, but they found no possible way to reach the West side of Inner glacier.
1st Nov.	All members arrived at B.C. after an unsuccessful attempt.
2nd 〃	All members went to find out a route in the Churen Khola. They tried to cross over the last big fall, but failed.
3rd 〃	Left Barbung for Mukutgaon.
4th 〃	Rest Day
5th 〃	Left Mukutgaon and arrived at Hunjoe with 18 yaks.

6th Nov. (snow)	Arrived at Murrungi-Summa.
7th 〃	Rest Day
8th 〃	Khokgaon
9th 〃	Shangdagaon
10th 〃	Arrived at Zamfuk
11th 〃	〃 Falak (Dhangarjong)
12th 〃	〃 Muktinath, where we changed yak to *zow*.
13th 〃	Rest Day
14th 〃	Alophir
15th 〃	Bap
16th 〃	Manangbhot
17th 〃	Rest Day
18th 〃	Omley
19th 〃	Dhak-Dhang
20th 〃	Serque
21st 〃	Arrived at Thonje
22nd 〃	〃 Tal
23rd 〃	〃 Syangja
24th 〃	〃 Thullo Besi
25th 〃	Three members and two Sherpas left for Dhalegaon.
26th 〃	Route finding for the possible route to the west face of Himalchuli.
27th 〃	Came back to Thullo Besi with good hope for next year's ascent.
28th 〃	Arrived at Khudi
29th 〃	〃 Nalma
30th 〃	〃 Chisankhu
1st Dec.	〃 Rupakot Tal
2nd 〃	〃 Pokhara
3rd 〃	Rest day
4th 〃	Arrived at Kathmandu by air.

Consequently, we could not find any accessible route to the summit, although we spend over a month for reconnoiterring from every direction

of Dhaulagiri II except from the south. Big Ice-fall prevented our approaching from north-east, buttress blocked our way from north, steep rocky ridge did not permit us for climbing with heavy load and the west side was guarded with deep and narrow valley with rapid stream.

Even the Chorten Route, which seemed the only accessible route, will be badly exposed under the hazardous snow avalanche in the spring time.

Due to the luck of time, we could not reconnoiter the south side of the mountain for which we regret very much.

On the way back, we could reconnoiter the west face of Himalchuli and find out a possible route.

The Road to Ausangate

by Yoshifumi TAKEDA

We, Japanese Mountaineering team, are very grateful to Peruvian Government and people who extended a great assistance to us, and also to Mr. M. Wortis of Harvard Mountaineering Club, U.S.A. and Mr. G. Hauser of W. Germany Mountaineering Club who rendered patronage for our success of climbing, for the first time, the summits of unclimbed Ausangate-South Summit (6200 m.) and Pico de Aroz (6250 m.), Peruvian Andes.

Japanese team was consisted of the following 6 members.

Leader	Y. Takeda	(36 ages)
	I. Nishimura	(26 〃)
	M. Ohe	(25 〃)
	K. Agata	(24 〃)
	K. Takeuchi	(24 〃)
	Y. Horiuchi	(23 〃)

On July 22nd, we left Lima, Peru, carrying more than three tons of the needed items, for Cuzco which was the once prosperous capital of imperial Inca.

Visiting Cuzco had long been my earnest desire and pleasure for the two reasons, the one, needless to mention was the climbing purpose, and the

other was to see Dr. Piero Ghiglione of Italy, the great alpinist in the world.

I had been looking forward to seeing him in my wish that I be given an opportunity to listen to his experienced advice for the mountaineering.

However, against my wish for the longer stay in Cuzco, we had very short rest so that we could reach Tinki, base house, to form the caravan as soon as possible.

I was, however, delighted with Dr. P. Ghiglione's message conveyed to me through the two members of our team who remained there that he wished success for Japanese team and best regard to the Captain Takeda. Our final goal, Ausangate-South Summit was soaring to skys and rising above the others in Cordillera Vilcanota, right off of the Bolivian boarder, about 300 km east of Cuzco.

Fascinating shape of unclimbed Ausangate-South Summit covered with icy snow attracted me very much when I visited there last year, 1958, although I was told of how charming she was beforehand by Mr. M. Wortis of the U.S.A. and Mr. G. Hauser of W. Germany.

Thanks to considerable cooperation from Dr. R. Schatz, we could make our dream of climbing this mountain true ahead of Swiss Mountaineering Club who had also plan of it.

The climate of this year, 1959 was unusual, and as examples of it, cold wave weather visited Lima one month earlier than usual, in Cuzco peach flowers blossomed two month earlier and in Vilcanota it snowed heavily in the month of July.

On August 2nd we, consisting of 33 donkies, took off Base house "Tinki" for the valley of south-west of Ausangate and our Japanese team, confronted with unexpected snowstorm which lasted for two days.

On the way to Punca-cocha, we stopped for the day, and it was the evening of August 3rd when we finally got the scheduled Base Camp. Sharp slope coverd with icy snow on south side of Ausangate looked to leave no way for us to be climbed, and success of climbing depended on whether we could climb icy rock and set up the advance camp right beneath the summit. We kept struggling with crevasses and snow-storm to make the route to the advance camp for a week, and finally succeeded in setting up the advance

camp at the height of 5200 m.

It was calm and fine morning on Aug. 14. We saw everywhere around the camp big devilish scratch of snow-slidding, which happened last night.

At 8 a.m. three attacking members left advance camp.

Crossing numerous crevasses and climbing sharp icy walls, they kept going on to the summit.

When we got the point, 100 m. beneath the summit, we found ice in the state of overhang which forced us to swing around with nothing but air in the back at the height of 6200 m.

By that time, the weather had been fine, however, in the minutes we saw big clouds above us, snow falls with thunder-storm began threatening us. Worst condition of weather for the very last moment!

Unclimbed Ausangate-South Summit had every sort of difficulties we could think of climbing but finally at 3 p.m. 46 minutes, we poled Japanese flag at the top of it.

We drove in ice piton engraved as "–1959–Japan Peru Andes Expedition" on it and the pickel to which Peruvian and Japanese flags were tied together at the summit of 6200 height, and left them there at 7 p.m. with gradually darkness for advance camp where our friends waited for.

On the following day, Aug. 16, two members of our team also made the summit of the unknown and peaked mountain, 6250 m. high and named her "Pico de Aroz".

After our success of climbing 2 unclimbed mountains on the south side, on Aug. 23, we moved Base Camp to north side and tried to climb E–21, Ritic-Yac and Ausangate Main summit in vain, continue of heavy snow falls with thunder storm made our plan for climbing impossible, and we returned to Tinki on Sept. 4th.

In conclusion, we express our gratitude to Peruvian Government who rendered great assistance and cooperation.

Japanese Langtang Himal Expedition, 1959.

by Tetsuo YAMADA

The Langtang Himal region has been introduced by Mr. H.W. Tilman, and Dr. T. Hagen appreciated the beauty of the Langtang Khola. The Japanese Jugal Himal Expedition led by Mr. Fukata also visited the area on his return trip in 1958.

We, members of Iida Langtang Himal Expedition* left Kathmandu on 29 th of September in 1959, and arrived at Kyangjeng Gyang in the Langtang Khola valley along the course in the Trisuli Gandaki on the 7th of October, and at the foot of Lirung we happened to see Dr. H. Tichy. We visited the area with two purposes : climbing up Lirung (7245 m) which is the highest peak of the Langtang Himal range, and geologic and botanic survey of the region. We should have accomplished the climbing before the strong seasonal wind. The monsoon was almost over then.

The base camp was established in a small depression on a moraine at the end of the Lirung Glacier. At first we tried to search for a route on the south-eastern side of the mountain. It seemed, however, to be very difficult for us because of large ice-falls and ice-walls on the face and of the lack of food and equipment. Then we were obliged to divert our purpose to the climbing up Shalbachum (pronounced Shalbachome in local use of the natives of Langtang) at the east of Lirung.

We began to attack the mountain on 10th of October. Taking advantage of one of the highest kharka (pasture) 4350 m high as a depot, we pitched three camps respectively at the height of 5000 m, 5400 m, and 5800 m. We met a blizzard on our way and were shut up in the tents for two days, and the first attack party which had already been at the highest camp had

* T. Yamada, leader, Department of Geology, Shinshu University, Matsumoto ; S. Hojo ; N. Matsushima ; T. Terahata ; H. Arai ; and W. Kasai. The Sherpas employed were Pasang Phutar I, Dawa Thondup, Ang Dawa IV, Pasang Temba, and Tensing Girming. Pasang Phutar II joined as the liaison officer.

to come down to the second camp. Nevertheless we sent the second attack party consisted of two members and two Sherpas, and finally we reached the summit of Shalbachum on 25th of October. We have been favoured with a successful ascent by three days' fine weather after the blizzard.

Though the exact height of Shalbachum has not yet been measured, it might be about 6700 m according to our measurement made at the summit of which the height we compared with the other well known peaks.

After climbing up the summit we attemped an exploration around the Tsunga Glacier and Gosainthan (Shisha Pangma). But we could not reach the crest commanding the environs of Gosainthan being obstructed by unlucky weather.

Our party left Kyangjeng Gyang on 18 th of November and returned to Kathmandu by way of Gosainkund. On our way back to Kathmandu, we observed the south-western face of Lirung. It looked to be more difficult to climb than the south-eastern face.

Gaurisankar Expedition, 1959.

by Hideki KATO

Fukuoka University sent a reconnaissance expedition to Gaurisankar in commemoration of the 25 anniversary of its foundation. The team composed of three members–Hideki Kato, Moriaki Abe, graduates of Fukuoka University and Mitsuharu Oishi, student of Fukuoka University.

We three member left Kathmandu with four Sherpas, Ang Temba, sirdar; Kilken, cook; Kunga Norbu and Ang Dawa Ⅲ; whom we hired through the Himalayan Society. The Nepalese Sherpas proved excellent, although we had been uneasy about them, this being our first experience of employing Nepalis.

We left Kathmandu on September 17 and arrived at Beding on September 28. After depositing half of our food at Gompa, a lama temple, we started on October 1 for Base Camp at Menlung Pokhari (4800 m),

arriving there in twelve days after our departure, as we were obliged to stay half way at Taika because of heavy snowfall.

From October 14 to 25 we tried to find out routes to the top of Gaurisankar (7144 m) from several directions, but on the north side we could not find any camp site because of the knife-edged ridge. The mountain was covered with icefalls up to 5550 meters high. We turned to scout Menlung Tse (7181 m), and found that it had several faces of ever changing and unclimbable walls.

We got up to Hakan-La, a col of the north side of Hakan or Lundartsubug (6658 m), but we could not climb to the summit on account of icefalls and knife-edged ridges. We attemped to climb Pangbuk (6561 m), first ascended by T. Bourdillon and R. College, 1952. Oishi succeeded in reaching to a height of 6100 m on November 4, while Kato, liaison officer and two Sherpas were surrounded by nine Tibetans at Base Camp on Dudh Pokhari near Hadengi-La (5400 m). The armed Tibetans demanded 2,600 rupees but did not want any of our equipments. After long negotiations, they consented to get 500 rupees, and got away the next morning on their ponies. After their departure, however, we discoverd that 2,260 rupees had been taken away.

Abe, Oishi, Ang Temba and Ang Dawa Ⅲ, gave up an attempt of Pangbuk and hurried down from the Menlung Glacier. On the way, at Menlung-La, Abe and Oishi climbed an unclimbed 5880 m rock-peak.

Meanwhile, Kato's team, returned to Beding, and carrying half our food proceeded over Tesi-Lapcha (6100 m) to Khumjung, where the two team met. We were, however, surprised to find that we were reported to be missing. After consultation, we gave up the reconnaissance of Gyachung Kang (7897 m), we went up along the Dudh Kosi to the Ngojumba Glacier. We admired the magnificent view of Gyachung Kang, the clearest we believe anyone has ever had. We were fortunate enough to be able to admire Mount Everest, Lhotse, Pumori and other mighty peaks. Passing through various villages just as if we were a ghost party coming down from the Himalayas we came back to Kathmandu, where both the government officials and people welcomed us heartily. We are very thankful to all who were anxious about us.

The Japanese Yeti Expedition, 1959—1960.

by Fusao YAMASAKI

We, seven members (T. Ogawa, the leader, J. Hayashi, F. Yamasaki, H. Ohtsuka, T. Yoda, Y. Ozaki and Gyaltsen Norbu) with about 100 porters left Dahran Bazaar on the 2nd of December 1959 for Namche Bazaar. There we reached on the 17th December. The Base Camp was set at Phurtee, a small village about two miles west of Namche Bazaar. Then we stayed about fifty days in the Khumbu area, searching for the Yeti.

Our chief aim was to catch the difinite evidences of the existence of the Yeti, and for that purpose we have chosen especially the coldest season, thinking that the Yeti, if such a high animal lives in the Himalayan range, must come down to lower place in the severe winter, to get food.

But against all our efforts we could not find any definite footprints of the Yeti. This winter we had almost no snowfall in that area. The weather seemed to be quite exceptional this year. The minimum temperature at the Base Camp, 3500 meters high, was $-12.4°C$ in the middle of January and even in the mountain zone as Dudh Pokhari, 4700 meters high, it was no less than $-20°C$ in the end of that month. We were shown at Namche Bazaar some meteorogical notes of last year, though there was no datum on temperature in it, so we could know that during January of last year there were snowfalls seven times and the maximum depth of snow reached 250 cm. Because of the lack of snow we encountered much difficulty in finding out the Yeti's track.

On the other hand, thanks to the scarcity of snow, we could walk easily through almost all valleys of this area above Namche Bazaar. At first we went along Bhote Kosi, and especially one of its tributaries, Langmoche river, was examined pretty satisfactorily. As the next step we went to Khumjung, Tyangboche, Pangboche, Dingboche and Chukung along Imja Khola, and its tributaries. Some of us reached Lobujya Khola and Khumbu

glacier. In the third search, about a half of the members went to Dudh Pokhari, the other half to Langmoche and Lhenjo.

On the 5th of February we left Phurtee with 45 porters, and via Jungbesi we came back to Kathmandu on the 19th February.

Lützow-Holm Glacier (1959)

——Problems of small sledge journeys in Antarctica——

by Junji NAKAMURA

Some journeys with small sledge about 5 m long were attempted by the 3rd JARE (Japanese Antarctic Research Expedition) in 1959.

(1) Man hauling sledge journey (May 7th~13th). A sledge weighing 210 kg with full load was hauled from Skjegget to Langhovde in three days by J. Nakamura, S. Kawaguchi and Z. Hirayama. But it was too heavy for us to walk through sastrugis and deep snow. Maximum load per man seems to be about 60 kg for comfortable trip. Spacing of runners was 40 cm which was so small that sledge often tumbled. Moreover, snow was easy to adhere to glazite runner coated with polyester.

(2) Cooperative sledge journey of men and dogs (Nov. 6th~8th). In winter season, the old dog sledge was reconstructed by J. Nakamura and T. Kitamura at Showa-Base. Weight of the sledge was decreased from 72 kg to 30 kg by removing brake and bumper, and by shortening its length. Seltana runner was coated by glasslite. Spacing of runners was decided to 80 cm, and the height of upturn was keep to 25 cm. With this sledge we and four hasky dogs, Taro, Jiro, Aku and Tochi tried a test trip to Langhovde and Indre Island. It was found that proper weight of load was also 60 kg per man and 40 kg per dog when hauling together men and dogs.

(3) Dog sledge journey to Instefjorden (Nov. 20 th~Dec. 7th). J. Nakamura and Z. Hirayama, with four haskies, Taro, Jiro, Aku and Tochi, went to the most inner part of Lützow-holm Bay. Sledge weighed about 180 to 220 kg. First six days, we drived the sledge along the east coast

of the Bay. After reached on moraine of Lützow-holm glacier in Instefjorden, we spent three days to scout there. This glacier is 100 km long or more and 10 km wide, which flows from SSE to NNW. Debri was about 80 m high on sea level. Rocks lying on both bank have been eroded constantly and formed the precipice of 200 m high. It was also found that if we make a landing between Insteodden and Strandnebba and walk up continental slope of neve about 1 km, we shall be able to seek the route along east bank of the glacier which leads to wide background of Prince Harald Land and Prince Olav Land. In homeward way, we called at several bared rock region where we collected samples of rockmagnetism and glaciology and made measurements by clinometer and altimeter.

Dogs haulted the sledge very well. Speed of the sledge was about 3.5 to 4.0 km/h, when load was about 40 kg per dog. Total weight of our equipments were 60 kg, our food was 1.5 kg per man-day, dog food was 0.85 kg per dog-day and kerosene was 0.6 kg per day. With a help of previously deposited food and fuel, we will be able to perform two or three months journey with several well-taught hasky dogs by this glasslite runner sledge.

(Recently, the Lützow-Holm Glacier mentioned above, was officially named as the "Shirase Glacier" in accordance with our new nomenclature.—J.N.)

Bhutan Himalaya

by Sasuke NAKAO

Thanks to the kind invitation from H.H. Maharaja of Bhutan, I traveled nearly one thousand miles inside Bhutan from June to November 1958 for the botanical collections. On the way I entered three times into the different parts of main Himalayan range and made the possible reconnaissance for the future mountain climbing.

There are two ways from Paro Dzong to reach Chomo Lhari Gompa which are situated leaning to the huge boulders in the end of old glaciated

valley of 3900 m altitude. From there the full view of the mountains were opressing. The north-western corner of Bhutan border are gathered by many seven thousand meter peaks, all are glittering from the gentle alpine meadows of yak grazing. The main peaks are Tsulim Khon (c. 7300 m.), Takha Khon (c. 7300 m.), Masa Khon (7165 m) and their satellites. These peaks can be accessible from Lingshi Dzong or Laya village. The Kulha Kangri (local name Kira Khari) (7554 m.) dominates the upper most mountains of Pho Chu, Trongsa Chu, Bumtang Chu and Kuru Chu. Peaks around there are many alluring future attempts for the alpinists. These are most easy to approach from the old trodden road from Bumtang to Tibet.

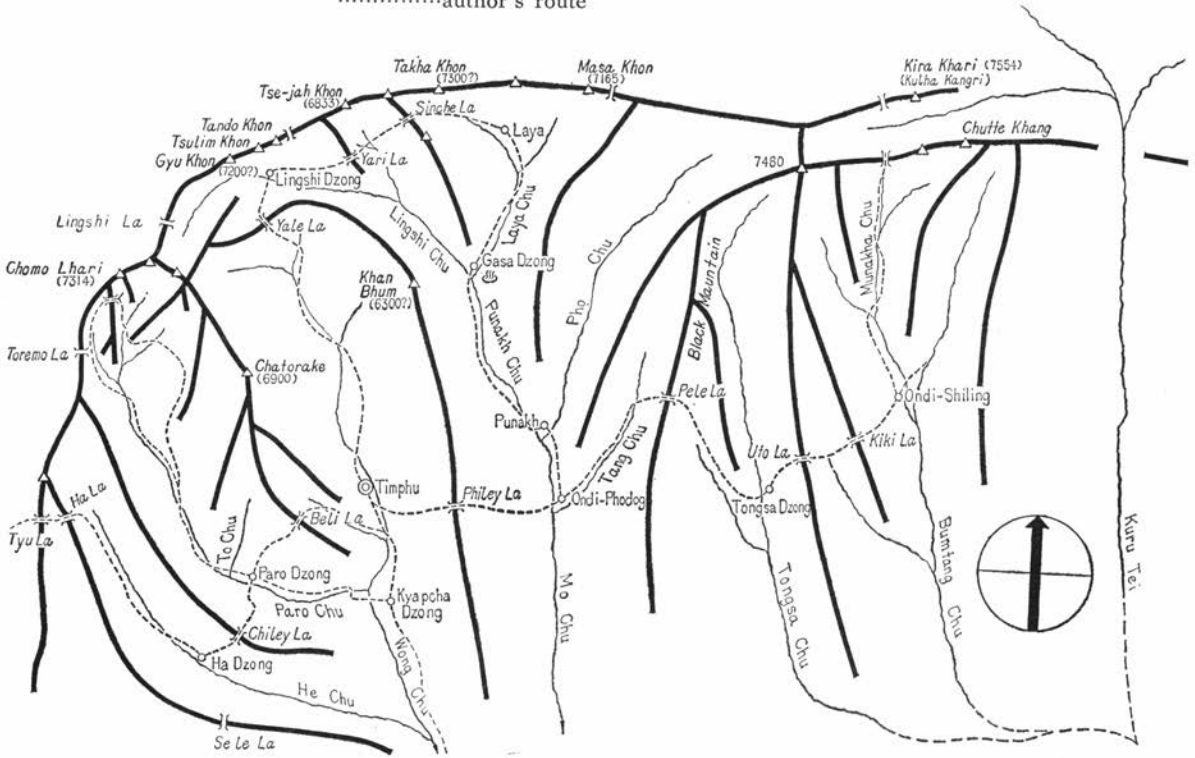
The Bhutan Himalaya, in general, is not steep, it is rather slow and gentle and thickly covered by the dense forests. It contains very wide alpine highlands and the peaks higher than six thousand meters are abruptly towering from the green pastures. All the moutains can hardly ever be seen from June to September because of their roaming monsoon clouds. But from the middle of September clear sky happens in few days intervals and it becomes quite clear from the middle of October. The travel to the mountain in Bhutan is a pleasant one, riding all the way on the tough pony or the strong mule. The river bridges are all cantilever construction and the pack mules can cross easily on them.

See S. Nakao : *Unknown Bhutan* (in Japanese), Mainichi Press, Tokyo, 1959.

Sketch Map of North-western Bhutan Himalaya

(Spelling as heard in Bhutan by S. Nakao, 1958)

·····author's route



かたい貯蓄でいちばん有利

三井の **貸付信託**

1口1万円
元本保証
予想配当率
年7分3厘7毛

三井信託銀行

丸の内支店・千代田区丸ノ内2丁目

夏も冬も……

志賀高原へ

〜〜山登りの初歩に最適なコース〜〜

◆志賀高原から越後路へ（54キロ 2泊3日コース）

発哺温泉——岩菅山——烏帽子岳——切　明——
和山温泉（泊）——苗場山——八木沢＝越後湯沢駅

◆志賀高原から上州路へ（23キロ 1泊2日コース）

大沼池——赤石山——オッタテ峰——大高山——
守沢山——野反湖＝長野原駅

長野市権堂町
電話（長野）2—8121

長野電鉄

日本三大岩場

御在所岳藤内壁

（交通）●四日市より電車又はバス　50分
湯の山温泉より徒歩　1時30分
●御在所ロープウェイ（湯の山温泉ー御在所岳）
所要時間　8分10秒
料　金 片道150円 往復300円

世界一　御在所ロープウェイ　三重県湯の山温泉

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都千代田区神田駿河台四ノ六
日本山岳会「山岳」編集部

編集委員（望月達夫　渡辺公一　折井健一郎　金坂平太）

一九六一年三月三十日発行

山岳　五十五年　定価　八〇〇円

発行所　東京都千代田区神田駿河台四ノ六
日本山岳会
電話東京三五一局八九五三番
振替口座東京四八二九番

編集兼発行者　日本山岳会内　望月達夫

印刷　株式会社技報堂
写真版　光村原色版印刷所
製本　株式会社三水舎

発売所　東京都千代田区神田駿河台二ノ一
株式会社若溪堂
電話東京三九一局二六二一番（代表）
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

Jchimarayan

東レナイロン使用

ヒマラヤン 登山靴

岳人の為に造られた岳人の靴……
東レナイロンを胛皮に使用している為
美麗にして強靱、雨水に対しても絶対
に強く防水装置により雨降り、沢歩き
にはその効果を発輝します。

価格 ¥2000

特殊金具付

オニツカ株式会社

山　日　記　1961年版 日本山岳会編　¥ 250

赤い表紙でおなじみの岳人必携の書。26集のよき伝統を重ねていますが内容はいつも新鮮さを失わず年々著々しい歩みを続けています。

山で唄う歌　戸野 昭・朝倉 宏編
A6ポケット版 I ¥ 130 II ¥ 160

Iは赤いカヴァー IIは濃緑色のカヴァーです。Iのカットには各国の山岳会のマークとピッケルのマークが入れてあります。IIのカットは串田孫一氏の楽しい山のスケッチを豊宮にいただくことが出来ました。
附録の解説は読んで面白く愛唱する歌にますます親しみが増すことでしょう。

山なみ　随筆集　朝比奈菊雄・村山雅美 南宮淳三編　¥ 480

山を愛する人達が描き綴る珠玉編。坂本直行氏の絵が更に精彩をそえております。蔵書棚に加えていただきたいと思います。

アンナプルナ日記　京都大学山学会著
原色版3葉　写真28頁　地図2葉　¥ 690

これは小人数（7人）の貴重なヒマラヤ遠征の記録です。
出発前の準備から南面の障壁、困難な峠を越えて北面への大迂廻、頂上アタックを前にして、ジェット気流の嵐に最前線キャンプを吹き飛ばされて敗退するまでの克明な記録。

山岳　日本山岳会機関誌　年1回発売
在庫46，47年合併号 ¥ 400　48年 ¥ 400　50，51，52，53年 ¥ 500　54年 ¥ 700

南極新聞　1956－7　南極研究会発行
B5版 横トジ230頁　写真16葉箱入 ¥ 600

第一次南極観測隊の記録集大成、公共、学校図書館必備の極地文献、学校新聞部、職域新聞部等の好資料読物としても遠征記録としても抜群。

書店に注文下さればどこの店でもすぐ取寄せてくれます。

東京 神田 駿河台2の1　茗溪堂　電話（291）2811

技報堂の理工学優良図書

総合図書目録送呈

気象学ハンドブック
同編集委員会編　A5・1200頁　価2300円
気象学の基礎理論から応用までを気象庁第一線技術者が詳述

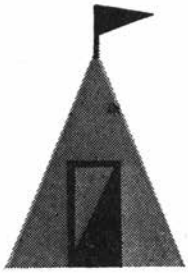
近代気象調査法
渡辺次雄著　B6・310頁　価450円
調査の方法，資料の纏め方，調査指針をわかりやすく解説す

天気学　技報堂全書10
渡辺次雄・荒井隆夫共著　B6・350頁　価500円
天気のありようと天気のはたらきを体系的にまとめた好書。

栄養学ハンドブック
同編集委員会編　A5・1240頁　価2100円
栄養学の一大体系で我が国唯一の便覧と好評の書関係者必携

振替口座 東京都港区赤坂溜池一〇番5 東京

軽快…



Toray
Reg. Trade Mark

EASY CARE／手のかからないせんい

東レ テトロン®

スポーツ用品

- テント
- ザイル
- ロープ
- ゴルフバッグ
- スリーピングバッグ
- リュックサック
- スポーツシューズ

東洋レーヨン株式会社

強靭のザイル

東レのナイロン・テトロン・マニラ麻

総発売元 株式会社 スポーク

強靱繊維興業株式会社

東京都中央区日本橋芳町2－2　TEL（661）4019・4038・2596

出光興産

石油／輸入・精製・販売

登山とスキーの
日本最古の専門店

好日山荘

東京店	大阪店	神戸店	福岡店
東京都中央区銀座西2の5	大阪市北区老松町3の12 日新ビル1階	神戸市生田区三宮町1の32の1	福岡市大名町86
電話 (561) 3600	電話 (34) 7745	電話 (2) 5951	電話 (5) 2990
振替東京 113657	振替大阪 68763	振替神戸 21352	

東京瓦斯株式会社

取締役社長 本田弘敏
取締役副社長 安西 浩

東京都中央区八重洲1の3
電話(281)0111-10・0121-10・1121-10

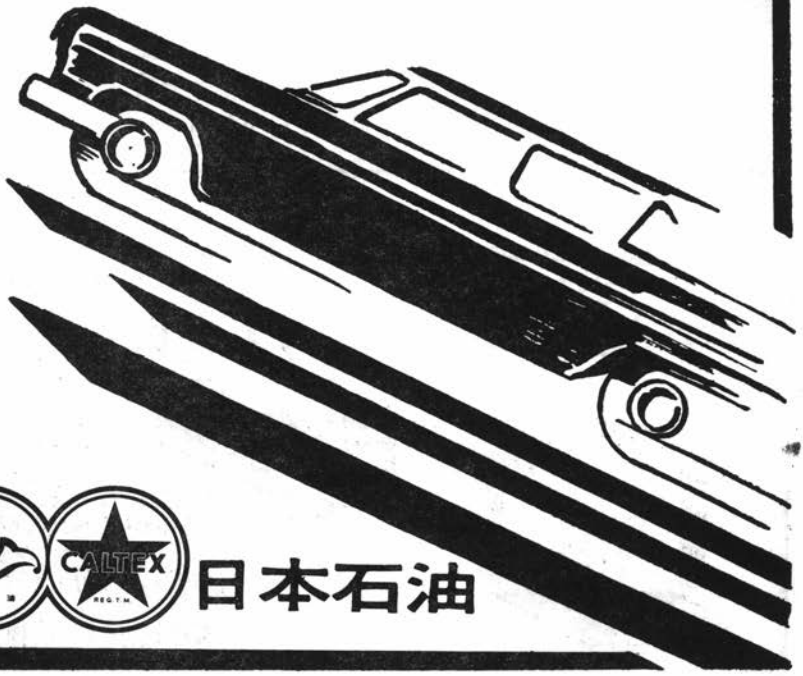
皆さまの明治生命は
創業80周年を迎えました

明治の祖父も 昭和の僕も

明治生命 東京・丸の内

日本で一番使われている……

コウモリ ガソリン



日本石油

登山　ハイク等の携行に
こぼれず　とても便利で
必要量を自由にだせます

★携帯ビンづめ
一五〇㎖　三五円
一八〇㎖　四〇円

レストラン　ポールスター

千代田貿易食品株式会社　経営

喫茶　軽食　御宴会

新丸ビル店　電（271）0741～5
永楽ビル店　電（271）8000

強力 ROYAL JELLY製剤

活力を高める　天然強化強壮剤

アピフォルティール

女王蜂の黄金食といはれるローヤルゼリーを
高度に濃縮・強化した製剤。　30球　3900円

製造元　ハインリッヒ　マック社

輸入発売元　日本新薬株式会社
京都市西大路八条

あけぼの
マヨネーズ

ファンシー 450g ¥200
スタンダード 450g ¥160
ビン入・チューブ入 各種

日魯漁業

日本山岳会検定

Cervin

最高の性能を誇る！

アキレス

ビニール製登山靴
61年型 ¥ 2,200.00

セルバンシューズ

東京興国化学大阪

山　靴　は

クライマーのいのち

マナスル登山隊　御用命

登山靴・スキー靴 専門 製作

千代田区神田
神保町３－12

森田靴店

専修大学前
TEL (331) 3716

片桐のキスリング型ルックサック

キスリング型ザック
札幌門田作　ピッケルアイゼン

No. 3　小型　1.65×2.3
No. 4　中型　1.6 ×2.5
No. 5　大型　2.0 ×2.8
No. 6　特大　2.2 ×2.8

東京都文京区
湯島天神町三の十九

片桐

電話下谷 (831)1794番

片桐盛之助

キスリング・サブルック　ヤッケ・ズボン・シューズ・手袋・マット

登山用各種天幕 専門製作

カタログ進呈

吉田テント

東京・杉並・中通町・1
TEL. 398－2548

ヒマラヤから南極へ

登項に
観測に
このマークがお
伴いたしました

Ⅰ	1936年	立教大学	ナンダコート登山隊
Ⅱ	1952年	日本山岳会	マナスル踏査隊
Ⅲ	1953年	〃	マナスル登山隊
Ⅲ	1954年	〃	第二次マナスル登山隊
Ⅴ	1954年	京都大学	アンナプルナ登山隊
Ⅵ	1955年	〃	カラコラム学術調査隊
Ⅶ	1956年	日本山岳会	第三次マナスル登山隊
Ⅷ	1957年	文部省学術会議	南極予備・本観測隊
Ⅸ	1958年	神戸大学	パタゴニヤ登山隊
Ⅹ	1958年	深田隊長	ジュガールヒマール探査隊
Ⅺ	1959年	日本山岳会	ヒマルチュリー登山隊
Ⅻ	1960年	明治大学	アラスカ学術調査隊
XIII	1960年	同志社大学	ヒマラヤ遠征隊
XIIII	1960年	早稲田大学	アジア・ヨーロッパ大陸横断隊
XV	1961年	大阪大学	ピーク29登山隊
XVI	1961年	全日本山岳連盟	ビッグホワイトピーク登山隊

千代田区神田須田町2－23 株式会社 **細野テント** Tel.(251) 6428

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LV 1960